秋田県文化財調査報告書第241集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XVI

―― 上谷地遺跡 ――

1994・3

秋田県教育委員会

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XVI

—— 上谷地遺跡 ——

1994・3

秋田県教育委員会

1　ＳＩ31竪穴住居跡（北東▷）

2　ＳＩ36竪穴住居跡（東▷）

序

東北横断自動車道秋田線は、秋田県の高速交通体系の根幹となるものです。すでに秋田市から横手市までの約57.4kmは、平成３年７月に開通し供用されており、現在は、横手市から岩手県湯田町までの区間15.8kmについての工事が進められています。

本区間の路線上には、多くの遺跡の存在することが確認されており、秋田県教育委員会では、平成２年から工事に先立って、遺跡の発掘調査を実施して、記録保存に努めております。

本報告書は、平成４年度に調査しました山内村上谷地遺跡の調査成果をまとめたものであります。

本書が、埋蔵文化財の保護に広く活用され、郷土の歴史や文化財を研究する資料として、多くの方々にご利用いただければ幸に存じます。

最後に、本調査の実施および本書の刊行に際し、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、山内村・山内村教育委員会、横手市教育委員会、増田町教育委員会、十文字町教育委員会をはじめ、関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成６年３月

秋田県教育委員会

教育長　橋本　顕信

例　　言

1．本書は、東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書は、第1章第1節、第2章第2節、第6章を除いて利部修が執筆した。

3．第2章第2節の「地形と地質」は板垣直俊氏、第6章第1節の「上谷地遺跡の考古地磁気調査」は、西谷忠師先生から原稿を賜った。

4．第6章の科学分析のうち、第2節は学習院大学年代測定室に、第3節はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

5．堆積土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。

6．遺跡は沢筋によって分断されるため、A(西側)・B(東側)二地区に分けて記述してある。

7．本書の作成にあたり以下の方々の協力を得た。記して謝意を表す。

合川穣子、大竹憲治、堤　隆、仲山茂司、平野真一、山口　晋、錦貫邦男

凡　　例

1．遺構・遺物には、下記の記号を用いてある。

ＳＩ・・竪穴住居跡　　ＳＢ・・掘立柱建物跡　　ＳＲ・・土器埋設遺構

ＳＮ・・屋外炉・焼土遺構・炭焼成遺構　　ＳＫＴ・・陥し穴状遺構

ＳＫＦ・・フラスコ状土坑　　ＳＫ・・土坑・土壙墓　　ＳＶ・・石器集中部

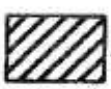
ＳＳ・・石器製作跡　　ＳＫＰ・・ピット　　ＳＤ・・溝状遺構

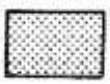
ＳＸ・・性格不明遺構　　Ｓ・・礫　　Ｃ・・炭化物層

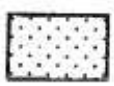
2．挿図中の遺物番号は、遺構の内外を問わず土器・石器ごとの通し番号にしてあり、その番号は図版中の遺物番号と対応している。その際、石器の番号にはＳを付してある。

3．遺構の縮尺は1／40を基本とした。遺物の縮尺は、土器では拓本が1／3で他を主に1／4とし、石器では主に剥片石器を1／2で礫石器を1／3とした。但し、特別に縮尺を与えるものは、その都度表記した。

4．挿図中に使用したスクリントーンは、以下の通りである。


遺構以外


焼土


焼け面

磨り面

目　次

序

例　言

凡　例

目　次

第1章　はじめに …… 1
　第1節　調査に至るまで …… 1
　第2節　調査の組織と構成 …… 3
第2章　遺跡の立地と環境 …… 5
　第1節　遺跡の立地 …… 5
　第2節　地形と地質 …… 5
　第3節　周辺の遺跡 …… 11
第3章　発掘調査の概要 …… 14
　第1節　遺跡の概観 …… 14
　第2節　調査方法 …… 18
　第3節　調査の経過 …… 18
第4章　A区の調査記録 …… 20
　第1節　検出遺構と出土遺物 …… 20
　第2節　遺構外出土遺物 …… 24
第5章　B区の調査記録 …… 56
　第1節　検出遺構と出土遺物 …… 56
　第2節　遺構外出土遺物 …… 111
第6章　自然科学的分析 …… 143
　第1節　上谷地遺跡の考古地磁気調査 …… 143
　第2節　学習院大学放射性炭素年代測定 …… 146
　第3節　炭化物同定 …… 147
第7章　まとめ …… 150

挿図目次

第 1 図　横手Ⅰ・C以東の路線と遺跡 …… 2
第 2 図　調査地域 …… 6
第 3 図　調査地域の地質図 …… 7
第 4 図　調査地域の段丘区分図 …… 8
第 5 図　周辺遺跡位置図 …… 12
第 6 図　A・B区基本土層図 …… 14
第 7 図　遺跡推定範囲と発掘調査対象区 …… 15
第 8 図　A区遺構配置図 …… 21
第 9 図　SV03石器集中部と土坑 …… 25
第 10 図　SV03石器集中部関連石器(1) …… 26
第 11 図　SV03石器集中部関連石器(2) …… 27
第 12 図　SV03石器集中部関連石器(3) …… 28
第 13 図　SV03石器集中部関連石器(4) …… 29
第 14 図　SV03石器集中部関連石器(5) …… 30
第 15 図　SV03石器集中部関連石器(6) …… 31
第 16 図　SV03石器集中部関連石器(7) …… 32
第 17 図　SV03石器集中部関連石器(8) …… 33
第 18 図　SV03石器集中部関連石器(9) …… 34
第 19 図　SV03石器集中部関連石器(10) …… 35
第 20 図　SV03石器集中部関連石器(11) …… 36
第 21 図　SV03石器集中部関連接合資料(1) … 37
第 22 図　SV03石器集中部関連接合資料(2) … 38
第 23 図　SS09石器製作跡関連石器(1) …… 39
第 24 図　SS09石器製作跡関連石器(2) …… 40
第 25 図　SS09石器製作跡関連石器(3) …… 41
第 26 図　SS09石器製作跡関連石器(4) …… 42
第 27 図　SS09石器製作跡関連石器(5) …… 43
第 28 図　SS09石器製作跡関連石器(6) …… 44
第 29 図　SS09石器製作跡関連石器(7) …… 45
第 30 図　SS09石器製作跡関連石器(8) …… 46
第 31 図　SS09石器製作跡関連上器 …… 46
第 32 図　遺構外出土石器(1) …… 47

第 33 図　遺構外出土石器(2) …… 48
第 34 図　遺構外出土石器(3) …… 49
第 35 図　遺構外出土石器(4) …… 50
第 36 図　炭焼成遺構 …… 51
第 37 図　B区遺構配置図 …… 57
第 38 図　SI26a・b竪穴住居跡(1) …… 60
第 39 図　SI26a・b竪穴住居跡(2) …… 61
第 40 図　SI29竪穴住居跡(1) …… 62
第 41 図　SI29竪穴住居跡(2) …… 63
第 42 図　SI30竪穴住居跡(1) …… 65
第 43 図　SI30竪穴住居跡(2) …… 66
第 44 図　SI31竪穴住居跡(1) …… 68
第 45 図　SI31竪穴住居跡(2) …… 69
第 46 図　SI32竪穴住居跡 …… 71
第 47 図　SI36竪穴住居跡(1) …… 73
第 48 図　SI36竪穴住居跡(2) …… 74
第 49 図　SI43竪穴住居跡 …… 75
第 50 図　SI115竪穴住居跡(1) …… 77
第 51 図　SI115竪穴住居跡(2) …… 78
第 52 図　SI150竪穴住居跡 …… 80
第 53 図　掘立柱建物跡 …… 82
第 54 図　土器埋設遺構・屋外炉・焼土遺構 … 84
第 55 図　陥し穴状遺構・フラスコ状土坑 …… 86
第 56 図　土坑(1) …… 88
第 57 図　土坑(2) …… 90
第 58 図　土坑(3) …… 92
第 59 図　土坑(4) …… 94
第 60 図　土坑(5) …… 96
第 61 図　西側ピット配置図 …… 98
第 62 図　主要ピット配置図(1) …… 99
第 63 図　主要ピット配置図(2) …… 100
第 64 図　主要ピット配置図(3) …… 101
第 65 図　SKP145・239ピット …… 101
第 66 図　ピット(1) …… 102
第 67 図　ピット(2) …… 103
第 68 図　ピット(3) …… 104
第 69 図　ピット(4) …… 105
第 70 図　ピット(5) …… 106
第 71 図　SX38性格不明遺構 …… 108
第 72 図　炭焼成遺構など …… 110
第 73 図　遺構内出土土器(1) …… 112
第 74 図　遺構内出土土器(2) …… 113
第 75 図　遺構内出土土器(3) …… 114
第 76 図　遺構内出土土器(4) …… 115
第 77 図　遺構内出土土器(5) …… 116
第 78 図　遺構内出土土器(6) …… 117
第 79 図　遺構内出土土器(7) …… 118
第 80 図　遺構内出土土器(8) …… 119
第 81 図　遺構内出土土器(9) …… 120
第 82 図　遺構内出土石器(1) …… 121
第 83 図　遺構内出土石器(2) …… 122
第 84 図　遺構内出土石器(3) …… 123
第 85 図　遺構内出土石器(4) …… 124
第 86 図　遺構内出土石器(5) …… 125
第 87 図　遺構内出土石器(6) …… 126
第 88 図　遺構内出土石器(7) …… 127
第 89 図　遺構内出土石器(8) …… 128
第 90 図　遺構内出土石器(9) …… 129
第 91 図　遺構内出土石器(10) …… 130
第 92 図　遺構外出土土器(1) …… 132
第 93 図　遺構外出土土器(2) …… 133
第 94 図　遺構外出土土器(3) …… 134
第 95 図　遺構外出土土器(4) …… 135
第 96 図　遺構外出土石器(5) …… 136
第 97 図　遺構外出土石器(6) …… 137
第 98 図　遺構外出土石器(7) …… 138
第 99 図　遺構外出土石器(8) …… 139
第 100 図　遺構外出土石器(9) …… 140

第101図　交流消磁による磁化の減少 …… 145
第102図　消磁後の磁化方向の分布 …… 145
第103図　SN144.SI150炉の結果と4400B.P.～3800B.P.の地磁気変化曲線 …… 145
第104図　SN149.SN152の結果と1000～1600年の地磁気変化曲線 …… 145

表目次

第1表　河岸段丘の区分の比較 …… 10
第2表　周辺遺跡一覧表 …… 13
第3表　石器観察表(1) …… 50
第4表　石器観察表(2) …… 52
第5表　石器観察表(3) …… 53
第6表　石器観察表(4) …… 54
第7表　石器観察表(5) …… 55
第8表　ピットの観察表 …… 107
第9表　石器観察表(6) …… 141
第10表　石器観察表(7) …… 142
第11表　上谷地遺跡残留磁化測定結果 …… 144
第12表　炭化材同定結果 …… 148

図版目次

図版1　1 遺跡遠景(南西▷) …… 151
2 A区全景(東▷) …… 151
3 B区全景(東▷) …… 151
図版2　1 A区Mしライン土層断面(西▷) … 152
2 SV03石器出土状況(北▷) …… 152
3 SV03断面状況(南東▷) …… 152
図版3　1 SS09遺物出土状況(西▷) …… 153
2 SS09遺物出土状況(西▷) …… 153
3 SS09遺構出土状況(南東▷) …… 153
図版4　1 SI26a・b完掘(東▷) …… 154
2 SI26a・b土層断面(西▷) …… 154
図版5　1 SI29完掘(北▷) …… 155
2 SI29炉(北▷) …… 155
図版6　1 SI30完掘(南東▷) …… 156
2 SI30土層断面(南東▷) …… 156
図版7　1 SI31土層断面(南東▷) …… 157
2 SI31遺物出土状況(北東▷) …… 157
3 SI31炉(北東▷) …… 157
図版8　1 SI32完掘(北東▷) …… 158
2 SI32炉(南東▷) …… 158
図版9　1 SI43完掘(南西▷) …… 159
2 SI43炉(南東▷) …… 159
図版10　1 SI150全景(西▷) …… 160
2 SI150炉(北西▷) …… 160
図版11　1 SI115完掘(北東▷) …… 161
2 SI115炉(南東▷) …… 161
図版12　1 SN11完掘(西▷) …… 162
2 SX125検出状況(東▷) …… 162
3 SR23断面(東▷) …… 162
4 SR151検出状況 (南▷) …… 162
図版13　1 SKT16完掘(南東▷) …… 163
2 SKT25完掘(西▷) …… 163
3 SKF28土層断面(南西▷) …… 163
4 SKF28完掘(南西▷) …… 163
図版14　1 SK22土層断面(東▷) …… 164
2 SK24調査風景(北▷) …… 164
3 SK22・24完掘(東▷) …… 164
図版15　1 SK33完掘(南東▷) …… 165
2 SK34完掘(南▷) …… 165
3 SK35完掘(北西▷) …… 165
図版16　1 SK12土層断面(東▷) …… 166
2 SK19土層断面(南▷) …… 166
3 SK44完掘(南東▷) …… 166
図版17　1 SK45完掘(東▷) …… 167

2 SK46完掘(南▷) …… 167
3 SK53完掘(南西▷) …… 167
図版 18 1 SK54完掘(北西▷) …… 168
2 SK55完掘(北▷) …… 168
3 SK58完掘(北西▷) …… 168
図版 19 1 SK48～50完掘(南▷) …… 169
2 SK130完掘(南西▷) …… 169
3 SK131完掘(南西▷) …… 169
図版 20 1 SX38全景(南東▷) …… 170
2 SK74～76完掘(南▷) …… 170
3 SKP129土層断面(南東▷) …… 170
図版 21 1 SKP145断面(南東▷) …… 171
2 SKP239断面(南東▷) …… 171
3 SKP60完掘(南東▷) …… 171
図版 22 1 SB126完掘(南東▷) …… 172
2 B区西側ピット群風景(南▷) …… 172
3 SK45とピット群(南▷) …… 172
図版 23 1 SN01完掘(北東▷) …… 173
2 SN05～09全景(南西▷) …… 173
3 SN148土層断面(北▷) …… 173
図版 24 1 遺構内出土遺物(1) …… 174
2 遺構内出土遺物(2) …… 174
図版 25 1 遺構内出土遺物(3) …… 175
2 遺構内出土遺物(4) …… 175
図版 26 1 遺構内出土遺物(5) …… 176
2 遺構内出土遺物(6) …… 176
図版 27 1 遺構内出土遺物(7) …… 177
2 遺構内出土遺物(8) …… 177
図版 28 1 遺構内出土遺物(9) …… 178
2 遺構内出土遺物(10) …… 178
図版 29 1 遺構内出土遺物(11) …… 179
2 遺構内出土遺物(12) …… 179
図版 30 1 遺構外出土遺物(1) …… 180
2 遺構外出土遺物(2) …… 180
図版 31 1 遺構外出土遺物(3) …… 181
2 遺構外出土遺物(4) …… 181
図版 32 1 遺構外出土遺物(5) …… 182
2 遺構外出土遺物(6) …… 182
図版 33 遺構内出土遺物(13) …… 183
図版 34 遺構内出土遺物(14) …… 184
図版 35 遺構内出土遺物(15) …… 185
図版 36 1 遺構内出土遺物(16) …… 186
2 遺構内出土遺物(17) …… 186
図版 37 1 遺構内出土遺物(18) …… 187
2 遺構内出土遺物(19) …… 187
図版 38 1 遺構内出土遺物(20) …… 188
2 遺構内出土遺物(21) …… 188
3 遺構内出土遺物(22) …… 188
図版 39 遺構内出土遺物(23) …… 189
図版 40 遺構内出土遺物(24) …… 190
図版 41 遺構内出土遺物(25) …… 191
図版 42 遺構内出土遺物(26) …… 192
図版 43 遺構外出土遺物(7) …… 193
図版 44 遺構内外出土遺物(1) …… 194
図版 45 遺構外出土遺物(8) …… 195
図版 46 遺構内外出土遺物(2) …… 196
図版 47 1 遺構内出土遺物(27) …… 197
2 遺構内出土遺物(28) …… 197
図版 48 1 遺構内出土遺物(29) …… 198
2 遺構内出土遺物(30) …… 198
図版 49 1 遺構内外出土遺物(3) …… 199
2 遺構外出土遺物(9) …… 199
図版 50 1 炭化材顕微鏡写真 …… 200
2 種実遺体写真 …… 200

第1章　はじめに

第1節　調査に至るまで

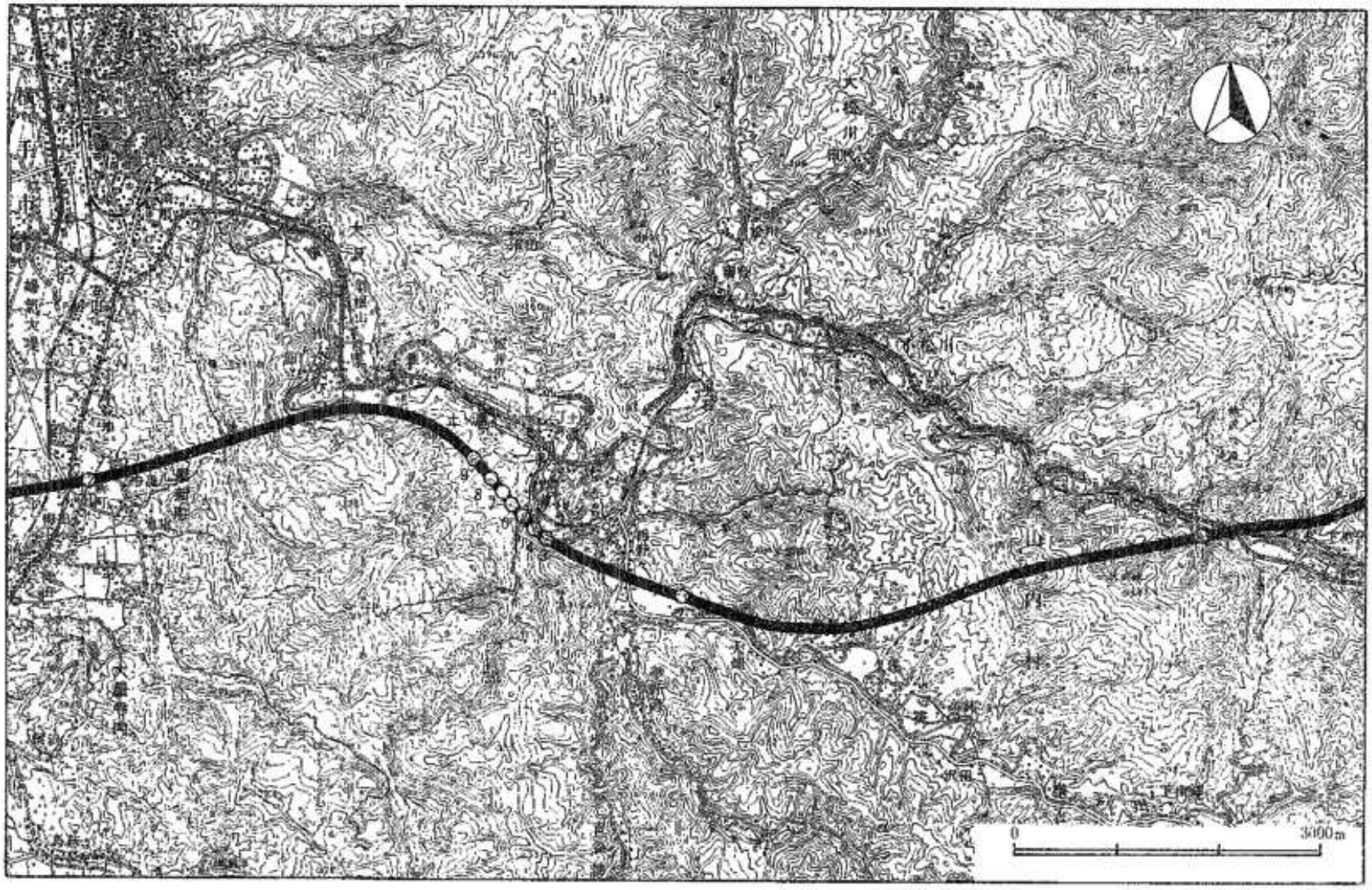
東北横断自動車道秋田線は、首都圏への時間短縮と県内の陸上交通体系の改善など、地域の生産活動と住民生活に必要な情報や資源の交流を促進することを目的に計画された高速道路である。道路は、東北自動車道から岩手県北上市で分岐し、横手市－大曲市を経て秋田市に至る総延長108kmに達する。このうち、秋田－横手間57.4kmについては、昭和53年11月の第8次施行命令によって具体化し、既に平成3年7月に供用が開始されている。

秋田－横手間の道路計画路線内に存在する合計27遺跡の発掘調査は、昭和60年～平成元年に実施され、それぞれに報告書が刊行されている。

横手インター・チェンジ（I・C）以東の横手－湯田間19.7kmについては昭和61年3月に第9次施行命令が下された。これに伴い昭和62年3月には、日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、道路計画路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会では、昭和62年5月と同63年6月に遺跡分布調査を実施し、平鹿郡山内村の計画路線内に11遺跡が存在することを報告した。また、横手I・C以東の横手市分についての分布調査は、横手～秋田間の分布調査と同時に、昭和56年と同58年に実施され、4遺跡の存在することが報告されていた。これら計画路線上に存在する合計15遺跡の取り扱いについては、昭和60年の日本道路公団と秋田県教育委員会の合意を踏襲することとした。15遺跡は横手I・Cから北上市側に、柳田I・柳田II・小松原・新町遺跡（以上、横手市）、茂竹沢・小田III・小田II・小田I・虫内II・虫内I・岩瀬・中島・相野々・上谷地・越上遺跡（以上、山内村）である。

発掘調査に先立って、横手市分として昭和62年には柳田1・柳田II遺跡、平成元年には小松原遺跡西半部、平成2年には小松原遺跡東半部と新町遺跡南半部、平成3年には新町遺跡北半部の範囲確認調査を実施した。その結果、柳田I・柳田II・小松原遺跡については遺跡の範囲が計画路線に及んでおらず、また新町遺跡北半部については宅地造成などによる攪乱が著しく遺構等が遺存していないため、これらは発掘調査の必要がないと判断した。

山内村分の遺跡範囲確認調査は、平成2年に虫内I遺跡、平成3年に茂竹沢・虫内II・岩瀬・中島・力石II・越上遺跡、平成4年に小田V・小田IV・虫内III・相野々・上谷地遺跡について実施した。その結果、中島・相野々・力石II遺跡については遺跡の範囲が計画路線内には及ばないことから調査が不要となった。なお平成2年に、虫内I遺跡の南東側と虫内II遺跡の西側、



1　越上　2　上谷地　3　岩瀬　4　上内Ⅲ　5　上内Ⅰ
6　上内Ⅱ　7　小国Ⅳ　8　小国Ⅴ　9　荻竹沢　10　新町

第1図　横手Ⅰ・C以東の路線と遺跡

および上谷地遺跡の東側で縄文時代の遺物が採集され、この3つの地点にも遺跡の存在することが判明したことから、各々を虫内Ⅲ遺跡・小田Ⅳ遺跡・力石Ⅱ遺跡として登録し、範囲確認調査を行っている。これらのことから、横断道山内村分の発掘調査対象遺跡は、岩手県側から順に越上・上谷地・岩瀬・虫内Ⅲ・虫内Ⅰ・虫内Ⅱ・小田Ⅳ・小田Ⅴ・茂竹沢遺跡の9遺跡となったのである。

横手市の1遺跡・山内村の9遺跡に対する発掘調査は、平成2年度の新町遺跡から開始され、平成3年には越上遺跡、岩瀬・虫内Ⅰ遺跡の一部、虫内Ⅱ遺跡、茂竹沢遺跡が、平成4年には上谷地・虫内Ⅲ遺跡、虫内Ⅰ遺跡の一部、小田Ⅳ遺跡、平成5年には小田Ⅴ遺跡、虫内Ⅰ遺跡の一部、岩瀬遺跡の残り部分が実施されている。また、これらの遺跡のうち、新町遺跡、茂竹沢遺跡、虫内Ⅱ遺跡、越上遺跡の発掘調査報告書が平成5年3月に公にされている。

第2節　調査の組織と構成

遺跡名	上谷地遺跡
遺跡所在地	秋田県平鹿郡山内村平野沢字上谷地117外
調査期間	平成4年4月27日～11月20日
調査面積	8,500㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
専門指導員	板垣　直俊（由利郡鳥海町立川内中学校教諭）
	岡村　道雄（文化庁記念物課文化財主任調査官）
	小林　達雄（国学院大学文学部教授）
	林　謙作（北海道大学文学部助教授）
調査担当者	大野　憲司（秋田県埋蔵文化財センター　第1科長）
	利部　修（秋田県埋蔵文化財センター　学芸主事）
	榮　一郎（秋田県埋蔵文化財センター　学芸主事）
	佐野　浩子（秋田県埋蔵文化財センター　非常勤職員）
総務担当者	皆川　清（秋田県埋蔵文化財センター　主査）
	（現　南教育事務所仙北出張所　主査）
	佐々木　眞（秋田県埋蔵文化財センター　主査）
	佐藤　広文（秋田県埋蔵文化財センター　主事）
調査協力者	西谷　忠師（秋田大学鉱山学部教授）
調査協力機関	山内村・山内村教育委員会、横手市教育委員会

増田町教育委員会、十文字町教育委員会、平鹿町教育委員会

註

1：秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ～Ⅺ』秋田県文化財調査報告書第150・166・180・186・189・190・191・205・206・207・209集　1986～1991（昭和61～平成3年）

2：秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第179集　1989（平成元年）

3：秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第93集　1982（昭和57年）

4：秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第201集　1990（平成2年）

5：秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第217集　1991（平成3年）

6：秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第226集　1992（平成4年）

7：前述の小田Ⅰ・小田Ⅱ・小田Ⅲ遺跡については、横断道の分布調査の際に付した遺跡名が、既に別の遺跡として遺跡地図に登録されていたことが判明したこと、地形的には一つの遺跡とするのが妥当であること等から、これをまとめて小田Ⅴ遺跡とした。

8：秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅻ－新町遺跡－』秋田県文化財調査報告書第232集　1993（平成5年）

9：秋田県教育委員会『東北横断自動車道東和秋田線発掘調査報告書XIII－茂竹沢遺跡－』秋田県文化財調査報告書第233集　1993（平成5年）

10：秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XIV－虫内Ⅱ遺跡－』秋田県文化財調査報告書第234集　1993（平成5年）

11：秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XV－越上遺跡－』秋田県文化財調査報告書第235集　1993（平成5年）

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の立地

上谷地遺跡は、奥羽脊梁山脈西側の標高200～400ｍの山間に所在し、ＪＲ東日本北上線相野々駅の南東約1.2kmに位置している。遺跡は、南東から北西に両岸を深く削って蛇行しながら流れる横手川の右岸にあり、天竺森（368ｍ）の南側山麓緩斜面上および山地裾の緩傾斜面に立地する。遺跡における天竺森南側の山麓緩斜面は、山地中腹から南側にせり出したテラス状となっている。このテラス状の緩斜面は、東側を鋭く切り込むＶ字状の谷、西側を浅い小谷によって画されており、横手川に面する南側は段丘崖状の急斜面となっている。このため、山麓緩斜面全体の規模は、東西・南北が各々130ｍで、平面形は北を頂点とする正三角形を呈する。標高は北端で162ｍ、南端で144ｍほどであるが、正三角形の頂点の１つである南西側は、東側よりも一段低い緩斜面となっており、その中心部の標高は140ｍである。

また、上記山麓緩斜面の西側にある山地裾の緩傾斜面は、小谷の出口にあたり、山地裾部から沖積段丘に向かって緩やかに低くなっている。標高は、緩傾斜面頂部で134ｍ、沖積段丘への転換部で118ｍである。

第２節　地形と地質

１　地形と地質の概況

１．はじめに

ここで扱う地域は第２図に示したとおりである。本地域は山内村の西端に位置し、４㎞四方の地域である。本地域には33箇所の遺跡が確認されているが、その中で８遺跡が東北自動車道秋田線建設事業に係わる発掘調査の対象となっている。

２．地形の概況

本地域は雄物川の支流である横手川とその支流黒沢川・武道川の流域に位置し、地形的には、山地と河岸段丘および氾濫原・谷底平野に区分される。

山地は河川によって区分され、秋田県(1976)によると、西部と南部の金峰山山地、南東部の大日向山山地、東部の大穴峠山地、北部の御岳山山地の４つに分けられる。いずれの山地も標高250ｍ～350ｍの中起伏山地が大部分を占めている。本地域の最高峰は東端部にある天竺森（標高368ｍ）である。

河岸段丘は横手川と黒沢川に沿って、500m～1kmの幅で分布しているが、武道川沿いでは発達が乏しい（詳細は後述）。

氾濫原は横手川と黒沢川の現河床沿いに僅かに分布する程度である。また、谷底平野は武道川沿いと小さな谷沿いにいくつか分布がみられる。

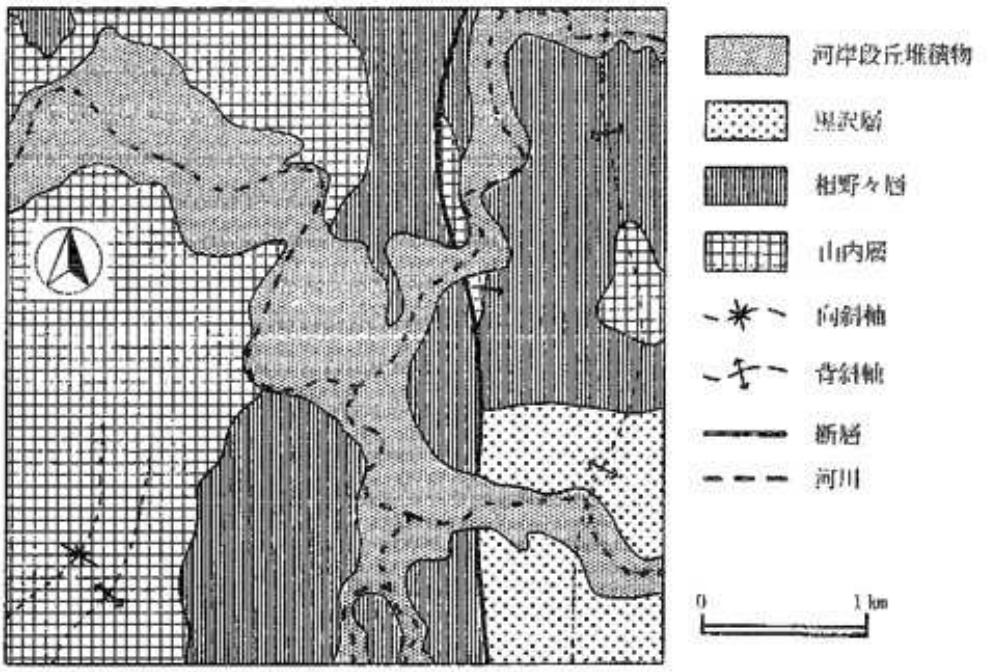
3．地質の概況

本地域の地質は、河岸段丘堆積物を除くと、古い順に山内層・相野々層・黒沢層（いずれも新第三紀中新世）に区分される（第3図）。

山内層は淡灰褐色～褐色の硬質泥岩で、層理が発達しており板状に割れる性質がある。横手市東方の山地に広く分布し、本地域では相野々よりも西方の山地を形成している地層である。

相野々層は主として黒色泥岩からなり、一部では石灰質の団塊や凝灰質砂岩を含む。また、最下部に灰白質～白色の石英安山岩質凝灰岩の薄い層をはさむ。山内層の上に不整合にのり、西は横手市の中山丘陵から、東は横手川・黒沢川の流域に広く分布する。本地域では相野々よ

第2図　調査地域



第3図　調査地域の地質図

りも東方に分布し、平野沢集落付近では、石英安山岩質凝灰岩がみられる。

黒沢層は主として青灰色～暗灰色の細粒砂岩、砂質シルト岩からなり、相野々層とは整合であり、若干指交関係をなすが、やや斜交して黒沢層が上位となる。横手川・黒沢川の流域に分布するが、相野々層よりは分布範囲が狭い。本地域では東南部の横手川沿いにみられる。

河岸段丘堆積物は横手川・黒沢川の河川沿いに発達し、礫・砂及び泥からなり、厚さは数m程度である。

本地域は断層と褶曲によって複雑な地質構造を示している。本地域の東部には、平野沢断層が南北に縦断しており、さらにその東方には、断層と平行に背斜軸がみられる。また、南部にもいくつかの背斜・向斜構造がみられ、複雑な構造を物語っている。

4．河岸段丘について

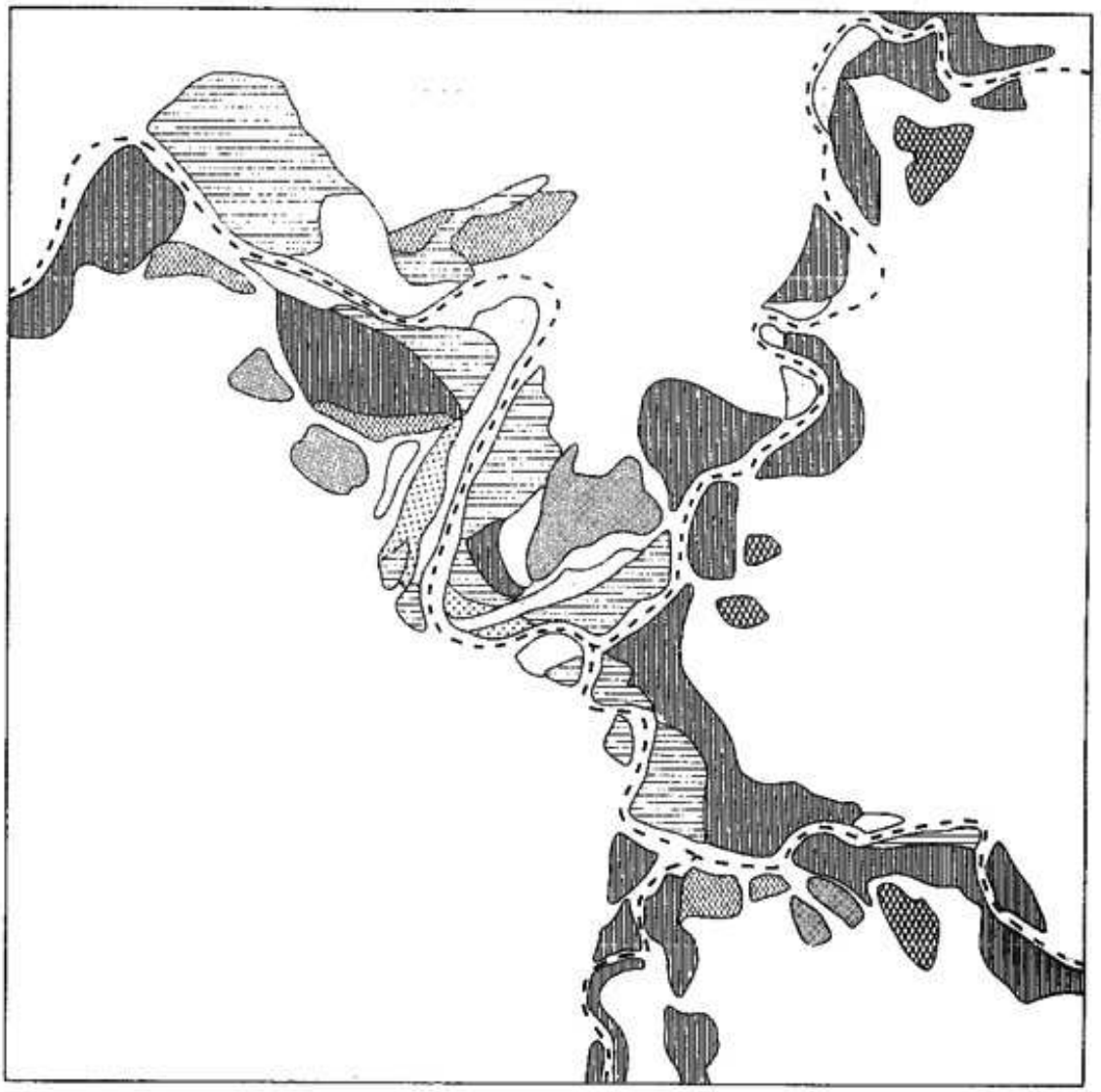
（1）これまでの研究

本地域の河岸段丘については、これまでいくつかの研究例がある（第1表）。

中川ほか（1971）では脊梁山脈とその両側の低地帯における第四紀の地変について考察を進めようと、横手川・黒沢川の河岸段丘と和賀川の河岸段丘の対比を行い、横手川・黒沢川流域では7つに段丘を区分している。

秋田県（1976）では、ほぼ中川ほか（1971）の段丘区分を踏襲しながら、さらに詳細な段丘面区分図を作製し、最も新しい砂礫段丘Vを加えて、全部で8段丘に区分している。

TOYOSHIMA(1984)では、2万年以後の河岸段丘の発達過程を調査するために横手川・黒



河川
横手沢段丘
岩瀬段丘
坂井沢段丘
南郷Ⅰ段丘
南郷Ⅱ段丘
南郷Ⅲ段丘
上瀬段丘

第4図　調査地域の段丘区分図

沢川流域を取り上げ、板井沢段丘をfilltop terrace(砂礫堆積面段丘)、南郷段丘を板井沢段丘を侵食したfillstrath terrace(砂礫侵食面段丘)であると考えた。さらには^{14}Cの年代測定資料から、板井沢・南郷両段丘の形成年代を約23,000年前よりも新しく、約12,000年前よりも古いと考えている。

（2）段丘の区分と対比

本稿では、これまでの研究の中から、TOYOSHIMA(1984)の段丘の区分を踏襲しながらも、南郷段丘をさらにⅠ～Ⅲの3つに区分し、現河床とほとんど同じ高度の最も低い段丘を「上淵段丘」と命名した（第1表）。

中川ほか（1971）の外山段丘と回立段丘及び秋田県（1976）の砂礫段丘Ⅴは、調査地域内には分布しないので、本稿では省略した。

①横手沢段丘

調査地域内では最も高位の段丘で、模式地は横手市の横手沢両岸であるが、本地域では、相野々～落合の黒沢川左岸と横手川の大畑にわずかに分布する。標高は相野々付近では140～160mであるが、落合では高度を増し、180～200mとなる。かなり開析が進んだ段丘面がみられる。堆積物については不明である。

②岩瀬段丘

調査地域中央鶴ケ池付近とその対岸である小田遺跡周辺、及び相野々南西に分布する。標高は120～130mで段丘面の開析度は横手沢段丘よりも小さく、平坦面が残る。安山岩を主体とする最大直径50cmの風化した円礫層が5m以上堆積しており、その上に1～2.5mの角礫交じりの砂質粘土層が発達している。本段丘は中川ほか（1971）によると、下末吉面（約12~13万年前）に対比される。

③板井沢段丘

下位の南郷段丘の山沿いに断片的に分布し、板井沢東方、その対岸の茂竹沢付近、相野々南方などでみられる。段丘面が山側から河谷側に傾斜し、標高は110～140mにおよぶ。本調査では確認できなかったが、TOYOSHIMA（1984）によると、本段丘はfilltop terrace(砂礫堆積面段丘）でその構成層は砂やシルトを多く含む亜円礫・亜角礫からなり、層厚は10m以上にも達する。岡田ほか（1972）によると、本段丘に対比される横手川上流の三又付近の段丘堆積物の上部の泥炭から23,200 $^{+1,100}_{900}$ yrB.P.という^{14}C年代が得られており、本段丘の堆積面は約23,000年以後に形成されたことが明らかになっている。

④南郷段丘

本地域に最も広く分布する段丘で、横手川・黒沢川に沿って連続的に跡をたどることができる。TOYOSHIMA(1984)では同一の段丘と考えていたが、段丘崖が認められることや標高の

第1表　河岸段丘の区分の比較

中川ほか（1971）	秋田県（1976）	TOYOSHIMA (1984)	本　　稿
外山段丘	砂礫段丘Ⅰ'		
相野々高位段丘	砂礫段丘Ⅰ	横手沢段丘	横手沢段丘
相野々段丘	砂礫段丘Ⅱ	岩瀬段丘	岩瀬段丘
長瀞段丘	砂礫段丘Ⅲ'	板井沢段丘	板井沢段丘
土淵段丘	砂礫段丘Ⅲ	南郷段丘	南郷（Ⅰ～Ⅲ）段丘
季原段丘	砂礫段丘Ⅳ'		土淵段丘
岡立段丘	砂礫段丘Ⅳ		
	砂礫段丘Ⅴ		

違いから、本稿ではⅠ・Ⅱ・Ⅲの3段丘に細分した。標高は、岩瀬付近では南郷Ⅰ段丘が107～110m、南郷Ⅱ段丘が104～106m、南郷Ⅲ段丘が101～103mである。

TOYOSHIMA(1984)によると、本段丘はfillstrath terrace(砂礫侵食面段丘)で、板井沢段丘を侵食して形成され、埋積堆積物の上に2～5mの薄い円礫層が堆積している。本調査では、埋積堆積物の上に薄い円礫層が堆積している露頭は発見できなかったが、南郷Ⅰ～Ⅲのいずれの段丘にも厚さが5m以下の薄い円礫層が堆積していることを確認できた。

TOYOSHIMAは横手川上流で南郷段丘を覆う沖積錐に含まれる木片から12,780 $^{+340}_{-390}$ yrB.P.という^{14}C年代を得ている。したがって、南郷Ⅰ段丘は少なくとも約12,000年前には形成されていたことが明らかである。TOYOSHIMAは、板井沢段丘と南郷段丘にみられる河谷の堆積と侵食は、東北地方の山間地域の諸河川流域では数多くみられることを、現地調査によって確かめており、このような河岸段丘の形成が最終氷期後半に東北地方で一般的であったと考えている。

⑤土淵段丘

本地域で最も低位の沖積段丘で、土淵から板井沢にかけてと、黒沢川の現河川沿いに断片的に分布する。標高は岩瀬付近で98～100mであり、相野々駅北では段丘面が旧河道として残っている。堆積物は現河床とおなじような円礫であるが、厚さは不明である。

2　遺跡の地形と地質

本遺跡は横手川右岸に位置し、西側のA区と東側のB区に区分される。

B区は標高125～147mの山麓緩斜面上にある。地質的には、基盤の暗灰色シルト岩の上に角礫層と角礫まじりの砂・シルト層の互層が約10mの層厚で堆積しており、崖錐堆積物と考えられる。この崖錐堆積物の堆積時期は、堆積物の末端が南郷Ⅰ段丘形成時期に侵食されていることから、南郷Ⅰ段丘形成よりは古いものと考えられる。

A区は標高123～129mの緩傾斜の区域で、南郷Ⅰ段丘上に山地からでてくる小谷の出口に位置している。堆積物は、角礫まじりの砂・シルト層が3m以上堆積しており、南郷Ⅰ段丘上に堆積した沖積錐堆積物と考えられる。

参考文献

秋田県「雄平都中核都市建設計画地域土地分類基本調査　横手」(1976)

秋田県「秋田県総合地質図幅　横手」(1977)

中川久夫ほか「北上線沿線の段丘群」東北大地質古生物研邦報　No71 p47－59 (1971)

岡田篤正ほか「奥羽山脈内秋田県平鹿郡山内村三又における堆積段丘の形成年代」地球科学
26 p263－264 (1972)

TOYOSHIMA, M.「The Sequence of River Terrace Development in the Last 20,000 Years in the Ou Backborn Range, Northeastern Japan」Reprinted from the Science Reports of the Tohoku University, 7th Series (Geography) 34 2 (1984)

豊島正幸「過去2万年の下刻過程にみられる10年オーダーの侵食段丘形成」地形 10 4
p309－321 (1989)

第3節　周辺の遺跡

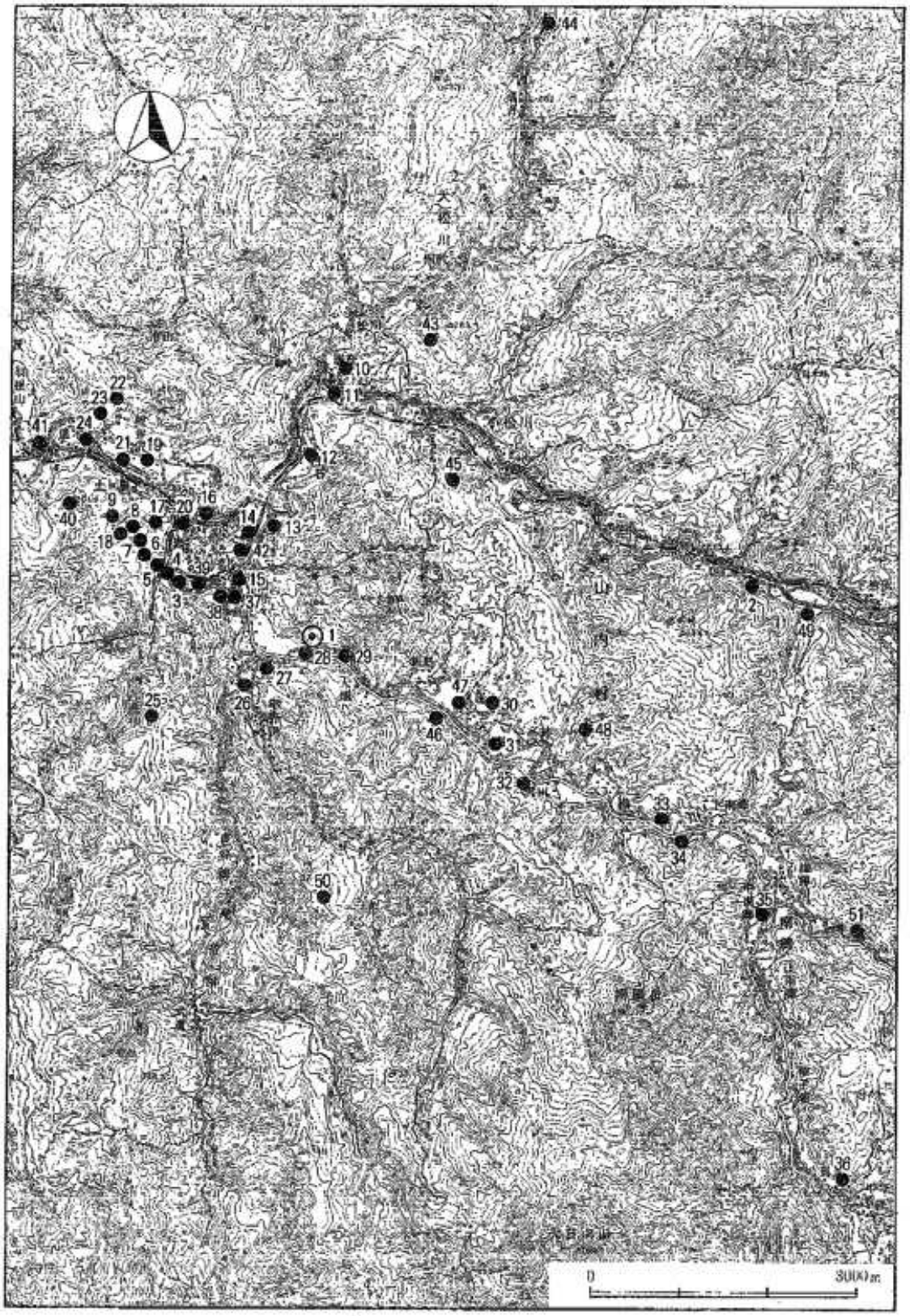
山内村で発見されている遺跡は、横手川と黒沢川が合流する現集落の周辺に多く分布しており、これらを中心として時代順に概観してみる（第5図、第2表）。

旧石器時代では、小田Ⅴ遺跡（8）から石刃が1点出土しているのみである。

縄文時代草創期には、横手川のそばで爪形文土器に石匙が伴った岩瀬遺跡（3）がある。ここからは両面調整石器を伴った石器埋納跡、集石炉跡、石器製作跡などが検出されている。早期末葉から前期初頭にかけては、虫内Ⅰ遺跡（5）、虫内Ⅲ遺跡（4）、小田Ⅴ遺跡で土器片が少量出土している他、岩瀬遺跡で竪穴住居跡や集石炉跡・石器製作跡などが検出されている。前期前半の遺跡には、本遺跡をはじめ茂竹沢遺跡（9）、虫内Ⅱ遺跡（6）、岩瀬遺跡などがあり、石鏃を中心にした石器・剥片が多く出土している。また、後半には、竪穴住居跡3軒と土坑などが検出された小田Ⅴ遺跡などがある。

中期後半から後期初頭にかけては、本遺跡やこれと対岸の段丘に形成された神成遺跡（27）の他、道地遺跡（16）、虫内Ⅲ遺跡、小田Ⅳ遺跡（7）がある。

後期前半では、捨て場から良好な土器群が出土した越上遺跡（2）や竪穴住居跡2軒を検出


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
0
3000m

第5図　周辺遺跡位置図

第2表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	上谷地遺跡	14	鶴ヶ池遺跡	27	神成遺跡	40	皿木館
2	越上遺跡	15	二瀬遺跡	28	力石遺跡	41	大沢館
3	岩瀬遺跡	16	道地遺跡	29	力石Ⅱ遺跡	42	和田館
4	虫内Ⅲ遺跡	17	小田遺跡	30	橋野沢遺跡	43	六郎台館
5	虫内Ⅰ遺跡	18	小田Ⅱ遺跡	31	横田表遺跡	44	大城
6	虫内Ⅱ遺跡	19	小田Ⅲ遺跡	32	横田野遺跡	45	鎧倉館
7	小田Ⅳ遺跡	20	板井沢遺跡	33	雨池遺跡	46	北館
8	小田Ⅴ遺跡	21	赤淵遺跡	34	除キ遺跡	47	寺館
9	茂竹沢遺跡	22	板屋沢遺跡	35	エヨリ遺跡	48	大穴館
10	上台遺跡	23	板屋沢Ⅱ遺跡	36	貝沢台遺跡	49	黒沢館
11	霜焼野遺跡	24	皿木遺跡	37	相野々遺跡	50	保章館
12	平石遺跡	25	谷地端遺跡	38	三明岡遺跡	51	藤倉館
13	菅生遺跡	26	桧沢遺跡	39	中島遺跡		

した茂竹沢遺跡がある。後期後葉以降晩期前半にかけては、虫内Ⅰ～虫内Ⅲ遺跡と小田Ⅳ遺跡を含む大きな範囲で墓域が形成されている。ここからは、土壙墓や土器埋設遺構が多数検出された他、虫内Ⅰ遺跡では捨て場が形成され膨大な量の遺物が出土した。また同期で上谷地遺跡に近い河川沿いには、桧沢遺跡（26）、相野々遺跡（37）、三明岡遺跡（38）がある。

弥生時代では、越上遺跡、小田Ⅴ遺跡で土器が少量出土しているのみで、古墳時代から平安時代のものについては、今のところ確認されていない。

中世では皿木館（40）、六郎台館（43）、黒沢館（49）、保章館（50）など多くの館跡が、かなり離れた状態で点在する。これらの点在性は支配領域に関係するが、縄文時代から弥生時代の遺跡が横手川、黒沢川、松川、武道川の流域沿いに分布していることと対称的である。

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

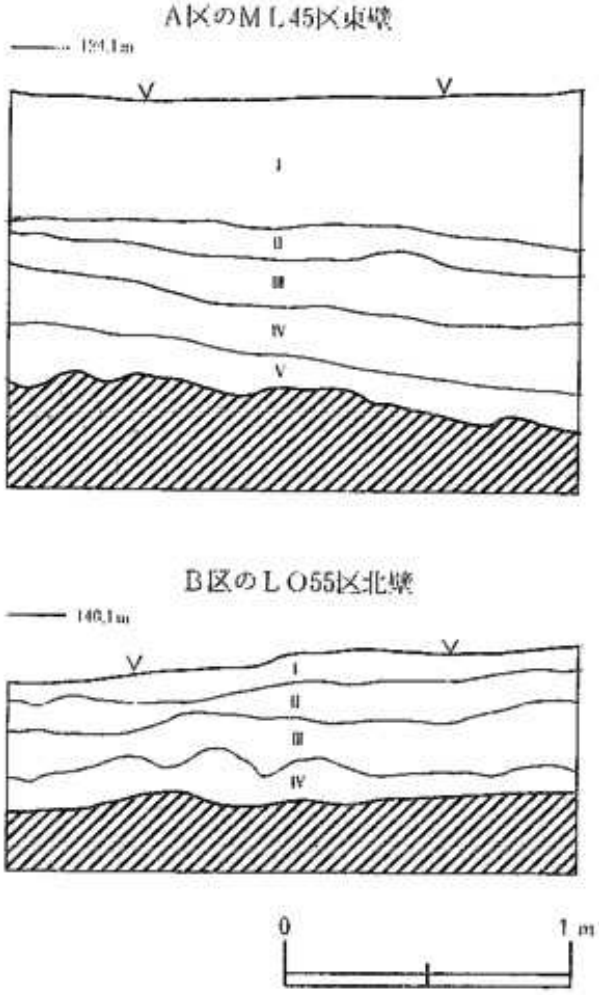
１．遺跡の推定範囲と調査区

上谷地遺跡の範囲は、天竺森南側の山地中腹にテラス状にせり出した山麓緩傾斜面全面と、その西側に展開する山地裾の緩傾斜面～沖積段丘面と推定される。遺跡は、東側が山麓緩傾斜面東側のＶ字状の谷、北側が山地裾部、南東部が山麓緩傾斜面南端の急崖で限られるが、南西側については不明な点が多い。これは、山地裾の緩傾斜面に続く沖積段丘面（現水田・畑地）にも遺物の散布が見られ、現状ではその散布範囲を正確に捉えることができないためである。今回の調査区はこのうち、山麓緩斜面の南端部及び、その西側の山地裾緩斜面である。

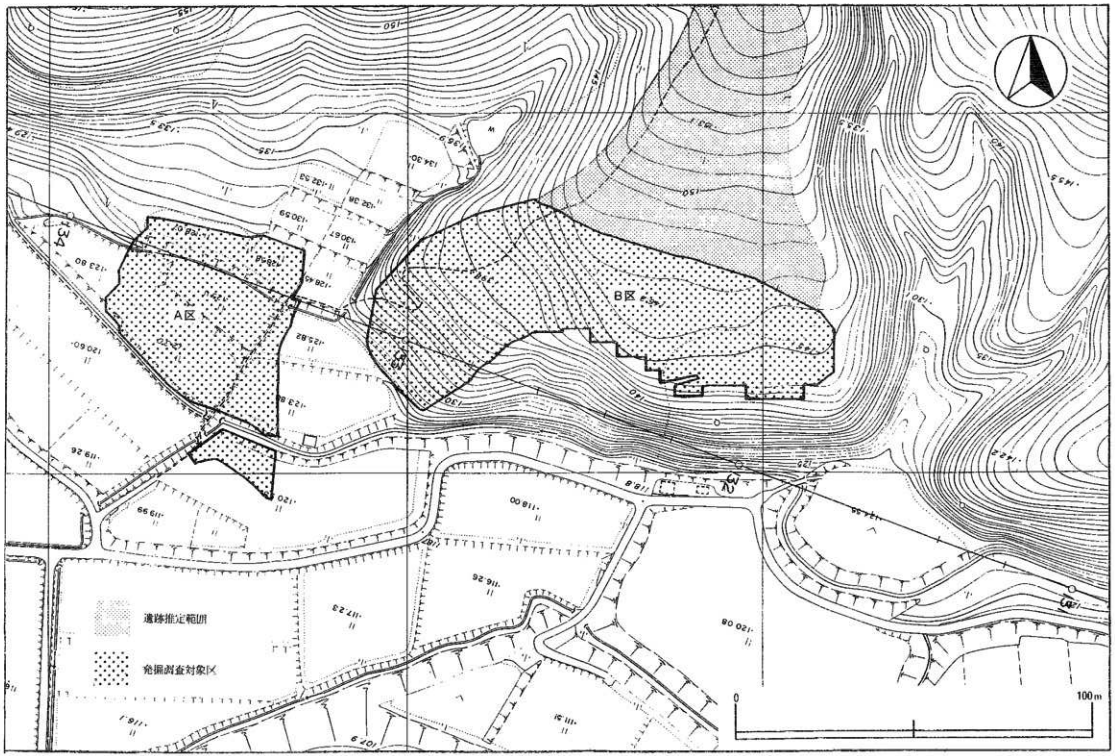
ところで、第２章等でも見て来たように、上谷地遺跡の立地及び調査区は、地形的に大きく異なる２つの部分から成っている。１つは東側の山麓緩斜面であり、他の１つは西側の山地裾の緩傾斜面である。このため、発掘調査は西側の緩傾斜面がＡ区、東側の山麓緩斜面がＢ区に分けて行った。以下、Ａ区、Ｂ区を分ける形で説明する。

２．Ａ区と基本層位

Ａ区全体は、北から南に下降する斜面で、南側に行くにつれその傾斜は緩くなる。調査前の状況は水田で、水田造成のため斜面上方側が削平され段状となっていた。このため、削平された部分では耕作土下が地山で、盛土された部分では現表土の１ｍ以上下から遺物が出土する。遺構は中央部から縄文時代前期のものと見られる石器製作跡、斜面上・下部から中世以降の炭焼成遺構が検出された。



第６図　Ａ・Ｂ区基本土層図



第7図　遺跡推定範囲と発掘調査対象区

3．B区と基本層位

B区は、平面形が北を頂点とする正三角形状を呈する山麓緩斜面である。前述のとおり、B区南西部はその東側に比べて1段低いごく緩斜面（略平坦面）となっている。このため、以後の記述に当たっては、この南西部を下位平坦面、東側の高い略平坦面を上位平坦面と呼称する。上位平坦面から下位平坦面への移行部は急な斜面である。

上位平坦面の南端には、南側からごく小さな谷が2箇所に入り込んでいる。この小谷も便宜的に東側からA小谷、B小谷とする。上位平坦面での遺物の出土は、南端部及び西端部が若干多いものの、他の部分では散在する程度である。遺構は、A・B小谷にはさまれた小さな平場や、小谷の斜面に僅かにあり、主体をなす中期末葉の竪穴住居跡群は西端部に集中する。

下位平坦面では、遺物も遺構も中央部にほぼ集中する。基本層位は、第6図に示した。A区では削平が著しいために、その層厚は20cm～1.2mと極端な開きがある。この地区の地山の傾斜は緩やかで、盛土を除く各層はそれに沿った傾斜を示している。Ⅰ層：黒褐色土（10YR3／2)。層厚が20～70cmの盛土で、1cm前後のあま石（粘性のある脆い礫）を少量含んでいる。粘性・締まり共に比較的弱い。Ⅱ層：黒褐色土（10YR2／2)。層厚は5～15cmで、少量の小礫と5～20mmのあま石を僅かに含んでいる。粘性・締まり共に比較的弱い。Ⅲ層：黒褐色土(10YR2／3)。層厚は5～20cmで、小礫を顕著に含んでいるほか、3～5cmのあま石が部分的に顕著な在り方を示している。粘性はやや弱く、締まりは比較的強い。この層からは、縄文時代前期と考えられる土器や石器が出土している。Ⅳ層：黒色土（10YR2／1)。層厚は10～30cmで3～5cmの礫を僅かに含んでいるほか、5～10mmのあま石を全体的に少量含んでいる。粘性・締まり共にやや強い。この層からは、縄文時代前期の土器や多量の石器が出土しており、この時期の遺物包含層と考えることができる。Ⅴ層：暗褐色土（10YR3／3)。層厚が10～20cmの漸移層で、3～10mmのあま石を顕著に含んでいる。粘性・締まり共に強い。このうち、水田の山側部分程著しい削平を受け浅い堆積状態を示している 。

B区では、西側下位段丘面と東側上位段丘面においては若干の相違がある。したがって、層厚の厚い下位段丘面について記述し、上位段丘面のそれを補足することにする。下位段丘面の堆積層の良好な所では、現地表面から地山まで概ね50～60cmの厚さを示し、層序自体は僅かに南西へ傾いている。Ⅰ層：黒褐色土（10YR3／2)。層厚が10cm程の表土で、地山粒と炭粒を僅かに含んでいる。根が多くはびこった軟らかい土である。粘性は弱い。Ⅱ層：黒色土（10YR2／1)。層厚は10～15cm程で、地山粒と炭粒を僅かに含んでいる。粘性・締まり共に比較的弱い。Ⅲ層：黒褐色土（10YR2／3)。層厚は20～25cm程で、地山粒と炭粒を僅かに含んでいる。粘性・締まり共に比較的弱い。Ⅳ層：褐色土（10YR4／4)。層厚が10～15cm程の漸移層で、特に目立った含有物はない。粘性・締まり共にやや強い。以上の西側平坦部に対する東側

緩斜面では、層厚が30～40cmと全体的に薄く、II層が薄くIV層が厚くなる。

第2節　調査方法

上谷地遺跡の調査は、工事の計画と排土置場の考慮から、発掘調査をA区・B区の順に実施することにした。

上谷地遺跡では、A・B区2地区の中心に近い路線内センター杭（STA133）にグリッド原点MA50を設定している。この原点を通り磁北に合わせた南北基線と、これに直行する東西基線を求め4m×4mのグリッドを設定した。東西基線には2桁の算用数字、南北基線には2文字のアルファベットを付し、グリッドの名称は、南東隅の交点の算用数字とアルファベットを組み合わせて呼称した。

遺構の実測は、グリッド杭を利用した遣方測量で作図した。遺構の名称は検出される順に算用数字を用い、その性格が判明した時点で略記号を付してある。したがって、略記号と番号の組み合わせが各遺構の名称になる。ただし調査の進行に伴って、遺構の性格が変わり略記号を変更した場合や、途中で遺構でないことが判明し番号を抹消した場合などがある。

遺物については、遺構名・グリッド名・出土層位・出土年月日を記入したラベルを付して取り上げ、竪穴住居跡内の床面遺物など必要と思われたものは、平面の位置とレベルを計測してある。

遺構の調査にあたっては平面図、断面図、エレベーション図等を作図し、必要事項の記録は調査日誌を用いてある。図面の縮尺は20分の1を基本にしたが、大きな表現を伴う場合は10分の1とした。写真撮影は35mmのモノクロとリバーサルフィルムを基本的に用い、必要に応じてネガカラーフィルムを使用している。また、遺跡の全景は航空写真撮影によっている。

室内における整理は、遺構は実測図をもとに第2原図を作成し、遺物については洗浄・注記の後、選別し実測図・拓影図を作成、写真撮影を行った。

第3節　調査の経過

上谷地遺跡の範囲を確定するために、4月8日から同21日にかけて、幅1mの試掘溝をA～Sまで各所に設定した。これによって、範囲が南北の沢を挟んだ東西2地区に及ぶことが分かり、排水管埋設工事などの関係から西側A区の調査を先行することになった。

4月27日、プレハブ設営などと共に、A区内にある水田面の下方側から本格的調査に着手した。5月19日、本日より盛土の厚い畔などを中心にして、重機による表土除去を行う。6月3

日、すでに調査を実施している水田面中位と併行して、上位部分の調査を開始する。調査を進めるにつれて、黒褐色土中から小さなチップが広がりをもって検出されることが分かった。6月19日、A区ＳＳ09石器製作跡の調査と併行して、B区の雑木集めや下草苅りを実施する。

7月10日、ベルトコンベアーをA区側から1つ1つ慎重に運んで、東側B区の上位平坦面側に設置する。東端部斜面の表土除去を皮切りに、B区の本格的な調査を開始する。以降、B区の調査は西側に向かって進められる。8月5日、東端部の緩い斜面から、大型で深い土坑ＳＫ24を検出。この他陥し穴状土坑やフラスコ状土坑が斜面で検出され、斜面部での調査を重視する必要性が生じてきた。17日、上位平坦面西側から、約3ｍの狭い範囲で縄文土器が集中して出土し、竪穴住居跡が想定された。この後、この平坦部を中心にして、次々に竪穴住居跡が検出される。28日、ＳＩ31竪穴住居跡検出。このころ、B区中央部に当たる斜面を中心に表土除去を行う。上位平坦面西側では、すでに検出されているＳＩ29・30竪穴住居跡の精査を実施している。この結果、8月いっぱいで上位平坦面の遺構はほぼ出揃い、以降人員を下位平坦面に集中して調査を進めることにした。

9月4日、下位平坦面を中心にして粗掘りを開始する。同時に、この南西にある急斜面では、下草苅りや雑木の撤収を行う。10月1日、予想に反して下位平坦面からＳＩ43竪穴住居跡が検出された。10月6日、下位平坦面より多数のピットや土坑を検出。この時点で、上位平坦面のＳＩ32・36・43竪穴住居跡では、まだ精査が継続中であり、人員の確保が要請された。22日、下位平坦面の西端からＳＩ115竪穴住居跡が検出された他、多数のピットや土坑が相次いで検出された。11月20日、下位平坦面の図面作成と併行して発掘器材などを搬出し、上谷地遺跡の調査終了に何とかこぎつけることができた。

第4章　A区の調査記録

A区では、縄文時代前期の石器製作跡1箇所・石器集中部1箇所・土坑2基と中世以降と考えられる炭焼成遺構5基・溝1条を検出している。これらは、段状に造り出された水田跡から検出されており水田造成時に消滅したものもかなり存在していると考えられる。

第1節　検出遺構と出土遺物

1．縄文時代

（1）石器集中部

SV03（第9～22図、図版2・36～38）

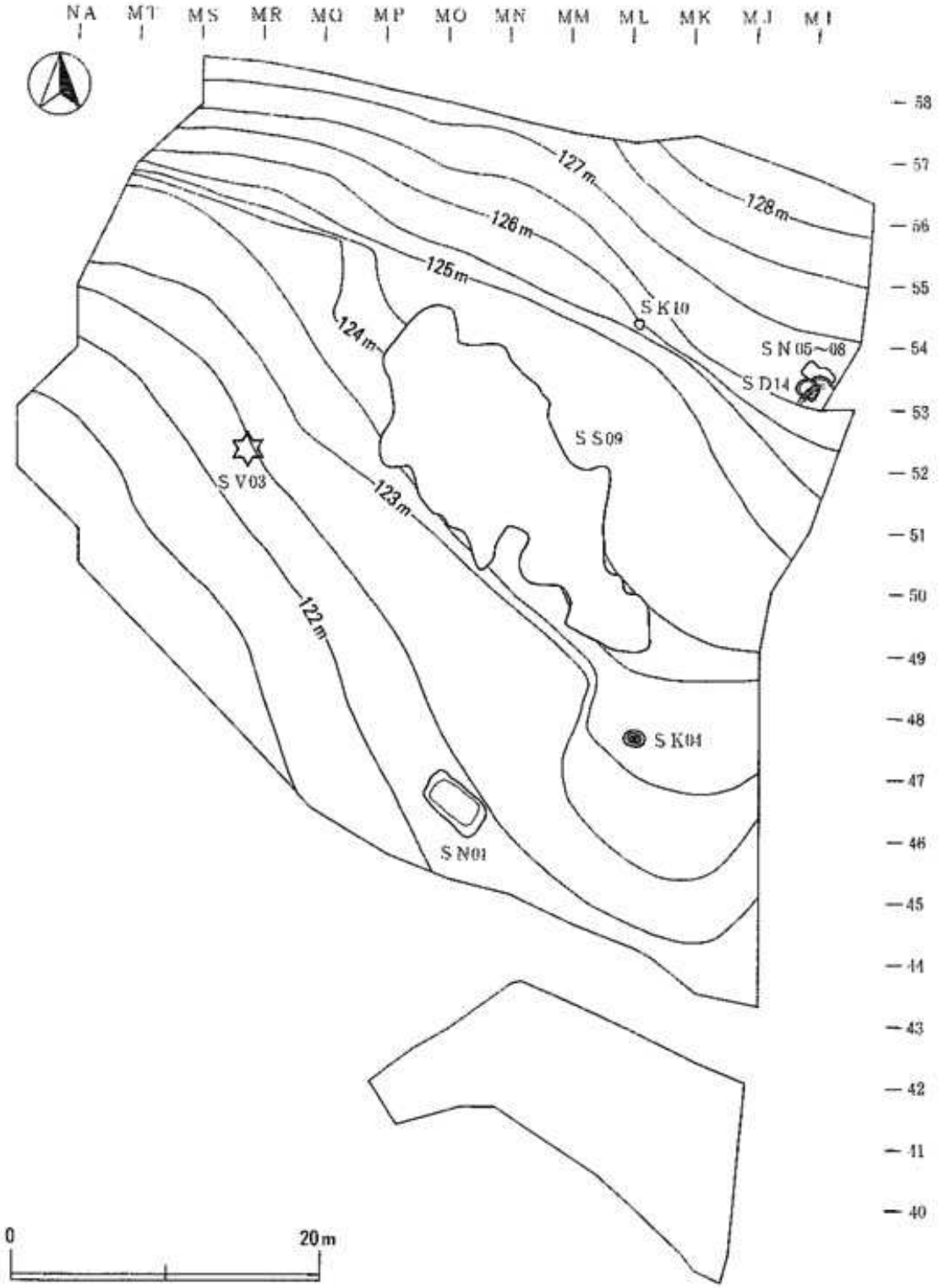
中央やや西側の緩斜面、MR52グリッド東側Ⅳ層中で検出した。頁岩を素材とした長さ5～10cmほどの49点の剥片が0.35m×0.3mの狭い範囲に集中して検出されたものである。さらに南～西側の約2m以内からは、同じような剥片が約25点出土している。この石器が集中する部分には掘り込みがなく、これらの剥片は全体として斜面の傾斜に沿っている。このことは、本来緩い傾斜地に集中してあった剥片が、一部南西斜面側に分散したものと理解される。ここからは定形的石器やチップが出土しなかったので、素材としての剥片を集中してまとめておいた場所と考えられる。

剥片は、74点出土している。このうちS27の1点だけに調整が施されており、他は無調整である。剥片には横長の剥片をいくつか含んでいるが、ほとんどは縦長の剥片である。また表裏面に礫皮面を残しているのは、S28～S31、S35・S38・S41・S44・S47・S60・S63・S64・S69・S71・S72と多く、特に良質なものだけを選択している訳ではない。接合できた資料には、接合資料A（S12・S14）、B（S15～S17）、C（S18・S19）、D（S20・S21）、E（S22・S23）、F（S24・S25）、G（S1・S3）、H（S2・S5）、I（S4・S6～S9）、J（S10・S11・S13）がある。S27は剥片が集中して出土した部分に含まれていたもので、折損部を除く裏面側の周囲には丁寧な調整が及ぶ。

（2）石器製作跡

SS09（第8図、図版3）

中央部のⅢ層およびⅣ層から、Ⅳ層を主体として石器および剥片・チップが多量に出土した。石器が出土した広がりは、MK49グリッドから北西のML54グリッドに及ぶ長軸26m×短軸約10mの範囲で、0.1～0.3mの高低差で出土した。ただし、この北東側と南西側では水田造成時


NA
MT
MS
MR
MQ
MP
MO
MN
MM
ML
MK
MJ
MI
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
127m
128m
126m
125m
124m
123m
122m
SK10
SN05~08
SD14
SS09
SV03
SK04
SN01
0
20m

第8図　A区遺構配置図

に南東―北西の水田区画に沿って大きく削平されているし、東側でも大きく削平が及んでいる。これらのことから、本来の広がりは北東側と南西側さらに東側に広がる、広範囲に遺物が分布していたものと思われる。したがって、分布範囲として示した領域以外であっても比較的近い所から出土した遺物は、ＳＳ09と関連づけて扱ってある。ＳＳ09の石器には、集中する部分がいくつか認められる。定型的な石器は石鏃・石錐・石篦・石匙・スクレイパーなど多種類にわたっており、しかもこれらのほとんどはⅣ層中出土である。特に、中央から東側にかけては濃い分布を示しており、チップや剥片の在り方と類似している。この中には、折損したもの（Ｓ109～Ｓ111）や再調整によって短くなったと考えられるもの（Ｓ99）、刃部が摩耗したもの（Ｓ85）が含まれている。このことは、ＳＳ09の性格を一概に石器製作跡だけに限定することはできず、これ以外の生活の場として利用したことも考慮する必要がある。なお、ＭＭ51区、ＭＰ53区、ＭＫ55区などのⅣ層中から土器が６点出土している。これらの土器は縄文時代前期初頭と考えられることから、Ⅳ層中を主体とするＳＳ09もこの頃に近い年代が考えられる。

Ｓ84～Ｓ144は、ＳＳ09から出土した石器である（第23～30図）。これらはⅢ層中の２点（Ｓ113・Ｓ114）を除くと、すべてⅣ層中から出土している。定形的な石器は、石鏃９点、石錐３点、石匙11点、石篦20点、スクレイパー12点などである。これらの石器は、ＳＳ09の中でも中央部に集中しており、ＭＭ51グリッドでは石鏃３点、石匙３点、石篦５点、スクレイパー４点が、ＭＮ52グリッドでは石鏃・石錐が各１点、石篦５点が出土した。

石鏃（Ｓ75～Ｓ83）は、形状から三角鏃（Ｓ75）、細長く二等辺三角形状を呈するもの（Ｓ76～Ｓ80）、五角形状を呈するもの（Ｓ81～Ｓ83）に分けられる。このうち、Ｓ76は未製品の可能性がある。石錐（Ｓ84～Ｓ86）は棒状のつまみ部をもち、Ｓ85の刃部では摩耗が著しい。石匙（Ｓ88・Ｓ89・Ｓ91～Ｓ99）は断面が三角形で、表面には両側縁から丁寧な押圧剥離が施されている。裏面の右側縁には、押圧剥離のための調整剥離が準備されている。石篦（Ｓ101～Ｓ114、Ｓ125～Ｓ129、Ｓ136）は、長さが５～６cmのもの（Ｓ125・Ｓ126・Ｓ128）、同じく12～13cmのもの（Ｓ109・Ｓ110）、それらの中間のものがある。これらの素材のほとんどは横長剥片であり、Ｓ105・Ｓ106は縦長の剥片である。Ｓ109の裏面は、礫皮面をそのまま利用している。裏面の調整からは、Ｓ101のように裏面の半分以上に剥離の及ぶもの以外は、ほとんどが両側縁の縁辺部に剥離を施している。スクレイパー（Ｓ87・Ｓ115～Ｓ124）は、縦長剥片の先端部に丁寧な調整によって丸みのある刃部をつくるもの（Ｓ115～Ｓ122）と、側縁に丁寧な調整を施しているもの（Ｓ87・Ｓ123・Ｓ124）がある。この他Ｓ90・Ｓ100は、つまみが付いていないものの、形態や剥離調整がそれぞれＳ89やＳ98と類似しており、石匙の未製品の可能性がある。

１～６は、前記Ⅳ層中から出土した縄文土器の破片である（第31図）。１は頸部がくの字で、

体部上位が強く張る深鉢の口縁部である。口縁は波状を呈するが、弧状を示す谷部には小さな突起が付く。口縁部には、長さ4cmほどの直線的な張り付け文が2つあり、これは突起部から波頂部に向う口唇部と平行する。この土器には、頸部を除いた全面に半截竹管による押し引き文が施される。この文様は、口縁と同上位では横位に、貼り付け文の中間ではX字形に施されている。2・3は平行な沈線文によるものである。これらには僅かに繊維が含まれている。4・5は縄文の施された破片、6は2本一組の撚紐を軸に巻き付けて回転したものの底部である。これらは、前期初頭頃の時期と考えられる。

（3）土坑

SK04（第9図）

東側中央部緩斜面、MK・ML47グリッド西側で検出した。規模は長軸1.35m×短軸1.05m×深さ0.3m、平面プランは楕円形である。長軸方向はN－75°－Wを指す。底面から壁面にかけては擂鉢状を呈し、底面中央部には長軸0.6m×短軸0.35m×深さ0.15mのピットがある。覆土は中央で柱痕と思われ黒褐色土の土層がある。

SK10（第9図）

中央やや北東側の緩斜面、MK55グリッドで検出した。形態は不整円形で、規模は長軸0.7m×短軸0.65m×深さ0.2mで、平面プランは不整円形である。底面は南西側にやや傾いている。覆土は黄褐色の締まりのある土である。

2．中世以降

（1）炭焼成遺構

SN01（第36図、図版23）

南側中央部緩斜面、MN・MO46グリッドで検出した。規模は長軸2.2m×短軸1.2m×深さ0.35mで、平面プランは平行四辺形である。長軸方向はN－50°－Wを指す。底面は平坦で、壁は擂鉢状を呈す。壁は、厚さ約1cmほどが還元および酸化した状態である。底面には2cm前後の炭化物層が認められた他、長さ10cm×幅5cmほどの炭化物もいくつか出土した。

SN05～08（第36図、図版23）

北東側緩斜面、MH・MI53グリッドで検出した。確認面は、縄文時代の遺物包含層に比べてかなり上層にあるが、それほど新しくもない土層である。はじめにSN05・08が方形状に検出でき、順次SN06・07の順で検出した。これらは、すべてSD14溝に切られている。SN05～08には切り合い関係があり、SN06はSN05よりも古くSN07よりも新しい。そしてSN08はSN05よりも古いが、SN07とSN08の関係は不明である。この中で規模が推定できるのはSN05とSN06で、SN05は長軸2m×短軸1m×深さ0.05mの長方形と考えられ、SN06は

長軸1.45m×短軸1.2m×深さ0.1mの隅丸長方形である。SN06の床と壁は焼けて比較的しっかりしており、炭化物も多い。SN07は現存長1.4m×深さ0.15mで、断面は擂鉢状を呈している。ここでは、多量の炭化物が堆積していたが、床・壁面ともそれほど焼けてはいない。SN08は痕跡を留める程度である。

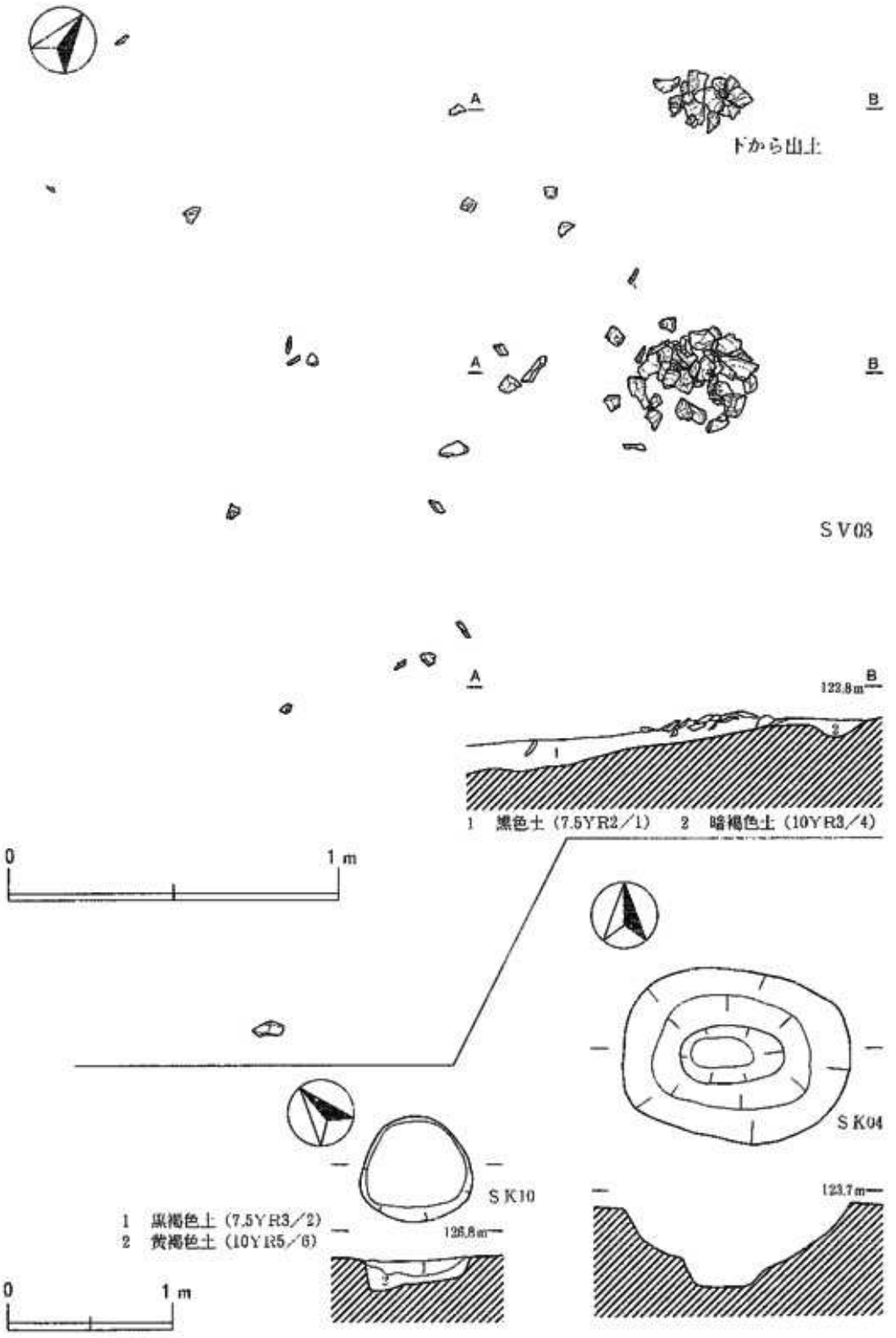
SD14（第36図）

北東側緩斜面で、MH・MI53グリッドで検出した。SN06～07の精査中に検出したもので、本遺構はSN05～08を切っている。幅は0.2～0.3mで、残存部の長さは約2mである。溝は北東から南西側にかけて僅かに湾曲し、南西斜面側に傾斜している。

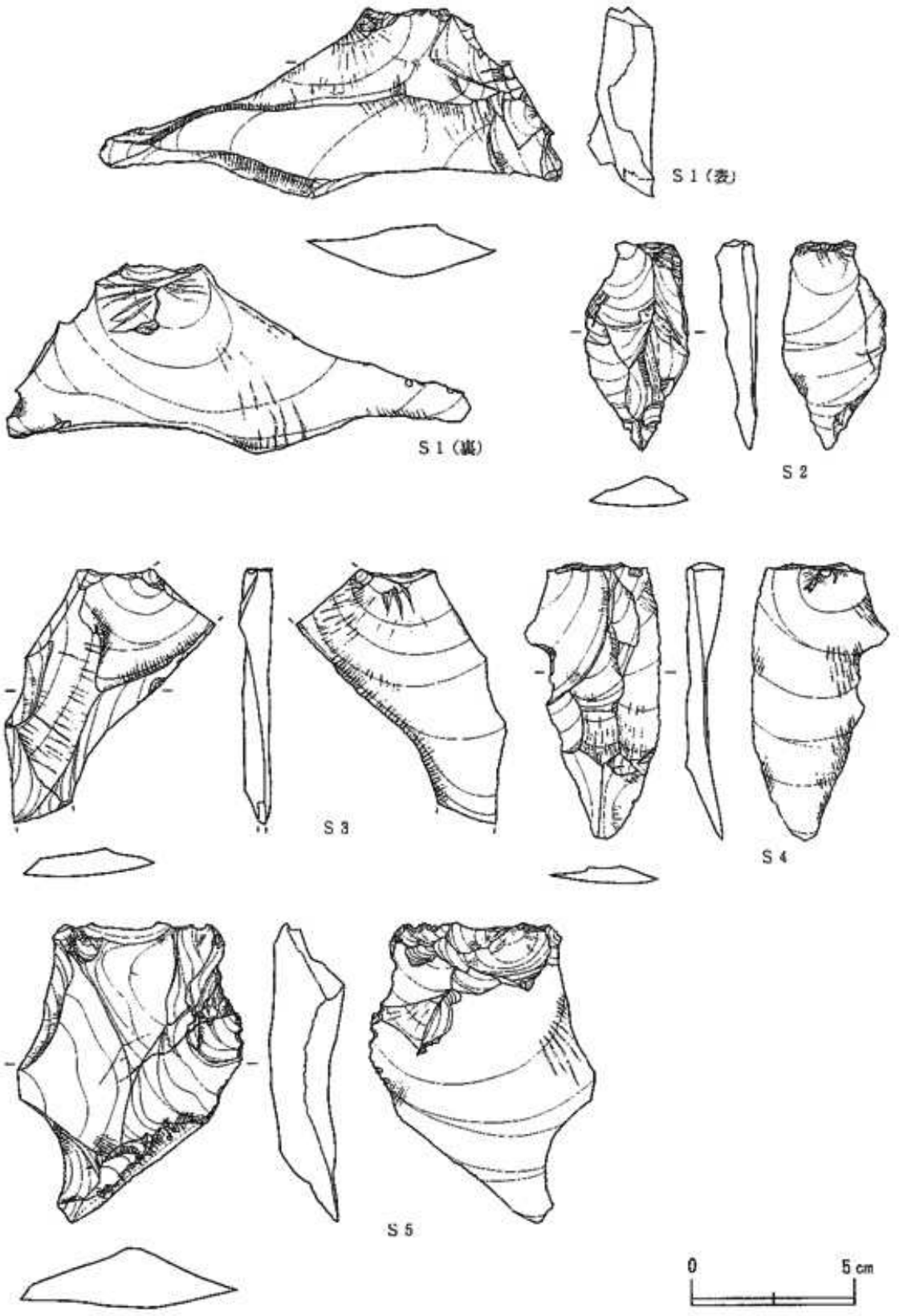
第2節　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物には、SS09と関連づけて述べたⅣ層出土の縄文土器6点と、表採や表土出土の石器21点、SV03・SS09以外にⅢ・Ⅳ層から出土した石器3点がある。表採や表土出土資料には、SS09と関連するものが多いと考えられる。以下には、遺構外出土石器について述べる（第32～35図、図版43～46）。

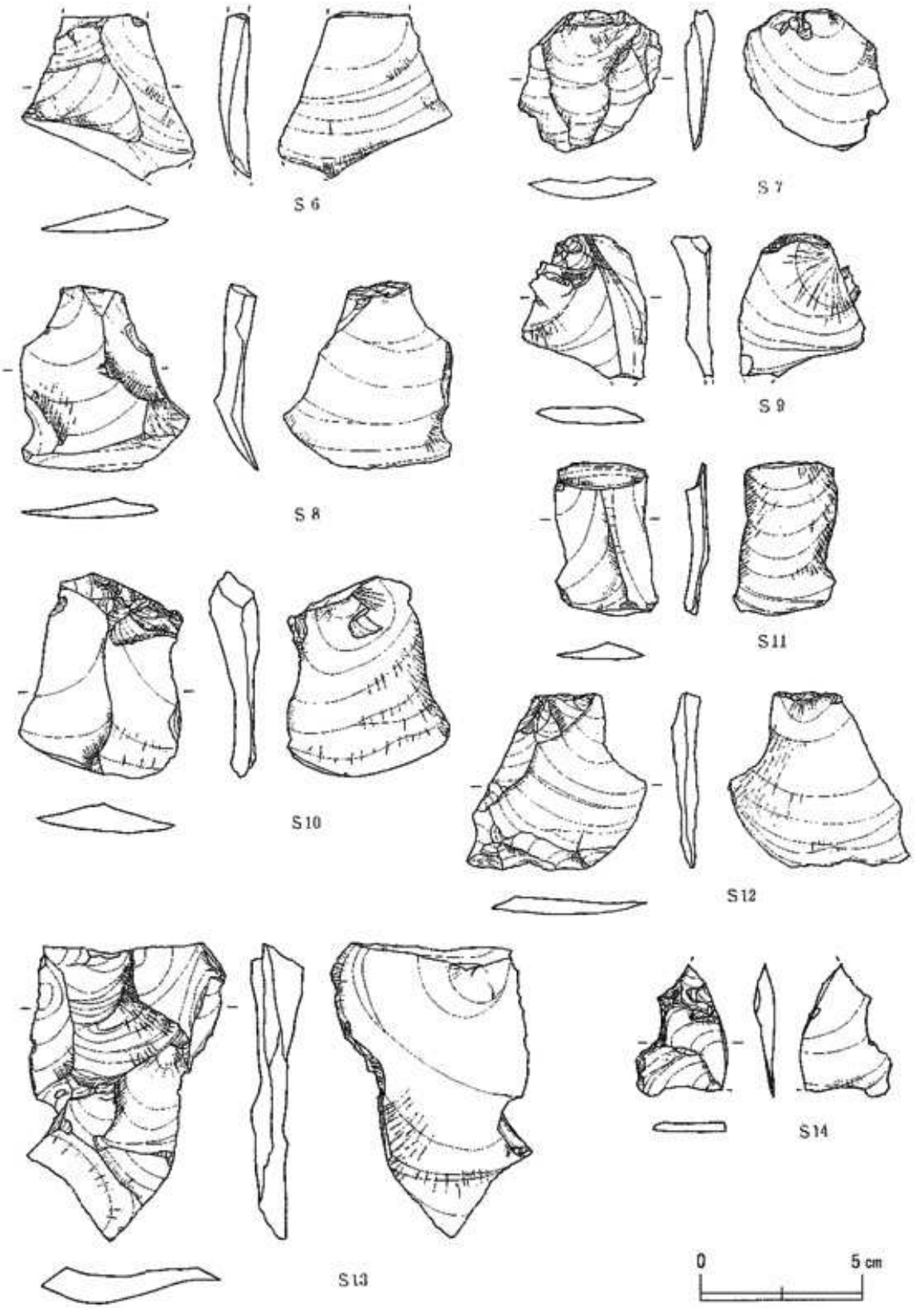
石器の器種には、石鏃2点、石錐1点、石篦5点、スクレイパー4点、礫器1点、垂飾品1点などがある。石鏃（S145・S146）は基部が突出した有茎鏃で、S145はチャート質の石材である。石錐（S147）は、やや太目の棒状を呈している。石篦は、裏面の半分以上に剥離が及ぶもの（S154）と、そうでないもの（S151～S153・S155）に分けられる。後者では、側縁の縁辺を調整しているもの（S151～S153）と調整の施さないもの（S155）がある。スクレイパー（S148～S150・S157）には、先端に丸みのある丁寧な調整を施すもの（S148～S150）と側縁にやや粗い調整を施しているもの（S157）がある。礫器（S167）は擦石と凹石を兼ねたもので、偏平な両面に擦り面をもち片面に3つの凹部をもつ。垂飾品（S168）は長楕円形を呈し、上部表面に径6㎜裏面に7㎜の穿孔を両側から円錐状に施したものである。石質は粘板岩である。両側は、主として縦方向の丁寧な磨きを施し、穿孔部と反対側の端側ではやや鋭利に仕上げている。S169は、石質がS168と類似するため掲載したが、未加工である。この他、S158・S159は小さな剥片を取る石核の可能性があり、S161・S162では両面にやや粗い剥離をもつ比較的扁平な石器である。



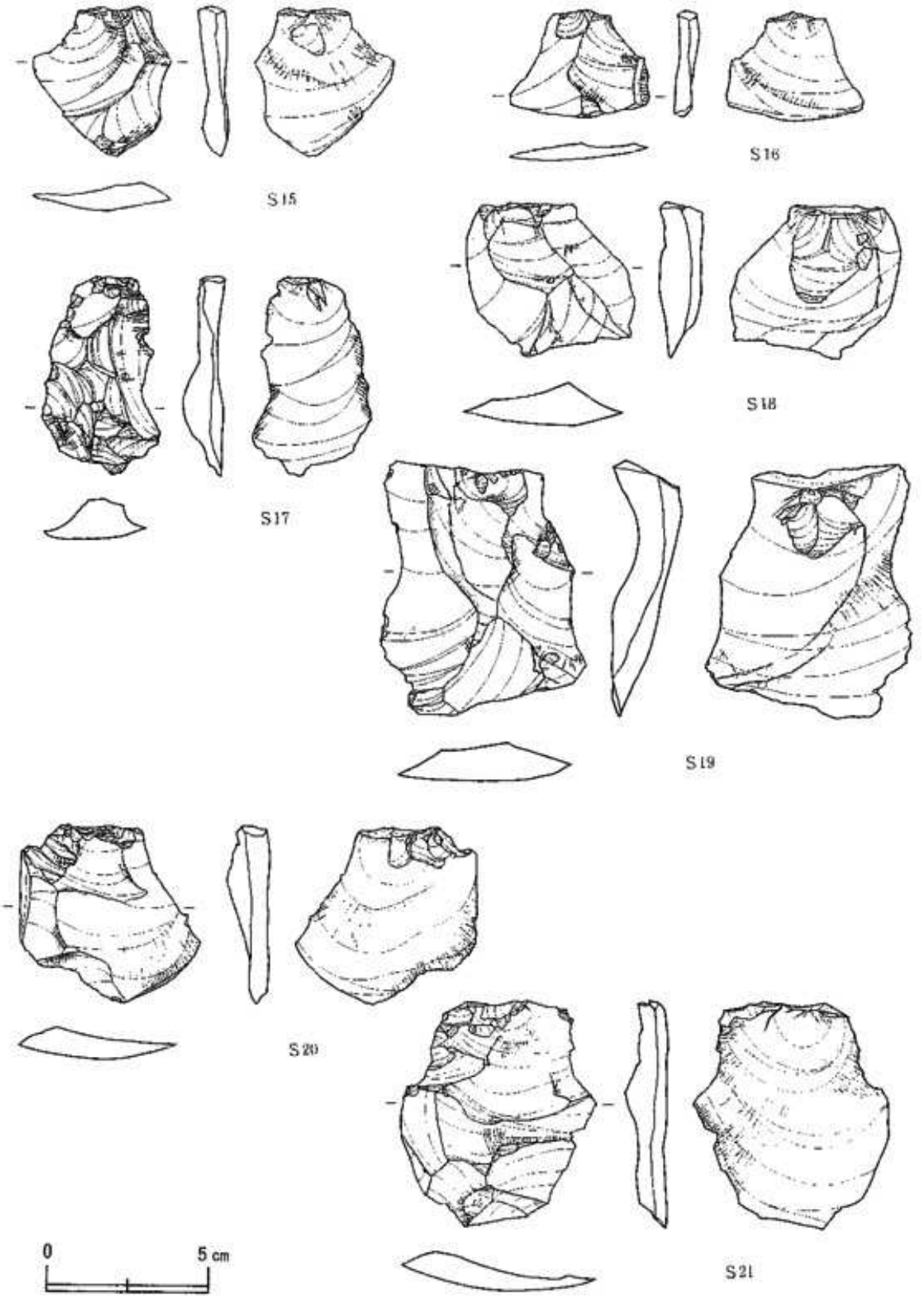
第9図　SV03石器集中部と土坑



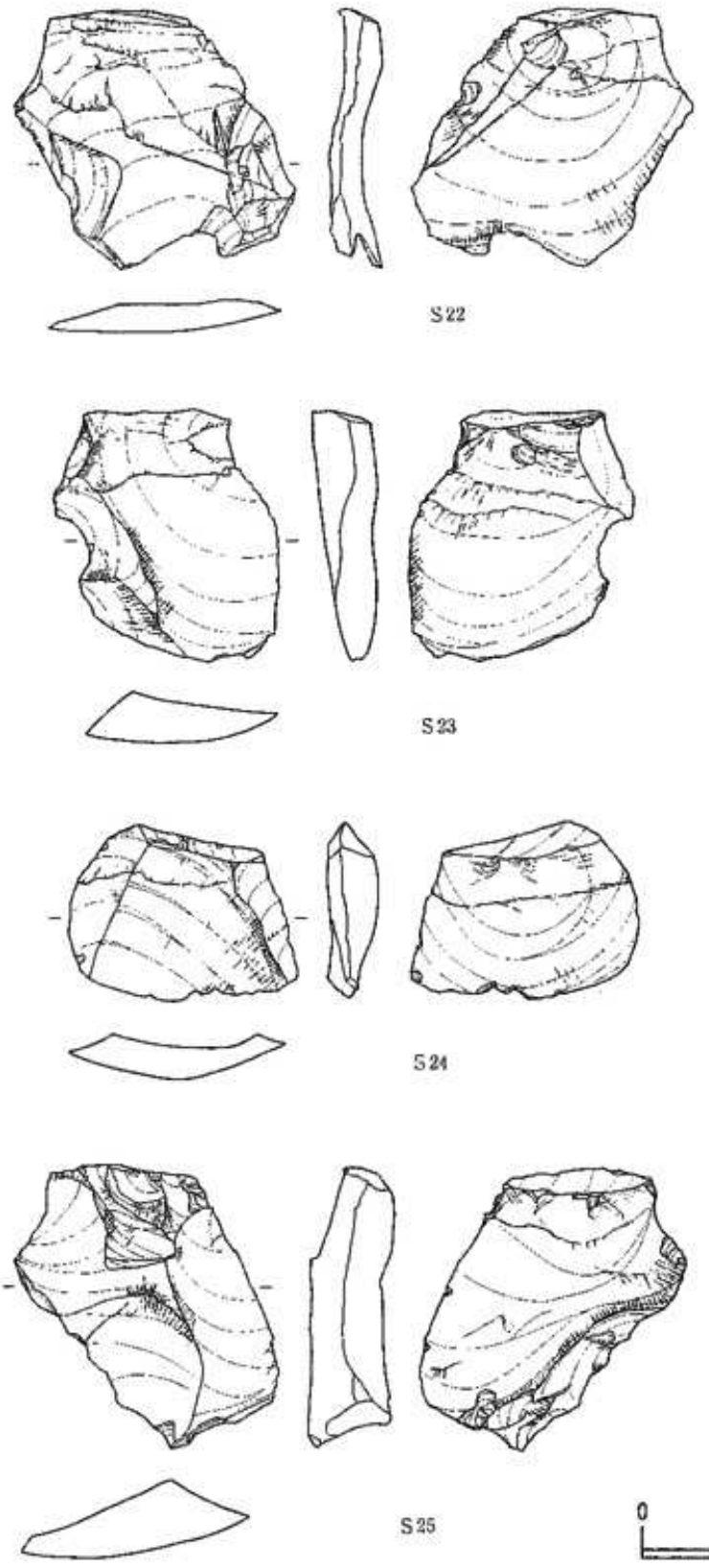
第10図　SV03石器集中部関連石器（1）



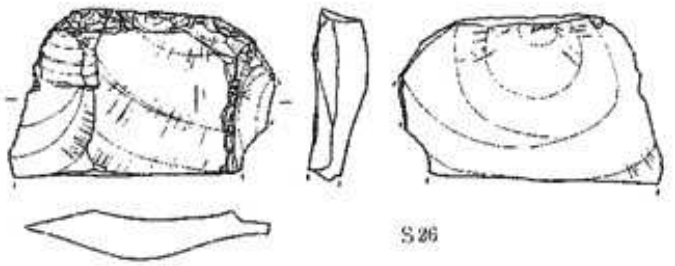
第11図　ＳＶ03石器集中部関連石器（２）



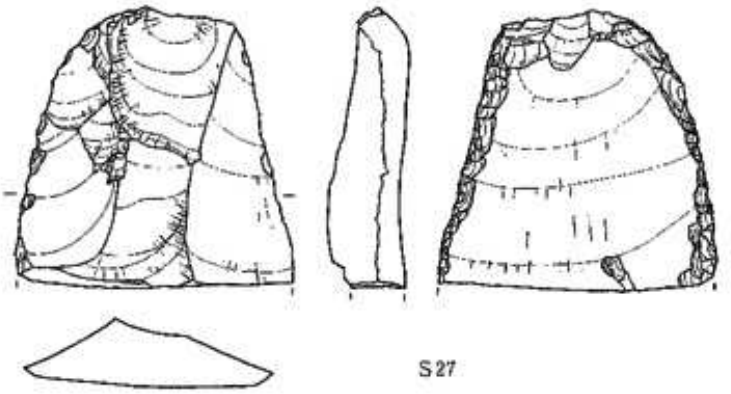
第12図　ＳＶ03石器集中部関連石器（3）



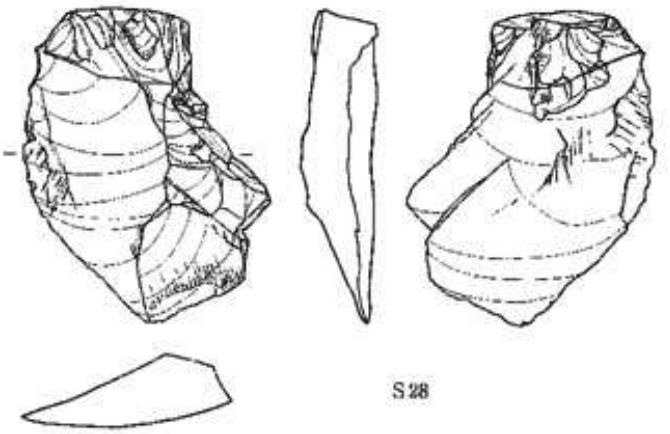
第13図　ＳＶ03石器集中部関連石器（４）



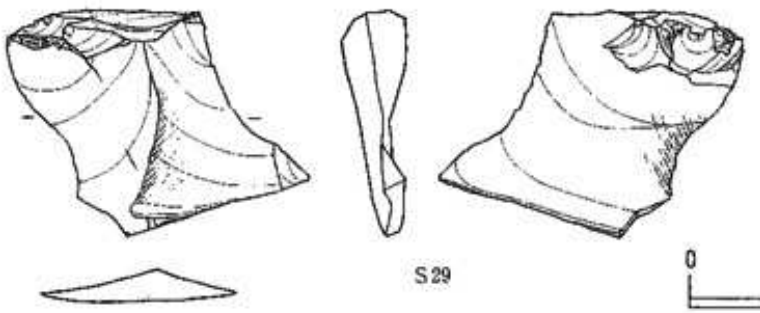
S26



S27

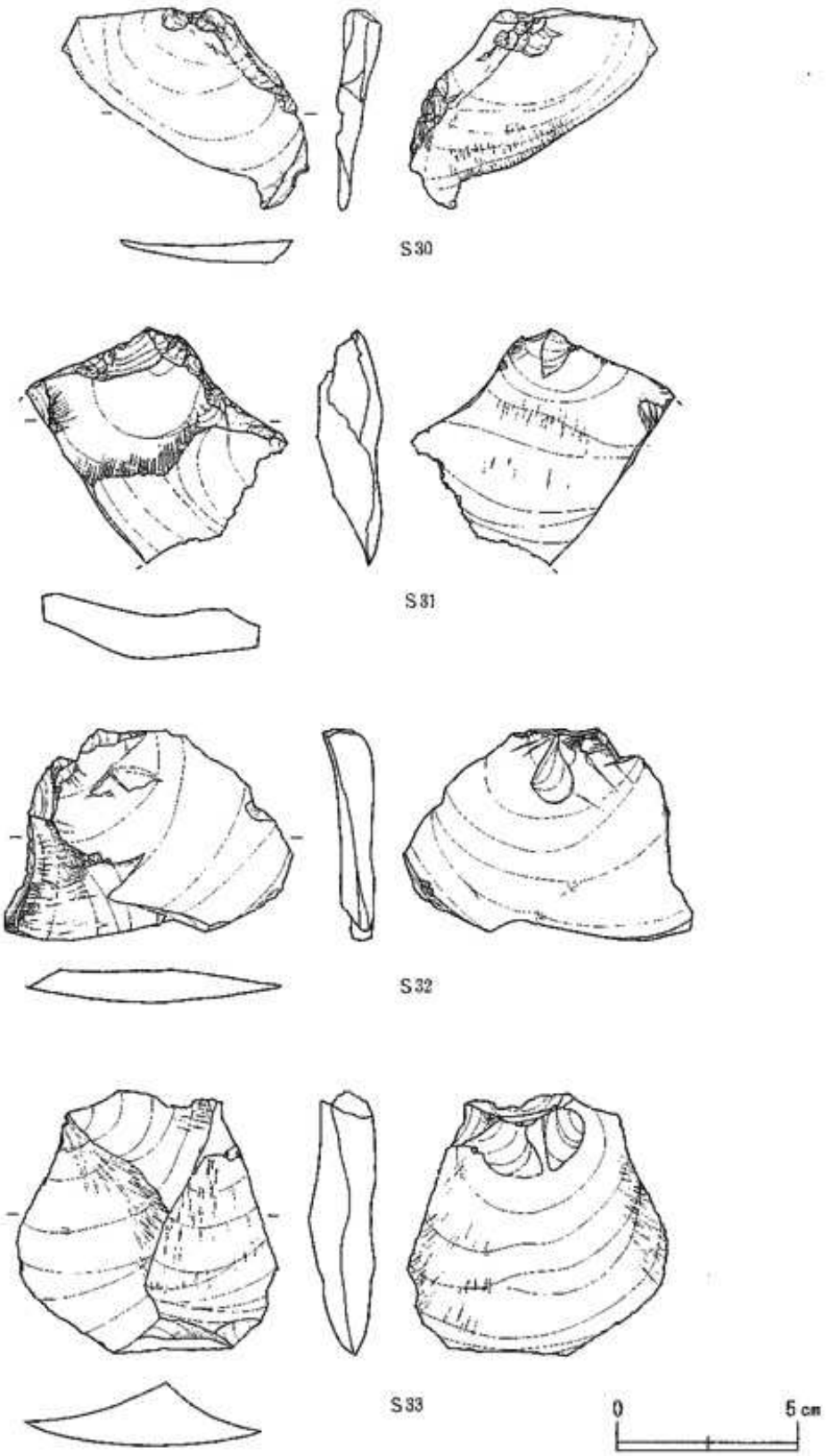


S28

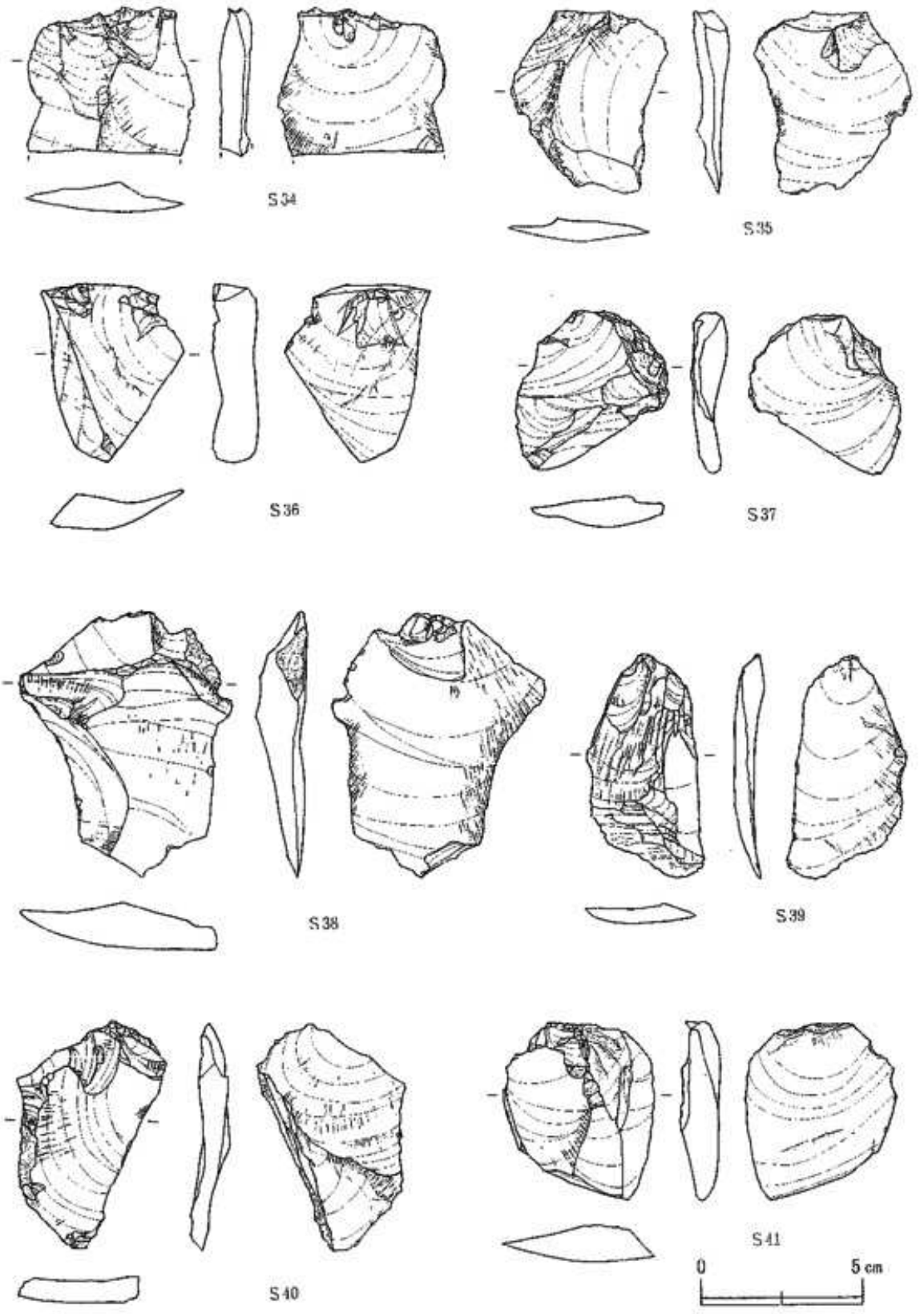


S29

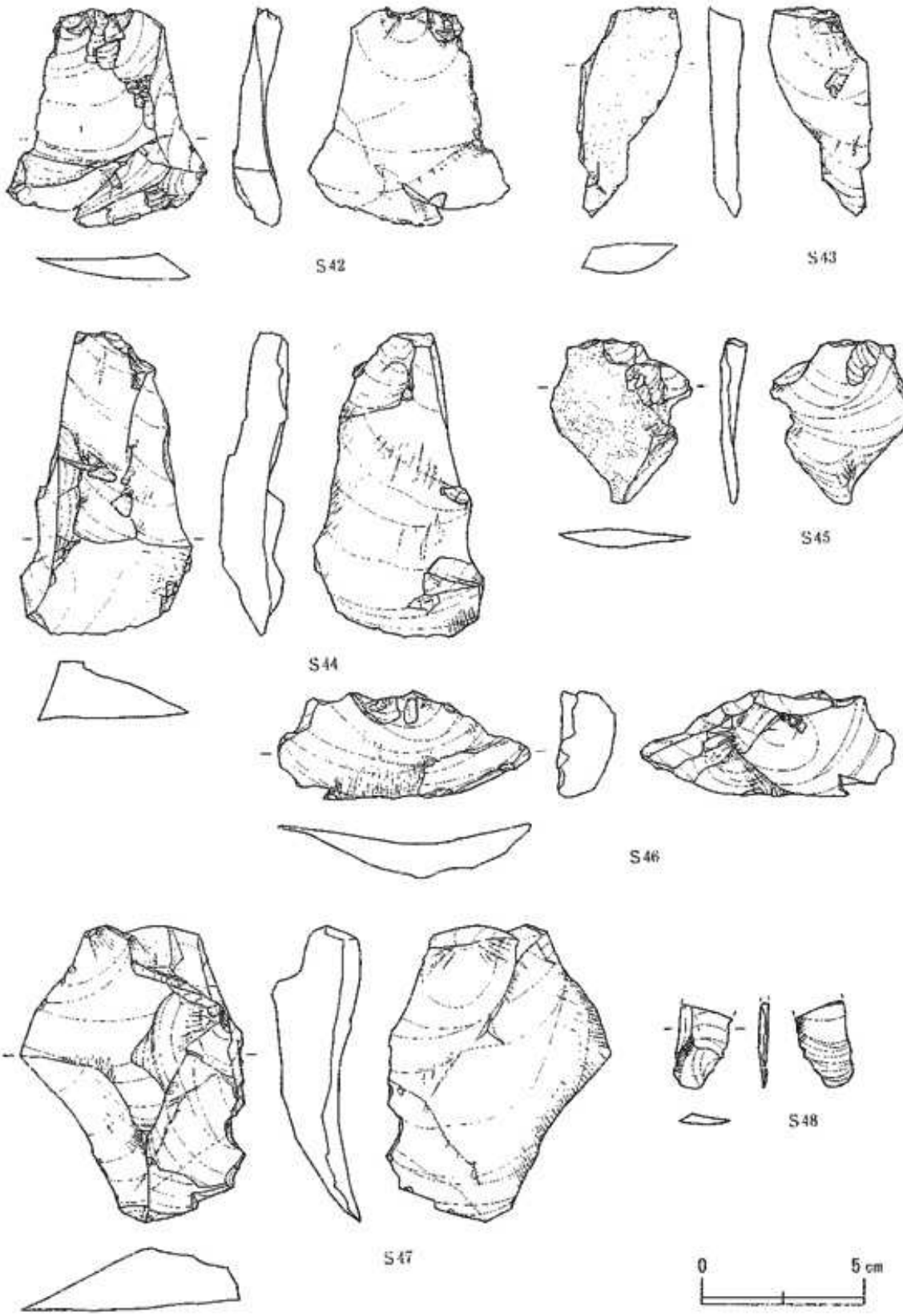
第14図　ＳＶ03石器集中部関連石器（５）



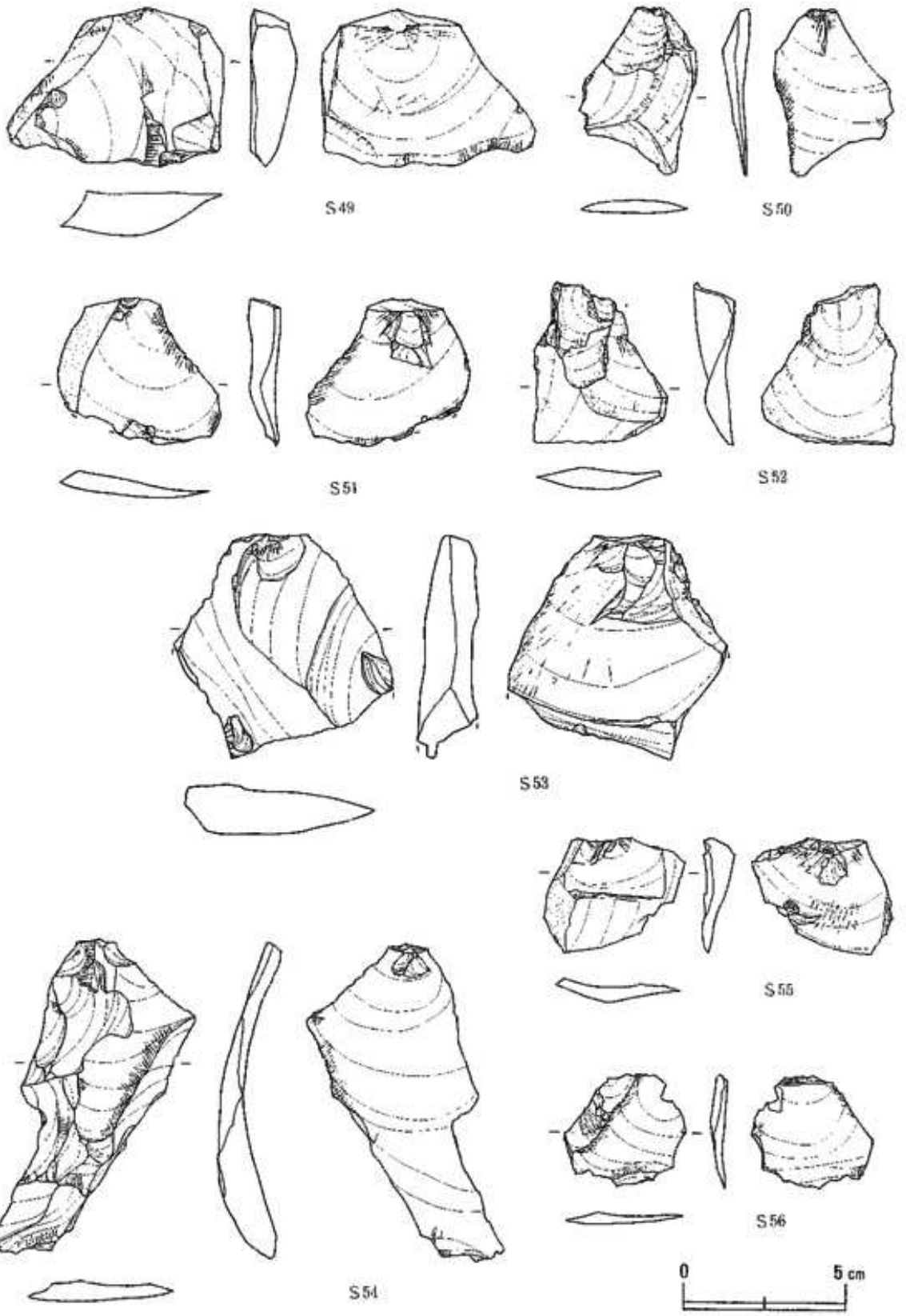
第15図　ＳＶ03石器集中部関連石器（６）



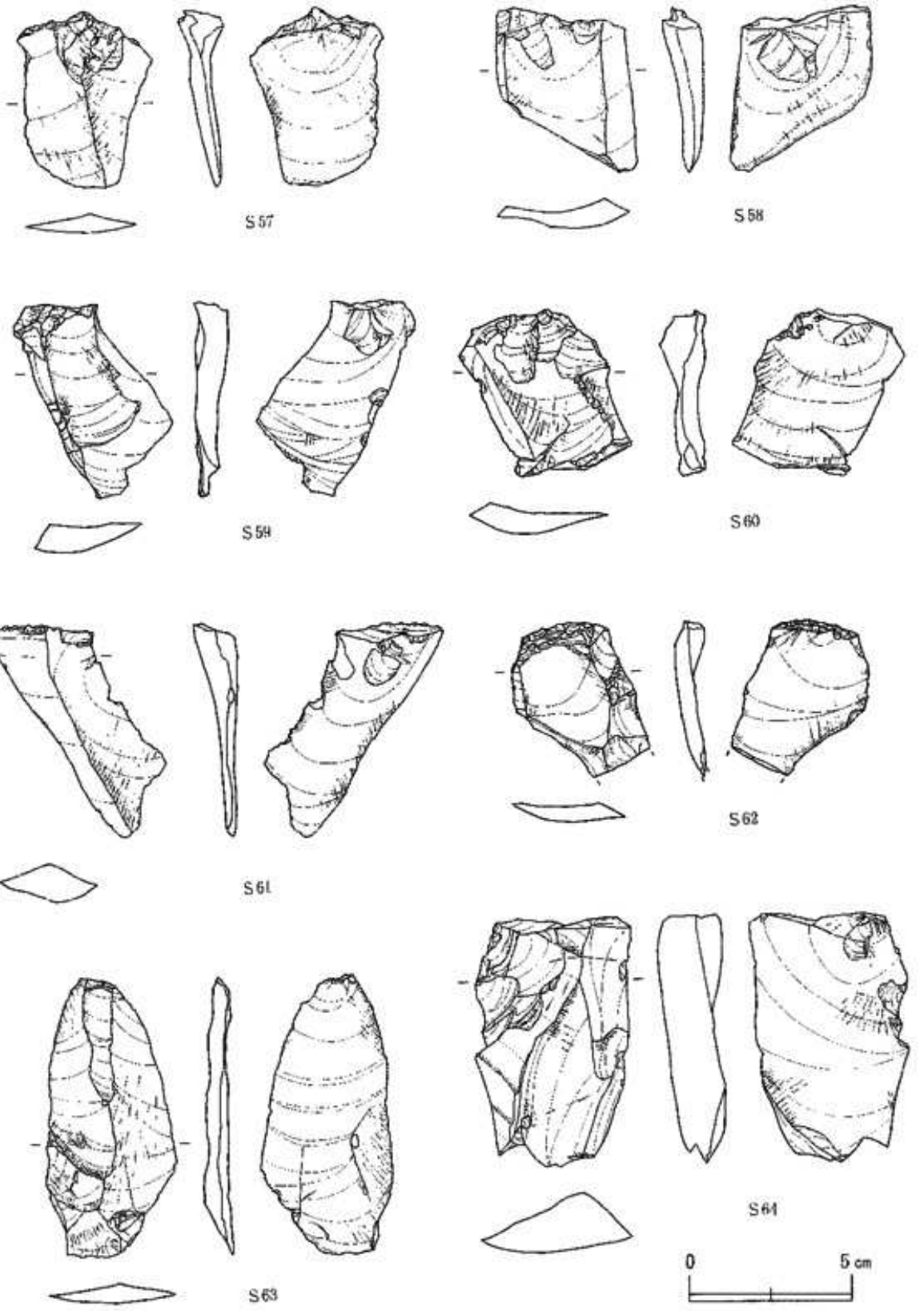
第16図　ＳＶ03石器集中部関連石器（７）



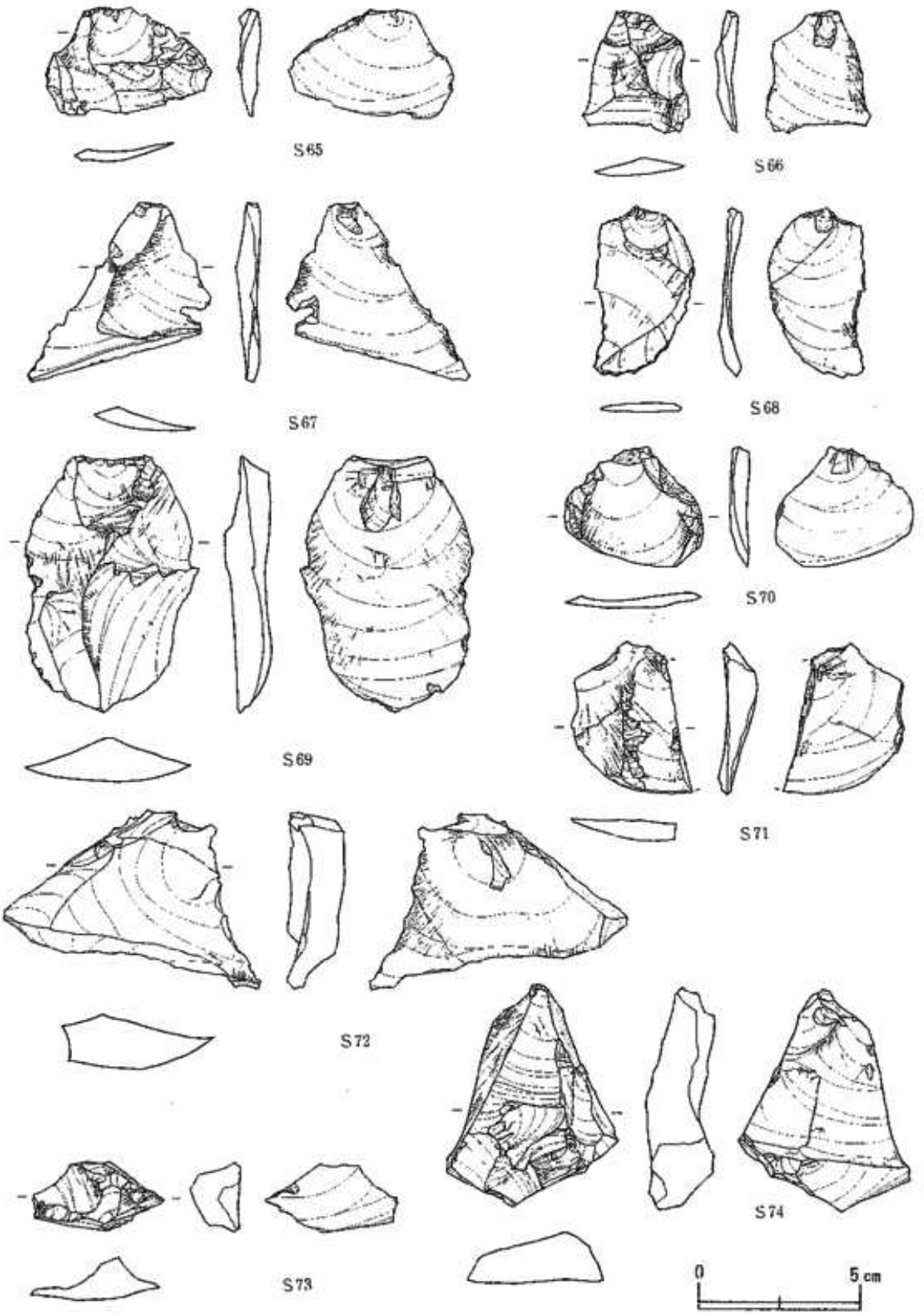
第17図　ＳＶ03石器集中部関連石器（８）



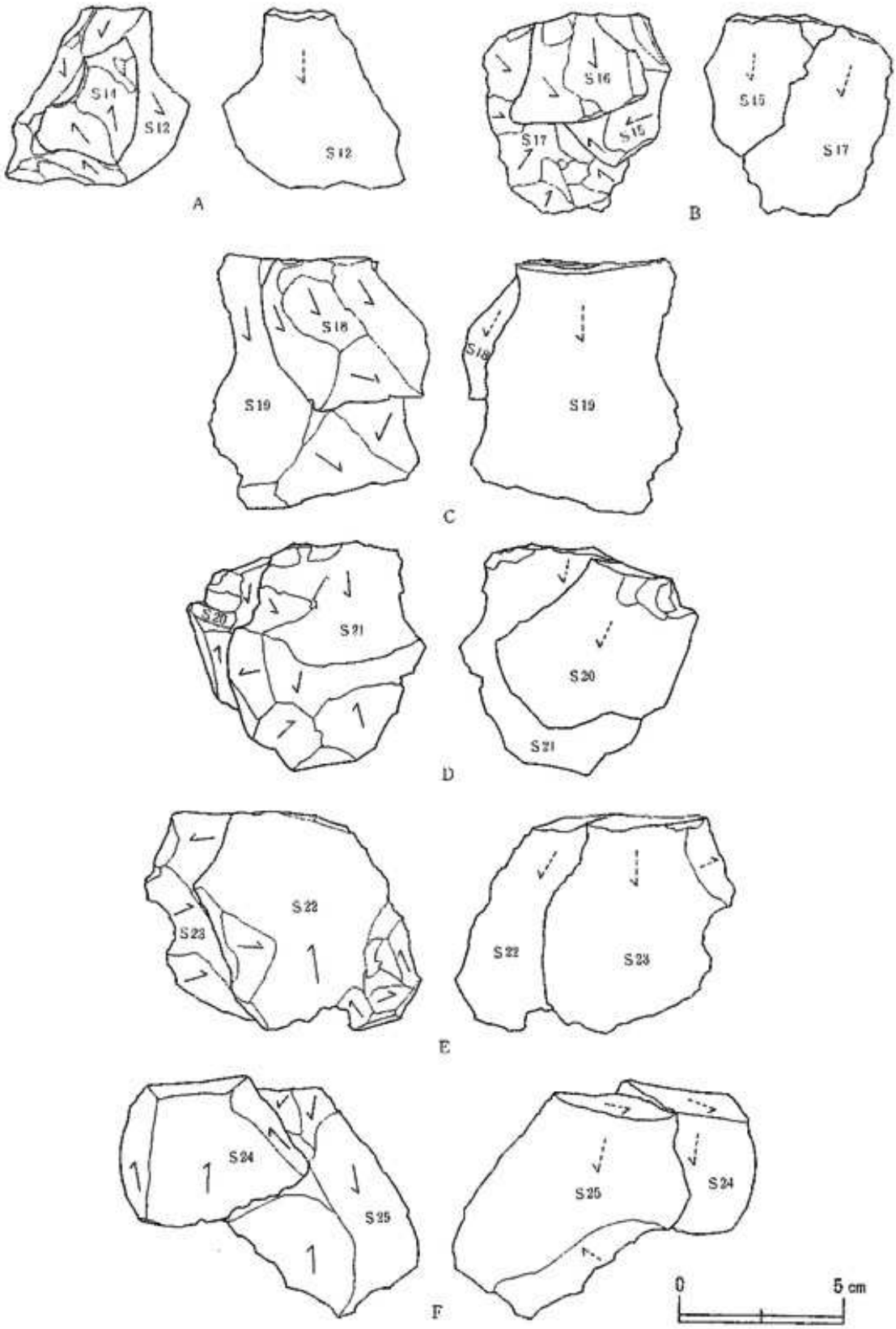
第18図　ＳＶ03石器集中部関連石器（９）



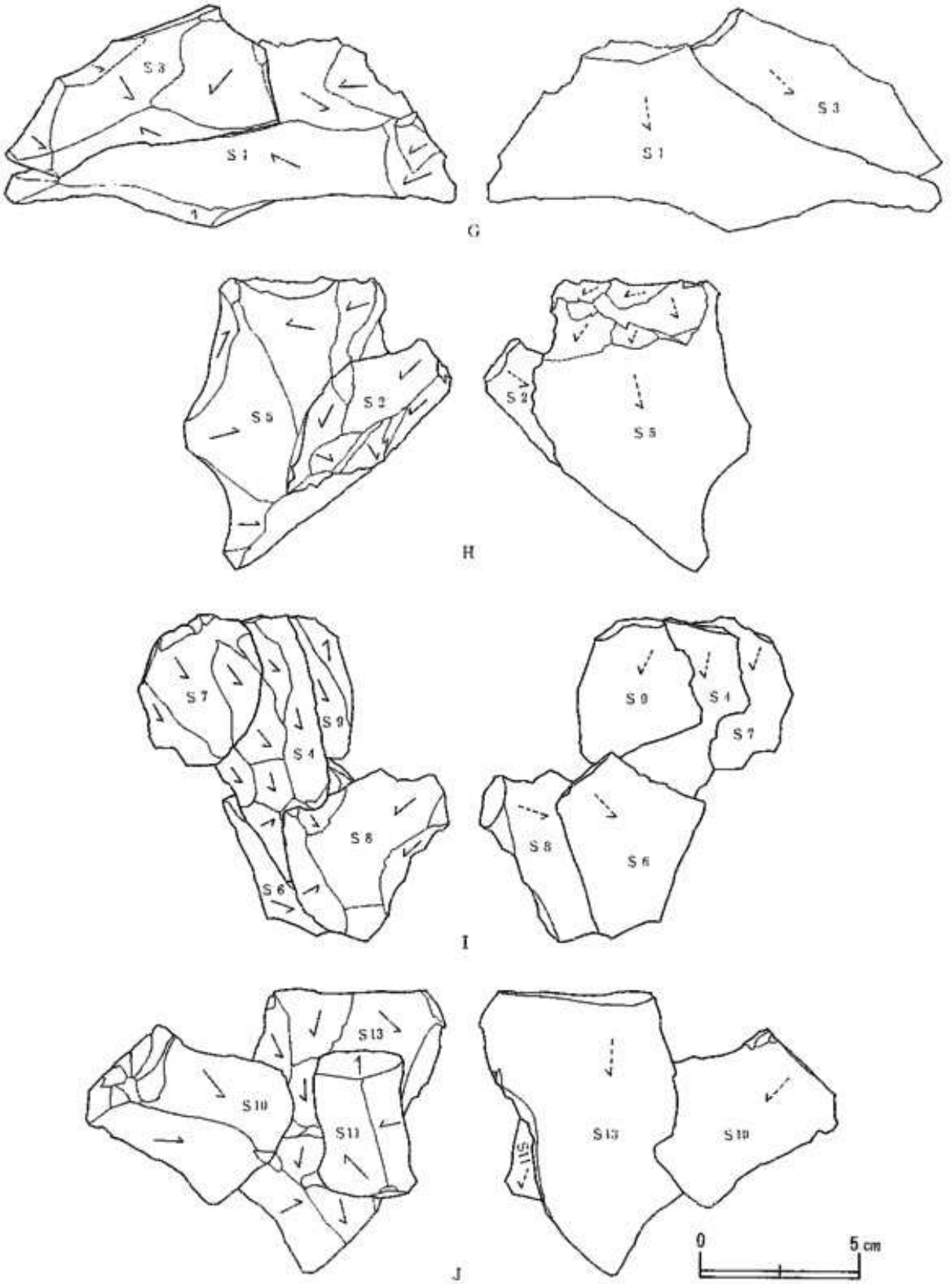
第19図　ＳＶ03石器集中部関連石器（10）



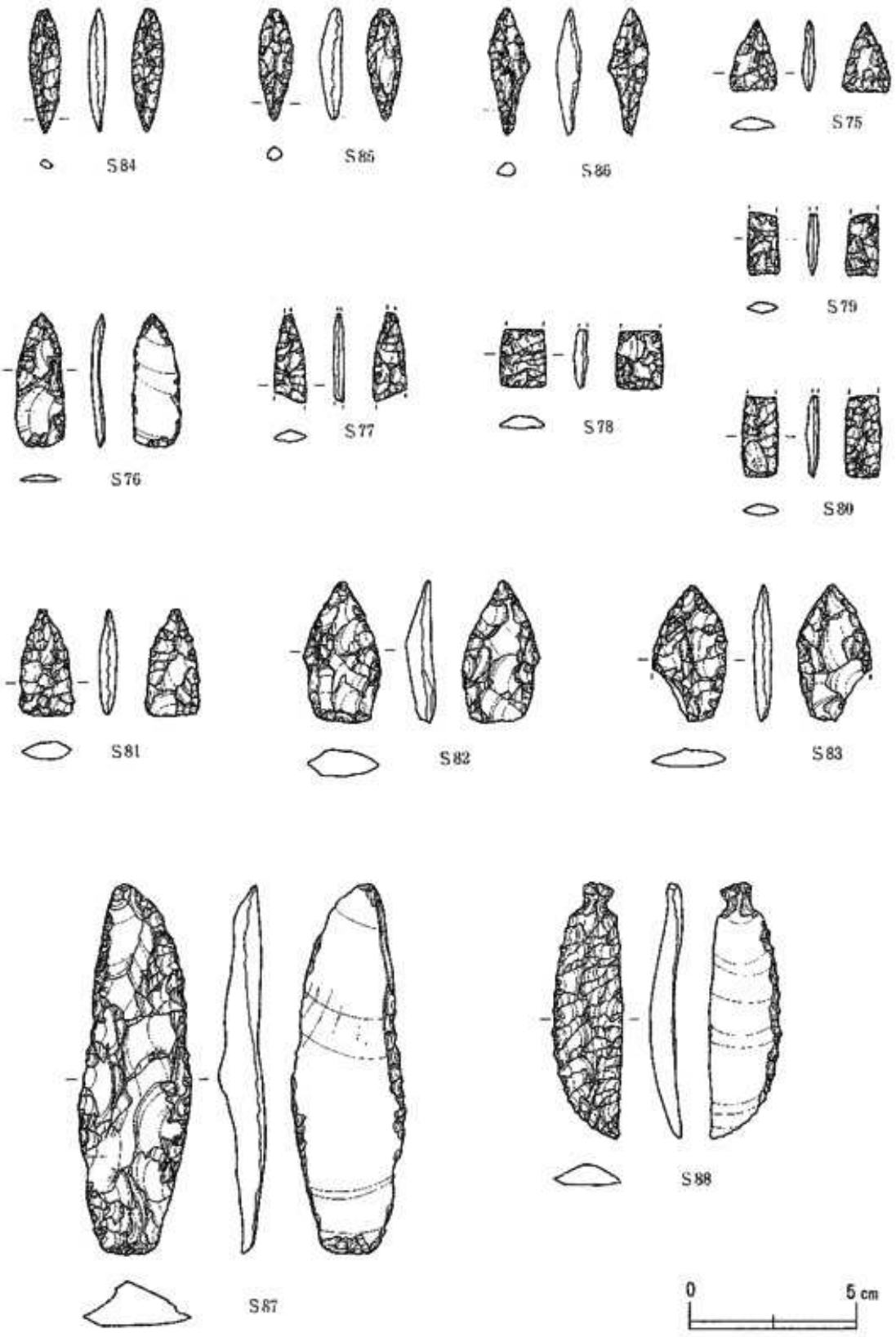
第20図　ＳＶ03石器集中部関連石器（11）



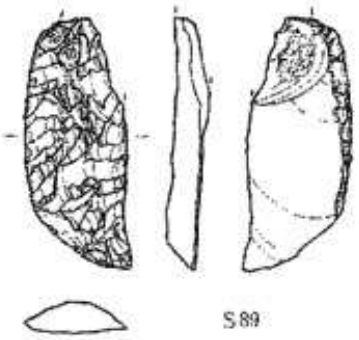
第21図　ＳＶ03石器集中部関連接合資料（１）

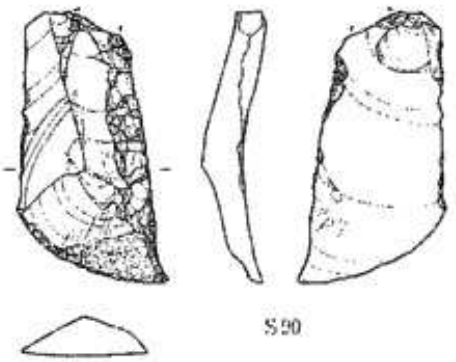


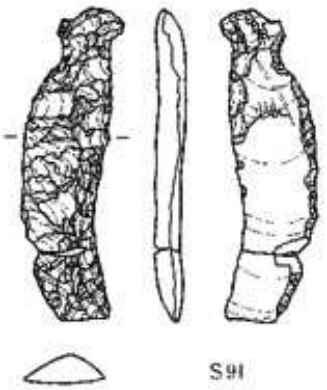
第22図　ＳＶ03石器集中部関連接合資料（２）

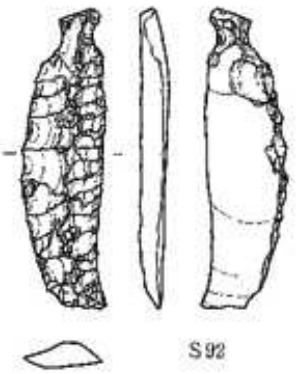


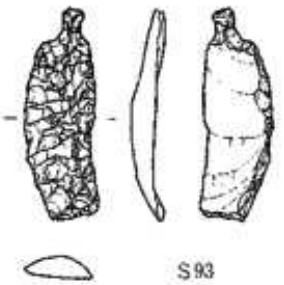
第23図　ＳＳ09石器製作跡関連石器（１）

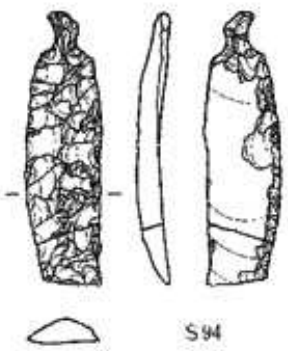


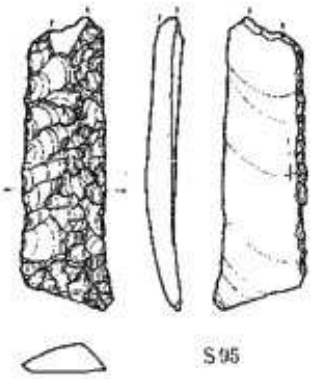


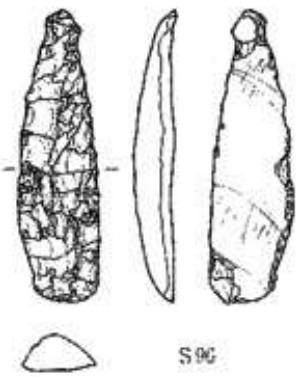


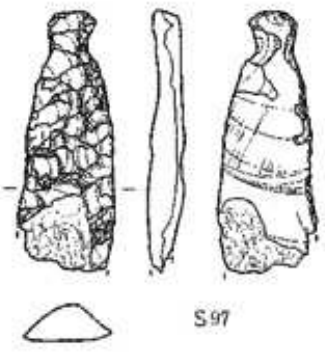




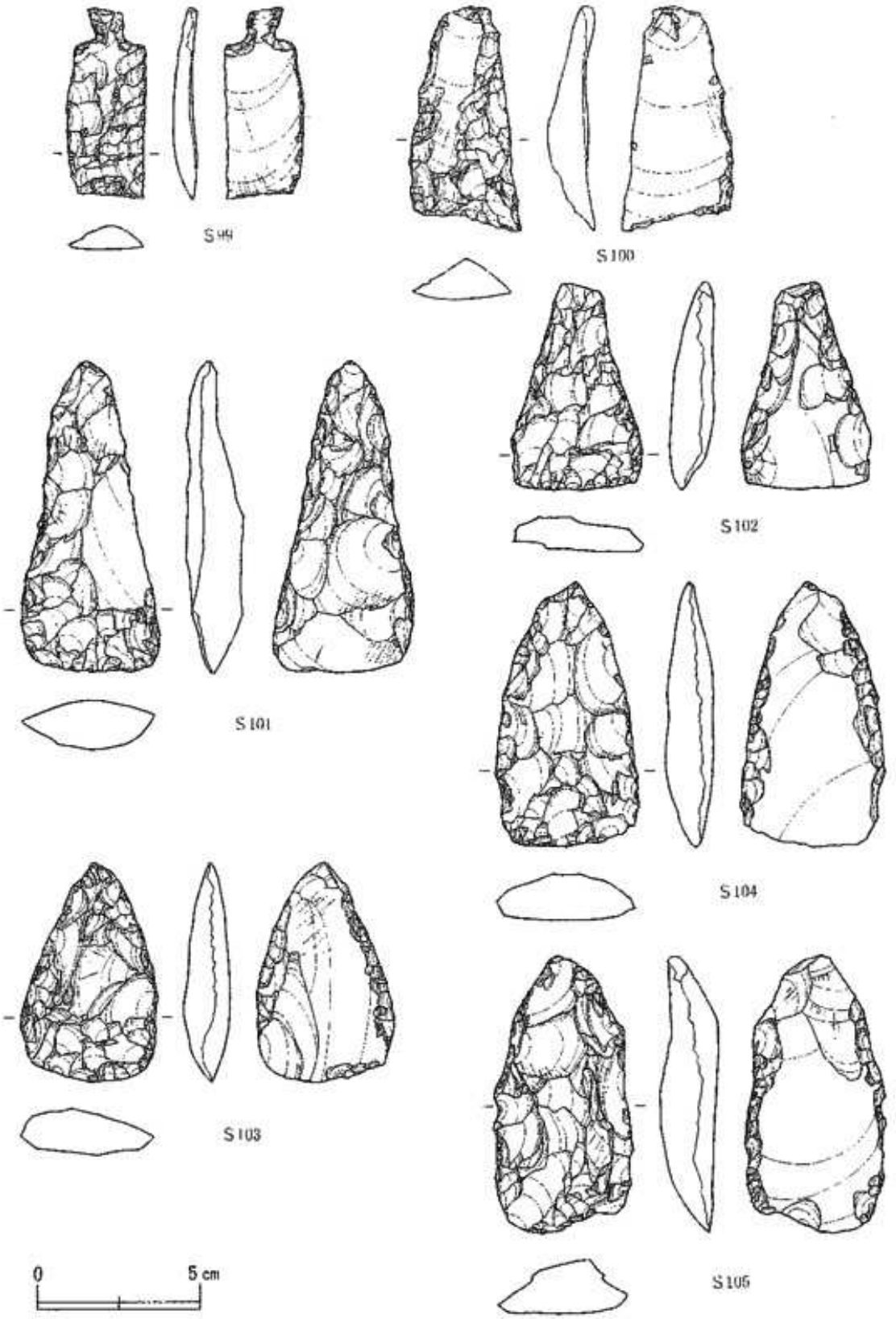




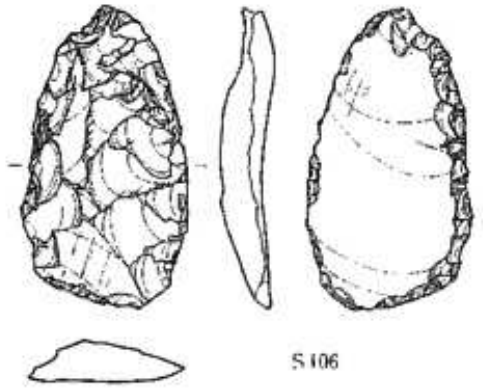


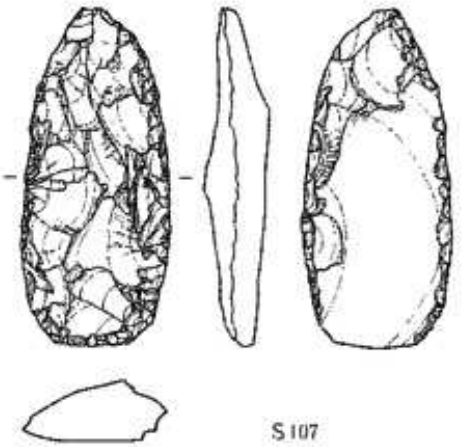


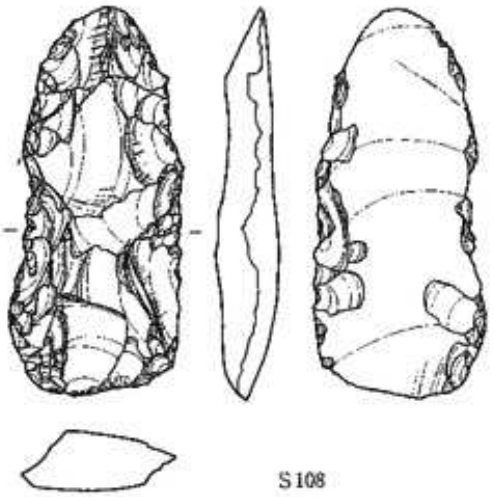
第24図　ＳＳ09石器製作跡関連石器（２）

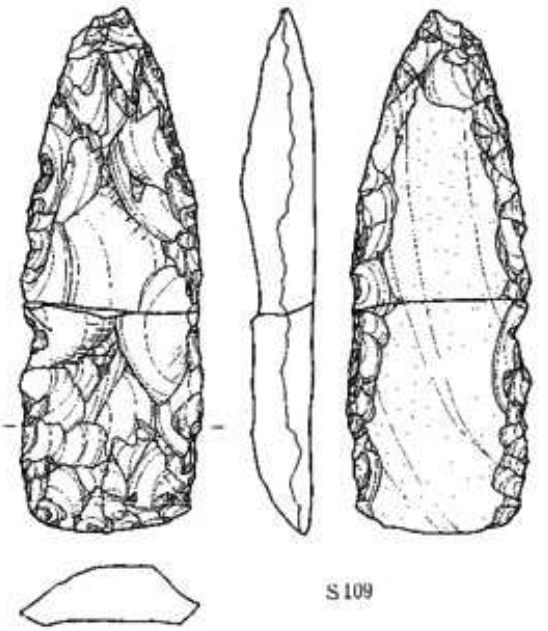


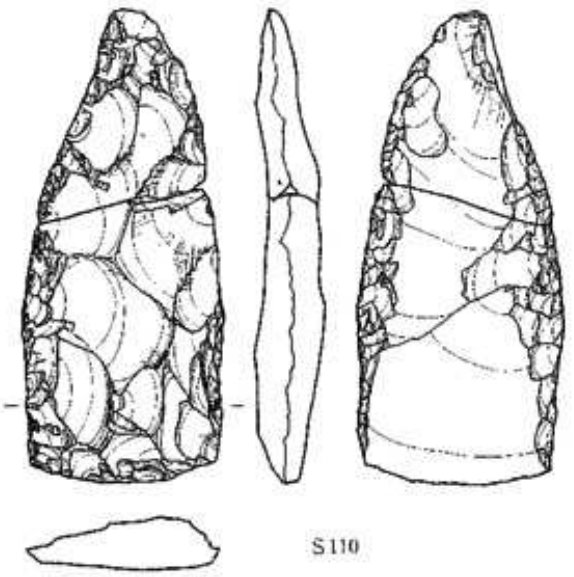
第25図　ＳＳ09石器製作跡関連石器（3）

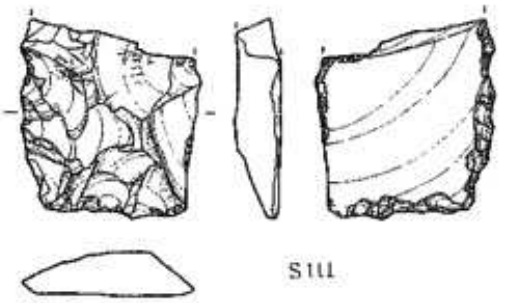




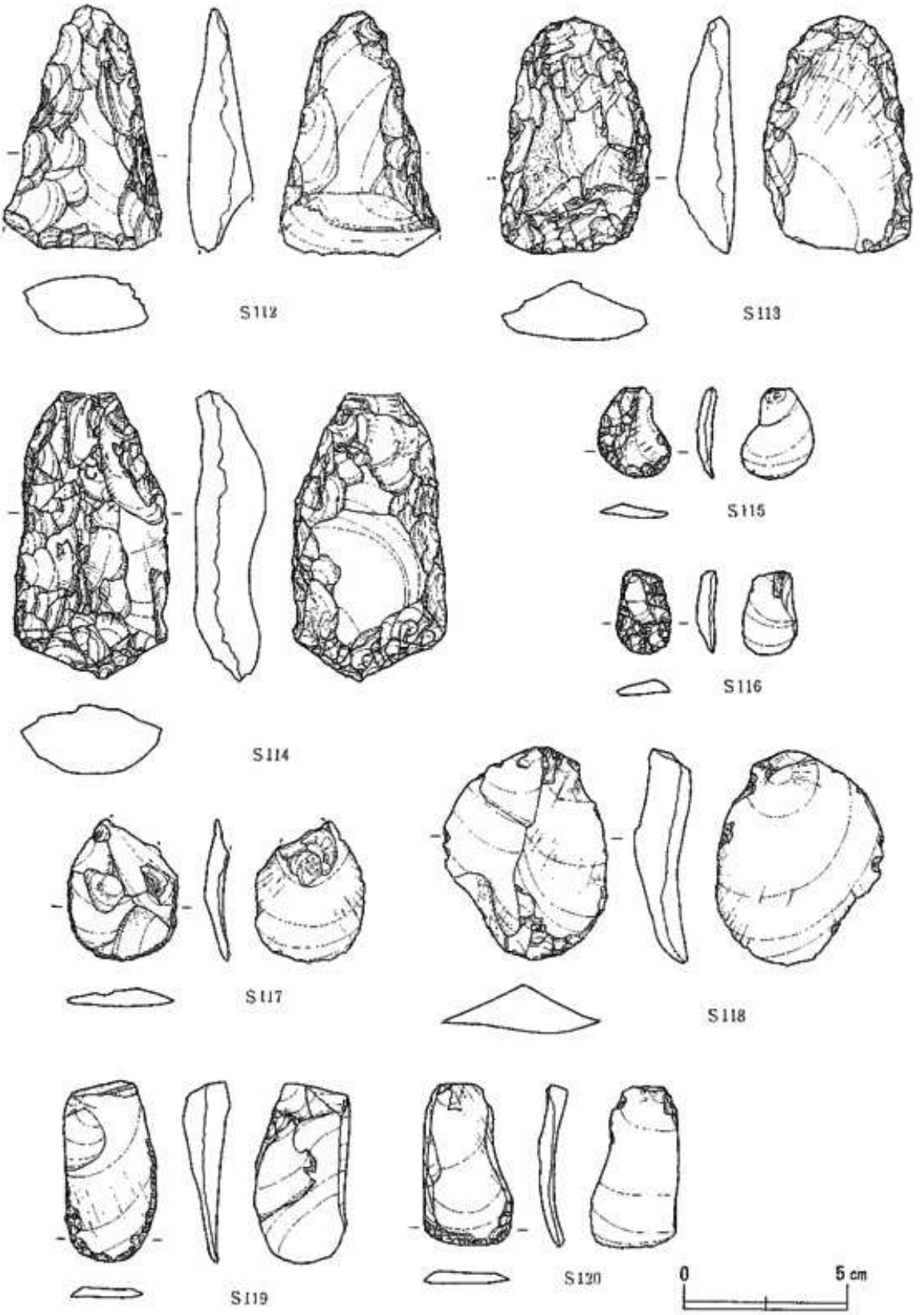




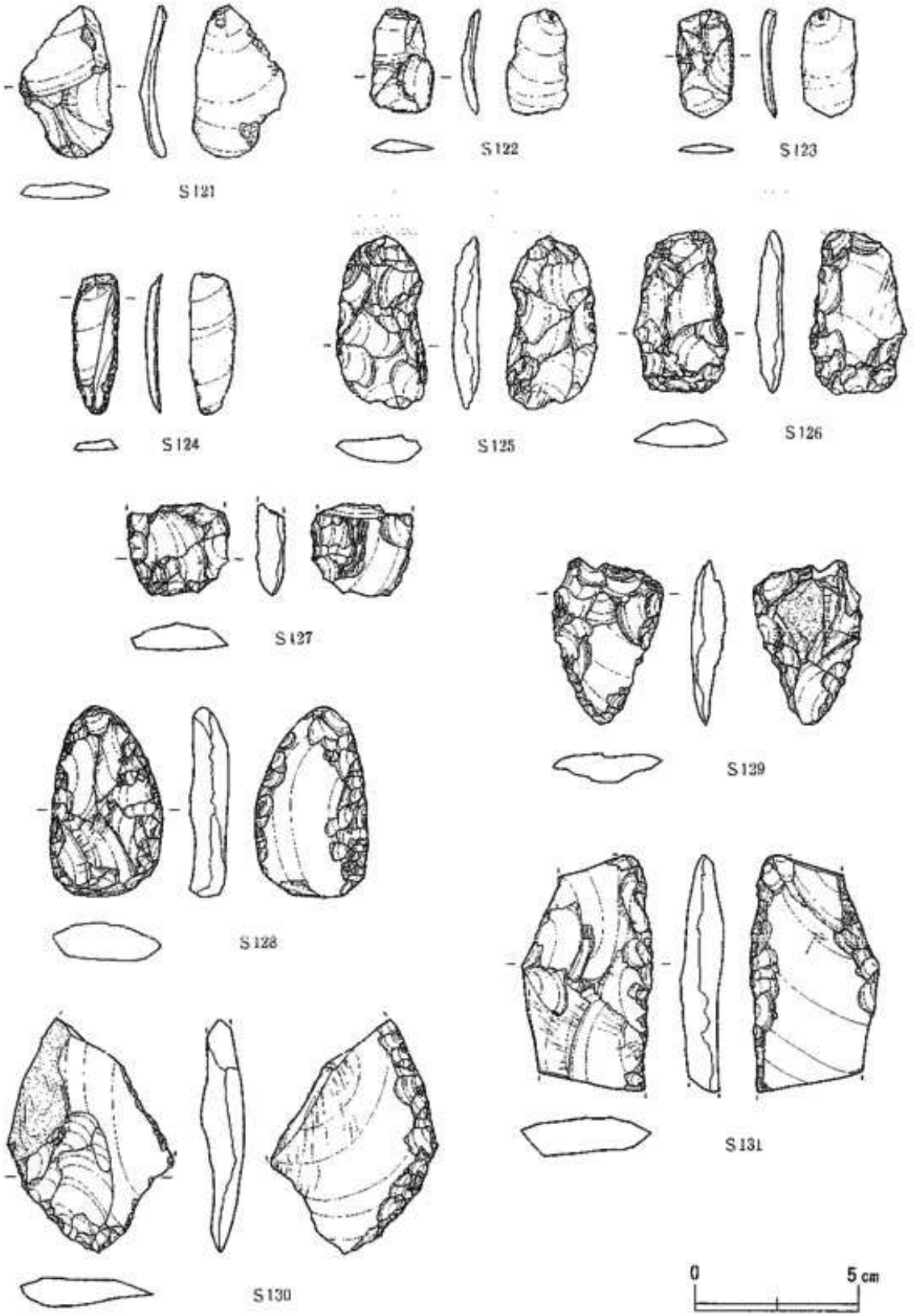




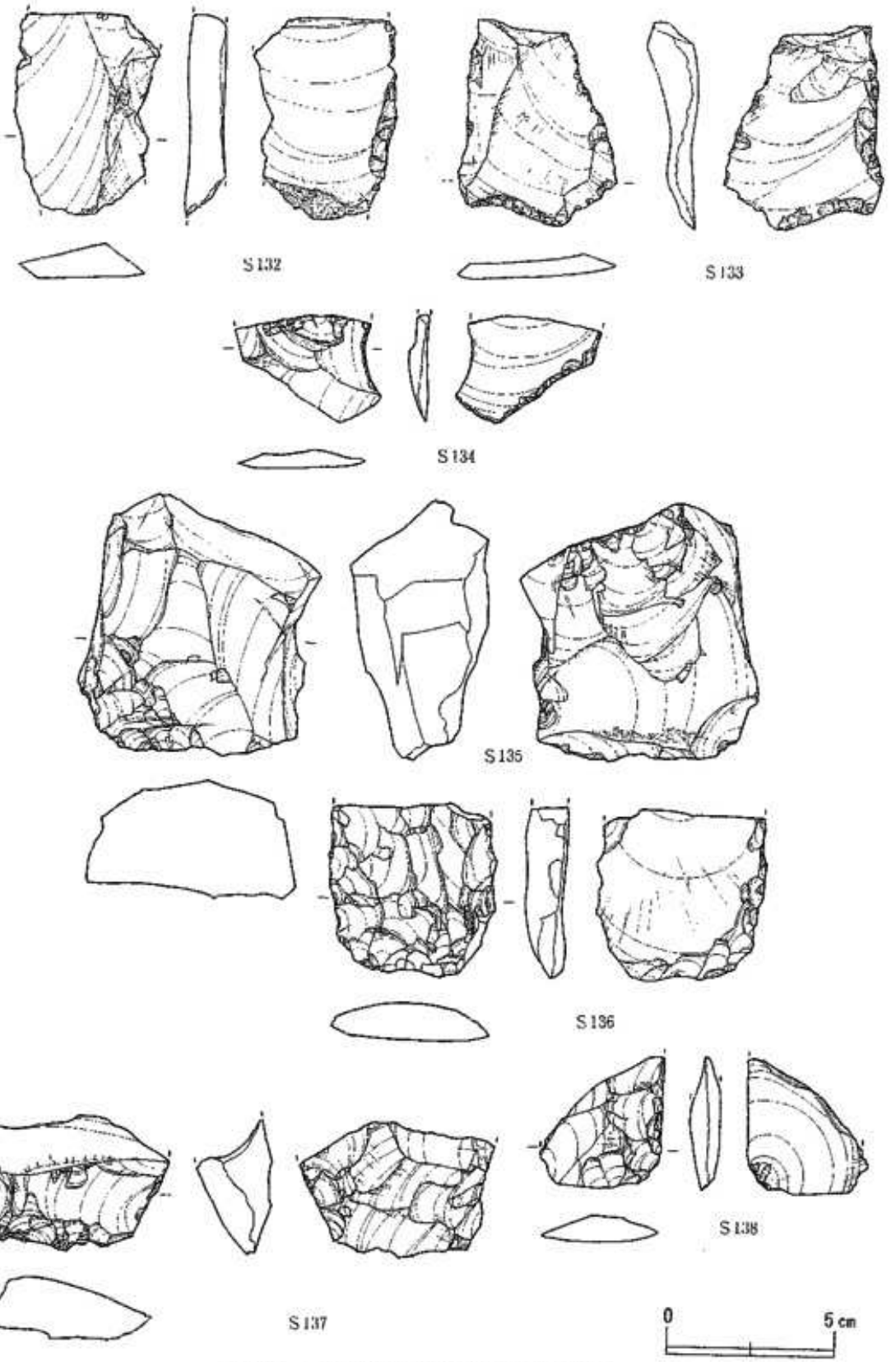
第26図　ＳＳ09石器製作跡関連石器（４）



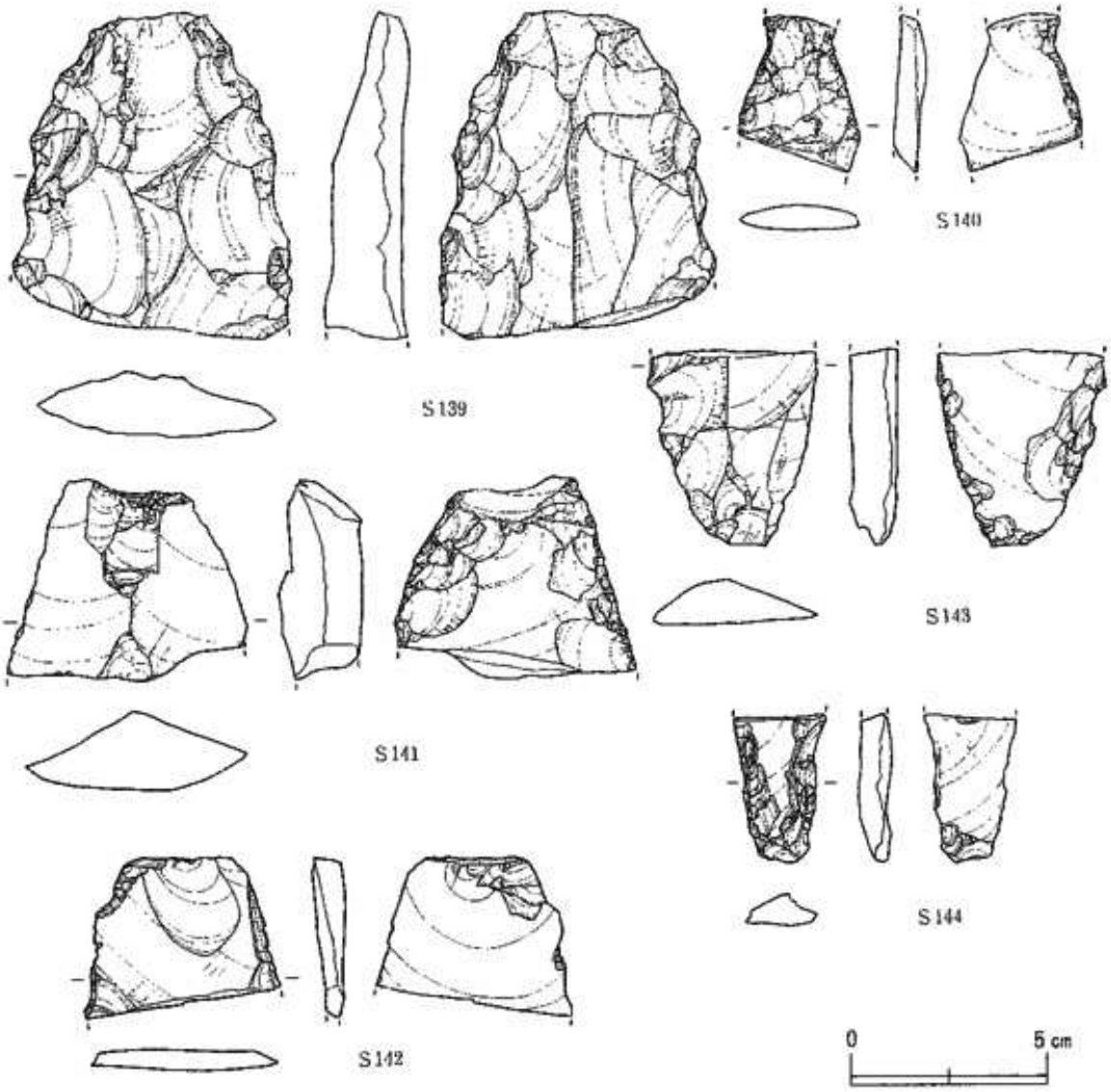
第27図　ＳＳ09石器製作跡関連石器（5）



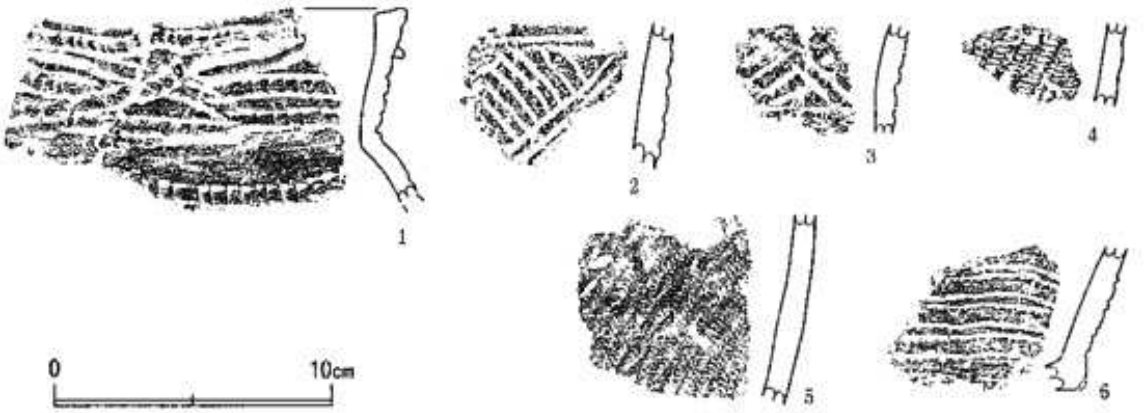
第28図　ＳＳ09石器製作跡関連石器（6）



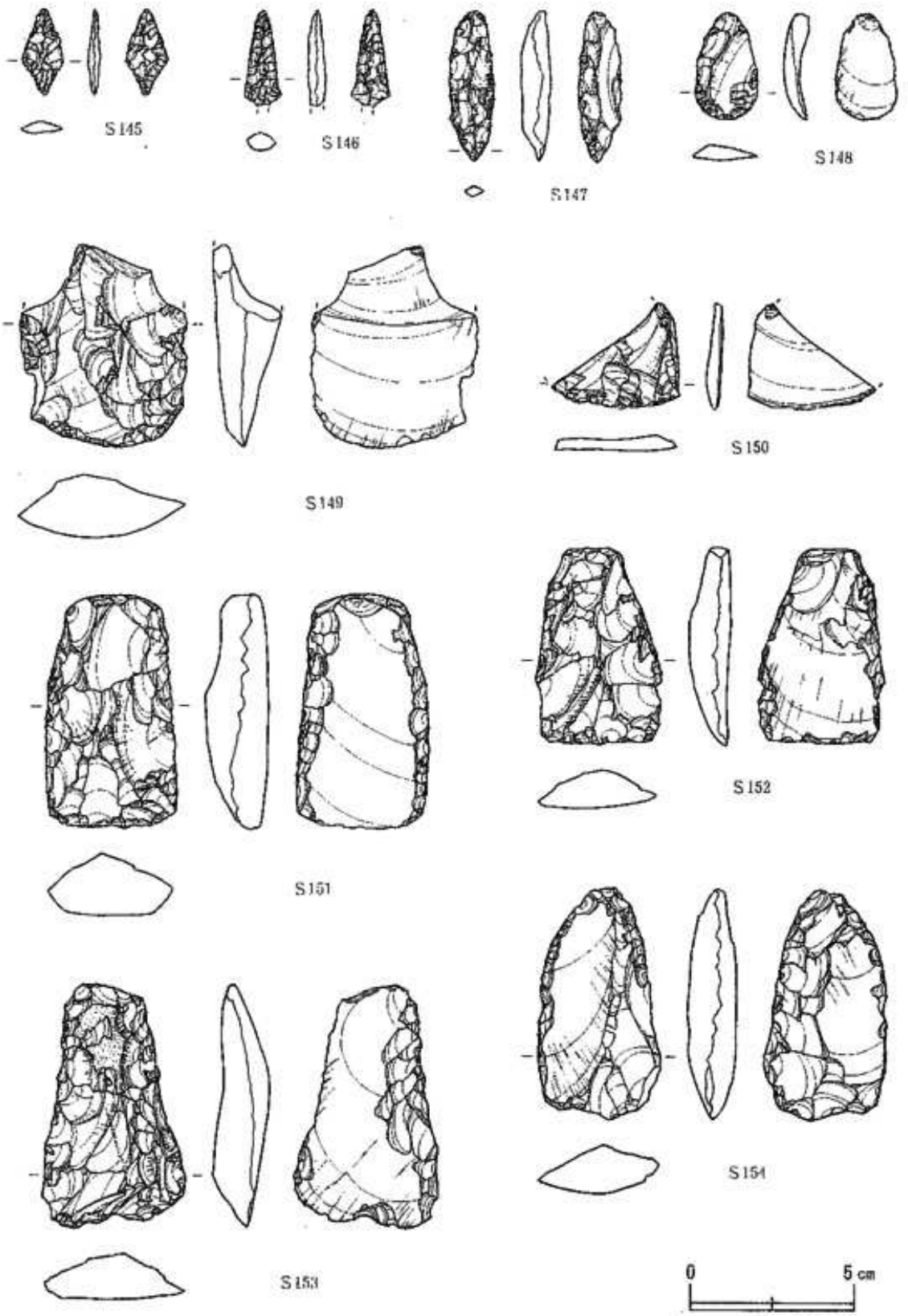
第29図　ＳＳ09石器製作跡関連石器（7）



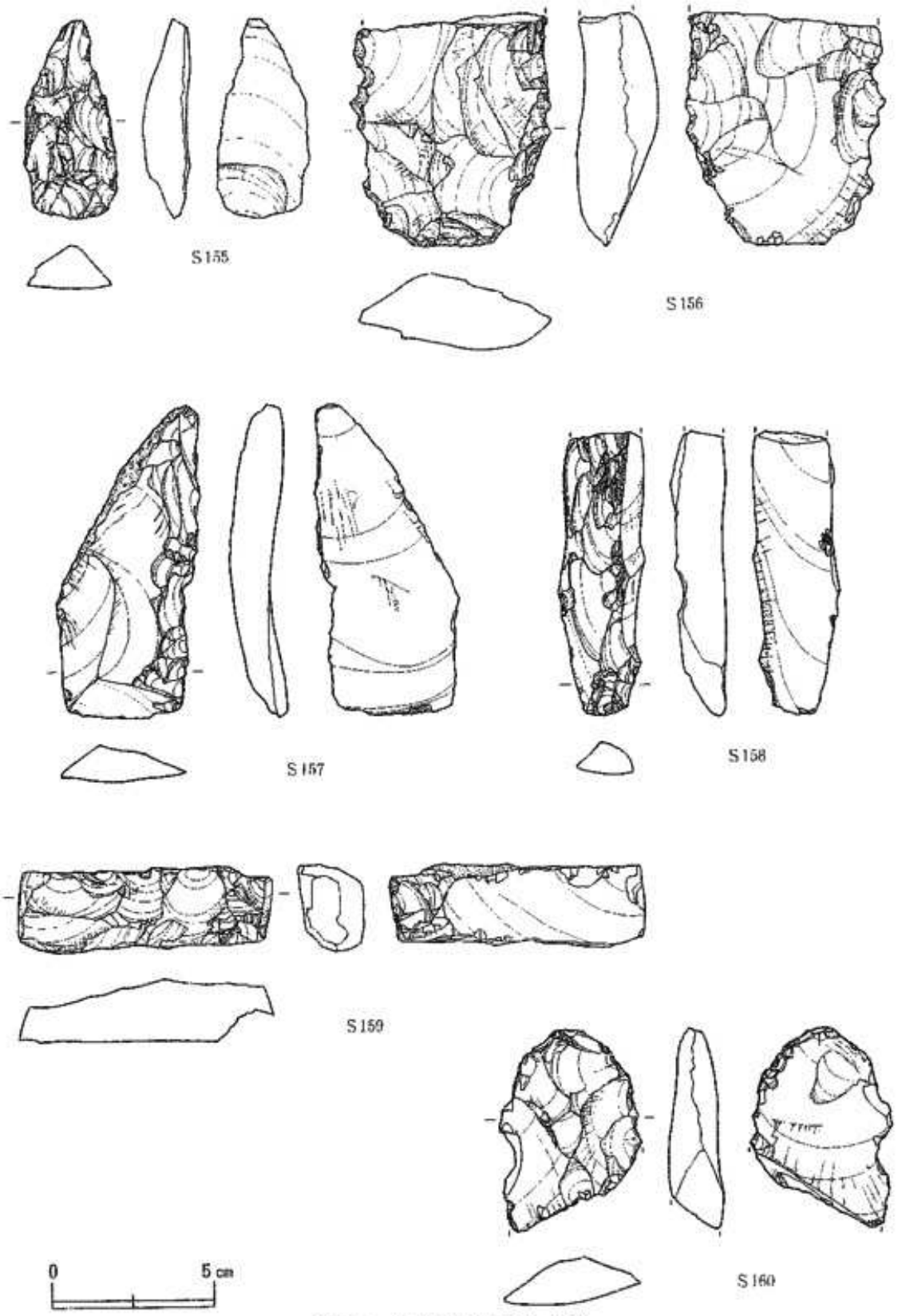
第30図　ＳＳ09石器製作跡関連石器（8）



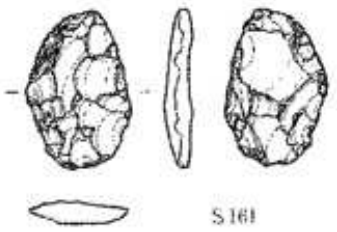
第31図　ＳＳ09石器製作跡関連土器

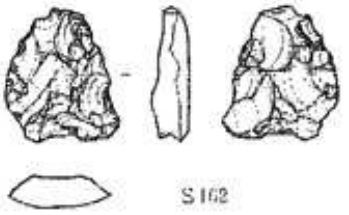


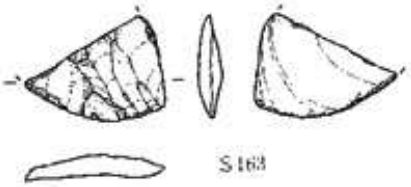
第32図　遺構外出土石器（１）

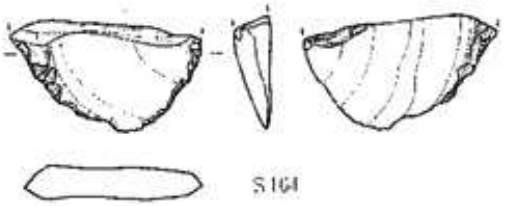


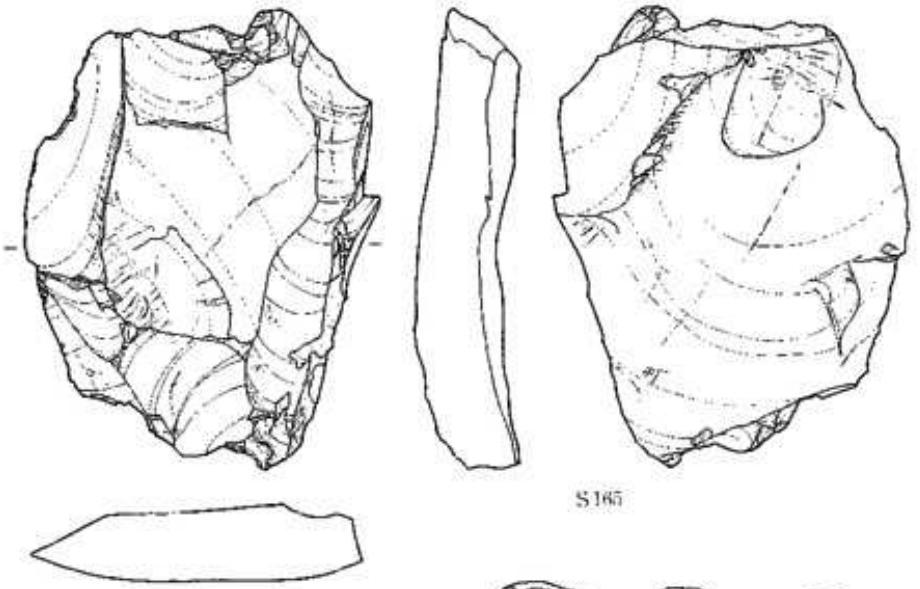
第33図　遺構外出土石器（2）

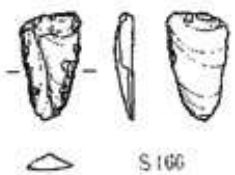


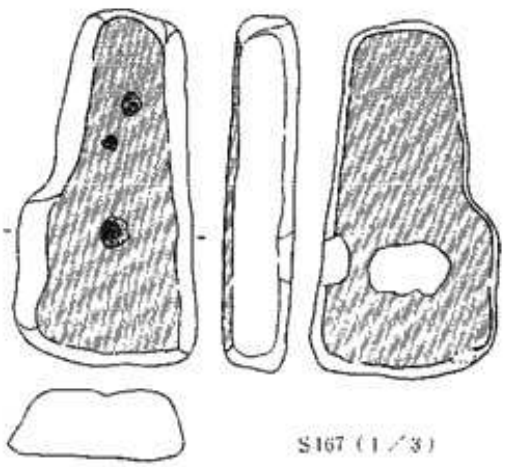




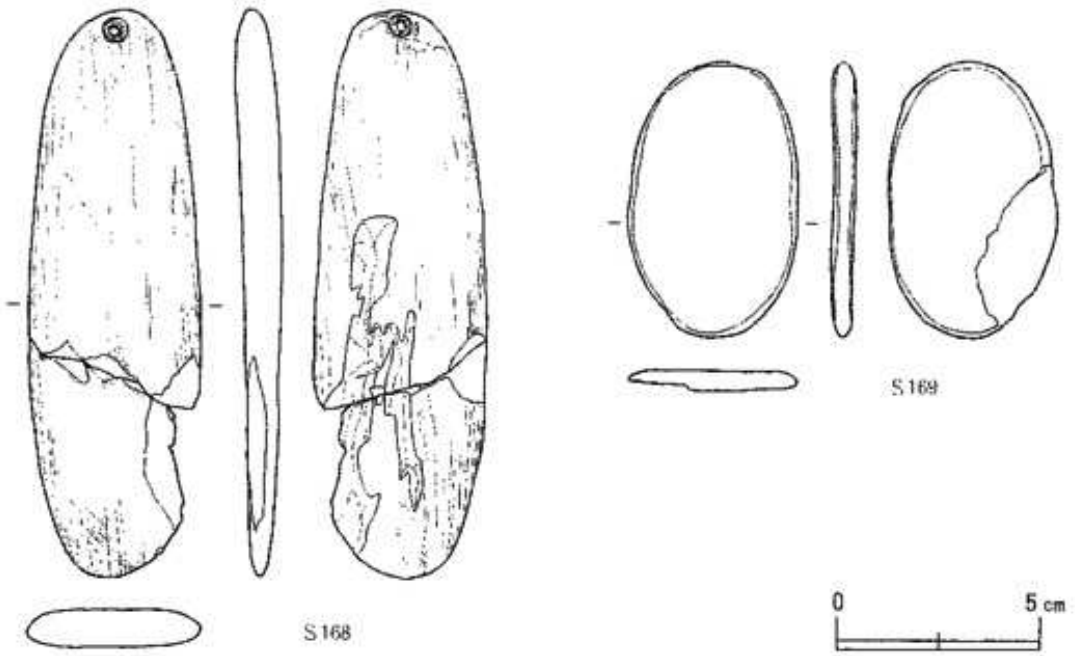








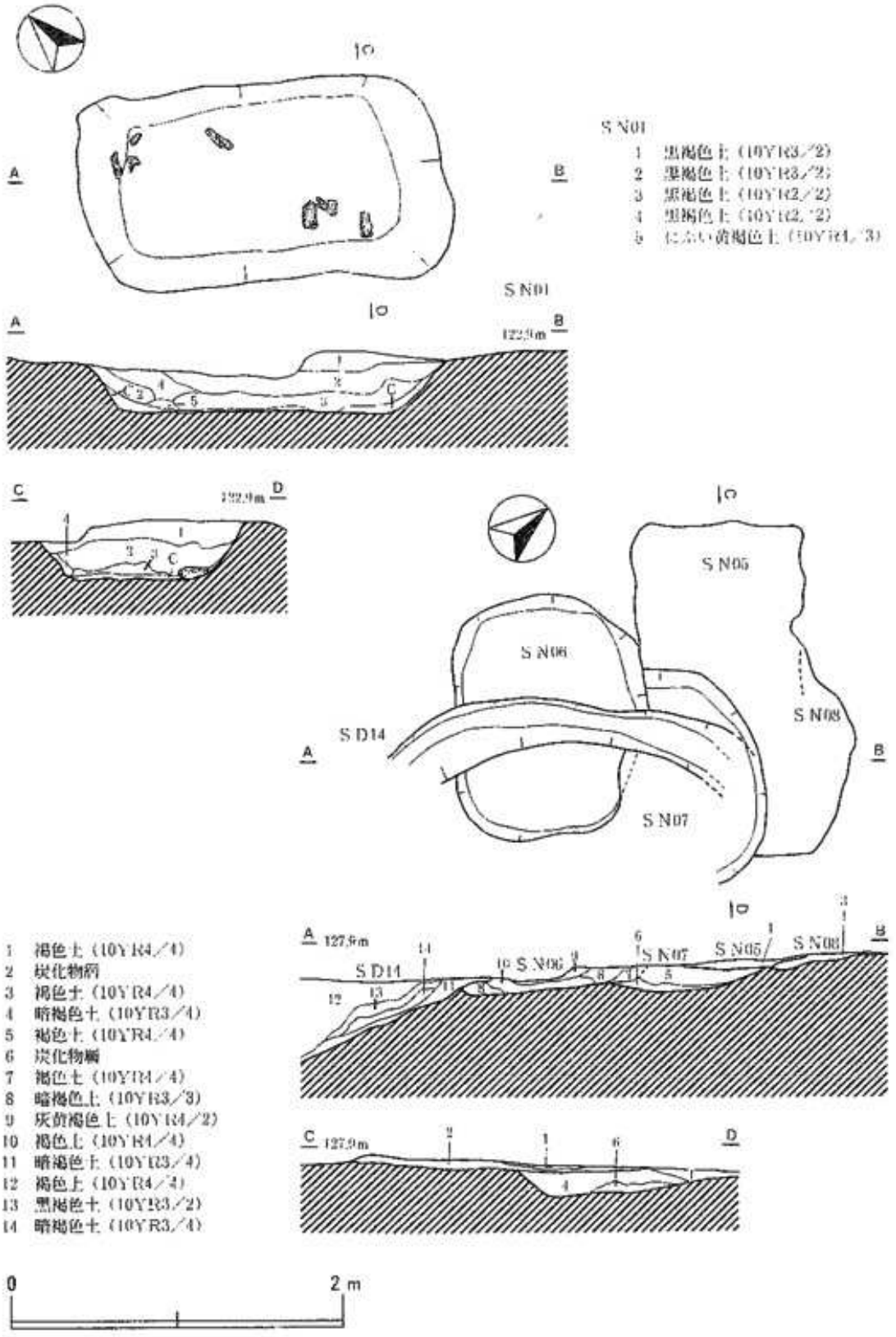
第34図　遺構外出土石器（3）



第35図　遺構外出土石器（4）

第3表　石器観察表（1）

石器番号	図版番号	出土地区	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質
S 1	36	SX03	剥片	59	142	21	83.1	頁岩
S 2	36	MR52	〃	64	32	13	15.9	〃
S 3	36	SX03	〃	89	65	10	28.3	〃
S 4	36	〃	〃	85	42	12	24.0	〃
S 5	36	〃	〃	93	69	23	95.4	〃
S 6	36	〃	〃	51	54	10	15.1	〃
S 7	36	〃	〃	44	45	9	10.1	〃
S 8	36	MR52	〃	58	52	14	18.1	〃
S 9	36	〃	〃	45	39	13	13.2	〃
S 10	36	SX03	〃	64	50	16	31.8	〃
S 11	36	〃	〃	48	32	8	7.8	〃
S 12	36	〃	〃	55	56	9	14.6	〃
S 13	36	MR52	〃	92	61	16	48.4	〃
S 14	36	〃	〃	41	28	6	4.0	〃
S 15	36	SX03	〃	46	43	10	13.5	〃
S 16	36	MR52	〃	34	43	7	7.0	〃
S 17	36	SX03	〃	62	37	13	16.9	〃


S N01
1　黒褐色土（10YR3／2）
2　黒褐色土（10YR3／2）
3　黒褐色土（10YR2／2）
4　黒褐色土（10YR2／2）
5　にぶい黄褐色土（10YR4／3）
S N05
S N06
S N08
S D14
S N07
1　褐色土（10YR4／4）
2　炭化物層
3　褐色土（10YR4／4）
4　暗褐色土（10YR3／4）
5　褐色土（10YR4／4）
6　炭化物層
7　褐色土（10YR4／4）
8　暗褐色土（10YR3／3）
9　灰黄褐色土（10YR4／2）
10　褐色土（10YR4／4）
11　暗褐色土（10YR3／4）
12　褐色土（10YR4／4）
13　黒褐色土（10YR3／2）
14　暗褐色土（10YR3／4）
0
2 m

第36図　炭焼成遺構

第4表　石器観察表（2）

石器番号	図版番号	出土地区	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石　質
S 18	36	SX03	剥　片	49	52	13	28.9	頁　岩
S 19	36	MR52	〃	80	64	21	61.9	〃
S 20	36	SX03	〃	55	56	14	24.4	〃
S 21	36	〃	〃	71	61	13	36.2	〃
S 22	36	〃	〃	67	73	14	37.7	〃
S 23	36	〃	〃	65	58	17	48.6	〃
S 24	36	〃	〃	46	59	13	26.3	〃
S 25	36	〃	〃	74	69	22	71.5	〃
S 26	36	〃	〃	43	65	14	34.9	〃
S 27	36	〃	二次加工有剥片	70	68	20	91.5	〃
S 28	36	〃	剥　片	78	61	19	57.4	〃
S 29	37	〃	〃	56	74	16	32.4	〃
S 30	37	〃	〃	55	68	12	15.2	〃
S 31	37	〃	〃	66	73	18	49.5	〃
S 32	37	〃	〃	59	80	15	45.1	〃
S 33	37	〃	〃	73	72	19	74.4	〃
S 34	37	〃	〃	46	52	10	19.5	〃
S 35	37	〃	〃	56	48	11	17.5	〃
S 36	37	〃	〃	55	44	14	23.2	〃
S 37	37	〃	〃	50	47	11	17.6	〃
S 38	37	〃	〃	82	66	15	49.5	〃
S 39	37	〃	〃	68	37	9	14.1	〃
S 40	37	〃	〃	70	46	12	25.6	〃
S 41	37	〃	〃	54	46	13	28.8	〃
S 42	37	〃	〃	67	62	15	30.0	〃
S 43	37	〃	〃	65	33	11	14.3	〃
S 44	37	〃	〃	94	52	20	61.0	〃
S 45	37	〃	〃	51	44	8	8.5	〃
S 46	37	〃	〃	34	78	18	27.2	〃
S 47	37	〃	〃	92	70	27	101.8	〃
S 48	37	〃	〃	26	18	3	1.0	〃
S 49	37	〃	〃	49	67	14	39.7	〃
S 50	37	〃	〃	52	36	8	9.0	〃
S 51	37	〃	〃	46	51	10	15.1	〃
S 52	37	〃	〃	50	41	13	10.9	〃
S 53	37	〃	〃	70	68	19	67.6	〃
S 54	37	〃	〃	98	62	18	32.8	〃
S 55	37	〃	〃	31	43	10	7.7	〃

第5表　石器観察表（3）

石器番号	図版番号	出土地区	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石　質
S 56	37	SX03	剥　片	35	47	5	4.0	頁　岩
S 57	37	MR52	〃	54	41	14	14.1	〃
S 58	37	〃	〃	51	44	13	13.6	〃
S 59	—	〃	〃	60	49	11	15.7	〃
S 60	—	〃	〃	52	54	14	18.1	〃
S 61	—	〃	〃	66	55	14	15.2	〃
S 62		〃	〃	48	43	10	9.8	〃
S 63	—	MJ45	〃	87	41	9	21.8	〃
S 64	—	MR52	〃	77	49	20	58.0	〃
S 65	—	〃	〃	33	51	7	7.1	〃
S 66	—	〃	〃	38	33	7	5.1	〃
S 67	—	〃	〃	55	56	8	10.7	〃
S 68	—	〃	〃	53	30	7	6.4	〃
S 69	—	〃	〃	79	53	15	48.2	〃
S 70	—	〃	〃	47	42	6	5.9	〃
S 71	—	〃	〃	47	37	12	11.1	〃
S 72	—	〃	〃	55	79	18	47.9	〃
S 73	—	MJ45	〃	21	40	15	9.3	〃
S 74	—	MR52	〃	69	53	21	51.8	〃
S 75	39	MN52	石　鏃	21.5	14	3.5	0.8	—
S 76	39	MK50	〃	41	15	4	2.0	頁　岩
S 77	39	MM51	〃	27	10	3.5	0.9	〃
S 78	39	MJ55	〃	17.5	14	4.5	1.4	〃
S 79	39	MO51	〃	19	10	4	0.8	〃
S 80	39	MO52	〃	25	11	4	1.3	〃
S 81	39	MM51	〃	32	17	5	3.0	〃
S 82	39	MM52	〃	43	23.5	8.5	7.6	〃
S 83	39	MM51	〃	42	22	6	4.8	〃
S 84	39	MN52	石　鏃	38	9.5	5	1.9	〃
S 85	39	MM52	〃	34	10.5	7	2.2	—
S 86	39	MN51	〃	39	13	7	2.6	頁　岩
S 87	39	ML49	スクレイパー	112	34.5	14	41.3	〃
S 88	39	MM51	石　匙	77	21.5	10	11.0	〃
S 89	39	MJ53・54	〃	62	27	11	14.9	〃
S 90	39	MN52	（石匙未整品）	67	37	15	22.3	〃
S 91	39	MM51	石　匙	77	25	7	12.1	〃
S 92	39	NA53	〃	75	21	7	10.5	〃
S 93	39	ML51	〃	53	19	8	5.5	〃

第6表　石器観察表（4）

石器番号	図版番号	出土地区	器　種	最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重量(g)	石　質
S 94	39	MM53	石　匙	68	19	8	9.5	頁　岩
S 95	39	MM51	〃	73	23	9	12.1	〃
S 96	39	MP52	〃	72	20	10	12.0	〃
S 97	39	MJ53・54	〃	64.5	24	9	12.2	〃
S 98	39	MQ52	〃	75	30	11	17.5	〃
S 99	39	MR50	〃	59	25	8	9.6	〃
S100	39	MJ53・54	（石匙未整品）	69	34	14	22.6	〃
S101	40	MN52	石　錐	96	43	17	55.2	—
S102	40	〃	〃	64	40	14	30.2	—
S103	40	MM55	〃	68	42	14	38.7	頁　岩
S104	40	MK49	〃	81	44	15	55.7	〃
S105	40	MJ53・54	〃	85	43	18	61.4	〃
S106	40	〃	〃	75	41	13	36.8	〃
S107	40	ML50	〃	83	37	16	47.4	〃
S108	40	MJ53・54	〃	96	42	16	62.9	〃
S109	40	MM51	〃	130	45	19	103.9	—
S110	40	MN52	〃	117	50	17	90.5	頁　岩
S111	40	MM51	〃	49.5	45	11	26.4	〃
S112	40	MN52	〃	76	49	21	55.1	—
S113	41	MM51	〃	73	47	18	61.7	頁　岩
S114	41	〃	〃	89	48	22	91.9	〃
S115	41	MK49	スクレイパー	28	22.5	5.5	2.5	〃
S116	41	〃	〃	26	17	6	2.6	〃
S117	41	MM51	〃	44	34	8	6.8	〃
S118	41	ML49	〃	66	51	17	38.2	〃
S119	41	MM51	〃	56	29	14	17.2	〃
S120	41	MO52	〃	50	28	8	7.9	〃
S121	41	MM51	〃	47	29	8	5.6	〃
S122	41	〃	〃	33	20	6	2.1	〃
S123	41	ML51	〃	33	17	5	2.1	〃
S124	41	MM50	〃	43	14	5	2.4	〃
S125	41	MN51	石　錐	53	28	8	11.9	—
S126	41	MM53	〃	50	29	9	13.7	頁　岩
S127	41	MM51	〃	29	31	9	8.1	〃
S128	41	ML49	〃	58	34	12	29.9	〃
S129	41	MN52	〃	51	34	10	13.5	〃
S130	41	MK55	二次加工有剝片	72	51	13	36.2	〃
S131	42	MM51	〃	72	40	14	39.3	〃

第7表　石器観察表（5）

石器番号	図版番号	出土地区	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石　質
S132	42	MJ53・54	二次加工有剥片	61	43	12	32.2	頁　岩
S133	42	MN46	〃	62	48	16	26.5	〃
S134	42	MN52	〃	32	41	6	6.5	〃
S135	42	MN51	〃	79	73	42	214.4	〃
S136	42	MK45	石　錐	52	51	13	42.9	〃
S137	42	MM53	二次加工有剥片	41	58	23	41.6	〃
S138	42	ML49	〃	40	37	9	11.7	〃
S139	42	MN52	〃	84	72	21	104.2	—
S140	42	ML51	〃	40	31	9	9.6	頁　岩
S141	42	MM52	〃	52	62	21	59.1	〃
S142	42	MM50	〃	41	50	8	15.3	〃
S143	42	ML51	〃	50	44	12	26.3	〃
S144	42	MN51	〃	38	24	9	7.3	〃
S145	43	表　採	石　鏃	26.5	12.5	3.5	0.9	チャート
S146	43	表　採	〃	29.5	11	5.5	1.5	頁　岩
S147	43	MK45	石　錐	46	14	9.5	5.6	〃
S148	43	MJ51	スクレイパー	33	19	7	3.5	〃
S149	—	MR51	〃	63	51	22	38.2	〃
S150	—	MM50	〃	33	39	5	4.8	〃
S151	43	MN47	石　錐	72	36	20	64.9	—
S152	43	Gトレンチ	〃	61	39	13	29.2	—
S153	43	MJ45	〃	75	44	17	42.6	—
S154	43	MM45	〃	72	38	15	41.1	頁　岩
S155	43	MP48	〃	62	28.5	15	23.2	〃
S156	43	MN48	〃	72	62	25	110.1	—
S157	43	Gトレンチ	スクレイパー	97	45	18	59.6	頁　岩
S158	—	MQ51	石　核	88	27	17	44.8	〃
S159	43	MN46	〃	27	84	20	50.6	〃
S160	—	MN47	二次加工有剥片	63	44	17	40.8	〃
S161	—	ML51	〃	40	26	7	6.4	〃
S162	—	MF46	〃	33.5	28	9	8.1	〃
S163	—	MO53	〃	26	35	6	3.9	〃
S164	—	MJ51	〃	28	48	9	9.5	〃
S165	43	トレンチ	〃	114	88	26	258.2	〃
S166	—	ML51	〃	27	15	5	1.8	〃
S167	—	MJ54	凹　石	132	69	26	368.5	安山岩
S168	43	MT50	垂飾品	141	43	11	88.2	粘板岩
S169	—	MM45	— —	68	42	6	25.6	〃

第5章　B区の調査記録

B区は地形的に、中央部にある斜面で東西に二分される。東側が上位平坦面、西側が下位平坦面である。上位平坦面からは、縄文時代中期末葉～後期初頭にかけての竪穴住居跡7軒の他土坑・屋外炉などが検出されている。これらの遺構は、竪穴住居跡が中央部～西部に集中し、それら以外の土坑等が中央部～東部に散在している。下位平坦面からは縄文時代中期～後期初頭の竪穴住居跡3軒と掘立柱建物跡・土坑・ピットなどが検出されている。これらの遺構は、ほぼ全域に分布するが、竪穴住居跡が南東部と西部に、掘立柱建物跡および掘立柱建物跡になると考えられる柱穴群が中央部～北西部、土坑が中央部～北部にまとまっている(第37図)。

第1節　検出遺構と出土遺物

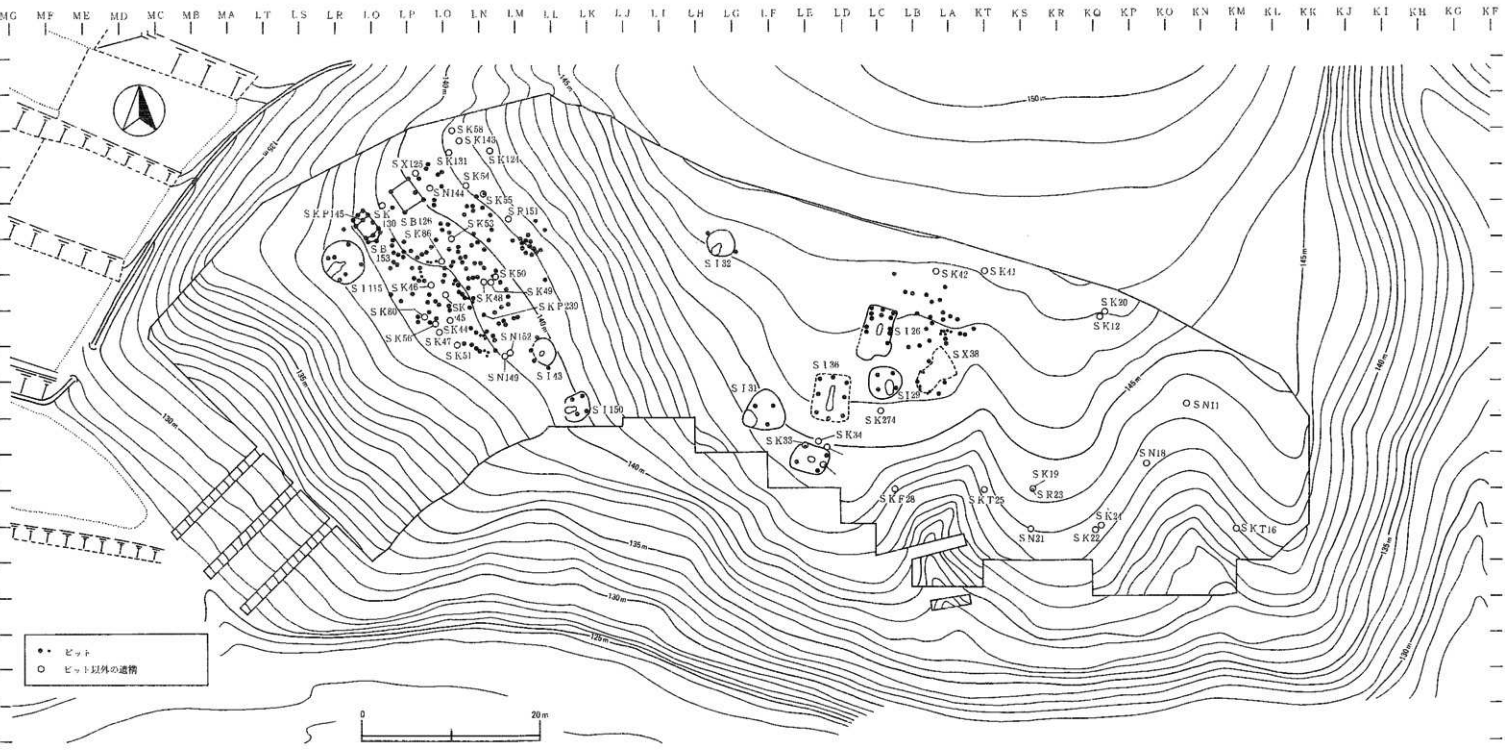
1．縄文時代

(1) 竪穴住居跡

S I 26 a・b（第38・39図、図版4）

上位平坦面の中央部やや西寄りのLB・LC53グリッドを中心にある。この部分の地山上面で、直径約2.5mの略円形に暗褐色の分布が見られたため、これをS I 26とした。東西・南北方向にベルトを残し、北側から掘り下げを開始したところ、北端部では約0.2m下から良好な床面が検出された。しかし、北壁から0.8m南側まではこの床面が続いているものの、その南側では1段下がっていた。このことと土層観察から、S I 26は2軒の住居跡の重複と判断し、南側をS I 26a、北側をS I 26bとした。S I 26aは、北側でS I 26bを切っており、南側は大きな風倒木痕による撹乱を受けている。

S I 26aは、北辺全部と東・西辺の北側が残っている。それによれば、東西が3.0～3.1m、南北が2.2m以上の矩形を呈する竪穴住居跡である。南部は撹乱によって不明な点が多いものの、柱穴を探したところ、第38図のように、本住居跡のものと考えられる多くの柱穴が検出された。撹乱を受けている柱穴もあり、にわかに全部を本住居跡のものとすることはできないが、検出された位置から、大多数を本住居跡の柱穴と見ることができると考えられる。以上を踏まえた全体の柱配置から、本住居跡は南北が約4.5m、東西が約3.0mの長方形を呈すると推定される。残存部分の床面は、平坦で普通のしまりである。壁は急傾斜で、床面からの高さは0.15～0.2mである。炉は、地床炉で長軸線上の北壁から約1.5m南側にある。南北に長く0.6m×0.3～0.4mの範囲が被熱のため赤変している。図示したよりも南側に連続すると考えられる



第37図　B区遺構配置図

が、撹乱されている。柱穴は壁際から多数検出されているが、基本的には、各辺に3本ずつ配されたP8・P7・P4・P12・P19・P20・P21・P14の合計8本が主柱穴と考えられる。なお、具体的な柱配置は不明だが、北壁下のP4とP5、P6とP7等では柱穴に新旧があり、本住居跡は建て替えられた可能性もある。遺物のうち土器は、覆土および撹乱土中から第73図7～10が出土している。いずれも口縁部が直立気味で胴上部に最大径を持つ深鉢形土器の破片である。7は口縁に沿う2段の刺突列が施されている。10はLR縄文地に無文帯で曲線文が描かれるもので、無文帯と縄文部を刺突列で画している。8はRL縄文を、9はLの撚糸をそれぞれ縦位回転施文している。石器は、覆土中から第82図S170～第83図S178が出土している。S170～S176は凹石で、表裏面に磨られた跡痕のあるものが多い。S177は側辺の中央に打ち欠きがあることから石錘と考えられるが、表裏面共に磨られている。S178は石皿の破片である。

本住居跡の時期は、覆土中から出土した土器から中期末葉と考えられる。

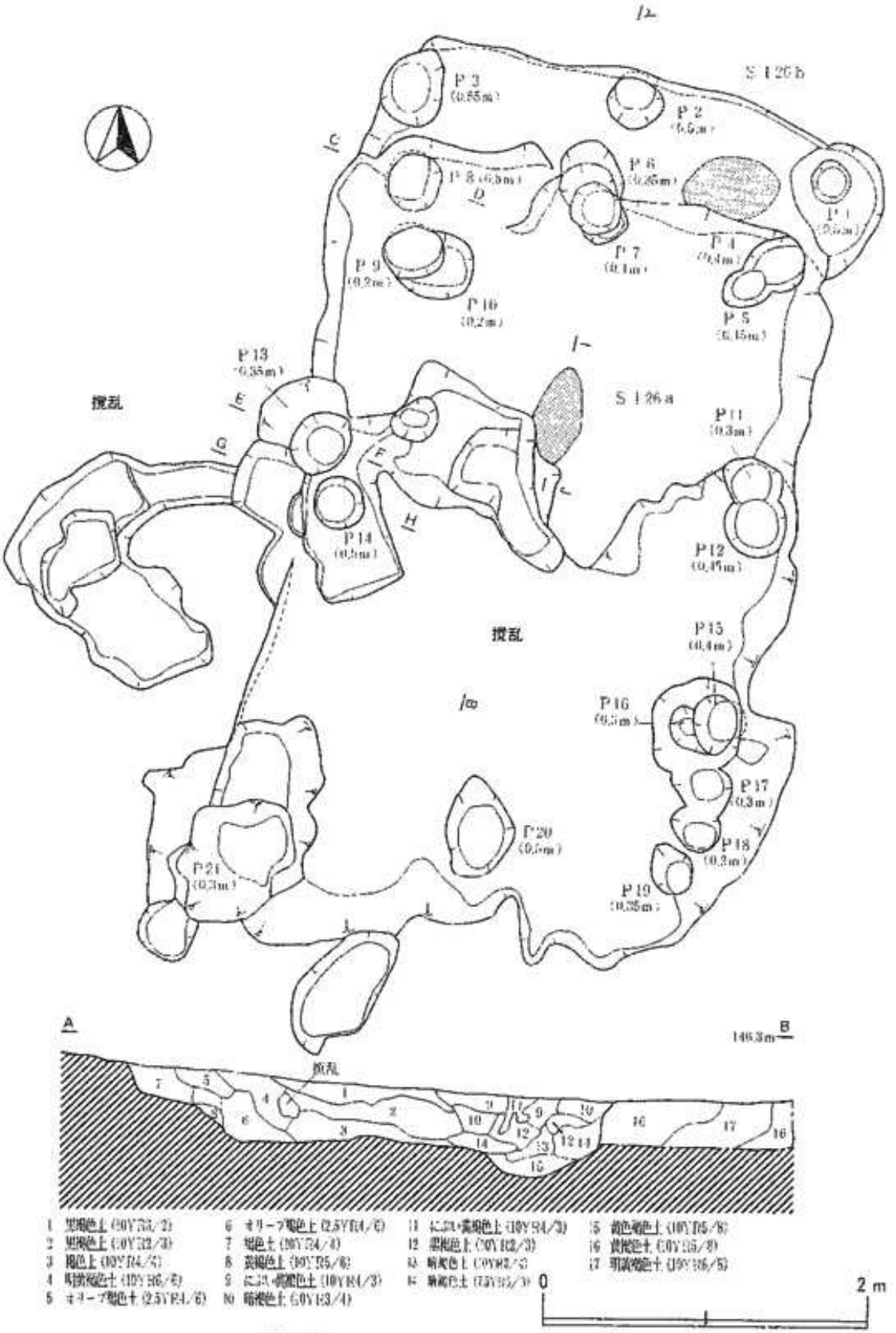
SI26bは、南側の大部分をSI26aに切られているため、北部約0.7mしか残存しない。東西幅が同じ規模のSI26aに切られているため、南側にどのくらい延びるか不明であるが、第38図の柱穴配置からすれば、P15あたりが南縁とも考えられる。その場合は南北約4m、東西約3mの長方形を呈する竪穴住居跡となる。床面はかたくしまり滑らかであるが、南側に僅かに下降する。壁は垂直で壁高は0.2～0.25mである。明瞭な炉は残存部にはないが、床面北東隅が図示した範囲で弱く焼けて赤変していた。ただしこの部分には、投棄したと考えられる焼土粒子と炭化物を多く含む土が約15cmの厚さで堆積していた。柱穴は北辺にP1～P3があり、いずれも主柱穴である。遺物は第73図11の深鉢形土器底部の他、剥片が数点覆土中から出土したにすぎない。

本住居跡の時期は、SI26aとほぼ同時期の中期末葉と考えられる。

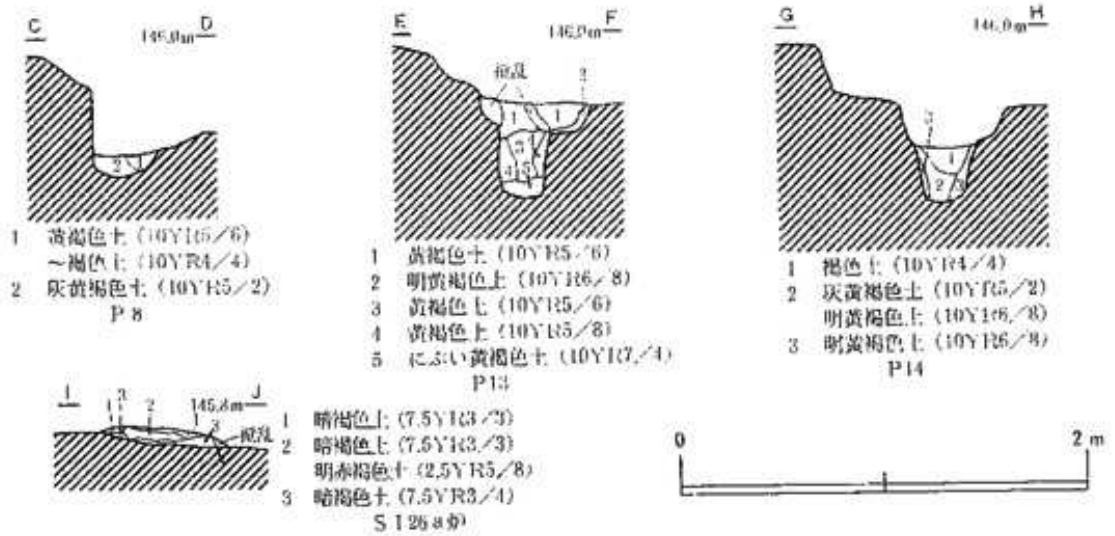
SI29（第40・41図、図版5）

上位平坦面の中央南西側、IB51・52グリッドを中心にある。この部分のⅣ層面のIC52グリッド杭周辺およびその南西側約2mの範囲には、本遺跡としては非常に多くの遺物が集中していた。遺物を残しながら掘り下げたところ、円形の石囲炉が検出されたためこれを竪穴住居跡とした。本住居跡は、直径約3.5mの円形を呈すると考えられるが、覆土がⅣ層と酷似するうえ浅く、明瞭な壁も検出できなかったところから、その平面プランの確証はない。床面は僅かに波打っているものの、比較的堅くしまっている。壁は明瞭な形では検出できなかったが、断面図には遺物の出土範囲とレベルから推定して示している。

炉は、中央部にある。検出当初は石囲炉としたが精査の結果、長軸0.9m×短軸0.5mの複式炉と判明したものである。南側に、中に深鉢を埋設した石囲部があり、石囲部が開口する北側に楕円形の浅い掘り込みが連続している（第41図下段）。石囲部の土器埋設に当たっては深さ



第38図　S I 26 a ・ b 竪穴住居跡（1）



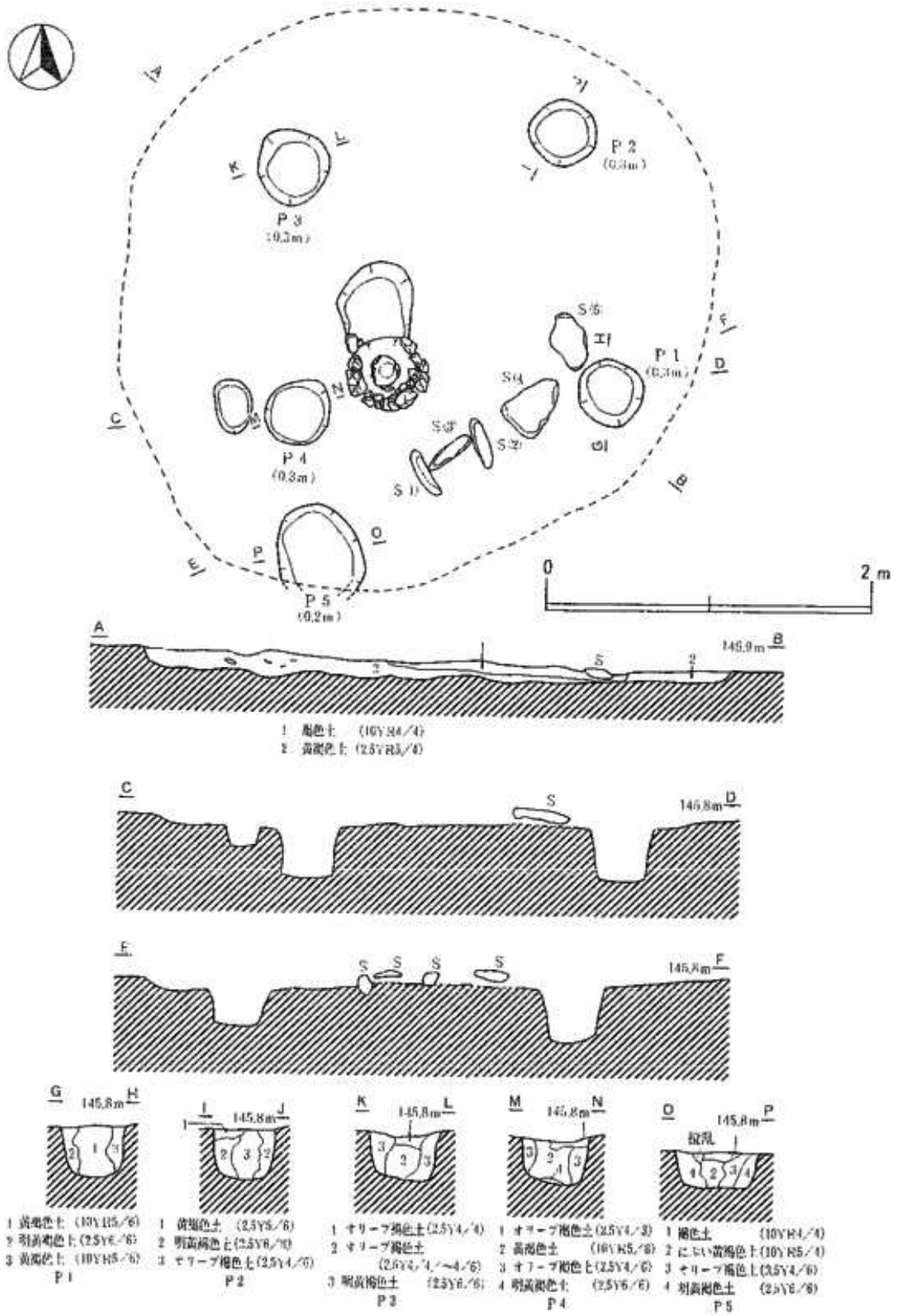
第39図　S I 26 a・b 竪穴住居跡（2）

12cm前後の穴を掘っているものの、河原石の設置のための明瞭な掘り方は見えない。設置する河原石の大きさの穴を掘り、はめ込むようにしたものと考えられる。石囲部は強く焼けており、河原石は被熱のため剥落したり、割れているものが多い。浅い掘り込みは、僅かに火を焚いた痕跡は認められるものの、被熱のため底面が赤変するなどはしていない。

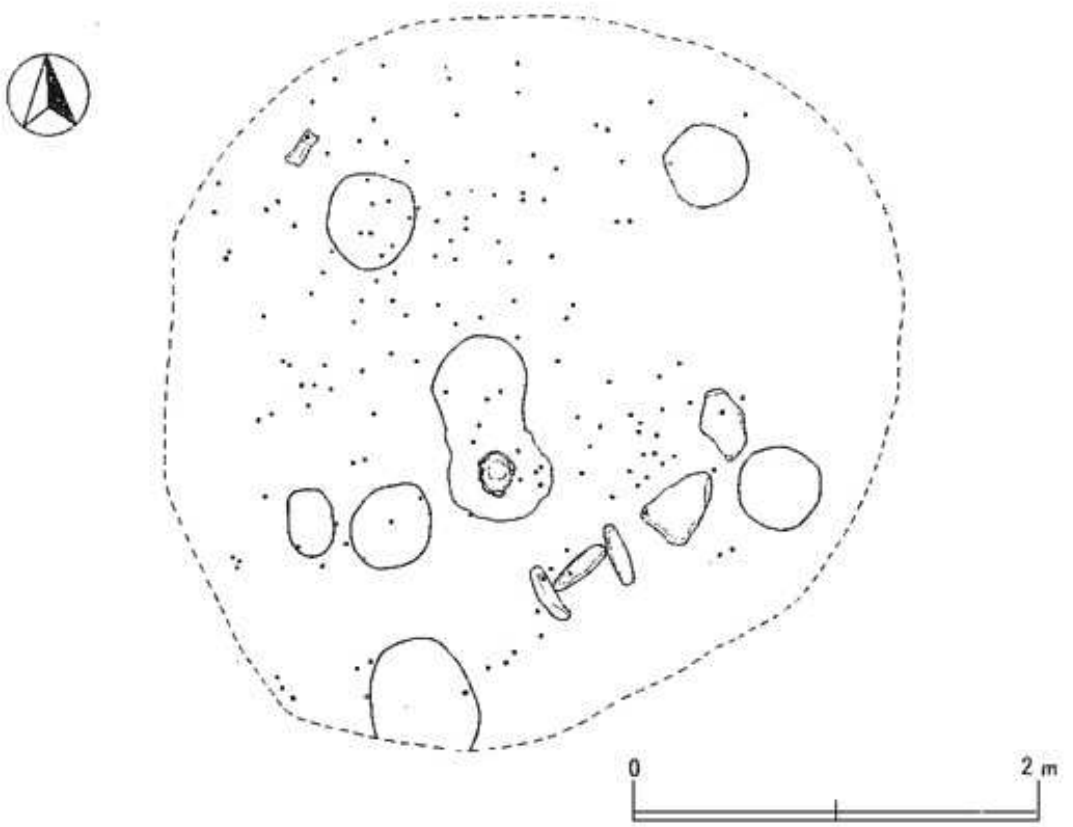
複式炉石囲部の南東0.3～0.4mに、長さ0.32m、幅と厚さが0.08～0.10mの長大な2個の河原石（S①とS②）が、0.3～0.4mの間隔で平行に埋設されている。S①・S②の間には、長さ0.34m、幅0.08m、厚さ0.04mの河原石（S③）がほぼ水平にあり、3つの河原石でH形の平面形をなしている。S③は、床面から僅かに浮いているものの、上面はS①・S②と同じレベルである。この遺構は、幅が0.3～0.4mと狭い上位置からしても入口施設とは考えられず、住居内における特殊な（例えば祭壇的な性格を持つ）遺構と考えられる。また、この遺構の北東側、P1の西には長さ0.35～0.4m、幅0.2～0.25m、厚さ0.07mの扁平な河原石2個（S④・S⑤）が、上面をほぼ水平にして存在する。床面よりも0.02m前後浮いているものの、その状況と位置から、何らかの目的で置かれたものと考えられる。主柱穴は、床面中央部を囲むように4本配されている。床面からの深さは4本共に0.3mである。P5は南壁にあるが、覆土がⅣ層と類似するため本遺構に伴うか否か不明である。

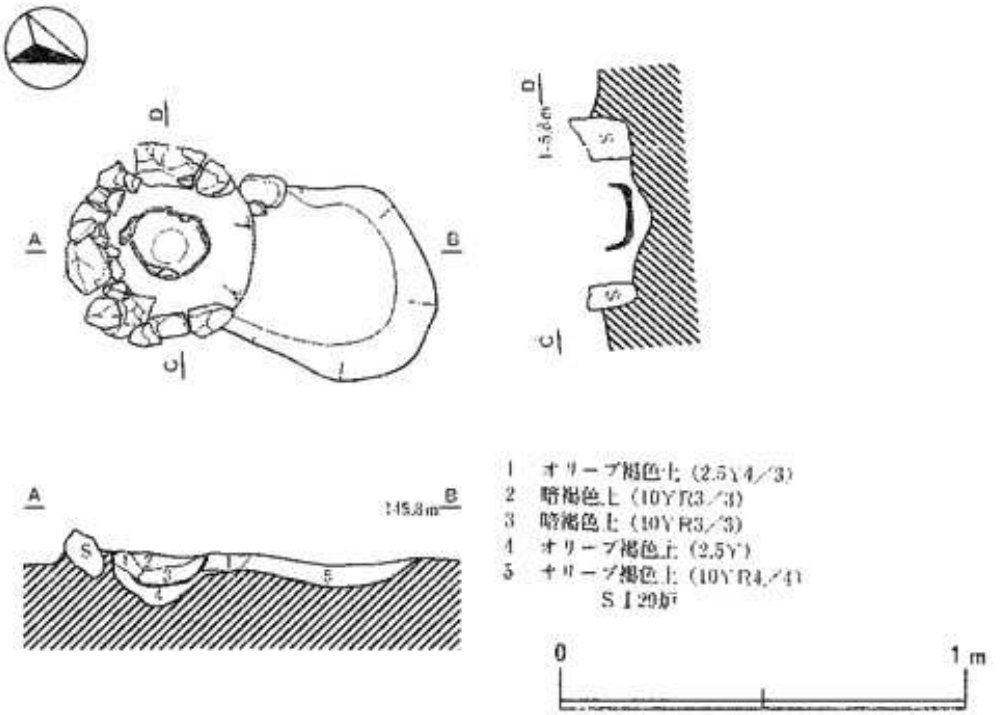
複式炉に埋設された土器（第74図31）は、深鉢底部で、RL縄文が縦位回転施文されている。

遺物は、土器・石器共に覆土中から多く出土している。第41図上段の黒点が平面分布状況を示したものである。土器（第73図12～25、74図28～37）は、いずれも深鉢の口縁部・胴部・底部の破片で、器全体を知ることのできるものはない。平口縁の他に、山形の突起をもつものがある（12～14、16・17）。施文は、沈線で縄文部と無文帯を区画したり（15・18、20～25）、縄文の代りに沈線で葉脈状文を描出したりするもの（21・27）がある。13は中型の深鉢で、4つの頂



第40図　ＳＩ29竪穴住居跡（１）





第41図　S I 29竪穴住居跡（2）

部を持つ波状口縁を呈するが、2分の1しか残存しない。波頂部のうち2個は大きな山形状で中央に小孔がある。他の2個の波頂部は、内面の鰭状突起が口唇部に突き出たものである。口縁部は粘土紐貼付によって肥厚しており、無文帯となっている。無文帯の下端は内外面の鰭状突起から続いて隆起しており、大波頂部の小孔上部を巡って連続する。胴部には縄文が施されているが、浅く不鮮明である。14もこの土器の鰭状突起部である。20と21は同一個体と考えられる。19と25は撚糸文であるが、21の沈線内にも撚糸文が施されている。他に木葉痕をもつ底部(32・33)がある。石器には、縦長の剥片に調整をもつスクレイパー(S179～S181)や磨製石斧(S182)、凹石・磨石(S183～S186)などが出土している。

本住居跡の時期は、炉の形態および出土土器から中期末葉と考えられる。

S I 30（第42・43図、図版6）

上位平坦面の南西側先端部、I.D49グリッドを中心にある。規模は、長軸3.9m×短軸3.1mノ深さ0.55mで、平面プランは隅丸でややいびつな長方形を呈している。本遺構はSK33・SK35・SK37と切り合い、SK33・SK35よりも古いが、SK37との関係は不明である。緩い斜面に立地するため、斜面下方の南西壁は僅かしか残っていない。床面は地山礫が露出しているため凹凸があるものの概ね滑らかで、僅かに南側に傾いている。壁は、埋土と地山土が似た色調で、埋土も堅くしまっているため検出が困難であったが、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は東辺では約0.5mである。中央には地床炉が、隅には4本の柱穴がある。

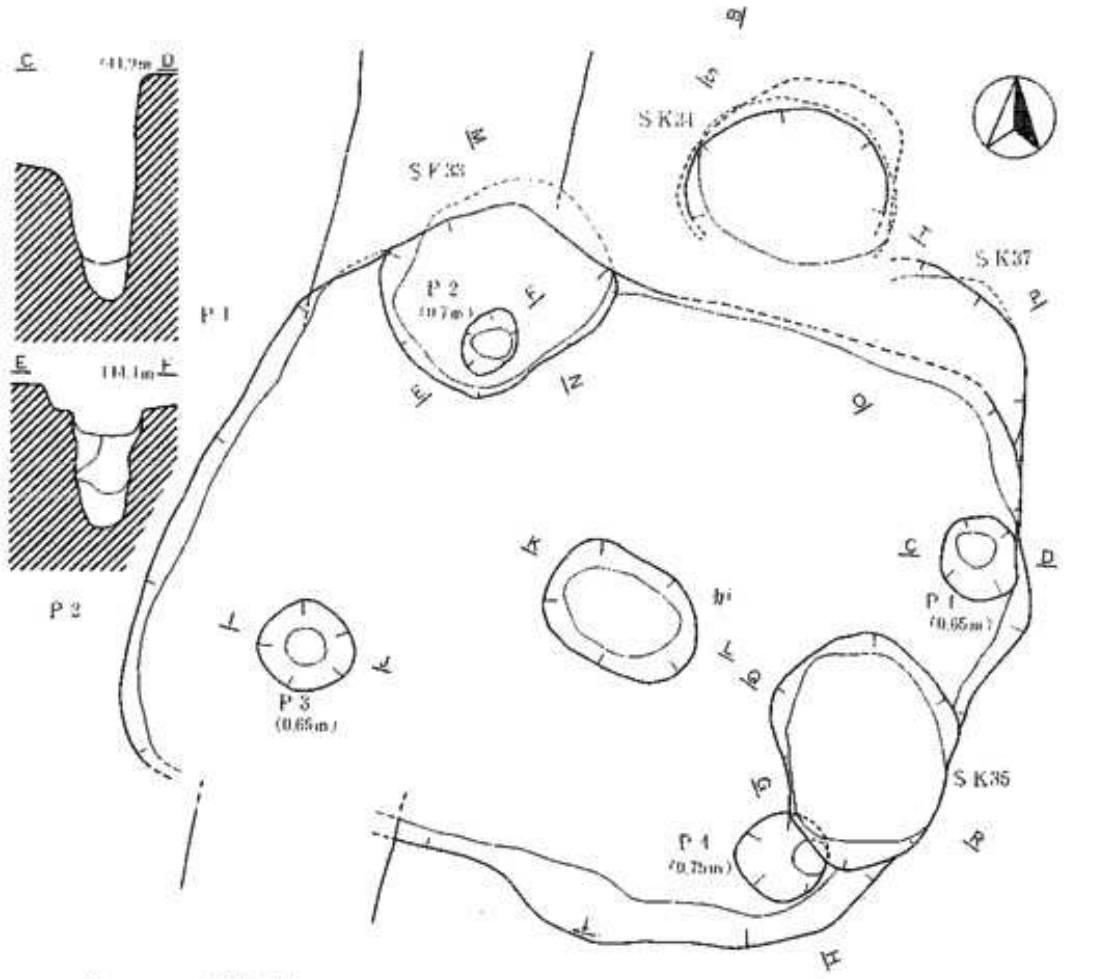
炉は、地床炉で床面中央部を僅かに掘り窪めてある。掘方は楕円形で、長軸0.8m×短軸0.55m×深さ0.05mと浅く擂鉢状を呈している。柱穴は各隅に1本ずつ配した4本で、これが主柱穴である。4本の柱穴は深く、床面から0.65～0.75mある。

出土土器は、第74図38～75図59である。沈線で無文部を区画し曲線文に描出したもの(38～41・47)や、断面三角形の隆帯に沿って刺突文を施したもの(45・48)がある。38・39は深鉢の同一個体で、口縁部が僅かに外反し胴中部近くで膨らみ、底部に向かってすぼまる器形と考えられる。49～53は、縄文原体の端部結束の痕が縦位に認められる例である。石器は、凹石や磨石などが4個出土している。

本住居跡の時期は、炉の形態や出土土器から中期末葉と考えられる。

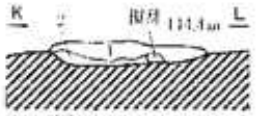
S I 31（第44・45図、巻頭図版・図版7）

上位平坦面の南西端部、LF51グリッド杭を中心にある。S I 30竪穴住居跡の北西側約3.5mに位置する。この部分の第Ⅳ層中に、直径約3.5mの円形の褐色土プランとして検出した。平面形は直径4.5mの不正円形であるが、北東辺と北西辺が整った形の弧ではなく直線的である。このため平面形は3つの頂点が丸くなった正三角形状に近い。本住居跡は南西側に緩く下降する斜面にあり、壁は南西部を除けば、ほぼ垂直でしっかりしている。壁高は北東側で、0.45m

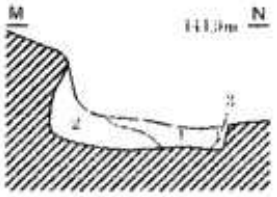


1	暗褐色土（10YR3/4）	5	暗褐色土（10YR3/4）	9	暗褐色土（10YR3/4）	13	褐色土（10YR4/6）
2	暗褐色土（10YR3/3）	6	褐色土　（7.5YR4/4）	10	褐色土　（7.5YR4/4）	14	褐色土（10YR4/6）
3	褐色土　（10YR4/4）	7	明褐色土（7.5YR5/6）	11	暗褐色土（10YR3/4）	15	褐色土（10YR4/6）
4	黄褐色土（10YR5/6）	8	暗褐色土（10YR3/3）	12	褐色土　（10YR4/4）	16	褐色土（10YR4/6）

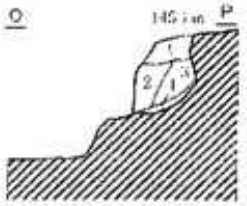
第42図　S I 30竪穴住居跡（1）



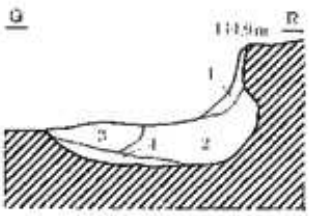
1　赤褐色土（5YR4／6）
2　明褐色土（7.5YR）
b'



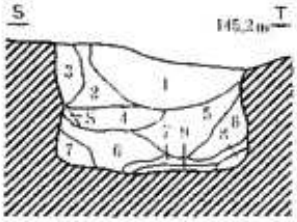
1　褐色土（10YR4／6）
2　明褐色土（7.5YR5／6）
3　明褐色土（7.5YR5／6～5／8）
S K33



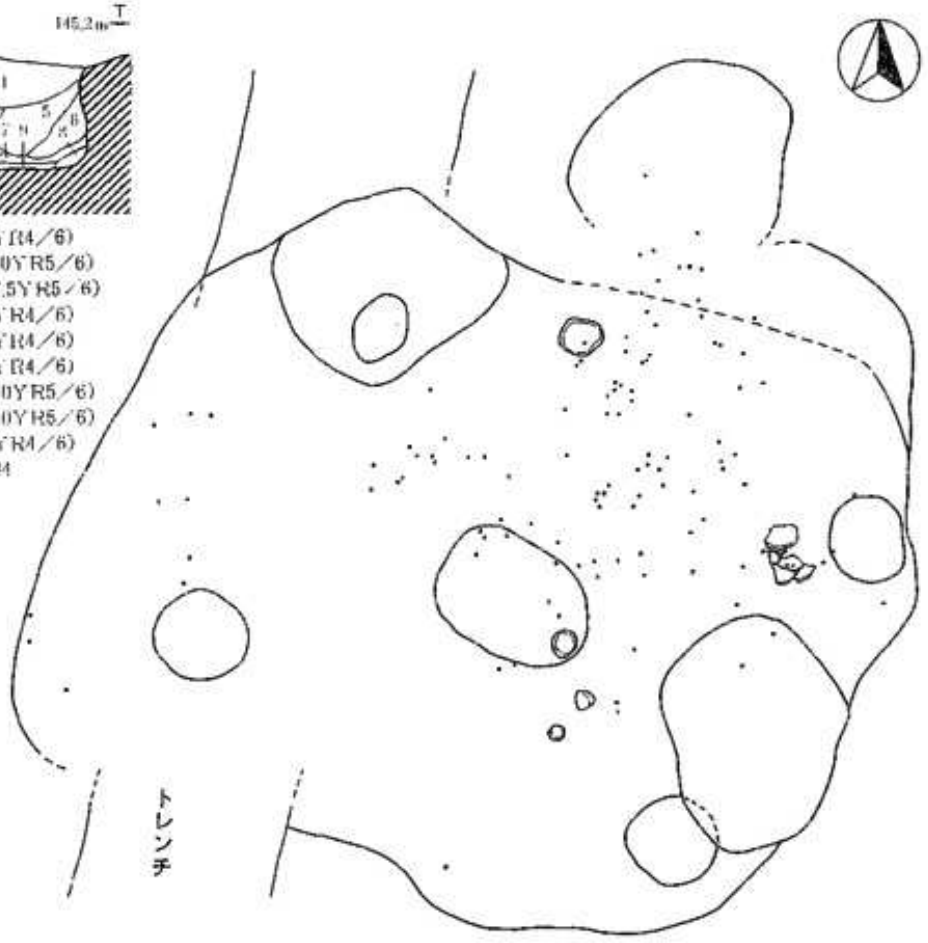
1　褐色土（10YR4／6）
2　褐色土（10YR4／6）
3　褐色土（10YR4／6）
4　黄褐色土（10YR5／6）
S K37



1　褐色土（10YR4／6）
2　黄褐色土（10YR5／6）
3　黄褐色土（10YR5／6）
4　褐色土（10YR4／6）
S K35



1　褐色土（10YR4／6）
2　黄褐色土（10YR5／6）
3　明褐色土（7.5YR5／6）
4　褐色土（10YR4／6）
5　褐色土（10YR4／6）
6　褐色土（10YR4／6）
7　黄褐色土（10YR5／6）
8　黄褐色土（10YR5／6）
9　褐色土（10YR4／6）
S K34



第43図　S I 30竪穴住居跡（2）

あるが、南西側ではほとんど残っていない。床面は緩く凹凸があり、南西斜面側に向かって僅かに傾斜するが、それに直交する方向ではほぼ水平である。

炉は、複式炉で南西壁から中央に向かって取り付く。中央側に石囲部、壁側に掘り込みがある。全体の規模は、高さ2m×底辺1.7mの二等辺三角形に近い。石囲部は、床面中央側に土器を埋設し、これに隣接して0.6×0.8mの石囲いがある。複式炉全体の掘り方は、上端の幅が0.2～0.3mの土手状になっている仕切りを挟んで、石囲部は方形状、掘り込みは楕円形状である。その規模は前者が一辺0.7m前後、後者が長軸1.8m×短軸0.7mである。石囲部には3方の壁際に大小の扁平な礫を主体にして据えてある。その礫の内側は赤く焼け、埋設してある土器の周囲も焼土化している。

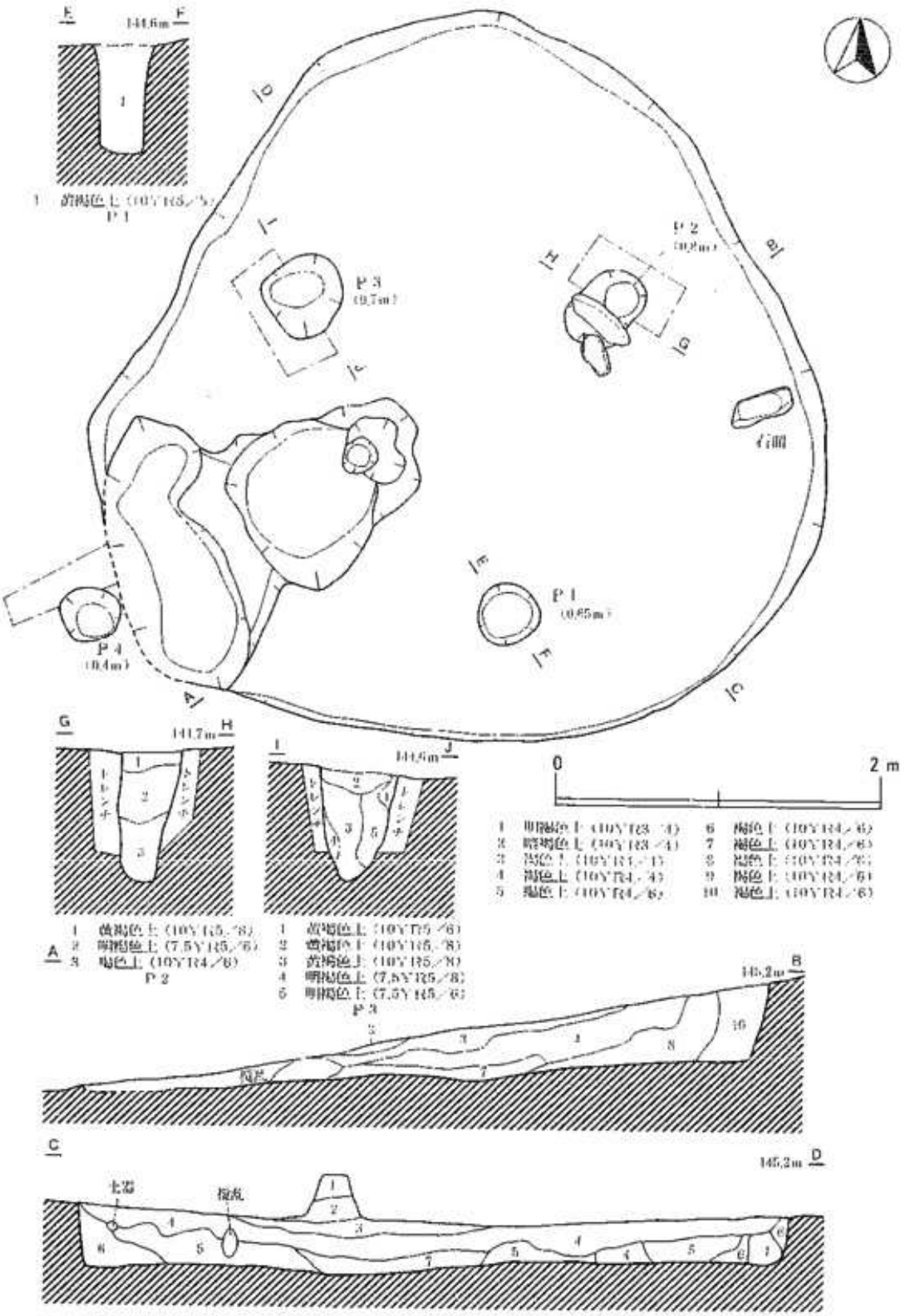
主柱穴は、配置と規模からP1～P3と考えられる。複式炉の石囲部を挟んで2本と、複式炉中軸線を通る北東側に1本配されている。P4は複式炉掘り込みに連なる覆土を掘り込んでいるところから、本住居跡よりも新しい柱穴である。竪穴住居跡の覆土は褐色土主体の層で、床面に近い壁際ほど締まりがある。

炉に埋設された土器が第75図60である。口縁部が直立もしくは外反すると考えられ、胴上部が強く膨らみ、底部に向かってやや急激にすぼまるいわゆるキャリパー形に近い深鉢形土器である。断面三角形の高い隆帯で区画した無文部が、無文帯と考えられる口縁部から逆L字状に垂下する。この逆L字状の文様は横位に器周5単位施されており、その下には逆L字間で頂部となる無文の波状文が描かれている。

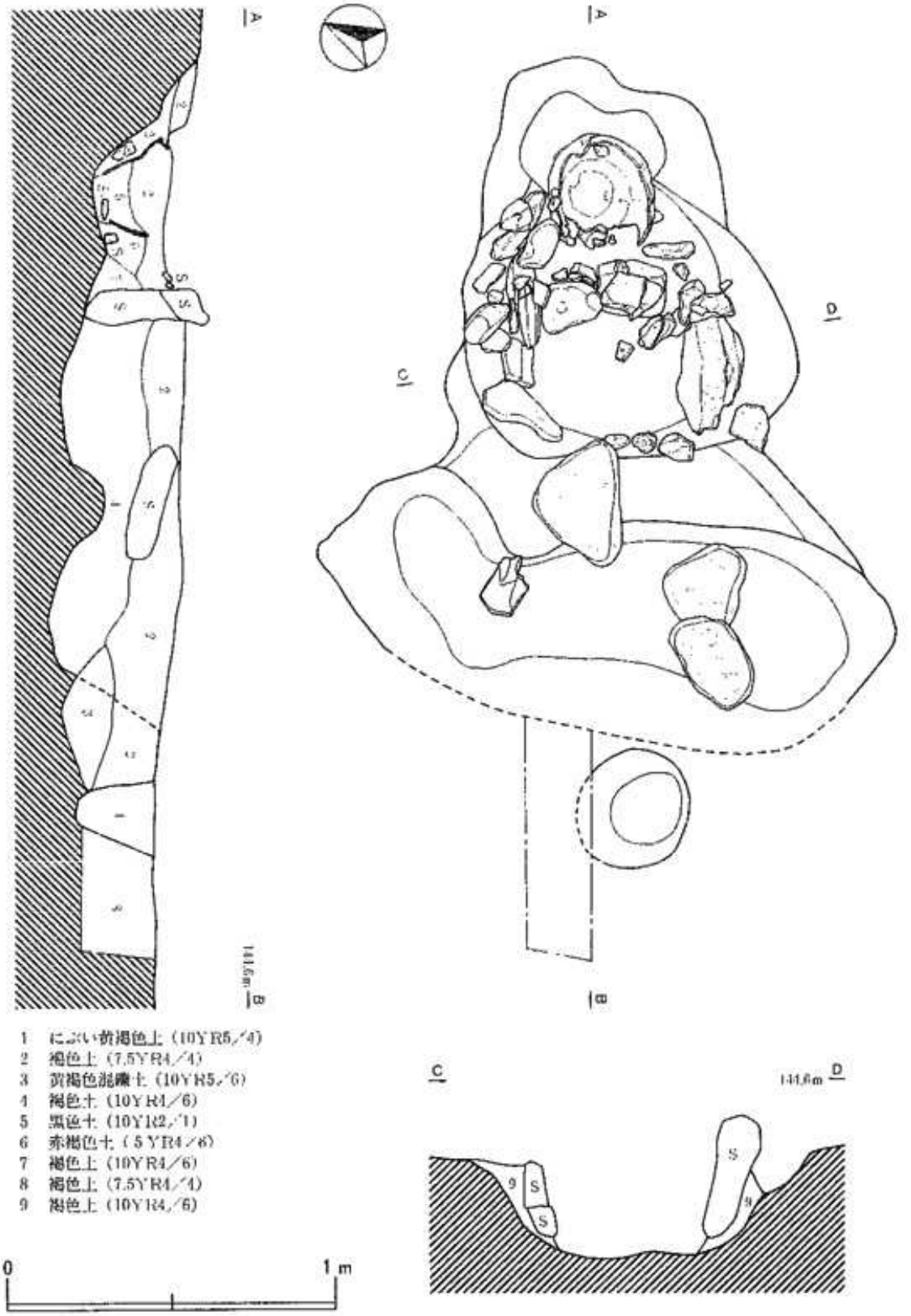
遺物は、床面東側壁際から小型壺・石皿・石鏃・剥片が集中して出土し、その他には覆土中から散在する形で土器・石器が出土している。第76図63は床面東壁際から、口を複式炉側に向けて横位に出土した小型壺である。この土器は口頸部上端を欠くが、南東壁際覆土中から出土した64は同じ器形で一部口唇部まで残存する。これによると63・64は、直立もしくは僅かに内傾する口頸部に半球状の胴部が付く器形である。底面は平坦で据わりが良く安定している。63は、口頸部が無文で、胴部には太い沈線で画された無文帯による波頭状文が器周3単位施されている。波頭状文の下には斜縄文が施されているが、器面が粗れて原体は判然としない。64は全面無文で、口頸部には縦方向のミガキが施されている。63・64共に胎土は覆土中から出土している他の土器と変わりなく、焼成は普通～やや不良である。

石器は、扁平で上下両端が尖った石鏃(S191)や、小さなつまみ部のある石錐(S192)が出土している。図版46の石皿は長大な砂岩の中央部が細長く窪んでおり、一部赤変している。この他凹石や磨石が出土している。

本住居跡の時期は、炉に埋設された深鉢から中期末葉と考えられる。



第44図　ＳＩ31竪穴住居跡（1）



第45図　S I 31竪穴住居跡（2）

S I 32（第46図、図版8）

上位平坦面西側端の、LG55・56グリッドにある。南々西側に下降する緩斜面の地山土面で、黒褐色土プランとして確認した。規模は長軸3m×短軸2.8m×深さ0.4mで、平面プランは略円形である。床面はほぼ平坦で、北壁の深さは約0.4mで立ち上がりはしっかりしている。南西壁に接して複式炉がある。複式炉は、南々西側の壁に取り付く形である。床面中央部に石囲部があり、これに連続して壁側に掘り込みがある。石囲部は上下を打ち欠いた深鉢が埋設され、これに連続して掘り込みとの間に方形と推定される石囲いがある。石囲いの石は長さ0.1～0.2m×幅が0.1～0.15m、厚さ0.05～0.07mの扁平な河原石で、これを立て並べている。埋設土器部分、石囲い部分共に良く焼けている。石は内外面共に被熱によって著しく赤変したものや、割れた一方の石だけが用いられているものがあることから、これらは他の炉などに使用したのを再利用したものが多いと考えられる。

柱穴は、炉の長軸と直交する方向の屋外に主柱穴と考えられる2本の柱穴がある。（P1・P2）。この他屋内の北西側に浅い3個のピットがある。住居の覆土は、床面の壁際に締まりの強い褐色土が、炉掘り方の上位には黒色を主体とする土が、レンズ状に堆積している。

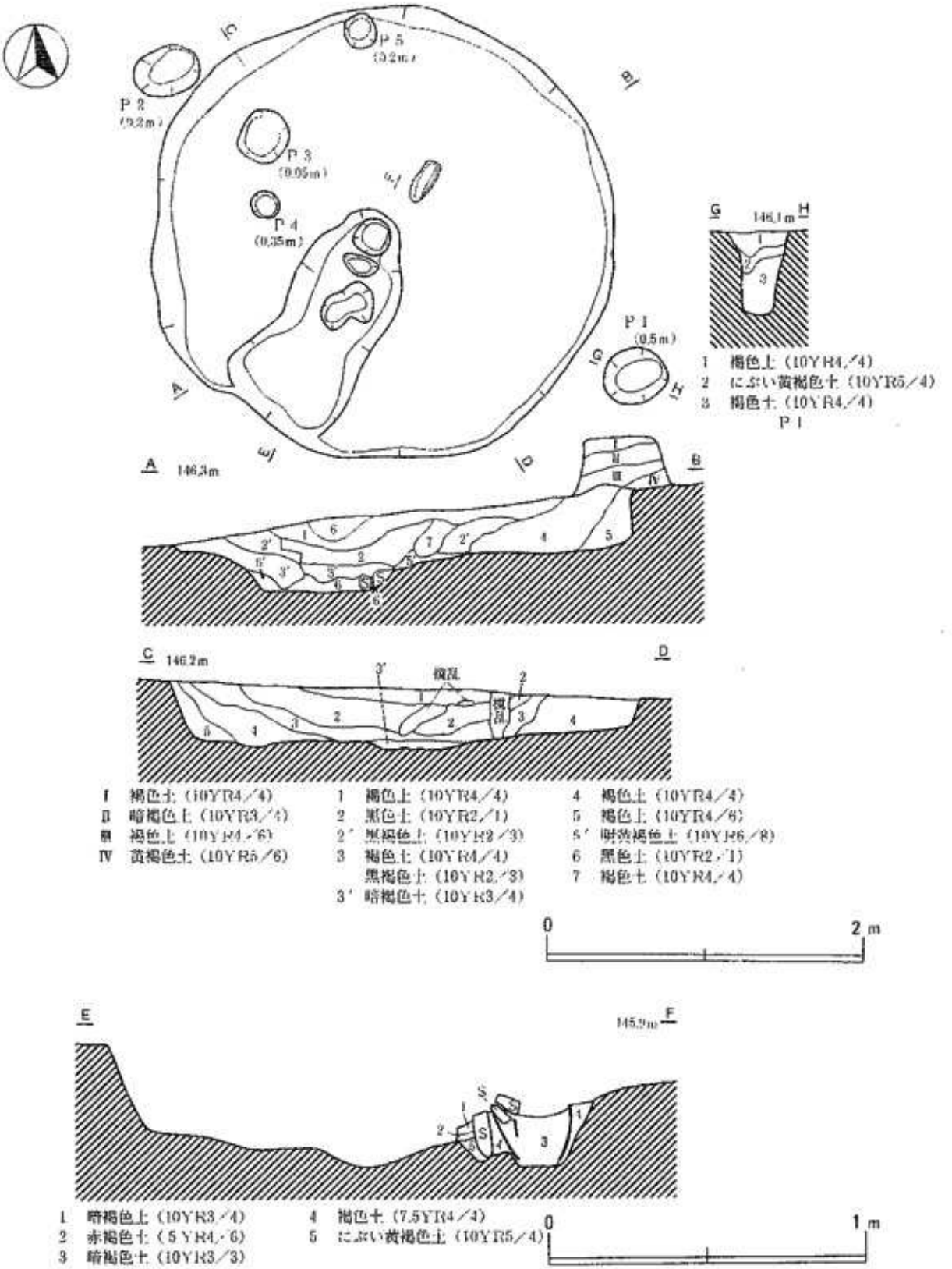
炉に埋設された土器(第76図65)は、口縁部が直立もしくは僅かに外反し、胴中部が緩く膨らみ、底部に向かってすぼまる深鉢と考える。口縁部と胴下部以下を欠いている。胴部には、沈線で区画されて先端が巻く逆L字状の無文帯が、器周4単位施されている。逆L字状の巻いた先端部は蕾状の突起様に高まっている。二次火熱によって器全体が非常に脆くなっている。

石器は覆土中から凹石と磨石を兼ねた礫石器が出土している(S198)。

本遺構の時期は、炉の深鉢から中期末葉と考えられる。

S I 36（第47・48図、巻頭図版）

上位平坦面の南西部、LD51グリッドを中心にある。4月の範囲確認調査トレンチで結果的には本住居跡西辺を壊してしまったが、この時に他に比べて遺物が僅少ながら集中する傾向を把握しており、小規模な土坑が存在するものと推定していた。その後、第Ⅳ層面で土色の違いによるプランは捉えられなかったものの、LD51グリッドを中心に遺物の集中することがわかった。精査したところ広範囲に焼土が検出されたため、これを地床炉と考えS I 36とした。しかし、この時点でも平面プランを把握するには至っていなかった。そして地床炉に続く床面を精査しつつ壁および柱穴の検出に努めた結果、北辺と東辺の北部で壁と思われる僅かな段差が捉えられ、地床炉を中心にして合計8本の柱穴を検出することができた。柱穴配置は、S I 26a同様、一辺に3本ずつ配されたものであった。この柱配置と僅かに残る壁から推定される本住居跡の規模は、長軸約5m×短軸約3.5mで平面形は長方形である。床は堅くしまっているが斜面に沿って緩く傾いている。壁は、西辺が既に失われおり、南辺と東辺の一部も不明であ



第46図　ＳＩ32竪穴住居跡

る。また、僅かに残る北辺と東辺・南辺の一部も明瞭な立ち上がりを捉えることはできなかった。

炉は、地床炉で住居中軸線上にある。検出時には第48図のように南北2.2m、東西0.4～0.8mの範囲で焼土が分布しており、南側が強く焼けていた。しかし半截したところ、南北に各々浅い掘り込みが見られた。したがって、南北に細長いこの地床炉が本来一連のものであったのか、2箇所の地床炉が最終的に繋がったものかは不明である。柱穴は、東辺と西辺に並ぶ6本（P1～P6）が規模も大きく深いのに対し、南北辺の中央にあるP7・P8は小さくP1～P6に比べやや浅い。P1～P6が主柱穴でP7・P8が支柱と考えられる。なお、6本の主柱穴のうちP5を除く5本に柱アタリが見られた。それによると柱の太さは直径0.25～0.35mと推定される。覆土はやや締まりのある褐色土が主体で、床面との境はそれほど明瞭ではない。

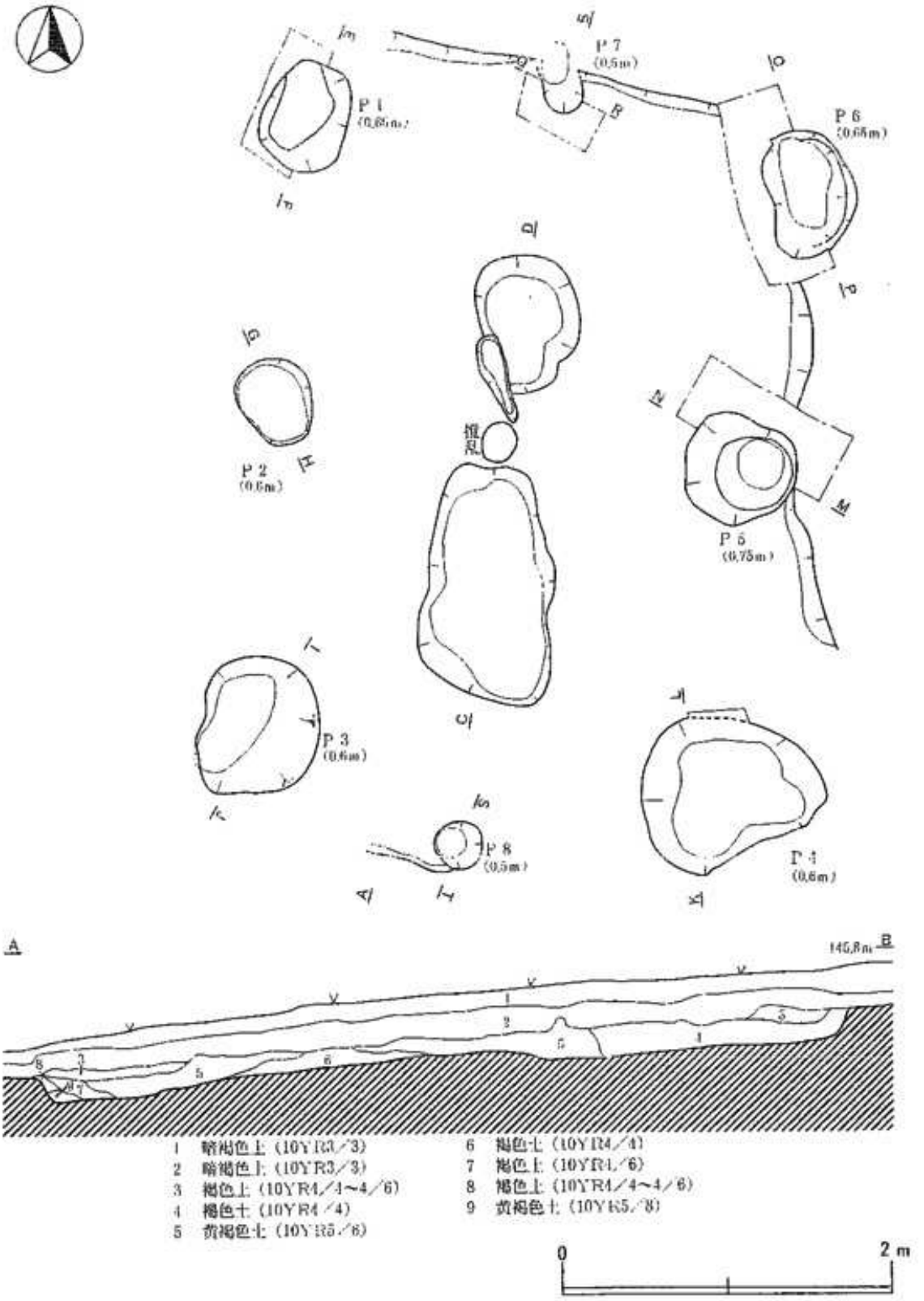
遺物は、床面に近い炉の周辺で出土している。土器は、第76図66～77図81である。いずれも深鉢で、口縁部がほぼ直立し胴部の膨らみが小さいもの(69・70)、口縁部が僅かに外反し胴中部が大きく膨らむもの(75)、短い口縁部が外反するもの(66・71・72)などがある。平口縁のものが多いと思われるが、山形の突起が付いて波状になるもの(68)や、内面に付された鰭状突起が口縁上に突出しているもの(67)などもある。口縁部は無文帯のものが多く、66では刺突列が施されている。胴部施文は、沈線や断面三角形の隆帯によって画された無文帯による波頭状文(75)などが主体である。66はLの、70はRの撚糸文である。石器には、石鏃（S199・S200）やスクレイパー（S201）などの他、凹石・磨石など6個が出土している。

本住居跡の時期は、土器から中期末葉～後期初頭と考えられる。

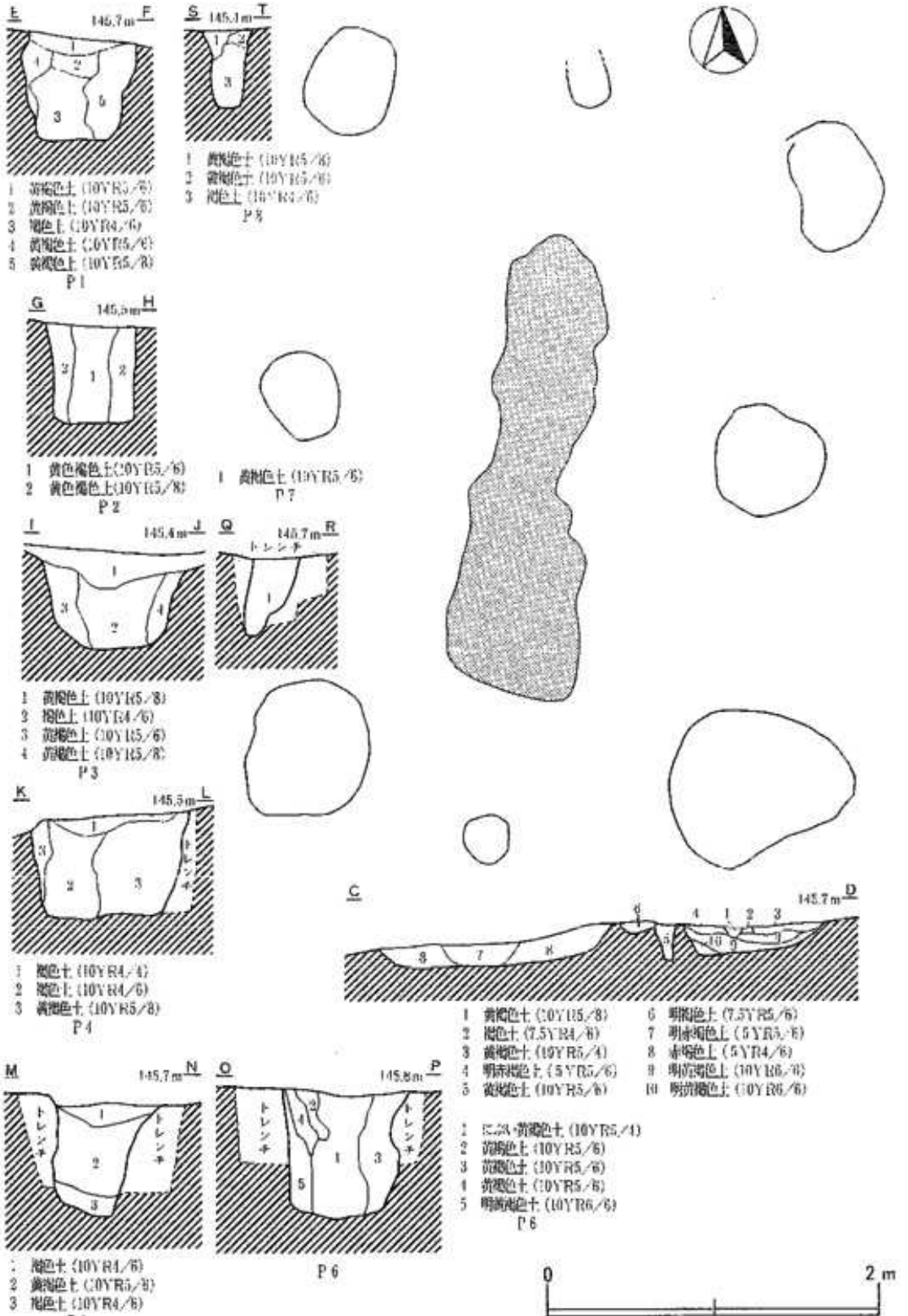
S I 43（第49図、図版9）

下位平坦面の南東側、LL52グリッド北東部を中心にある。Ⅳ層中で長径3.0m×短径2.2mの黒褐色のプランが明瞭にみえたものである。南西側に緩く下降する斜面にあるため南西側の壁および床面の一部は検出できなかった。規模は長軸3.1m×短軸2.4m×深さ0.4mで、平面プランは不整楕円形である。床面は概ね平坦で、西辺を除く壁の立ち上がりは明瞭である。中央やや南西寄りには複式炉がある。

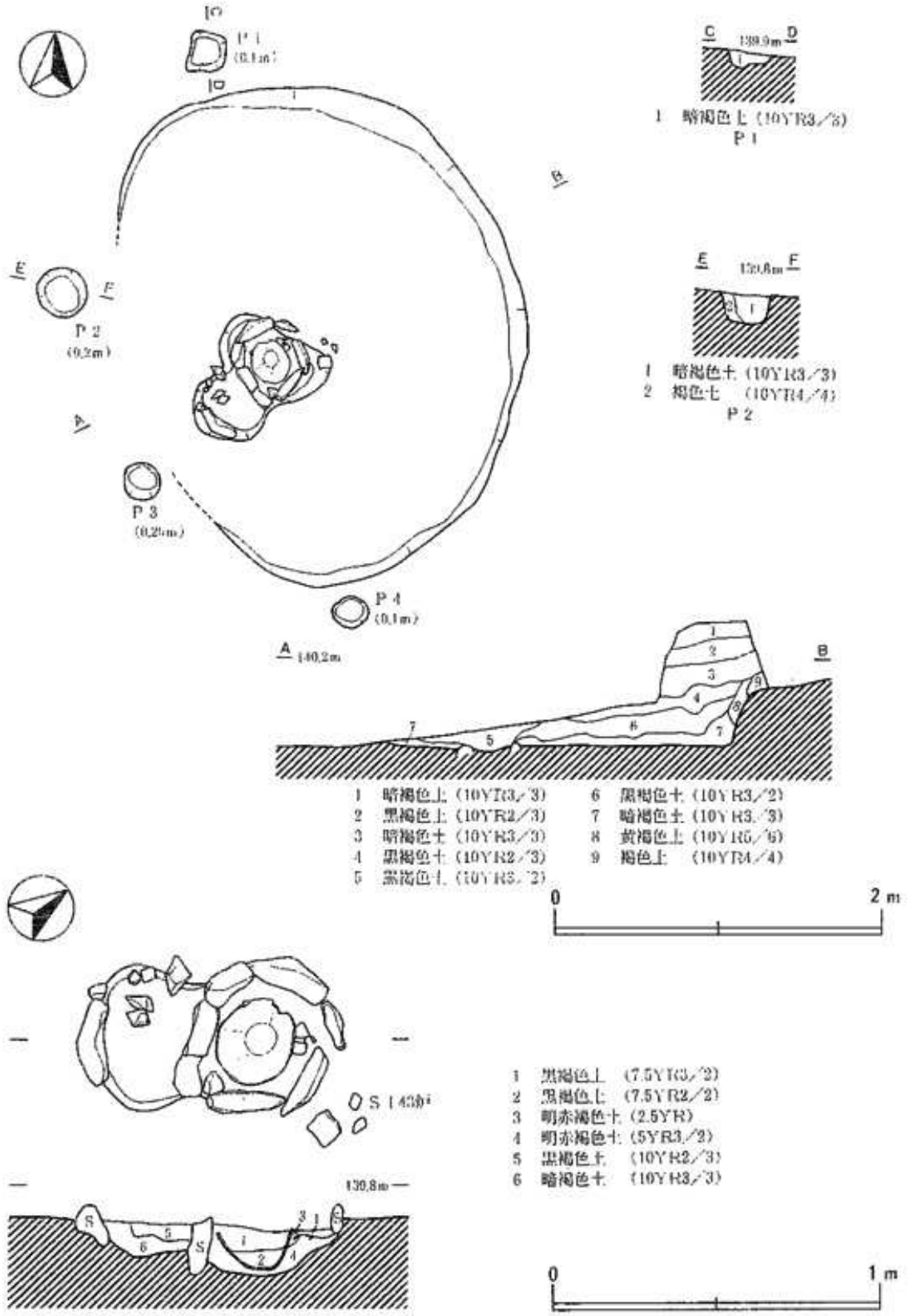
複式炉は、長軸0.8m×短軸0.45m程の大きさで、床面中央側に石囲い部、その南西側に掘り込みがある。石囲い部は、中央部に深鉢の胴下部を埋設し、その周囲に長さ0.15～0.3m、幅0.15～0.2m、厚さ0.05～0.1mの扁平な河原石6個を内径0.3～0.35mの円形に立て並べている。掘り込みは長辺0.4m×短辺0.25mの長方形を呈し、深さ0.1mである。南西辺には長さ0.27m、幅0.14m、厚さ0.08mの大きな礫を横位に立てている。石囲部、掘り込み共によく焼けており、各々の河原石内面は被熱によって赤変している。なお、石囲部完掘後、北東側から、径0.3m、長さ0.21mの掘り込みが検出された。掘り込みの周囲が僅かに焼けており、埋土



第47図　ＳＩ36竪穴住居跡（１）



第48図　ＳＩ36竪穴住居跡（２）



第49図　ＳＩ43竪穴住居跡

中には土器細片が含まれていたところから、古い(土器埋設)炉の跡と考えられる。したがって、本住居跡の炉には、新旧2つの炉があることが判明した。古い炉の形態は判然としないが、土器が埋設されていたと見られるところから新しい炉と同様、複式炉であった可能性が強い。住居跡の覆土は、黒褐色土や暗褐色を主体としたものである。

柱穴は、床面から検出されず、住居外西半から4本検出された。4本はいずれも直径と深さが0.15～0.25mと小規模であるが、壁から0.1～0.15mしか離れておらず、また周囲に同様の柱穴も存在しないところから、本住居跡に伴うものと考えられる。

新しい炉に埋設された土器(第77図83)は、平底から底部が短く直立し、胴中部に向かって外傾する深鉢である。ＲＬＲの複節斜縄文が施されている。

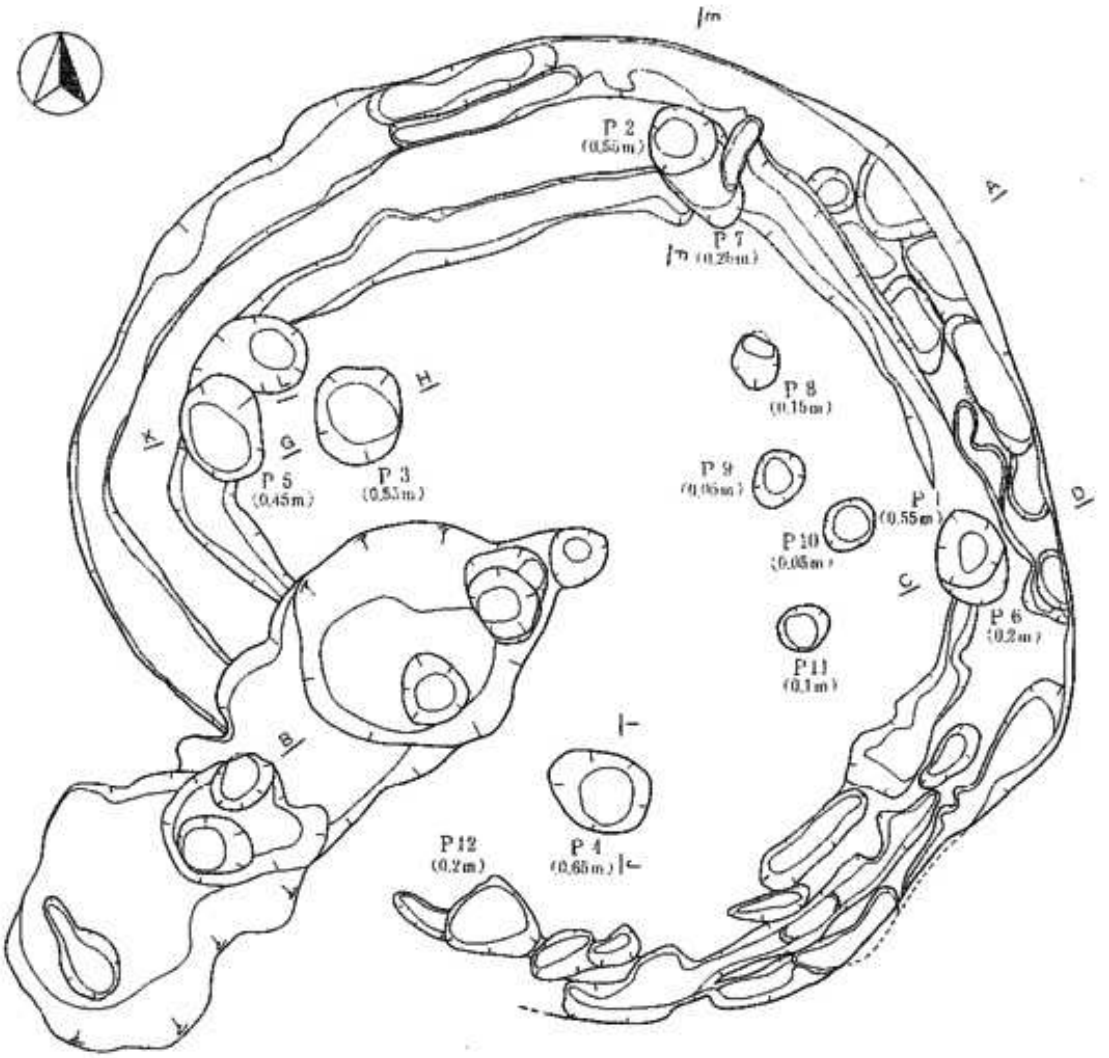
遺物は少なく、土器は炉に関わるもの(82・84)が出土しているにすぎない。82は、新しい複式炉の石囲部内から出土したものである。口縁端が外側に突き出ている。口縁部は無文で、下端に沈線がのぞいている。84は古い複式炉の埋土中から出土したものである。沈線で画された波頭文が描かれている。石器は出土していない。本住居跡の時期は、炉の形態と埋設された土器から中期末葉と考えられる。

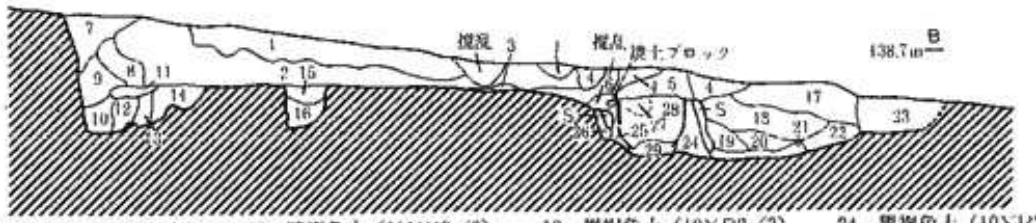
ＳＩ115ａ・ｂ・ｃ（第50・51図、図版11）

下位平坦面の西端部で、ＬＱ55グリッドを中心にある。Ⅳ層下部で直径約4.5mの不整円形のプランを確認したものであるが、この時既に、西～南西部では床面と溝が見えており、この部分の壁は残存していなかった。ほぼ中央部で直交する2本のベルトを設けて精査を進めたところ、確認面で見えていた壁溝は、幅0.2～0.5mあり、外周で4.85m×4.35mの規模であることがわかった。また、この壁溝の内側にも、幅0.2m×0.3m、外周で3.9m×3.2mの溝の存在が判明し、ＳＩ115は少なくとも2時期あることがわかった。さらに、外側の溝は、不明な部分があるものの、新旧のあることがわかり、結局、本竪穴住居跡は前後3時期の重複であると判明した。そして、断面観察により一番外側の壁溝(これを壁溝1とする)が最も新しく、次にその内側(壁溝2)、最も古いのが一番内側(壁溝3)と判断できた。また、壁溝1は、壁の直下にあるか、もしくは一部壁側を掘り込んでいるところから、壁溝の外周がほぼ竪穴住居跡の規模を表していることも明らかとなった。

以上のことからＳＩ115は、その平面形がいずれも南西辺が直線的となる不整円形を呈する3軒の竪穴住居跡(新しい順にＳＩ115ａ・115ｂ・115ｃとする)となった。

ＳＩ115ａは、長軸4.85m×短軸4.35mである。床面は概ね平坦で、堅く締まっている。炉は、複式炉で南西壁中央に取り付く。複式炉の規模は、長軸約1.6m、短軸約0.9mの楕円形である。床面中央側に口縁部と底部が打ち欠かれた深鉢が埋設され、南西側に一辺0.8mの方形の石囲い、その外側に掘り込みがある。主柱穴は、南東と北東隅に近いＰ1・Ｐ2と、石囲部を

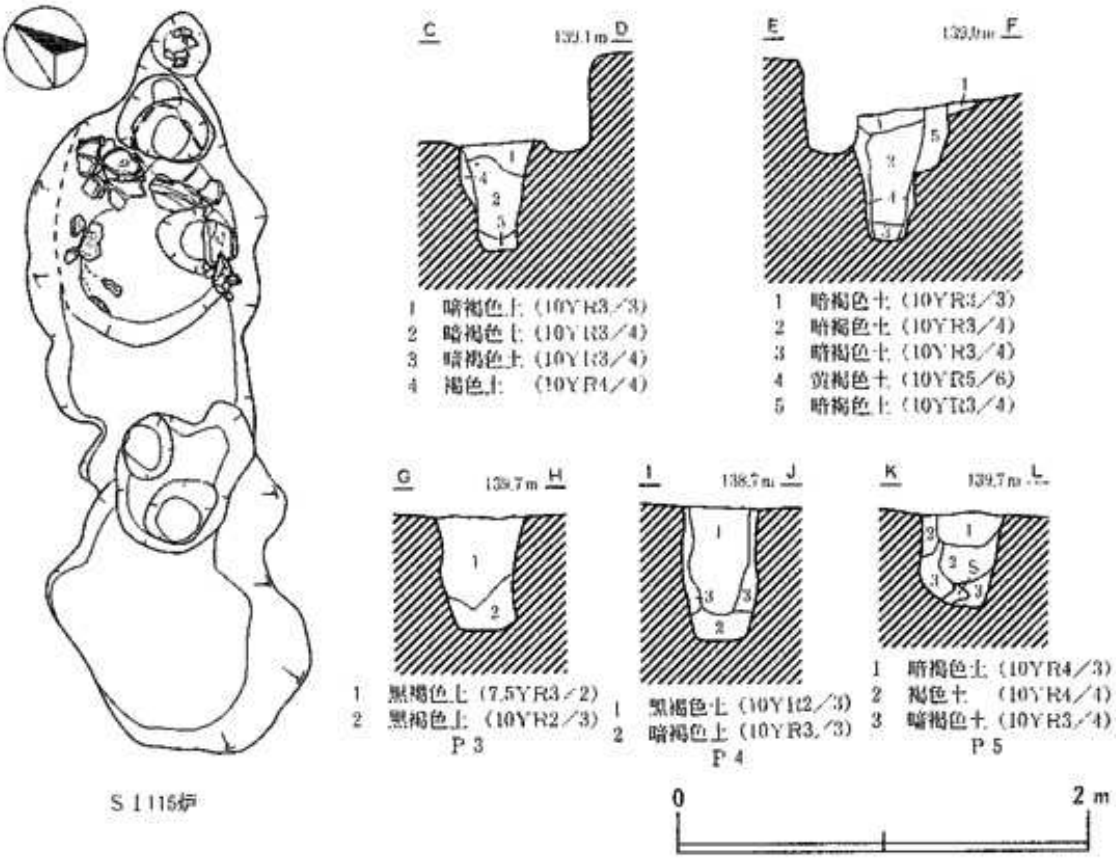




1	黒褐色土 (10YR2/3)	10	暗褐色土 (10YR3/3)	18	黒褐色土 (10YR2/3)	24	黒褐色土 (10YR2/3)
2	暗褐色土 (10YR3/3)	11	褐色土 (10YR4/4)	19	黒褐色土 (10YR2/3)	25	黒褐色土 (10YR3/2)
3	褐色土 (10YR3/3)	12	褐色土 (10YR4/4)	20	黒褐色土 (10YR2/2)	26	黒褐色土 (10YR3/2)
4	黒褐色土 (10YR2/3)	13	暗褐色土 (10YR3/4)	21	黒褐色土 (10YR2/3)	27	黒褐色土 (10YR3/2)
5	黒褐色土 (10YR2/2)	14	暗褐色土 (10YR3/4)	22	黒褐色土 (10YR3/2)	28	黒褐色土 (10YR3/2)
6	黒褐色土 (10YR3/2)	15	暗褐色土 (10YR3/3)	23	黒褐色土 (10YR3/2)	29	黒褐色土 (10YR2/3)
7	黒褐色土 (10YR2/3)	16	にぶい黄褐色土 (10YR4/3)				
8	黒褐色土 (10YR2/3)	17	黒褐色土 (10YR2/3)				
9	黒褐色土 (10YR2/3)						

0　2m

第50図　S I 115竪穴住居跡（1）



第51図　ＳＩ115竪穴住居跡（２）

挟むＰ３・Ｐ４の４本である。壁溝は幅0.1～0.2m、床面からの深さ0.1～0.25mで、南西辺の一部を除いて良く残っている。炉に埋設された土器(第77図85)は、口縁部が直立もしくは僅かに外反し、胴中部が膨らむ深鉢である。胴上～中部には、断面三角形の隆帯で画された無文帯で波頭状文が器周４単位描かれている。２つの波頭状文間で幅広となった部分には、隆帯で先端が巻くＳ字文が施され、その中は隆帯に沿う刺突列で充填されている。地文の縄文はＲＬＲの複節である。住居跡の覆土は、やや締まりのある黒褐色土や暗褐色土である。

ＳＩ115ｂは、南西辺と炉の位置がＳＩ115ａとほとんど同じで、他の辺がＳＩ115ａよりも僅かに小さい。規模は、長軸約4.5m×短軸約3.9mと考えられる。壁・床面共に不明である。炉もＳＩ115ａと同規模の複式炉だと推定される。主柱穴も同様４本と考えられ、Ｐ１・Ｐ２に切られているＰ６・Ｐ７とＰ５の他、配置からすればＰ４と考えられるが判然としない。床面からの深さからすればＰ12の可能性もある。壁溝２はほとんどの部分で、ＳＩ115ａの壁溝１の内側に沿っており、上面幅・床面からの深さ共に0.1～0.15mである。なお、壁溝２はＳＩ115ａ構築の際に全て埋められている。

ＳＩ115ｃは、南～南西側の壁溝が不明であるが、長軸3.9m×短軸3.2mの規模で、平面形

はＳＩ115ａ・ｂと相似形である。炉は、ＳＩ115ａの複式炉を長軸を変えず北東側にずらした形だったと考えられる。ＳＩ115ａの炉埋設土器の北東側に浅い円形の掘り込みがあり、その中が若干焼けて、第78図94が残っていた。ＳＩ115ｃの炉に埋設された土器と考えられる。94は、底部から胴下部が外傾して立ち上がる深鉢である。ＬＲの斜縄文が施されている。

遺物は、覆土中より僅かに出土するのみで、ＳＩ115ａに伴うものと考えられる。土器は全て深鉢の破片で、第77図86～78図95が出土している。86を除いては胴上～中部に無文帯によって波頭文などが施されるものである。平口縁のものと、90のように波状口縁のものがある。86は覆土上部から出土した。短い口縁部が外反気味に直立し、膨らみの小さい胴上部から胴下部に向かって緩やかにすぼまる深鉢である。波状口縁である。口縁部は無文で胴部との境は隆帯とその上端に沿う沈線で画されている。この隆帯からは胴部に垂下する隆帯が(拓影図の右端)が派生しており、その上には間隔のあいた刺突が施されている。また無文地の胴上部には、横位に連続する爪形の刺突列が６段以上施されている。石器は凹石と磨を兼ねた礫石器の他、スクレイパーと考えられる剥片が出土している。

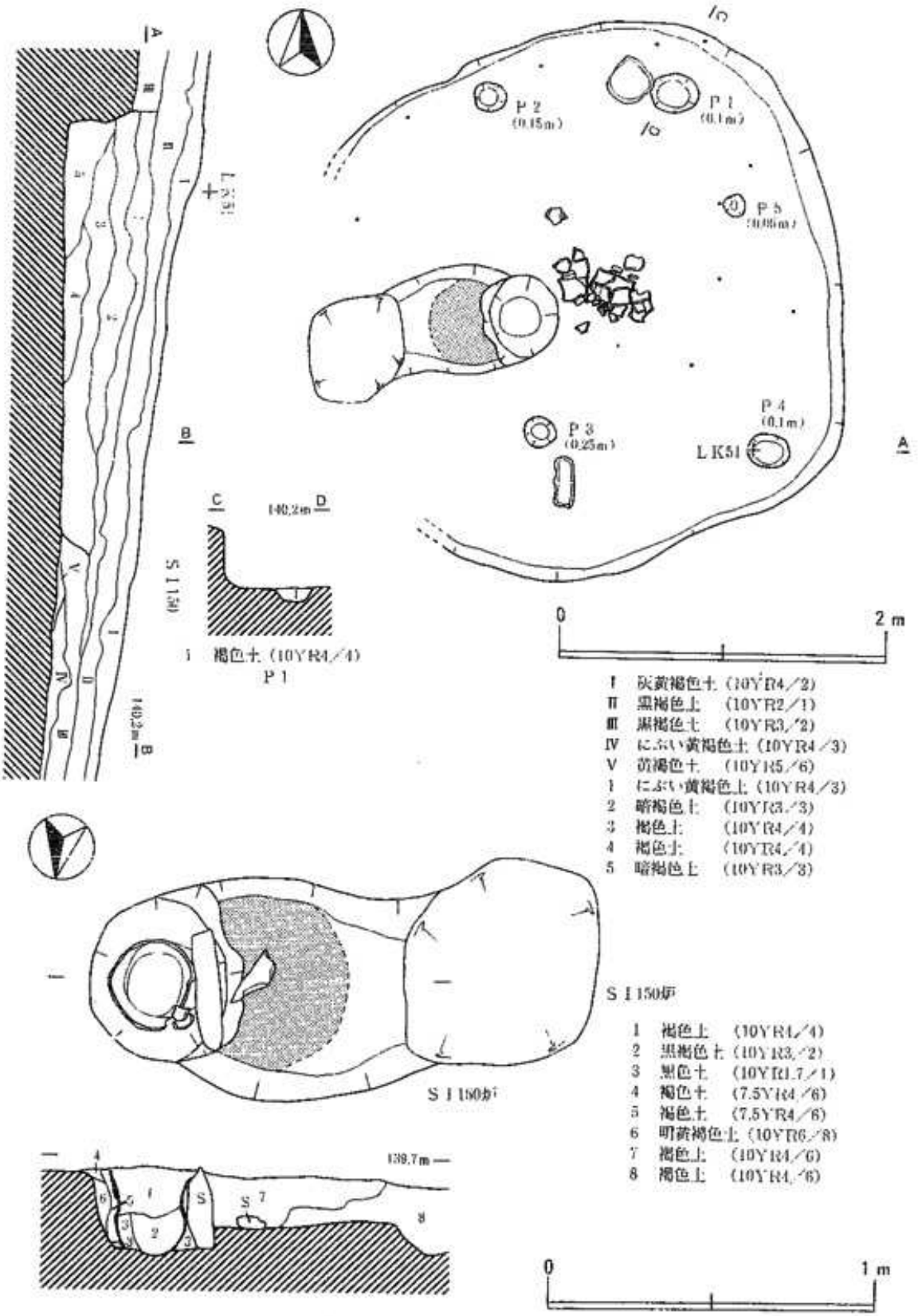
本住居跡の時期は、埋設された石器から中期末葉と考えられる。

ＳＩ150（第52図、図版10）

下位平坦面の南東端部ＬＫ51グリッドを中心にある。Ⅳ層中で、一辺約３ｍの隅丸方形状の褐色土プランとして確認した。規模は、長軸3.3ｍ×短軸3.2ｍ、東壁での深さ0.54ｍで平面形は隅丸方形を呈する。床面は平坦で堅く締まっている。緩い斜面に構築された住居跡であるため、斜面下方に当たる西側の壁は検出できなかったが、他の部分の壁はしっかりしてほぼ垂直である。炉は、複式炉で西辺中央部に取り付く。床面中央側の石囲部には、上下を打ち欠かれた深鉢が埋設され、土器に接して西側には長さ0.36ｍ、幅0.25ｍ、厚さ0.8ｍの大きく扁平な河原石が立てられている。この河原石の西側底面は長径0.55ｍ×短径0.35ｍの範囲が焼けて堅くなっている。掘り込みは西壁内側部分と考えられるが、ＳＩ32の掘り込みのように底面が平坦ではなく若干凹凸がある。

柱穴は、炉の埋設土器を挟んで南北(Ｐ２・Ｐ３)と北東・南東隅部(Ｐ１・Ｐ４)の４本が主柱穴と考えられ、Ｐ１とＰ４の間の小さな柱穴Ｐ５が、支柱と考えられる。

炉に埋設された土器(第78図97)は、口縁部が僅かに外反し胴中部で大きく膨らみ、底部に向かって急にすぼまる深鉢である。口縁部と胴下部以下が打ち欠かれている。胴上～中部には、断面三角形の隆帯とその外側の沈線(隆沈線)によって画された無文帯で逆Ｌ字状の文様が器周３単位描かれ、その下にはＬ字間が頂部となる波状文がある。そして、逆Ｌ字状文の先端と波頂部が連結し、連結部の下端は無文部が半弧状に下方に拡大され、その中央には隆帯で囲まれた形の円形文がある。円形文の中には縄文が施されている。地文はＲＬＲの複節縄文である。



第52図　ＳＩ150竪穴住居跡

遺物は、複式炉の東側、床面中央から割れて出土した96の土器などが出土している。96は、口縁部が僅かに外反し、胴中部でおだやかに膨らみ、胴下部に向かってやや急にすぼまる深鉢である。平口縁で、胴下部を欠いている。無文の口縁部から、沈線で画された逆L字状文が器周3単位施文され、さらに逆L字状文と逆L字状文との間からも無文帯が垂下し、この無文帯は胴中部で横位に展開する無文帯による波頭状文の波頂部に連結している。その結果、胴上部では、無文地に、内面が縄文で充填された横位のS字状文が3単位巡る形となっている。また、口縁部から垂下する無文帯の上端には刺突列で充填された円形文が施されている。この土器の口頸部～口縁部は強い二次的火熱で赤変し器面の剥落も見られるところから、炉に埋設された土器であると考えられるが、その出自と、ここに存った理由は不明である。石器には、凹石で磨石のもの(S211・S212)が2点出土している。

本住居跡の時期は、出土土器より中期末葉と考えられる。

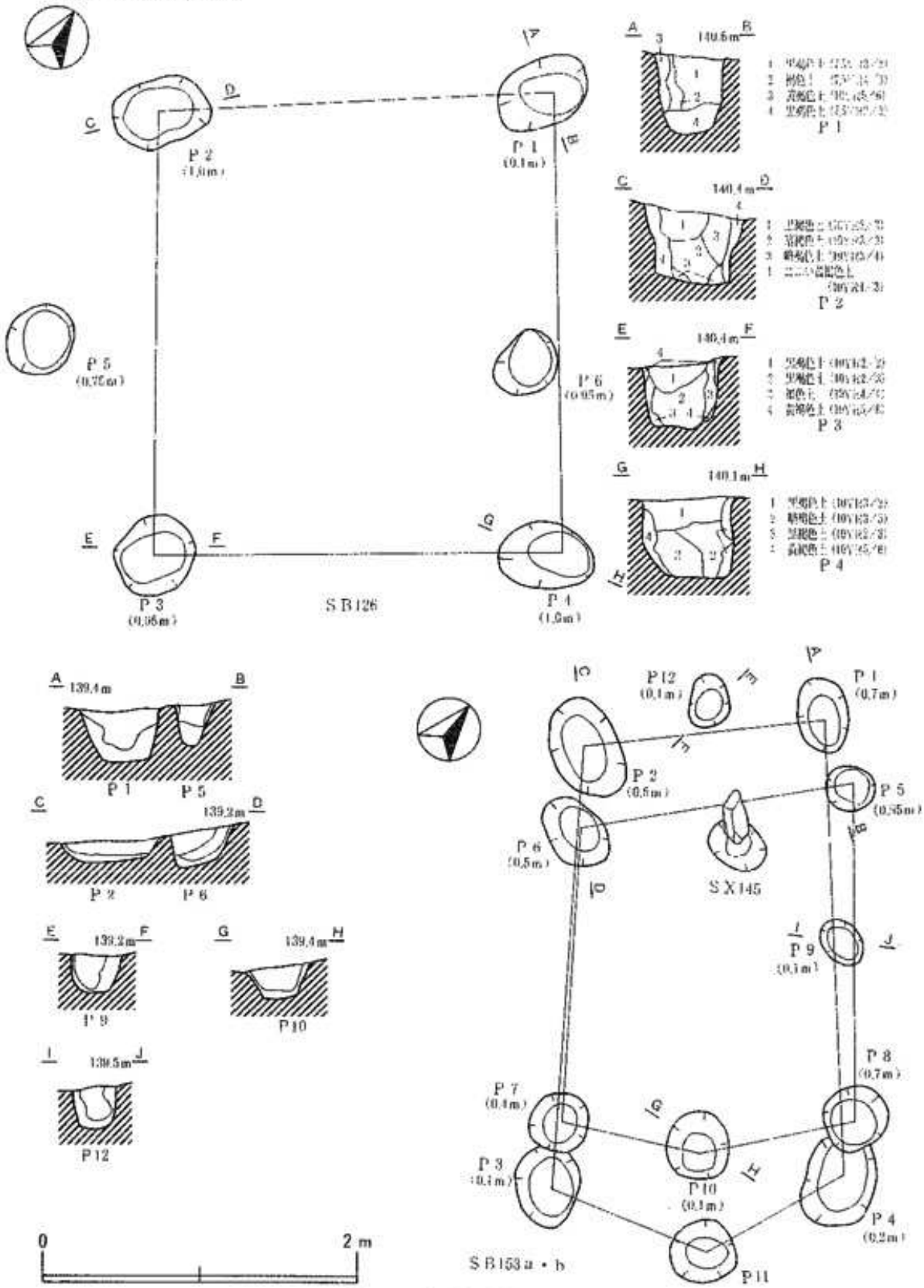
(2) 掘立柱建物跡

SB126（第53図、図版22）

下位平坦面の北側、LP57グリッド杭を中心に検出した。本遺構は、立ち上がりがしっかりしている大きめのピット、P1～P4を主体にした掘建柱建物跡と考えられる。全体の規模は、およそ長辺3.5m×短辺3mで平面プランは長方形を呈する。その長軸方向はN－35°－Eを指す。P3を除くピットの上面形は楕円形であるが、底面形は、4個のピット共に北東方向に長い形状で共通している。また、P5はP2とP3から等距離にあることや、P1・P4の間にあるP6がP5と対を成すように見えることから、この2個のピットも4個のピットと関係をもっていた可能性がある。これらのピット間の距離は、P1－P2が2.5m、P2－P3が2.85m、P3－P4が2.6m、P4－P1が2.9m、P2－P5が1.6m、P3－P5が1.6m、P1－P6が1.7m、P4－P6が1.2mである。ピットの規模は、長軸0.5～0.6m×短軸0.35～0.5m×深さ0.95m～約1mである。これらの覆土は、黒褐色土や褐色土を主体にした比較的締まった土層で共通している。

SB153a・b（第53図）

下位平坦面の北側、LQ56グリッドを中心に検出した。本遺構は、やや大き目のピットP1～P4のまとまり(SB153a)と、相対的にそれらよりやや小さいピットP5～P8のまとまり(SB153b)の、少なくとも各々4個のピットが主体となっている2棟の掘立柱建物跡と考えられる。大きさは前者で長辺が約3.8m×短辺が2～2.3mである。平面プランは長方形を呈すると考えられる。これら8個のピットは、方形状の配置からP1・P2・P7・P8とP5・P6・P3・P4の組み合わせも考えられるが、SB153aの4個のピットが大きいことから先のような組み合わせを想定した。2つの建物跡は長軸がN－35°－Eと同じ方向を指し建て換



第53図　掘立柱建物跡

えの可能性もあるが、切り合うピット間の先後差が把握できなかった。また、P10～P12は、本建物跡の中央で軸線上にあり、これら3個のピットは掘立柱建物跡に関連するものと考えられる。このことから、2つの建物は五角形を呈する可能性もある。これら主要なピット間の距離はSB153aではP1・P2が1.55m、P2－P3が2.85m、P3－P4が1.9m、P4－P1が2.9mで、SB153bではP5－P6が1.8m、P6－P7が1.9m、P7－P8が1.85m、P8－P5が2.15mである。各ピットの規模は、長軸0.5～0.6m×短軸0.35～0.5m×深さ0.95～約1mである。これらP1～P12の覆土は黒褐色土や暗褐色土を主体とした土層である。これらSB153a・bの建物跡にはSKP145が存在しており、あるいは建物跡に伴った特異な在り方を示すものかもしれない。

（3）土器埋設遺構

SR23（第54図、図版12）

上位平坦面、KR48グリッド北側にある。本遺構は、北東～南西にかけて傾斜している小さな沢の東側SK19の覆土中で検出した。SK19が僅かに窪んでいた部分に深鉢を埋設したもので、掘方の底面はSK19壁面をも掘り込んでいる。この掘方の規模は径約40cm程の略円形で、この内側に粗製深鉢の破片が僅かに残存していた。覆土はやや締まりのある暗褐色土が主体である。

埋設された土器（第79図99）は、口縁部が外反し、胴中部で弱く膨らみ胴下部に向ってすぼむ深鉢形土器である。胴中位以下を欠いている。平口縁である。端部が僅かに肥厚する無文の口縁部から、沈線で画された右巻きの渦文が器周4単位で描かれている。地文の縄文はRLRの複節である。

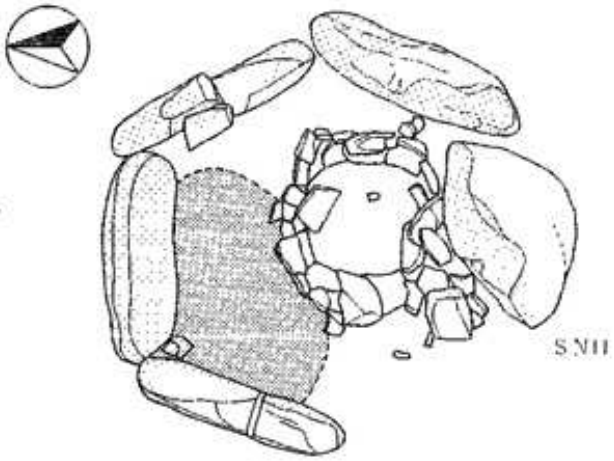
SR151（図版12）

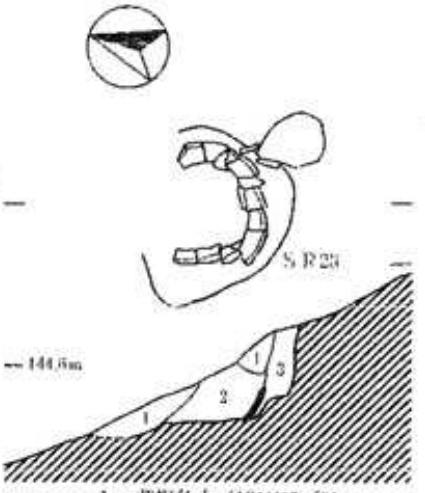
下位平坦面とその東の斜面変換部のLM57グリッド北東隅にある。この土器は、基本層位のⅡ層もしくはⅢ層に対比される暗褐色土中で検出されたが、上部の削平が著しく明瞭な掘方は確認できなかった。埋設された深鉢は傾斜地でありながら水平を保つ状態であった。

（4）屋外炉

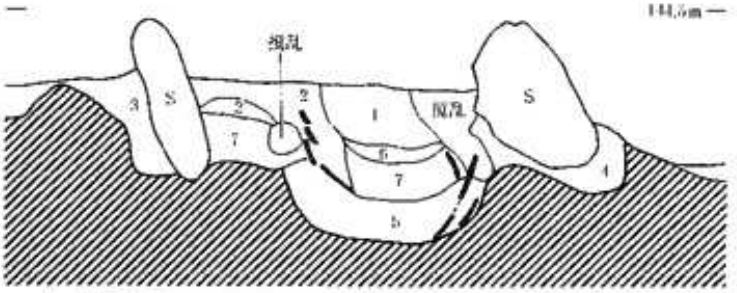
SN11（第54図、図版12）

上位平坦面の東側、KN51グリッド南東側で検出した。黒褐色土を除去した暗褐色土中より確認したもので、当初竪穴住居跡を予想したが、柱穴や平坦面が認められないので屋外炉と判断した。規模は、長さ0.2～0.25m×幅が0.15m前後のよく焼けた河原石5個を1箇所開いた六角形状に組んだもので、北西－南東・北東－南西が共に約0.55mである。この内側には深鉢を埋設してある。炉全体の掘方は、礫を据える所は浅く中央は深く掘ったものである。1箇所開いた部分には、礫を抜き取った痕跡は認められなく、斜面下方に開いている。覆土は、深鉢と

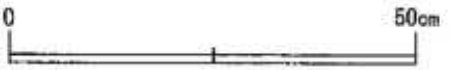


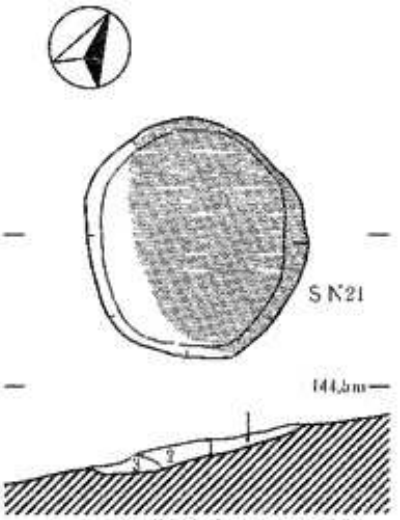


1　黄褐色土（10YR5／6）
2　暗褐色土（10YR3／4）
3　黄褐色土（10YR5／6）

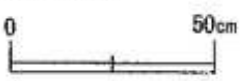


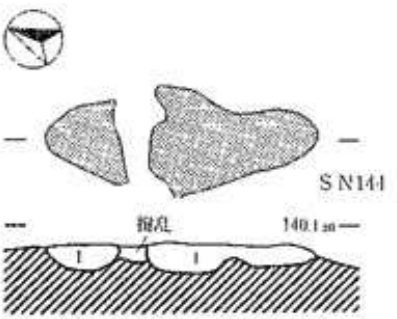
1　褐色土（10YR4／4）
2　暗褐色土（10YR3／4）
3　褐色土（10YR4／4）
4　褐色土（10YR4／4）
5　褐色土（10YR4／6）
6　暗褐色土（10YR3／4）
7　褐色土（7.5YR4／6）





1　にぶい黄褐色土（10YR4／3）
2　暗褐色土（10YR3／4）
3　黄褐色土（10YR5／6）





1　暗褐色土（10YR3／3）

第54図　土器埋設遺構・屋外炉・焼土遺構

その北西部河原石の間に約0.3m×約0.1mの堅く締まった焼土が検出されている。これと同じものは深鉢の中位にも見られるが、この上下は褐色土で下位では堅く締まっている。埋設された深鉢(100)は、口縁部が「く」の字に内傾し、胴上位から胴下位に向って緩やかにすぼまる。口縁部の大半と胴下位が打ち欠かれている。口縁は先端が丸味を持つ大小の山形状突起が、交互に各々3個ずつ付される波状口縁と考えられる。各突起中央から、上端部で鰭状を呈する隆帯が弧状に垂下し横位に繋がる。隆帯内側に沿って刺突列が施され、その内側は無文である。中央に1孔を有すると考えられる大きな突起の下方、隆帯下には、沈線で画された無文帯で渦巻の渦文が3単位描かれている。渦文と渦文の下端も無文帯で連結しており、この無文帯の上端中央は、左右の弧線が合わさって山形状に尖っている。胴部の縄文は、LRの縦位回転文である。時期は中期末葉～後期初頭と考えられる。

（5）焼土遺構

SN21（第54図）

上位平坦面の先端、KR47グリッド北西側で検出した。規模は長軸0.6m×短軸0.55m×深さ約0.05mで、平面プランは略円形である。現状の覆土は非常に薄く、焼土粒や炭粒を僅かに含んだものである。底面は火の影響を受けたようには観察できなかった。この断面からは、底面の最も深い部分が斜面側に片寄っていることが分かり、本来は斜面側にやや膨らんでいたものが削平を受けて現状の形を呈したものと判断される。底面はやや締まっている。

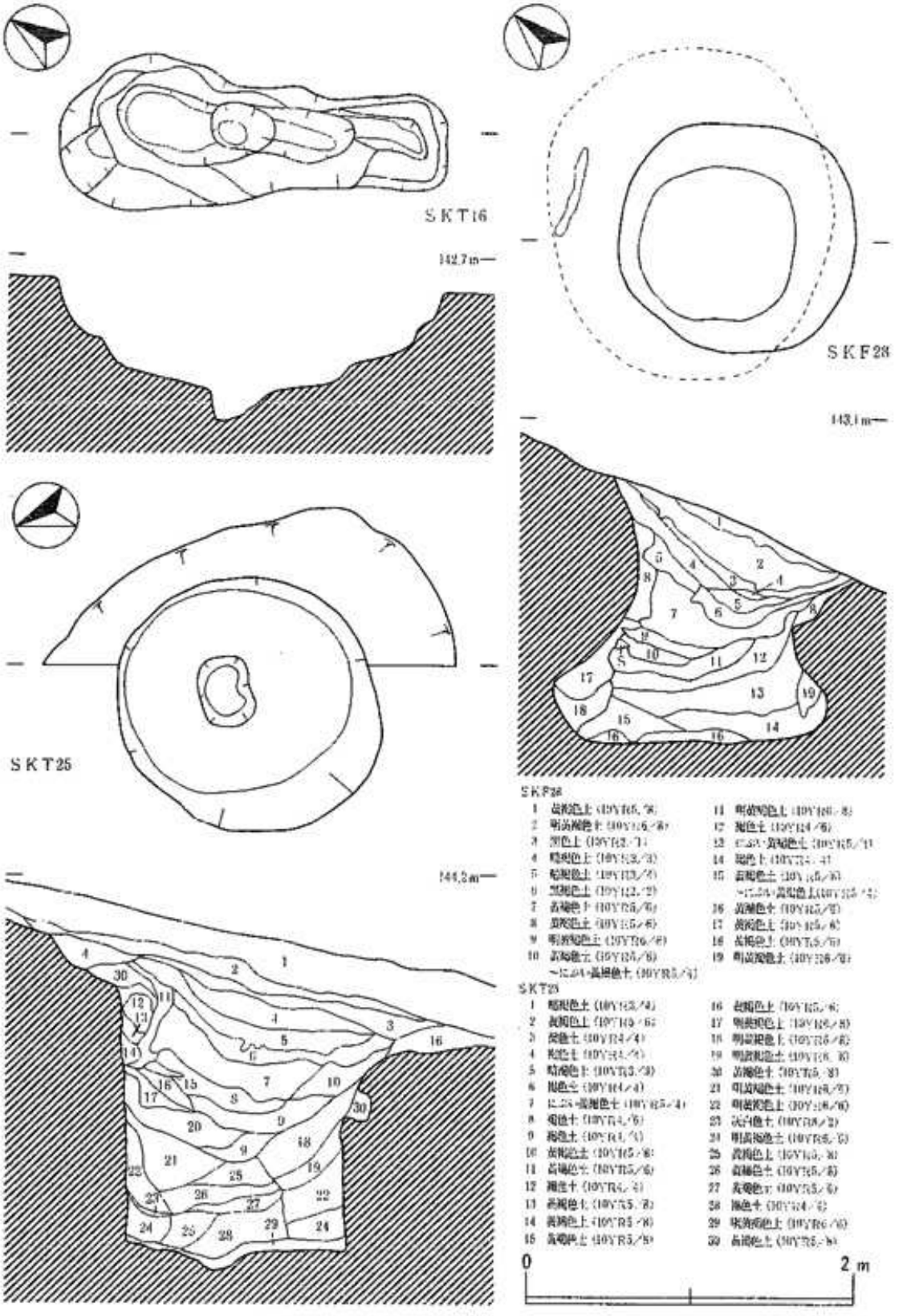
SN144（第54図）

下位平坦面北側、LO57グリッド南側で検出した。本遺構は削平や撹乱が著しく、かろうじて検出できたにとどまる。焼土は非常に希薄な状態で暗褐色土中に見え、その規模は1.3m×幅0.2～0.3m×厚さ0.1mである。

（6）陥し穴状遺構

SKT16（第55図、図版13）

上位平坦面東端の南側斜面、KM48グリッド杭を中心に検出した。壁面は不明な部分もあるものの、およそ3つの落ち込み面を形成している。規模は長軸2.4m×短軸0.55～0.95m×深さ0.9mで、平面プランは楕円形で、北西側がかなり膨らんでいる。中位では不定形であるが、下位では長軸1.45m×短軸0.3～0.4m×深さ0.1mで溝状を呈する。その中央には、長軸0.4m×短軸0.3m×深さ約0.2mのピットをもつ。長軸はN－25°－Eを指し、等高線に沿うように存在している。覆土は上位が褐色土や暗褐色土の締まりのある土層で、底面や壁際には粘性の強い黄褐色土が堆積している。



第55図　陥し穴状遺構・フラスコ状土坑

ＳＫＴ25（第55図、図版13）

上位平坦面の南側斜面、ＫＴ49グリッド杭を中心に検出した。北東～南西にかけて傾斜している小さな沢の東側緩斜面に位置している。平面プランは楕円形で、規模は筒状を呈する部分の上面が長軸1.7ｍ×短軸1.55ｍである。東側緩斜面側がやや広い擂鉢状～円筒状に掘り込まれたものである。中央には、長軸0.45ｍ×短軸0.3ｍ×深さ0.15ｍのピットがある。覆土は、上半で褐色土を主体にした土層がレンズ状に堆積し、下半では地山土と類似した明黄褐色土を主体とする。

（7）フラスコ状土坑

ＳＫＦ28（第55図、図版13）

上位平坦面西側の先端部斜面地にあり、ＬＢ48・49グリッドで検出した。断面は中央部がすぼまるフラスコ形を呈するが、斜面上方ほど坑の膨らみが大きく、斜面に規制されたものと考えられる。規模は口径が約１ｍで、平面プランは円形である。中位のくびれ部分の径も、約1.4ｍで円形状を呈する。覆土は、上位1／3まででは明黄褐色主体の上層と暗褐色主体の上層とがレンズ状になっている。遺物は、床面より５cm程高い状態で炭化物が検出された他、中期末葉と思われる破片(102～104)が覆土から出土している。

（8）土坑

ＳＫ12（第56図、図版16）

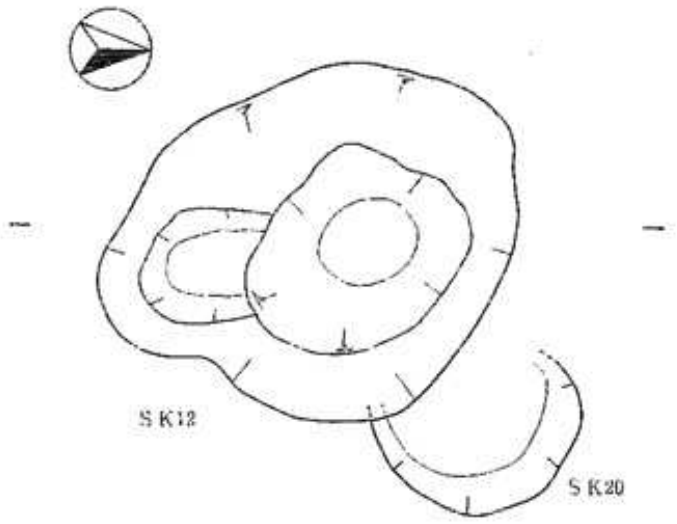
上位平坦面東側緩斜面の、ＳＫ53グリッド北西隅で検出した。ＳＫ20と切り合うが先後関係は不明である。規模は長軸2.15ｍ×短軸1.75ｍ×深さ0.5ｍで、平面プランは不整楕円形である。覆土は、底面近くにおいて比較的締まりのある黒褐色土である。

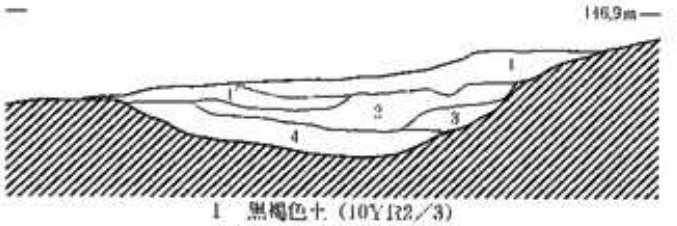
ＳＫ19（第56図、図版16）

上位平坦面先端部の東、ＫＲ48・49グリッドで検出した。本遺構は、南側緩斜面上に位置し、ＳＲ21によって切られている。規模は長軸1.9ｍ×短軸1.7ｍ×深さ約0.6ｍで、平面プランは円形に近い略楕円形である。長軸はＮ－40°－Ｅを指す。底面はやや東側に寄るが、断面形は擂鉢状を呈している。また、北西壁には長軸方向に沿って緩く小さなテラス状の平坦面があり、さらにその下の底面にも掘り残したと考えられる緩い傾斜の台状部分と、これに隣り合う小さなピットがある。テラス状の面と底面の差は約0.35ｍである。覆土は褐色土を中心とする上位の層から、下半の黄褐色土を中心とする締まりの強い層へ概ねレンズ状の堆積を示している。

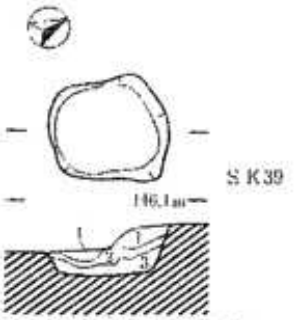
ＳＫ20（第56図、図版16）

上位平坦面東側緩斜面の、ＫＰ53グリッド北西側で検出した。ＳＫ12と切り合うが、その関係は不明である。全体に根による撹乱が激しく西半分を失っている。規模は径約１ｍ×深さ約0.4ｍで、平面プランは円形である。断面は擂鉢状を呈している。覆土は比較的締まりのある

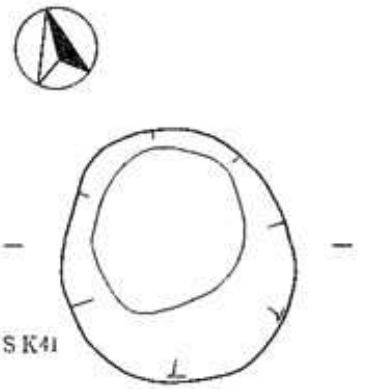




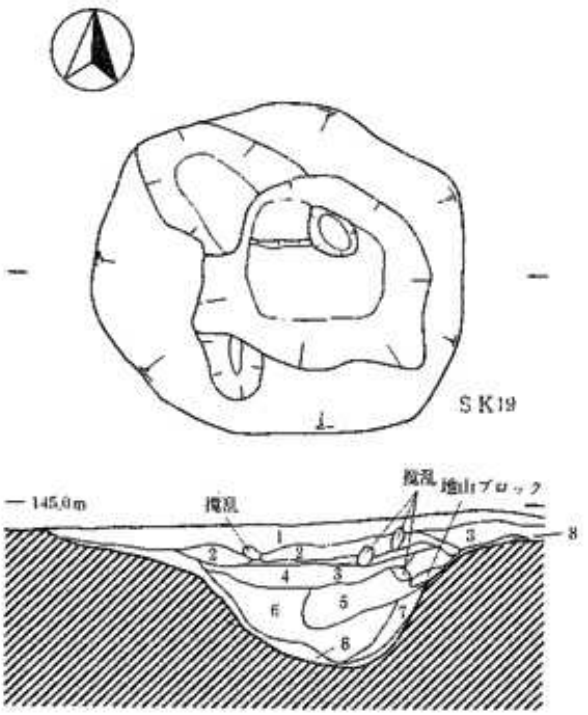
1　黒褐色土（10YR2／3）
1′　黒褐色土（10YR2／2）
2　黒色土（10YR1.7／1）
3　黒褐色土（10YR3／2）
4　黒褐色土（10YR2／2）



1　オリーブ褐色土（2.5Y4／4）
2　オリーブ褐色土（2.5Y4／6）
3　明黄褐色土（10YR6／8）



1　オリーブ褐色土（2.5YR4／6）
2　オリーブ褐色土（2.5YR4／6）
3　オリーブ褐色土（2.5YR4／6）



1　褐色土（10YR4／4）
2　暗褐色土（10YR3／3）
3　褐色土（10YR4／4）
4　にぶい黄褐色土（10YR5／4）
5　黄褐色土（10YR5／6）
6　黄褐色土（10YR5／6）
7　黄褐色土（10YR5／6）
8　明黄褐色土（10YR6／6）

第56図　土坑（1）

黒褐色土である。

SK22（第57図、図版14）

上位平坦面の東斜面にあり、KQ47グリッド杭付近で検出した。その北東にあるSK24と重複しており、本遺構の方が新しい。規模は径1.9m×深さ1.35mで、平面プランは円形である。壁はほぼ垂直で、底面は平坦である。覆土は、底面の壁際に地山土の壁が崩れたと考えられる明黄褐色土の堆積土があり、これより上層の黄褐色土や褐色土と共にレンズ状の堆積状況を示している。覆土より、後期と考えられる土器小破片が出土している。

SK24（第57・79図、図版14）

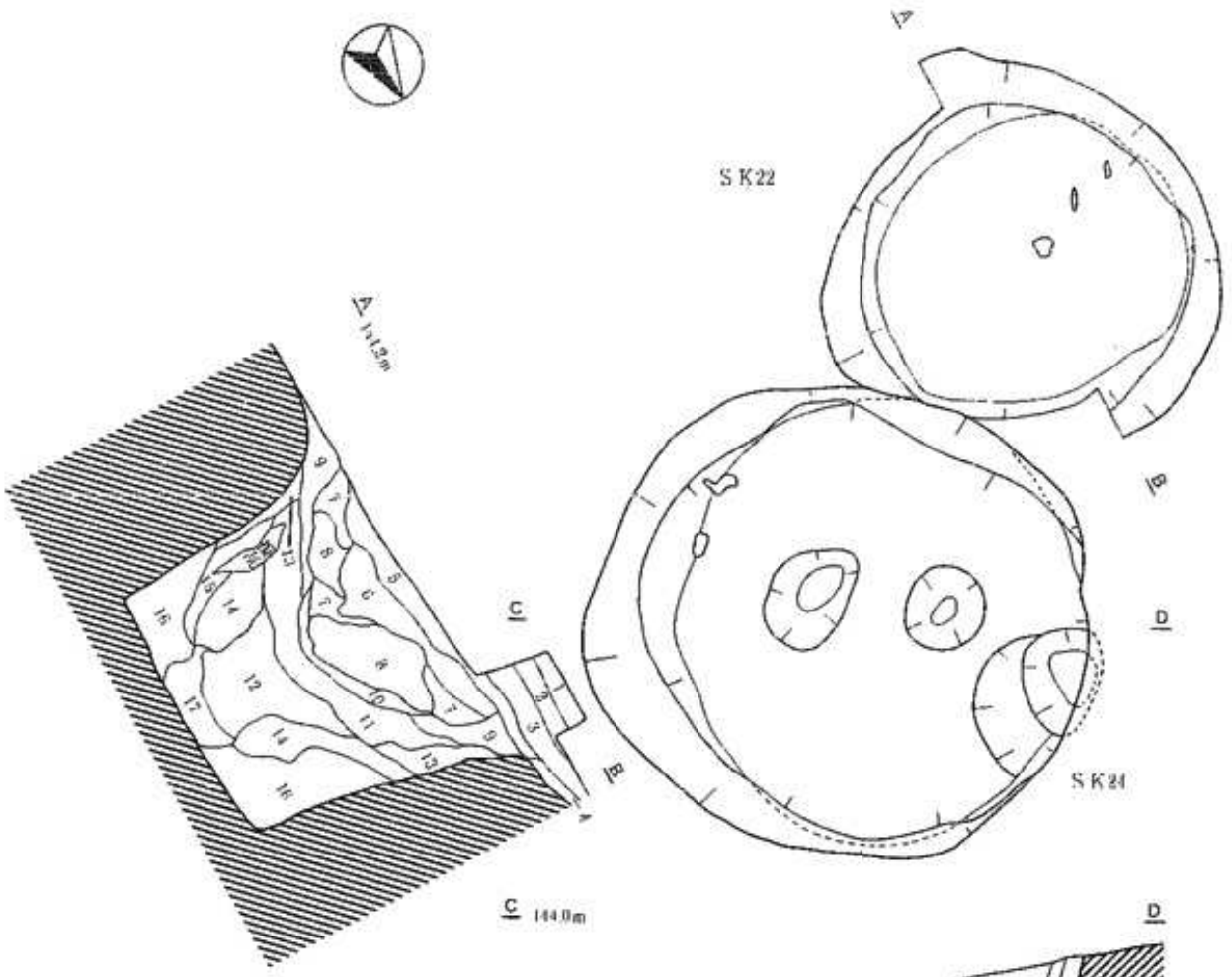
上位平坦面の東斜面にあり、KP47・48グリッドで検出した。その南西にあるSK22とは僅かに重複し、本遺構の方が古い。規模は上端の北西－南東方向が長軸2.5m×短軸2.3mであり、下端の北東－南西方向では長軸2.2m×短軸2mである。深さは最も深い北西側で1.8mである。平面プランは略円形を呈し、形態は上位が広がり南東側で僅かに傾斜するものの、全体としては円筒状を呈している。やや凹凸のある底面の中央には、0.55m×0.35mの楕円形と径0.4mの略円形の小さなピットがあり、それぞれ約0.1mの深さがある。この他北西壁際には、段を成す径0.8m程の半円形のピットがあり、深さは約0.2mである。覆土は、下半の中央部では黄褐色土や明黄褐色土によるレンズ状の堆積土で、その壁際は、地山土の壁が崩れたと考えられる黄褐色土が断面三角形状の土層で堆積している。上半では、黄褐色土が壁際からレンズ状に堆積した上に、さらに明黄褐色土を主体にした土層がレンズ状に堆積している。この最も新しい明黄褐色土は、人為的に埋められた土である。覆土からは、中期末葉と考えられる縄文土器が5点出土している(107～111)。109～111は口縁部に横位の刺突文をもつ深鉢の胴上位～口縁部の破片で、同一個体である。108は、突起の装飾部と考えられる。

SK33（第42図、図版15）

上位平坦面の先端部、LD・LE50グリッドの南側で検出した。本遺構はSI30と切り合い、それよりも新しい。規模は長軸1.1m×短軸0.9mで、平面プランは隅丸方形状を呈している。底面は丸みを帯びた袋状である。長軸方向はN－60°－Eを指す。覆土は底面付近で、やや締まっている褐色土や明褐色土の土層である。

SK34（第42図、図版15）

上位平坦面の南西側先端部、LD50グリッド南西側で検出した。南側が不明な本遺構は、SI30のすぐ北側に隣接するが、その前後関係は明らかにできなかった。規模は径1.1～1m×深さ0.6mで、平面プランは略円形である。覆土は上位1／3が締まりの強い褐色土である他は、やはり締まりのある黄褐色土が主体的である。覆土から縄文土器片が出土している。



SK22

1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
2 黒褐色土 (10YR3/2)
3 褐色土 (10YR4/4)
4 褐色土 (10YR4/4)
5 褐色土 (10YR4/4)
6 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)
7 黄褐色土 (10YR5/6)
8 黄褐色土 (10YR5/8)
9 黄褐色土 (10YR5/6)
10 暗褐色土 (10YR3/4)
11 褐色土 (10YR4/4～4/6)
12 褐色土 (10YR4/4)
13 黄褐色土 (10YR5/6)
14 黄褐色土 (10YR5/8)
15 明黄褐色土 (10YR6/8)
16 黄褐色土 (7.5YR5/8)
17 黄褐色土 (10YR5/8)

SK24

1 明黄褐色土 (10YR6/8)
2 黄褐色土 (10YR5/6)
3 明黄褐色土 (10YR6/8)
4 明黄褐色土 (10YR6/8)
5 黄橙色土 (10YR7/8)
6 黄褐色土 (10YR5/6)
7 黄褐色土 (10YR5/6)
7' 褐色土 (10YR4/4)
8 黄褐色土 (10YR5/8)
9 黄褐色土 (10YR5/6)
10 黄褐色土 (10YR5/8)
11 明黄褐色土 (10YR6/8)
12 明黄褐色土 (10YR6/6)
13 褐色土 (10YR4/4)
14 黄褐色土 (10YR5/6)
15 黄褐色土 (10YR5/6)
16 明黄褐色土 (10YR6/6)
17 黄褐色土 (10YR5/6)
17' 黄褐色土 (10YR5/6)
18 黄橙色土 (10YR7/8)
明黄褐色土 (10YR6/8)
互層
黄褐色土 (10YR5/6)
褐色土 (10YR4/6)
19 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)
～黄褐色土 (10YR5/6)
20 浅黄色土 (2.5Y7/4)
21 黄褐色土 (10YR5/8)

0　2m

第57図　土坑（2）

SK35（第42図、図版15）

上位平坦面の南西側先端部、LD49グリッド中央で検出した。本遺構は、SI30と切り合いそれよりも新しいと考えられる。規模は長軸1.15m×短軸0.9m×深さ最大0.6mで、平面プランは不整楕円形である。底面は丸みを帯びた袋状を呈している。長軸方向は南北方向を指す。覆土は下半で、締まりの強い黄褐色土が主体になる。

SK37（第42図）

上位平坦面の南西側先端部、LD50グリッド南側で検出した。本遺構は、東側の一部を残存するのみで、切り合いのあるSI30との先後関係は不明である。規模は径1m前後×深さ0.4mで、平面プランは楕円形である。覆土は下位で、黄褐色土を主体として堆積している。

SK39（第56図）

上位平坦面、LA53グリッド南側で検出した。規模は長軸0.6m×短軸約0.5m×深さ0.25mで、平面プランは不整楕円形である。長軸方向はN－30°－Eを指す。覆土は上位がオリーブ褐色土で、底部に近いところでは明黄褐色土主体の土層である。

SK41（第56図）

上位平坦面東側、KT55グリッド杭を中心に検出した。規模は長軸1.25m×短軸1.15m×深さ約0.2mで、平面プランは円形に近い楕円形である。壁面南側の断面は、緩やかな摺鉢状を呈している。長軸方向は南北方向を指す。覆土はオリーブ褐色土で、下層ほど締まりが強い。

SK42（第58図）

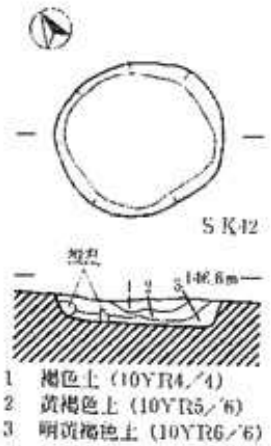
上位平坦面、LA49・50グリッドで検出した。規模は長軸0.8m×短軸0.75m×深さ約0.15mで、平面プランは略円形である。壁はしっかりした立ち上がりを示している。覆土は締まりの強い土層で、上位の褐色土から下位にかけて黄褐色土、明黄褐色土と明るくなっていく。

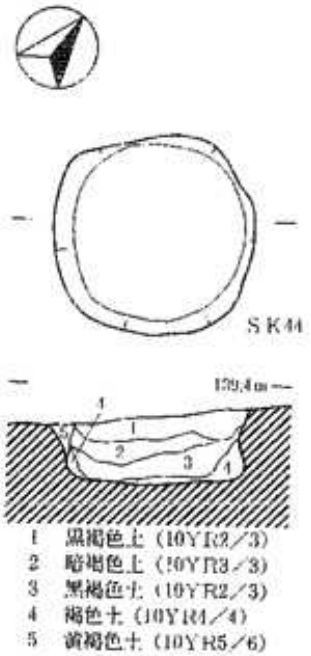
SK44（第58図、図版16）

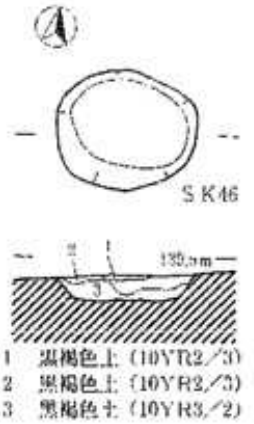
下位平坦面の中央、LN53グリッド西側で検出した。規模は、一辺が約1mの隅丸正方形で深さは0.35mである。壁の立ち上がりはしっかりしている。覆土は底部付近で褐色土が堆積している以外は、黒褐色土を主体とする。

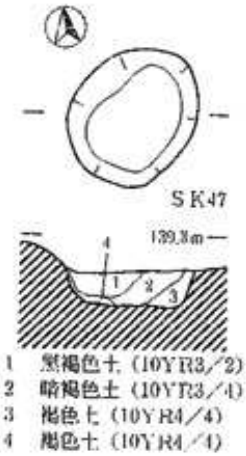
SK45（第58図、図版17）

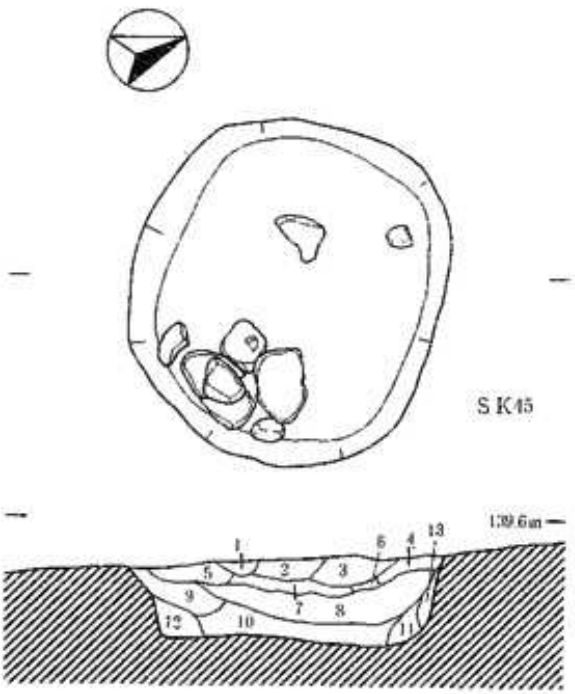
下位平坦面の中央、LN・LO54グリッドで検出した。規模は長軸1.7m×短軸1.5m×深さ0.35～0.45mで、平面プランは隅丸の長方形である。底面はほぼ平坦で、壁は比較的急な立ち上がりを示している。長軸方向はN－50°－Wを指す。覆土は、底面を0.1～0.15mの厚さで締まりのある暗褐色土が覆い、その上を厚さが0.1～0.2mのまばらな焼土層が1m×0.65mの範囲で覆っている。この層の中央には、赤みの強い部分も見られる。覆土中の土器（112）は焼土層の上にある。また底面近くからは、南側壁面際を中心にして、0.1～0.35mの焼けた河原石


SK42
撹乱
146.6m
1　褐色土（10YR4／4）
2　黄褐色土（10YR5／6）
3　明黄褐色土（10YR6／6）


SK44
139.4m
1　黒褐色土（10YR2／3）
2　暗褐色土（10YR3／3）
3　黒褐色土（10YR2／3）
4　褐色土（10YR4／4）
5　黄褐色土（10YR5／6）


SK46
139.5m
1　黒褐色土（10YR2／3）
2　黒褐色土（10YR2／3）
3　黒褐色土（10YR3／2）


SK47
139.8m
1　黒褐色土（10YR3／2）
2　暗褐色土（10YR3／4）
3　褐色土（10YR4／4）
4　褐色土（10YR4／4）


SK45
139.6m
1　暗褐色土（7.5YR3／3）
2　黒褐色土（10YR2／3）
3　褐色土（7.5YR4／6）
4　黒褐色土（7.5YR3／2）
5　黒褐色土（7.5YR3／2）
6　暗褐色土（10YR3／3）
7　黒褐色土（10YR2／3）
8　褐色土（7.5YR4／4）
9　暗褐色土（10YR3／4）
10　暗褐色土（10YR3／4）
11　暗褐色土（10YR3／3）
12　暗褐色土（10YR3／3）
13　暗褐色土（10YR3／4）
0
2 m

第58図　土坑（3）

が数個検出されている。この中には、壊れ落ちたように見うけられるものもある。

SK46（第58図、図版17）

下位平坦面の中央、LO54グリッド北東側で検出した。規模は長軸0.7m×短軸0.6m×深さ約0.1mで、平面プランは円形に近い楕円形である。長軸は東－西方向を指す。覆土は黒色土を主体とした上層である。

SK47（第58図）

下位平坦面の中央、LO53グリッド南東側で検出した。規模は長軸約0.7m×短軸0.6m×深さ約0.15mで、平面プランは楕円形である。壁は北西側がやや緩い傾斜を示している。長軸方向はN－55°－Eを指す。覆土は、底面近くや壁際が締まりのある褐色土である。

SK48（第59図、図版19）

下位平坦面の中央、LM54グリッド北西隅で検出した。規模は長軸0.65m×短軸0.5m×深さ0.25mで、平面プランは不整形である。断面は擂鉢状を呈している。覆土には、全体的に黒褐色土が堆積している。

SK49（第59図、図版19）

下位平坦面の中央、LM54北西側で検出した。規模は長軸0.6m×短軸0.5m×深さ約0.1mで、平面プランは円形に近い楕円形である。長軸方向はN－45°－Wを指す。覆土は底面近くが褐色土で、上位は黒褐色土である。

SK50（第59図、図版19）

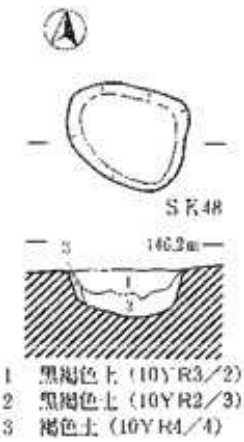
下位平坦面の中央やや東、LM54グリッド北側で検出した。北西側はSKP276と切り合うが、先後関係は不明である。規模は長軸0.5m×短軸0.4m×深さ0.25mで、平面プランは楕円形である。底面の立ち上がりは急である。長軸方向はN－45°　Eを指す。覆土は黒褐色土主体の層であるが、柱穴の可能性もある。

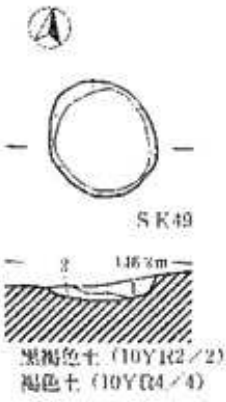
SK51（第59図）

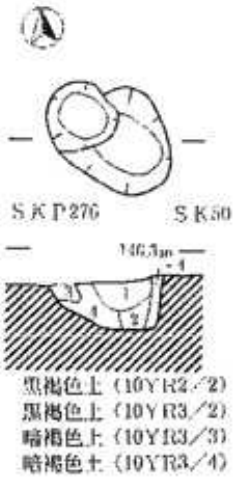
下位平坦面の中央、LN52・53グリッドで検出した。規模は長軸1.2m×短軸0.85m×深さ約0.3mで、平面プランは楕円形である。長軸方向は南北方向を指す。南側の壁面はやや緩く傾斜し、底面から壁への移行は急である。覆土は底面近くで水平な暗褐色土が、その上の中央では黒褐色土がレンズ状に堆積している。

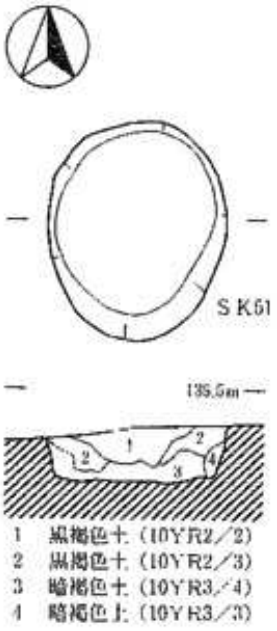
SK53（第59・80図、図版17）

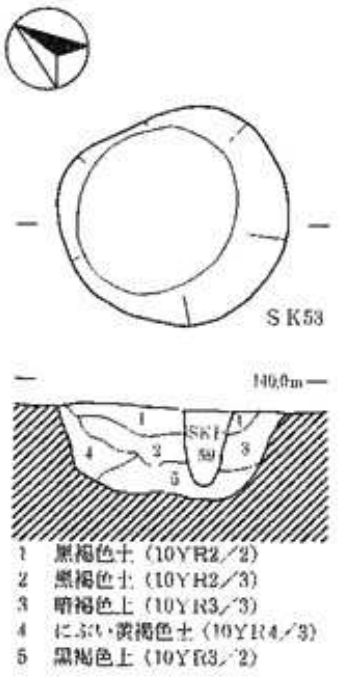
下位平坦面の中央、LN52・53グリッドで検出した。覆土を切って、SKP59が位置する。規模は長軸1.15m×短軸1.05m×深さ0.45mで、平面プランは楕円形である。壁面は南東側でやや緩く傾斜している。長軸方向はN－40°－Wを指す。覆土は底面近くで暗褐色土が、その上では黒褐色土が堆積している。遺物は、覆土から後期の土器(114～116)が数片出土している。

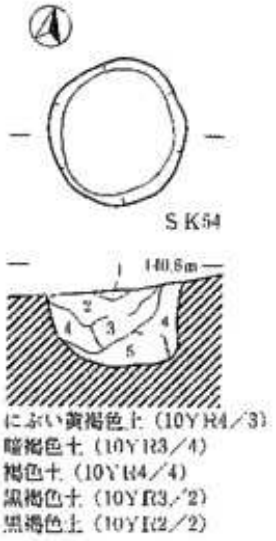

SK48
146.2m
1　黒褐色土（10YR3/2）
2　黒褐色土（10YR2/3）
3　褐色土（10YR4/4）


SK49
146.3m
1　黒褐色土（10YR2/2）
2　褐色土（10YR4/4）


SKP276
SK50
146.3m
1　黒褐色土（10YR2/2）
2　黒褐色土（10YR3/2）
3　暗褐色土（10YR3/3）
4　暗褐色土（10YR3/4）


SK51
135.5m
1　黒褐色土（10YR2/2）
2　黒褐色土（10YR2/3）
3　暗褐色土（10YR3/4）
4　暗褐色土（10YR3/3）


SK53
SK59
140.0m
1　黒褐色土（10YR2/2）
2　黒褐色土（10YR2/3）
3　暗褐色土（10YR3/3）
4　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
5　黒褐色土（10YR3/2）


SK54
140.8m
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
2　暗褐色土（10YR3/4）
3　褐色土（10YR4/4）
4　黒褐色土（10YR3/2）
5　黒褐色土（10YR2/2）

0
2 m

第59図　土坑（4）

SK54（第59図、図版18）

下位平坦面の中央、LN57グリッド中央で検出した。規模は長軸0.7m×短軸0.65m×深さ約0.4mで、平面プランは略円形である。底面は鍋底状に緩く窪んでおり、壁面は直立気味である。覆土は中位が褐色土主体で、下位は黒褐色土が堆積している。

SK55（第60図、図版18）

下位平坦面の北側、LM57グリッド南西側で検出した。本遺構はSKP227に切られている。規模は長軸約0.6m×短軸0.5m×深さ0.25mで、平面プランはやや不整な楕円形である。覆土は暗褐色土主体の層である。

SK58（第60・80図、図版18）

下位平坦面の北側、LN58・59グリッドで検出した。規模は一辺が0.7～0.8m×深さ0.8mで、平面プランはほぼ隅丸方形を呈する。断面は袋状を呈している。覆土は中央に厚さ0.1mの褐色土が、その上下には暗褐色土が堆積している。遺物は覆土中位から撚糸文が施された大型深鉢破片(117・118)が、下位より網代底の底部(119)が出土している。

SK86（第60・80図）

下位平坦面の中央、LO55グリッド南東側で検出した。規模は長軸0.55m×短軸0.4m×深さ0.25mで、平面プランは楕円形である。長軸方向はN－25°－Eを指す。覆土は掘方の最も深い所の下位が黒色土で、これ以外は暗褐色土である。遺物は縄文土器が数点出土している(122～125)。覆土の在り方から、ピットになる可能性もある。

SK130（第60図、図版19）

下位平坦面の北西、LP56グリッド北西側で検出した。規模は長軸0.9m×短軸0.7m×深さ0.2mで、平面プランは楕円形である。底面は中央部が最も低く、断面は摺鉢状を呈している。長軸方向はN－45°－Wを指す。覆土は床面上が黄褐色土その上が暗褐色土で、レンズ状の堆積を示している。

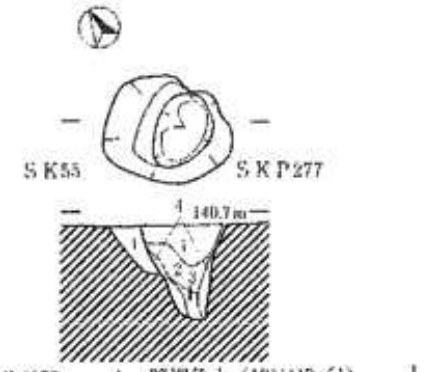
SK131（第60図、図版19）

下位平坦面の北側、LN58グリッド西側で検出した。規模は長軸0.7m×短軸0.6m×深さ最大約0.15mで、平面プランは楕円形である。底面は南東部がやや落ち込んでいる。長軸はN－35°－Wを指す。覆土は暗褐色土主体の層で、レンズ状の堆積を示している。

（9）ピット

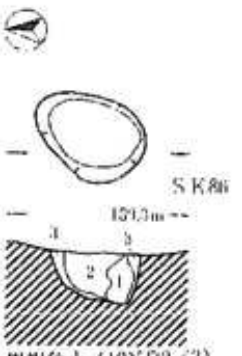
SKP145（第65図、図版21）

下位平坦面の北側、LQ56グリッド東側で検出した。規模は長軸0.4m×短軸0.3m×深さ0.25mで、平面プランは楕円形である。底面と壁はそれほどしっかりしていない。本遺構は、長さ0.45mで厚さ0.1mほどの細長い礫が北西方向に約20°傾いて検出された。礫は据えてあると

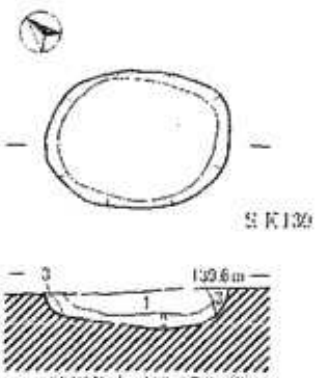


SK55　1　暗褐色土（10YR3/4）

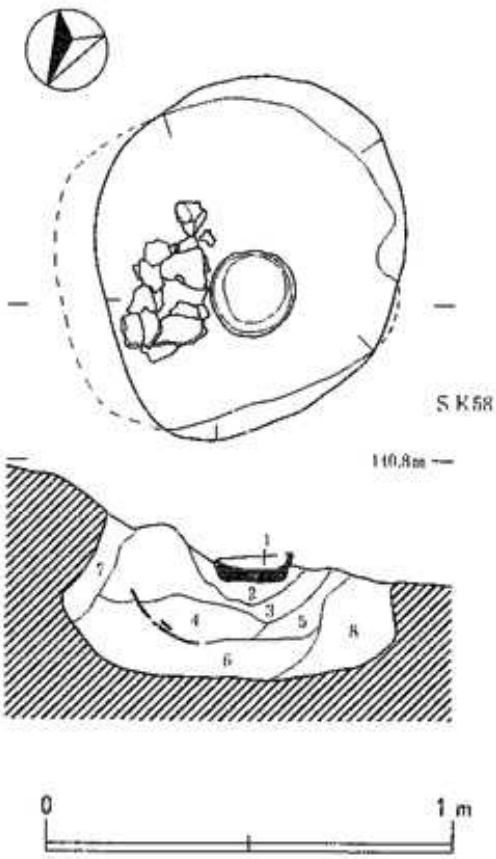
SKP277　1　黒褐色土（10YR2/3）
2　黒褐色土（10YR3/2）
3　黒褐色土（10YR2/2）
4　にぶい黄褐色土（10YR4/3）

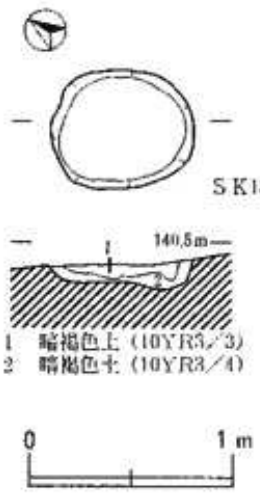


1　黒褐色土（10YR2/3）
2　暗褐色土（10YR3/3）
3　暗褐色土（10YR3/3）



1　暗褐色土（10YR3/3）
2　暗褐色土（10YR3/4）
3　黄褐色土（10YR5/6）





SK58
1　黒褐色土（7.5YR2/2）
2　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
3　暗褐色土（10YR3/3）
4　褐色土（10YR4/4）
5　暗褐色土（10YR3/3）
6　暗褐色土（10YR4/3）
7　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
8　褐色土（10YR4/4）

第60図　土坑（5）

考えられ、この覆土は灰黄褐色土で、縦方向に土層が分かれる。礫は当初から立てていたのか、柱の抜き取り痕に礫を置いたのかは不明である。この遺構はＳＢ126内にあるため、これに伴う可能性がある。

ＳＫＰ239（第65図、図版21）

下位平坦面の中央やや東側、ＬＭ53グリッド西隅で検出した。規模は長軸0.55ｍ×短軸0.45ｍ×深さ0.25ｍで、平面プランは楕円形である。底面と壁面は比較的しっかりしている。本遺構には、長さ約0.4ｍ厚さ0.1ｍほどの細長い礫が南西方向に25°ほど傾いて検出された。礫は据えてあると考えられるが、この覆土は黒褐色土で縦方向に土層が別れる。このことからＳＫＰ145同様、もともと礫が立てられていた立石遺構か、もしくは柱抜き取り跡に礫が据えられた可能性がある。

ピット群（第61～64・81図、図版20・22）

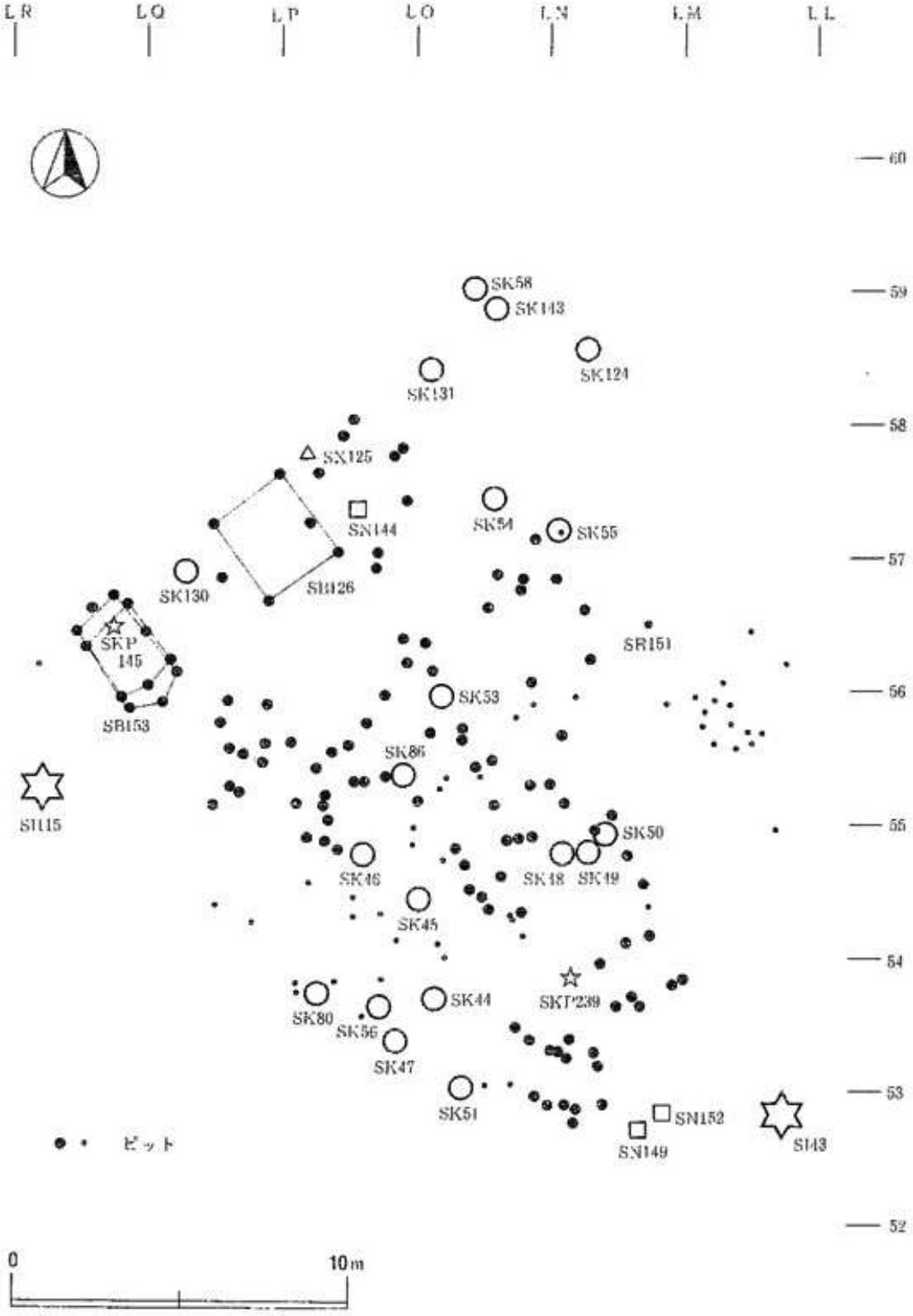
下位平坦面のほぼ全域から検出された。上位平坦面東側にも僅かにピットの集中する部分があり、これについては竪穴住居跡の可能性がある（第71図）。西側ピット群の中には径0.3～0.5ｍ前後の大型のものや、10cm前後の小型のものなどさまざまである。第60～70図には可能な限りの断面図を掲載してあるが、これらの中には建物跡としたＳＢ126・ＳＢ153ａ・ｂ以外にもいくつかの建物跡が存在しそうである。例えば、Ｐ64・Ｐ107・Ｐ67・Ｐ90やＰ230・Ｐ207のあたり、Ｐ163・Ｐ179のあたり、Ｐ169・Ｐ174のあたり、Ｐ120・Ｐ192のあたりにその可能性がある。径0.3ｍ以上の大きなものは、大部分が縄文時代で竪穴住居跡の時期に伴う掘立柱跡ではないかと考えられる。

遺物はＳＫ103から126、ＳＫＰ107から127、ＳＫＰ108から128、ＳＫＰ129から129、ＳＫＰ134から130、ＳＫＰ137から131、ＳＫＰ155から132、ＳＫＰ156から133～136、ＳＫＰ183から138、ＳＫＰ185から139、ＳＫＰ236から140の縄文土器片が出土している（第81図）。127と138は隆帯で縄文を区画するもので、131は隆帯の両側が無文になっているものである。130は、口唇部の山形部分直下に小さな瘤状の隆帯がある。そこから真直に下降した隆帯には、米粒状の刺突文がある。133～135は同一個体で、隆帯に沿って刺突文がめぐっている。

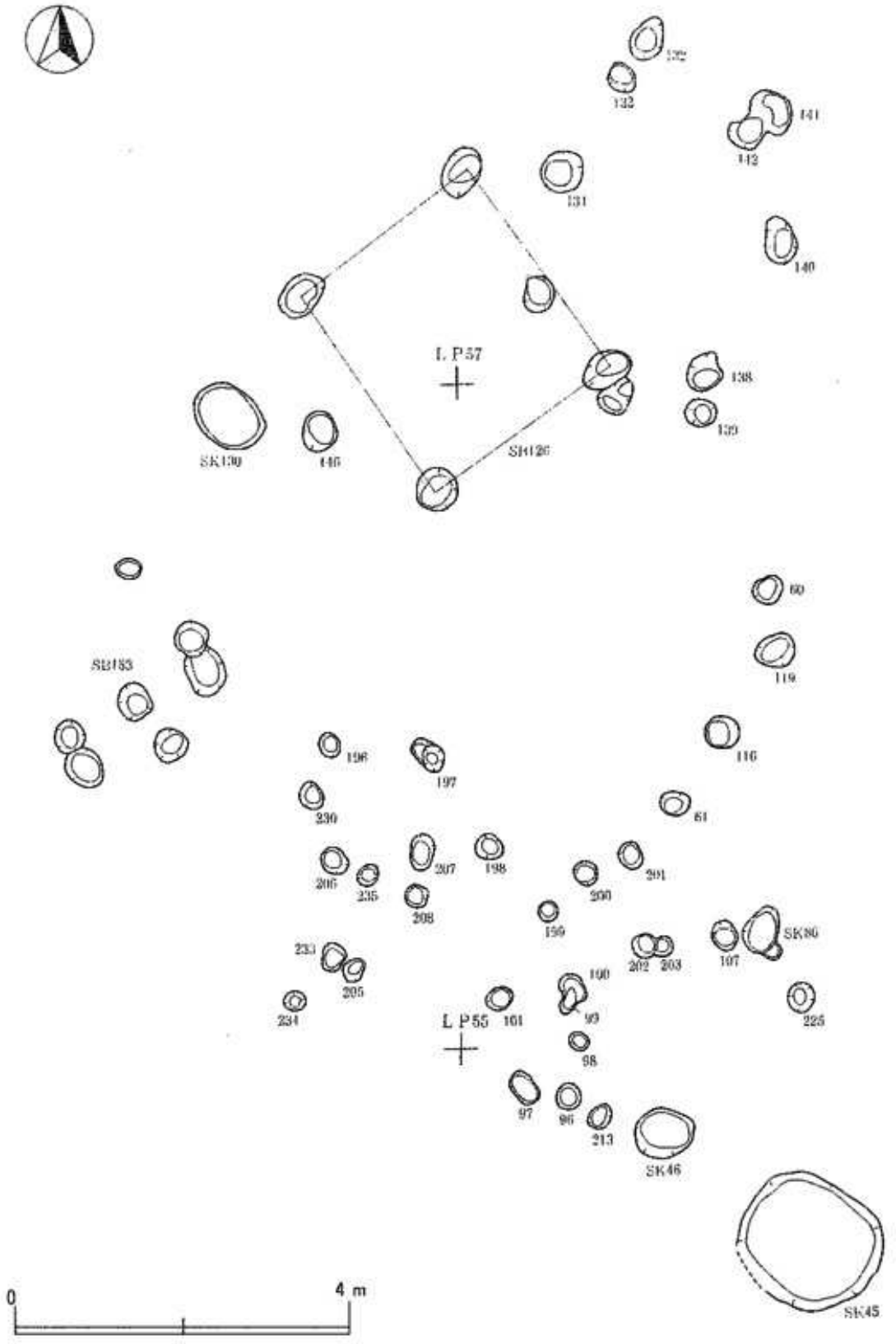
（10）性格不明遺構

ＳＸ38（第71・80・90図）

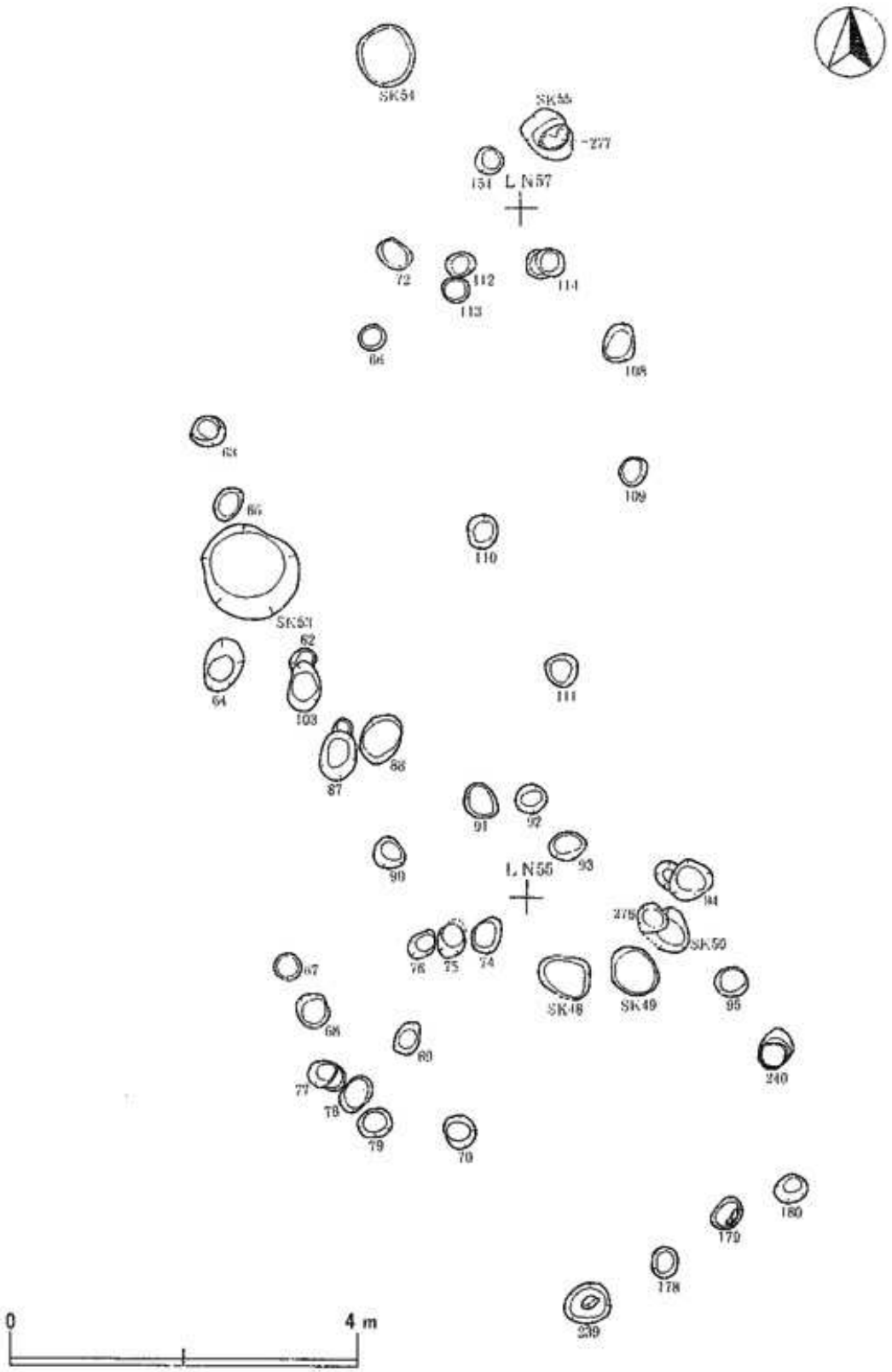
上位平坦面、ＬＡ51・52グリッドで検出した。この遺構はピットＰ１～Ｐ11がおよそ３ｍ四方の範囲に集中して検出された。この部分には長さ５ｍ×幅２～3.5ｍにわたって倒木痕が認められる。ピット群のおよそ中央には、やはり攪乱を強く受けた現存長軸１ｍ×短軸0.6ｍの焼土範囲がある。ピットはＰ１からＰ10まで検出され、規模は長軸0.2～0.65ｍ×短軸0.2～0.5ｍ×深さ0.1～0.55ｍとさまざまである。各ピットの覆土は黄褐色土の比較的締まりのある覆土



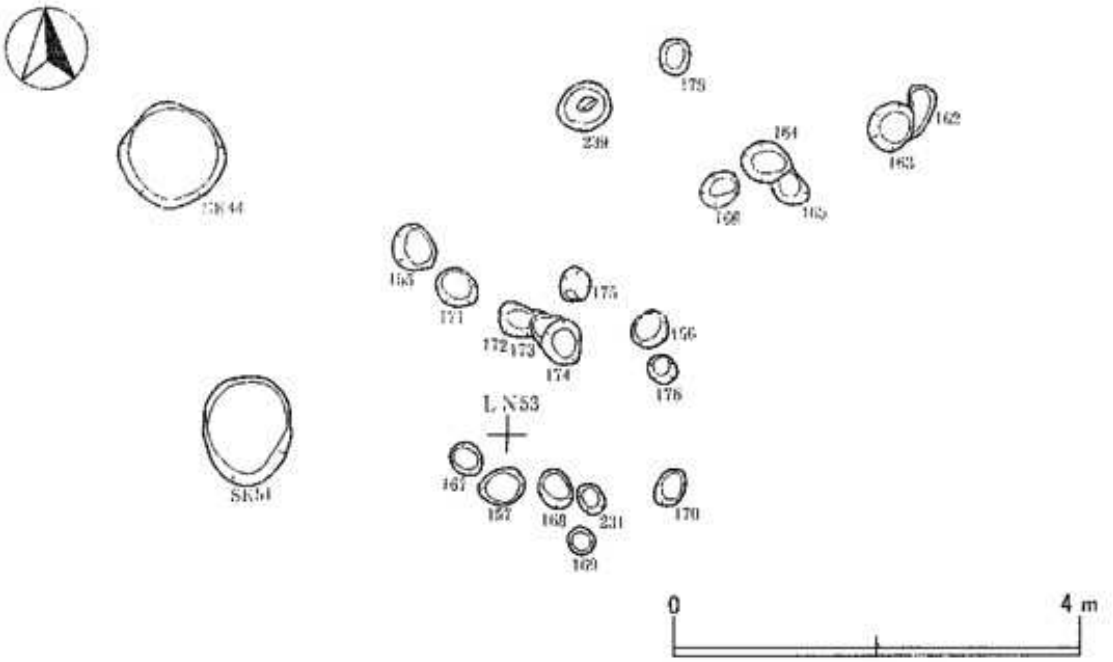
第61図　西側ピット配置図



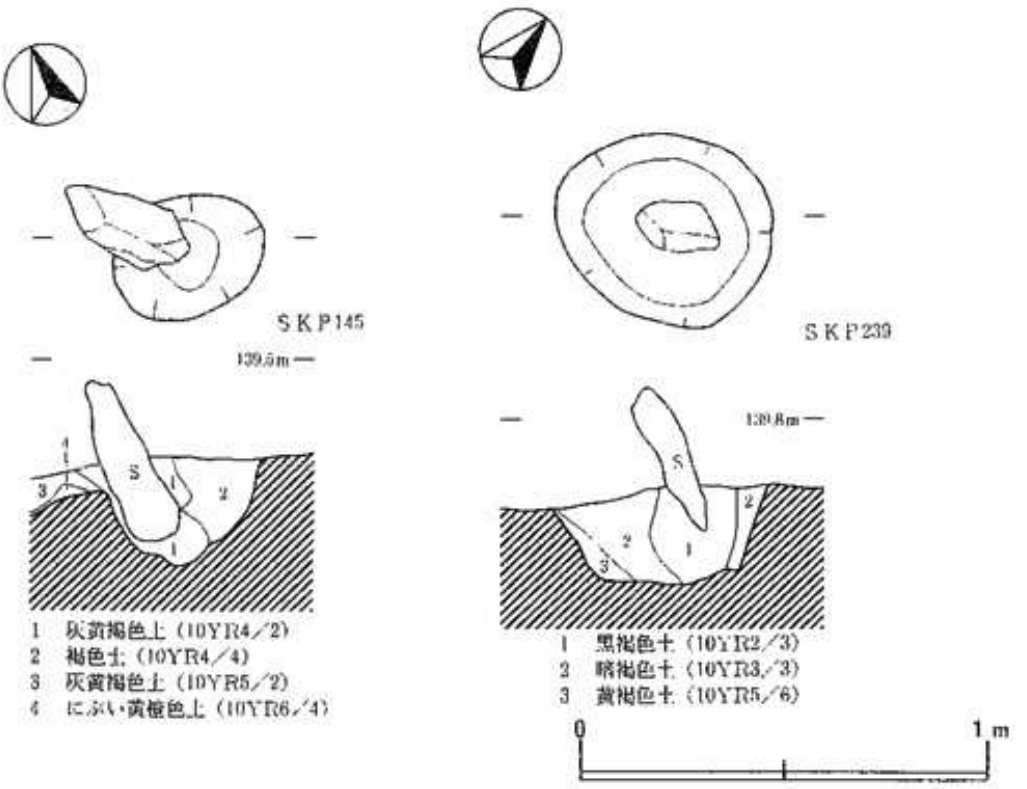
第62図　主要ピット配置図（1）



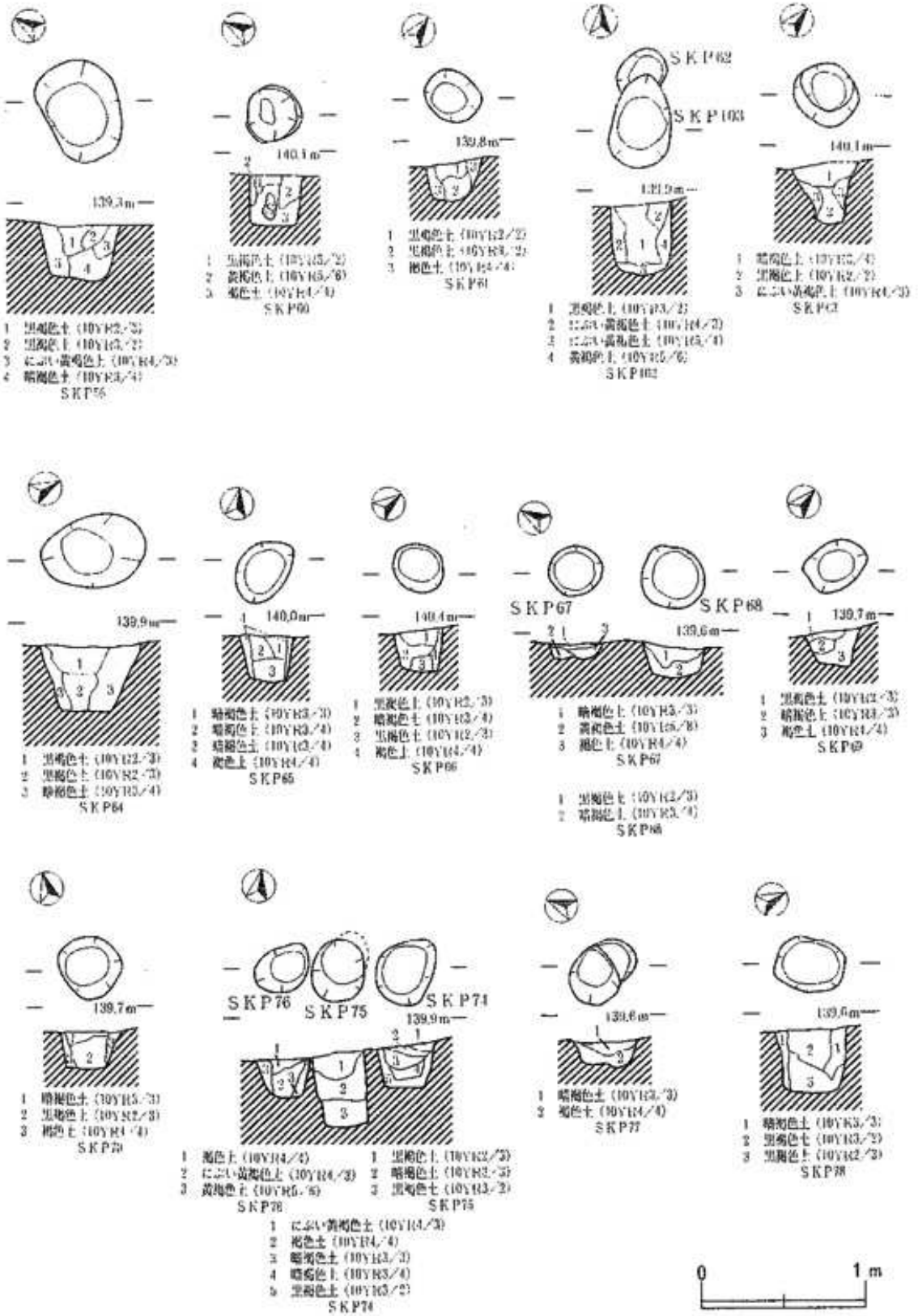
第63図　主要ピット配置図（2）



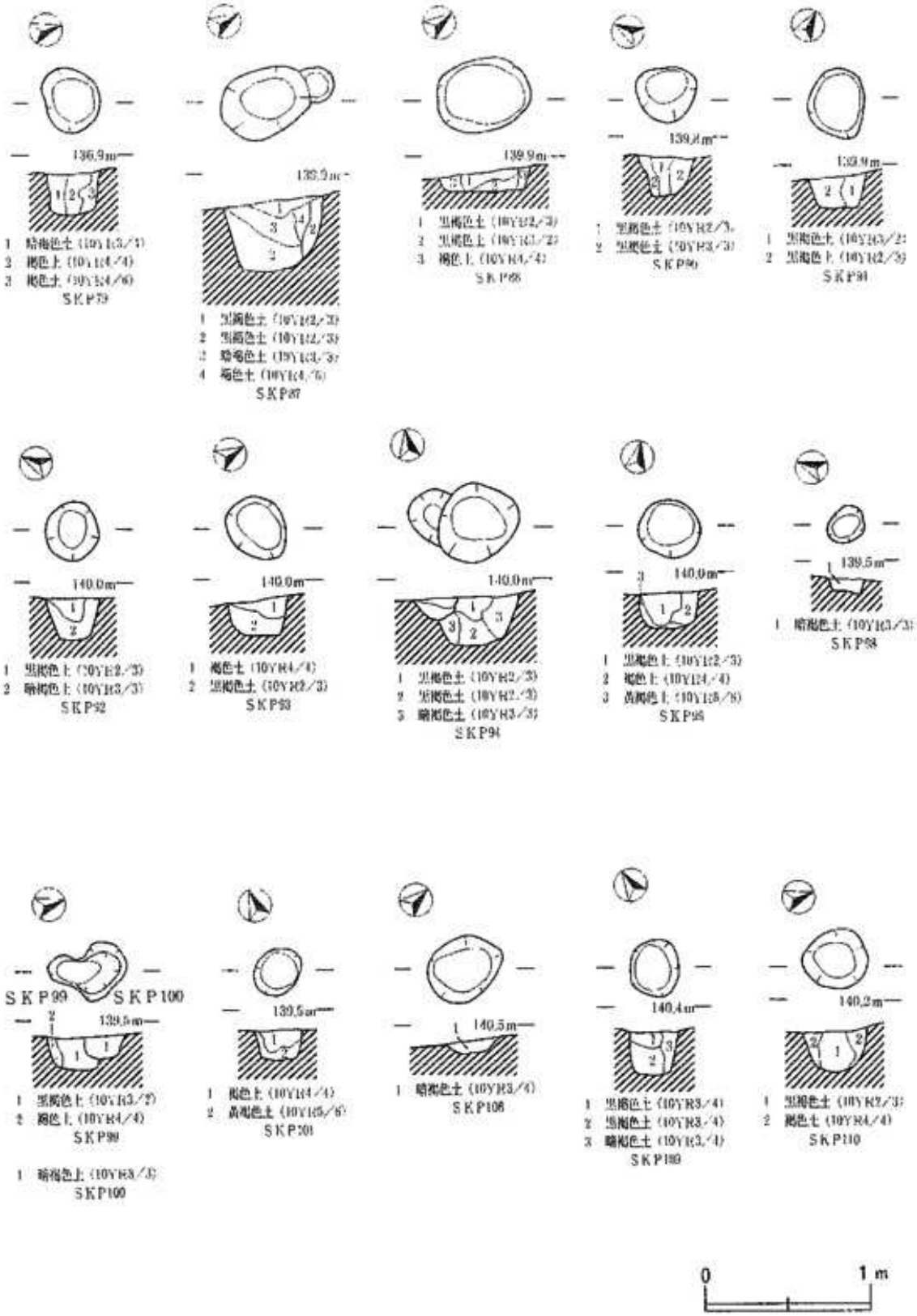
第64図　主要ピット配置図（3）



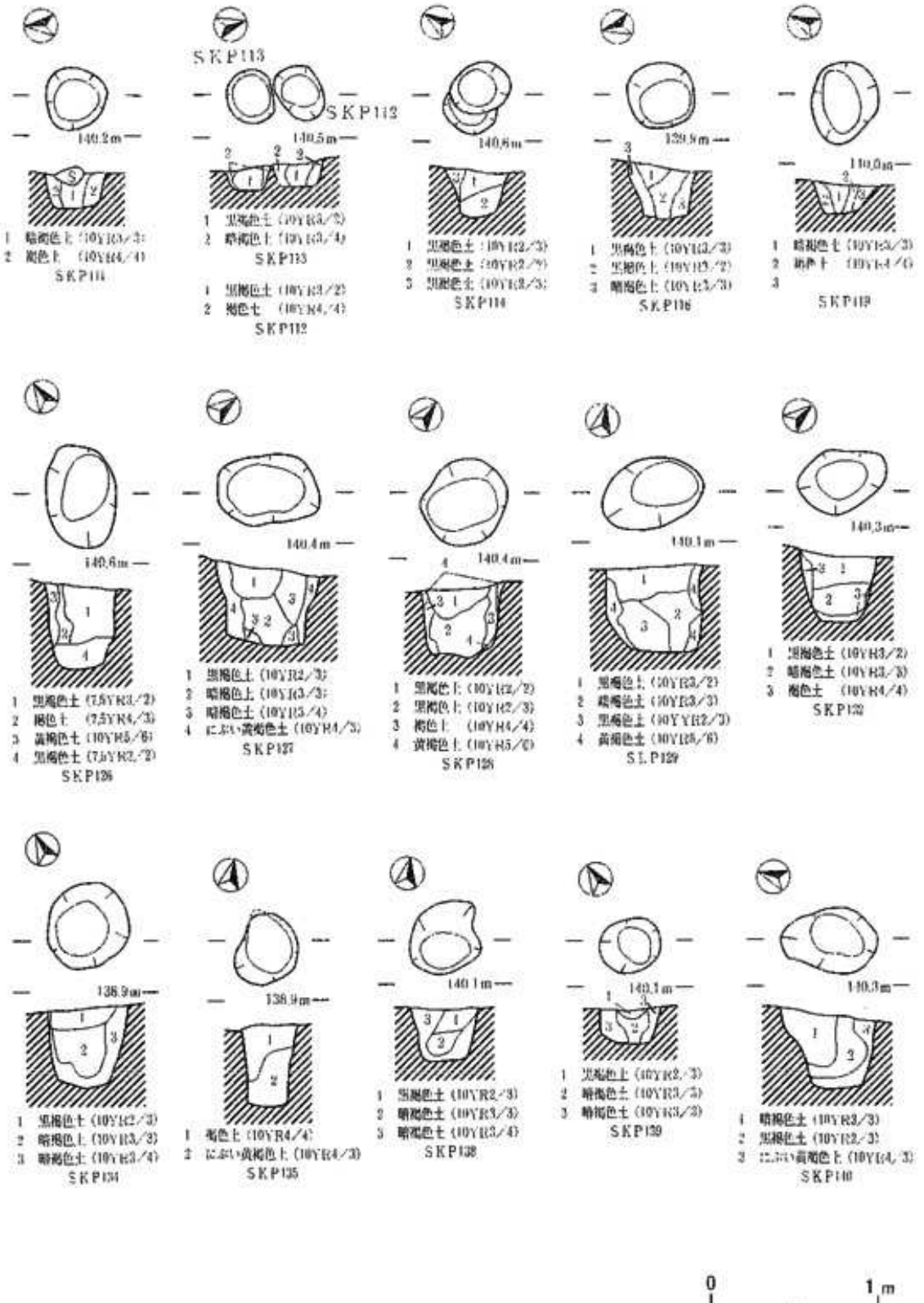
第65図　SKP145・239ピット


139.3m
1 黒褐色土（10YR2/3）
2 黒褐色土（10YR3/2）
3 にぶい黄褐色土（10YR4/3）
4 暗褐色土（10YR3/4）
SKP56
140.1m
1 黒褐色土（10YR3/2）
2 灰褐色土（10YR5/6）
3 褐色土（10YR4/4）
SKP60
139.8m
1 黒褐色土（10YR2/2）
2 黒褐色土（10YR3/2）
3 褐色土（10YR4/4）
SKP61
SKP62
SKP103
139.9m
1 黒褐色土（10YR3/2）
2 にぶい黄褐色土（10YR4/3）
3 にぶい黄褐色土（10YR5/4）
4 黄褐色土（10YR5/6）
SKP102
140.1m
1 暗褐色土（10YR3/4）
2 黒褐色土（10YR2/2）
3 にぶい黄褐色土（10YR4/3）
SKP62
139.9m
1 黒褐色土（10YR2/3）
2 黒褐色土（10YR2/3）
3 暗褐色土（10YR3/4）
SKP64
140.0m
1 暗褐色土（10YR3/3）
2 暗褐色土（10YR3/4）
3 暗褐色土（10YR3/4）
4 褐色土（10YR4/4）
SKP65
140.4m
1 黒褐色土（10YR2/3）
2 暗褐色土（10YR3/4）
3 黒褐色土（10YR2/3）
4 褐色土（10YR4/4）
SKP66
SKP67
SKP68
139.6m
1 暗褐色土（10YR3/3）
2 黄褐色土（10YR5/8）
3 褐色土（10YR4/4）
SKP67
1 黒褐色土（10YR2/3）
2 暗褐色土（10YR3/4）
SKP68
139.7m
1 黒褐色土（10YR2/3）
2 暗褐色土（10YR3/3）
3 褐色土（10YR4/4）
SKP69
139.7m
1 暗褐色土（10YR3/3）
2 黒褐色土（10YR2/3）
3 褐色土（10YR4/4）
SKP70
SKP76
SKP75
SKP74
139.9m
1 褐色土（10YR4/4）
2 にぶい黄褐色土（10YR4/3）
3 黄褐色土（10YR5/6）
SKP76
1 黒褐色土（10YR2/3）
2 暗褐色土（10YR3/3）
3 黒褐色土（10YR3/2）
SKP75
1 にぶい黄褐色土（10YR4/3）
2 褐色土（10YR4/4）
3 暗褐色土（10YR3/3）
4 暗褐色土（10YR3/4）
5 黒褐色土（10YR3/2）
SKP74
139.6m
1 暗褐色土（10YR3/3）
2 褐色土（10YR4/4）
SKP77
139.6m
1 暗褐色土（10YR3/3）
2 黒褐色土（10YR3/2）
3 黒褐色土（10YR2/3）
SKP78
0
1m

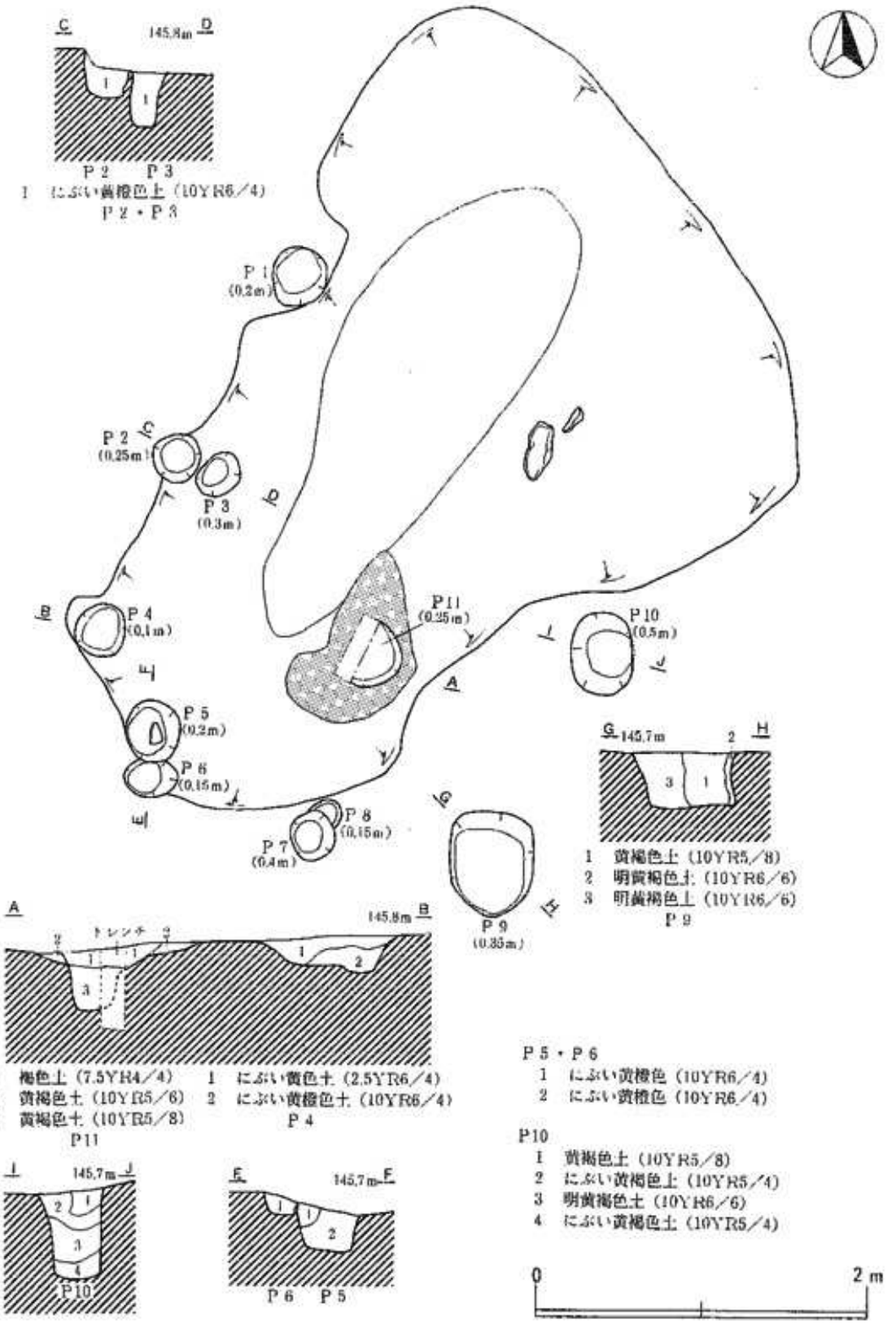
第66図　ピット（1）


136.9m
1 暗褐色土 (10YR3/4)
2 褐色土 (10YR4/4)
3 褐色土 (10YR4/6)
SKP79
139.9m
1 黒褐色土 (10YR2/3)
2 黒褐色土 (10YR2/3)
3 暗褐色土 (10YR3/3)
4 褐色土 (10YR4/6)
SKP87
139.9m
1 黒褐色土 (10YR2/3)
2 黒褐色土 (10YR3/2)
3 褐色土 (10YR4/4)
SKP88
139.9m
1 黒褐色土 (10YR2/3)
2 黒褐色土 (10YR3/3)
SKP89
139.9m
1 黒褐色土 (10YR3/2)
2 黒褐色土 (10YR2/3)
SKP90
140.0m
1 黒褐色土 (10YR2/3)
2 暗褐色土 (10YR3/3)
SKP92
140.0m
1 褐色土 (10YR4/4)
2 黒褐色土 (10YR2/3)
SKP93
140.0m
1 黒褐色土 (10YR2/3)
2 黒褐色土 (10YR2/3)
3 暗褐色土 (10YR3/3)
SKP94
140.0m
1 黒褐色土 (10YR2/3)
2 褐色土 (10YR4/4)
3 黄褐色土 (10YR5/6)
SKP95
139.5m
1 暗褐色土 (10YR3/3)
SKP98
SKP99
SKP100
139.5m
1 黒褐色土 (10YR3/2)
2 褐色土 (10YR4/4)
SKP99
1 暗褐色土 (10YR3/3)
SKP100
139.5m
1 褐色土 (10YR4/4)
2 黄褐色土 (10YR5/6)
SKP101
140.5m
1 暗褐色土 (10YR3/4)
SKP108
140.4m
1 黒褐色土 (10YR3/4)
2 黒褐色土 (10YR3/4)
3 暗褐色土 (10YR3/4)
SKP109
140.2m
1 黒褐色土 (10YR2/3)
2 褐色土 (10YR4/4)
SKP110
0
1 m

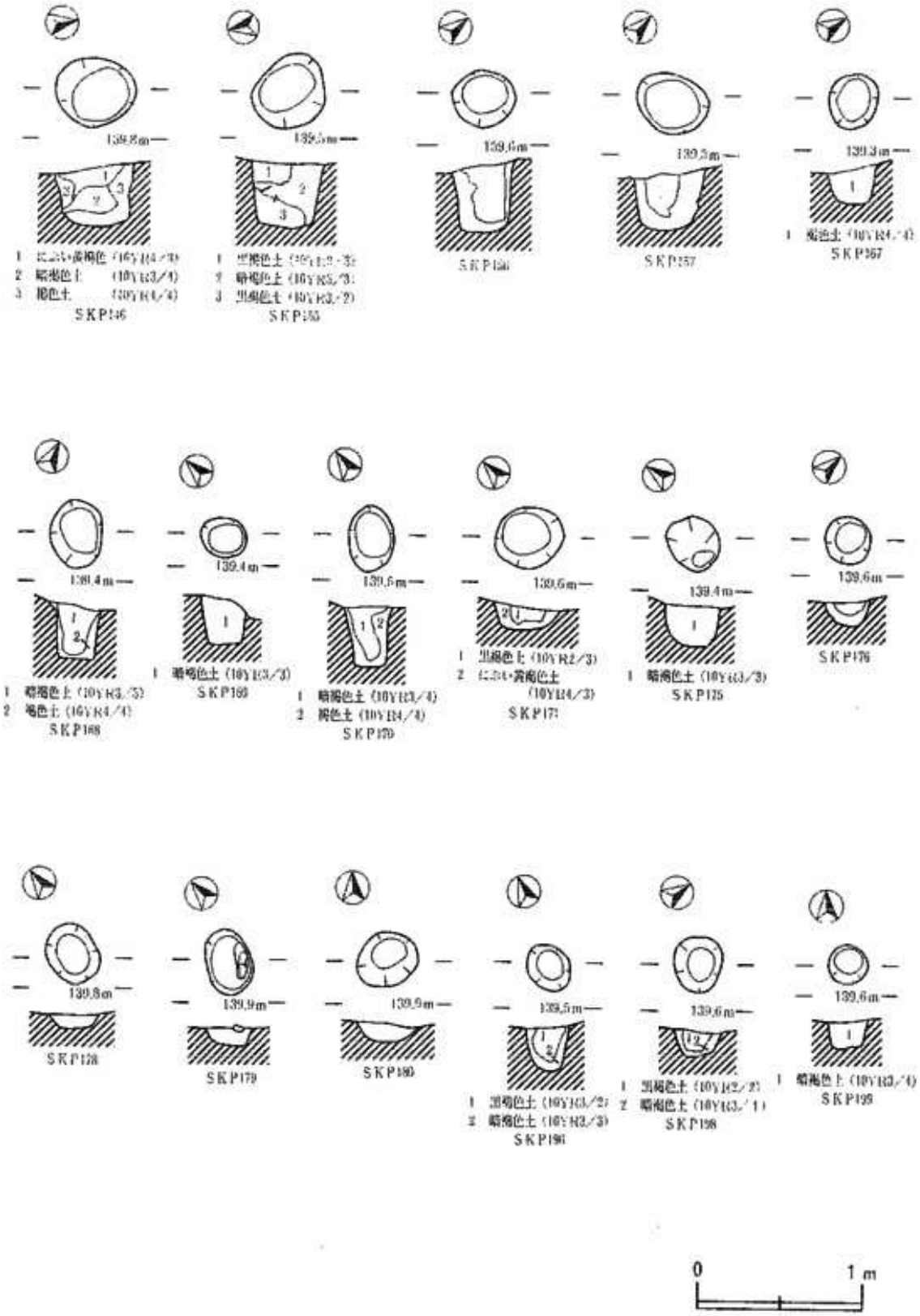
第67図　ピット（2）


SKP113
SKP112
140.2m
140.5m
140.6m
139.9m
140.0m
140.6m
140.4m
140.4m
140.1m
140.3m
138.9m
138.9m
140.1m
140.1m
140.3m
0
1m

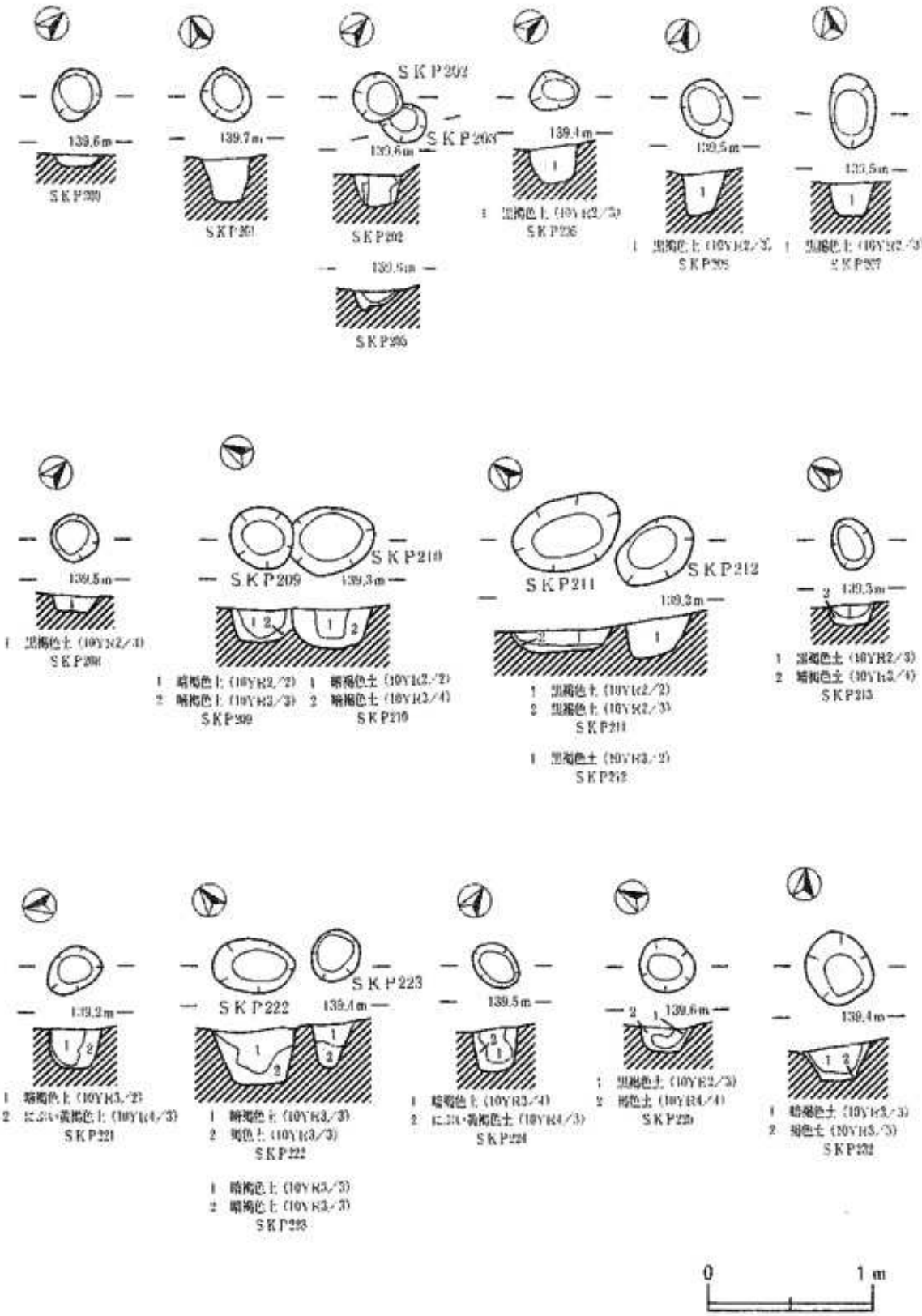
第68図　ピット（3）



第71図　ＳＸ38性格不明遺構


SKP146
SKP155
SKP156
SKP157
SKP167
SKP168
SKP169
SKP170
SKP171
SKP175
SKP176
SKP178
SKP179
SKP180
SKP196
SKP198
SKP199
0
1 m

第69図　ピット（4）


SKP200
139.6m
SKP200
139.7m
SKP201
SKP202
SKP203
139.6m
SKP202
139.5m
SKP205
139.4m
1 黒褐色土 (10YR2/3)
SKP206
139.5m
1 黒褐色土 (10YR2/3)
SKP207
139.5m
1 黒褐色土 (10YR2/3)
SKP208
SKP209
SKP210
139.3m
1 暗褐色土 (10YR2/2)
2 暗褐色土 (10YR3/3)
SKP209
1 暗褐色土 (10YR2/2)
2 暗褐色土 (10YR3/4)
SKP210
SKP211
SKP212
139.3m
1 黒褐色土 (10YR2/2)
2 黒褐色土 (10YR2/3)
SKP211
1 黒褐色土 (10YR3/2)
SKP212
139.3m
1 黒褐色土 (10YR2/3)
2 暗褐色土 (10YR3/4)
SKP213
139.2m
1 暗褐色土 (10YR3/2)
2 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
SKP221
SKP222
SKP223
139.4m
1 暗褐色土 (10YR3/3)
2 褐色土 (10YR3/3)
SKP222
1 暗褐色土 (10YR3/3)
2 暗褐色土 (10YR3/3)
SKP223
139.5m
1 暗褐色土 (10YR3/4)
2 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
SKP224
139.6m
1 黒褐色土 (10YR2/3)
2 褐色土 (10YR4/4)
SKP225
139.4m
1 暗褐色土 (10YR3/3)
2 褐色土 (10YR3/3)
SKP226
0
1 m

第70図　ピット（5）

第8表　ピット観察表

SKP No.	挿図 No.	平面形	開口部径 (cm)	深さ (cm)	SKP No.	挿図 No.	平面形	開口部径 (cm)	深さ (cm)
56	66	楕円形	60×45	35	132	68	楕円形	55×40	40
60	66	不整円形	35×35	30	134	68	不整円形	50×50	50
61	66	楕円形	35×30	25	135	68	楕円形	45×35	50
62	66	楕円形	35×25		138	68	楕円形	50×40	30
63	66	楕円形	40×40	40	139	68	楕円形	40×35	20
64	66	楕円形	65×45	45	140	68	楕円形	60×40	45
65	66	楕円形	45×30	30	146	69	楕円形	50×45	35
66	66	楕円形	35×30	25	155	69	楕円形	45×40	40
67	66	円　形	35×30	10	156	69	不整円形	40×35	40
68	66	不整円形	40×40	20	157	69	楕円形	45×35	35
69	66	楕円形	40×30	25	167	69	楕円形	35×30	25
70	66	楕円形	40×35	25	168	69	楕円形	40×35	35
74	66	楕円形	45×35	30	169	69	不整円形	30×25	30
75	66	楕円形	40×30	45	170	69	楕円形	40×30	40
76	66	楕円形	40×30	25	171	69	不整円形	45×40	15
77	66	不整形	35×30	15	175	69	楕円形	35×30	25
78	66	楕円形	45×35	40	176	69	円　形	30×30	15
79	67	楕円形	40×35	25	178	69	楕円形	40×30	10
87	67	楕円形	60×40	40	179	69	楕円形	40×30	10
88	67	楕円形	60×45	15	180	69	不整円形	40×35	10
90	67	楕円形	40×35	25	196	69	楕円形	30×25	30
91	67	楕円形	45×35	20	198	69	不整円形	35×35	15
92	67	不整円形	35×35	25	199	69	円　形	25×25	15
93	67	楕円形	45×35	25	200	70	不整形	35×30	10
94	67	楕円形	55×45	30	201	70	楕円形	35×30	25
95	67	不整円形	40×35	25	202	70	不整形	30×30	20
98	67	楕円形	25×20	10	203	70	不整円形	25×25	10
99	67	楕円形	35×20	20	205	70	楕円形	30×25	20
100	67	楕円形	35×25	15	206	70	楕円形	35×30	25
101	67	楕円形	35×25	20	207	70	楕円形	45×30	20
103	66	楕円形	60×35	45	208	70	円　形	30×30	10
108	67	不整形	50×40	15	209	70	円　形	40×40	20
109	67	楕円形	35×35	25	210	70	楕円形	55×40	25
110	67	不整円形	40×35	25	211	70	楕円形	70×45	15
111	68	不整円形	40×40	20	212	70	楕円形	55×35	25
112	68	楕円形	35×25	15	213	70	楕円形	30×25	15
113	68	不整形	35×30	15	221	70	楕円形	35×25	25
114	68	楕円形	35×30	30	222	70	楕円形	50×35	35
116	68	不整円形	40×40	30	223	70	不整円形	35×30	25
119	68	楕円形	50×45	20	224	70	楕円形	30×25	25
126	68	楕円形	65×45	50	225	70	不整円形	35×35	15
127	68	楕円形	65×50	45	232	70	楕円形	45×40	20
128	68	不整円形	55×50	40	276	59	不整円形	40×35	15
129	68	楕円形	65×45	50	277	60	楕円形	40×30	45

が多い。

この付近の撹乱部分からは、縄文や撚糸文を施す土器片(141・142)や大型石鏃(S218)、スクレイパー(S219)などが出土している。本遺構はTの可能性のある焼土やピット・遺物などの在り方から、中期末葉の竪穴式住居跡であった可能性がある。

SX125（第72図）

下位平坦面の北側、LO57グリッド北西端で検出した。0.2～0.4mの扁平な礫数個が、Ⅲ層中より約1m四方の広がりで検出された。上部にも礫が重なっていたようであるが、上位は根の撹乱によって不明になっている。これらの大型礫には一部赤変しているものがあるものの、各礫間はやや離れて存在するものが多く、ここで火を使用した痕跡は特には認められない。

2　中世以降

（1）炭焼成遺構

SN148（第72図、図版23）

下位平坦面の南東側で、斜面にさしかかるLJ51グリッド南側で検出した。規模は長軸0.4m×短軸0.35m×深さ0.1mで、平面プランは不整円形である。断面は摺鉢状を呈している。覆土は炭化物を多量に含む黒色土で、締まりはあまりない。

SN149（第72図）

下位平坦面の南側緩斜面LM52グリッド北東隅側で検出した。北東側にあるSN152を切っている。範囲確認調査のトレンチで、西側の半分が消滅している。規模は幅0.1m×深さ0.1mで、平面プランは楕円形と考えられる。断面は摺鉢状を呈している。覆土は細かい炭化物を顕著に含む黒褐色土である。

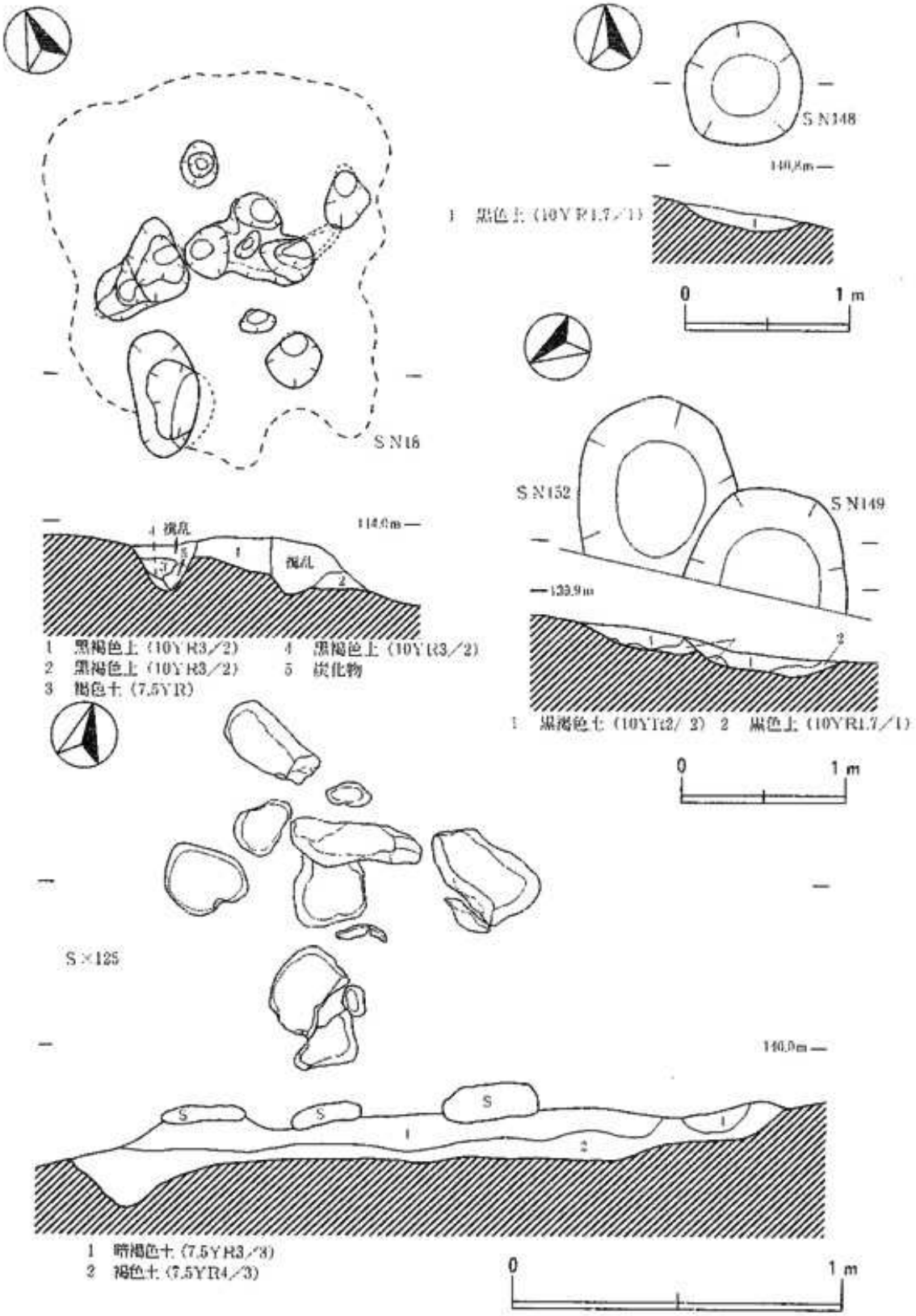
SN152（第72図）

下位平坦面の南側緩斜面、LM52グリッド北東隅で検出した。南西側にあるSN152よりも古い。範囲確認調査のトレンチで西側の約1／3が消滅している。規模は現存長軸1.1m×幅1m×深さ0.1mで、平面プランは楕円形と考えられる。断面は摺鉢状を呈している。覆土は細かい炭化物を顕著に含む黒褐色土である。

（2）焼土遺構

SN18（第72図）

上位平坦面東端部の緩斜面、KO49北側で検出した。特に目立った焼土が検出されている訳ではないが、地山上面の部分で堅い面が確認できたものである。この広がりは1.2m×1mの範囲で、根の撹乱を強く受けている。そこには不完全燃焼の炭化材があり、僅かな焼土粒が確



第72図　炭焼成遺構など

認されている。

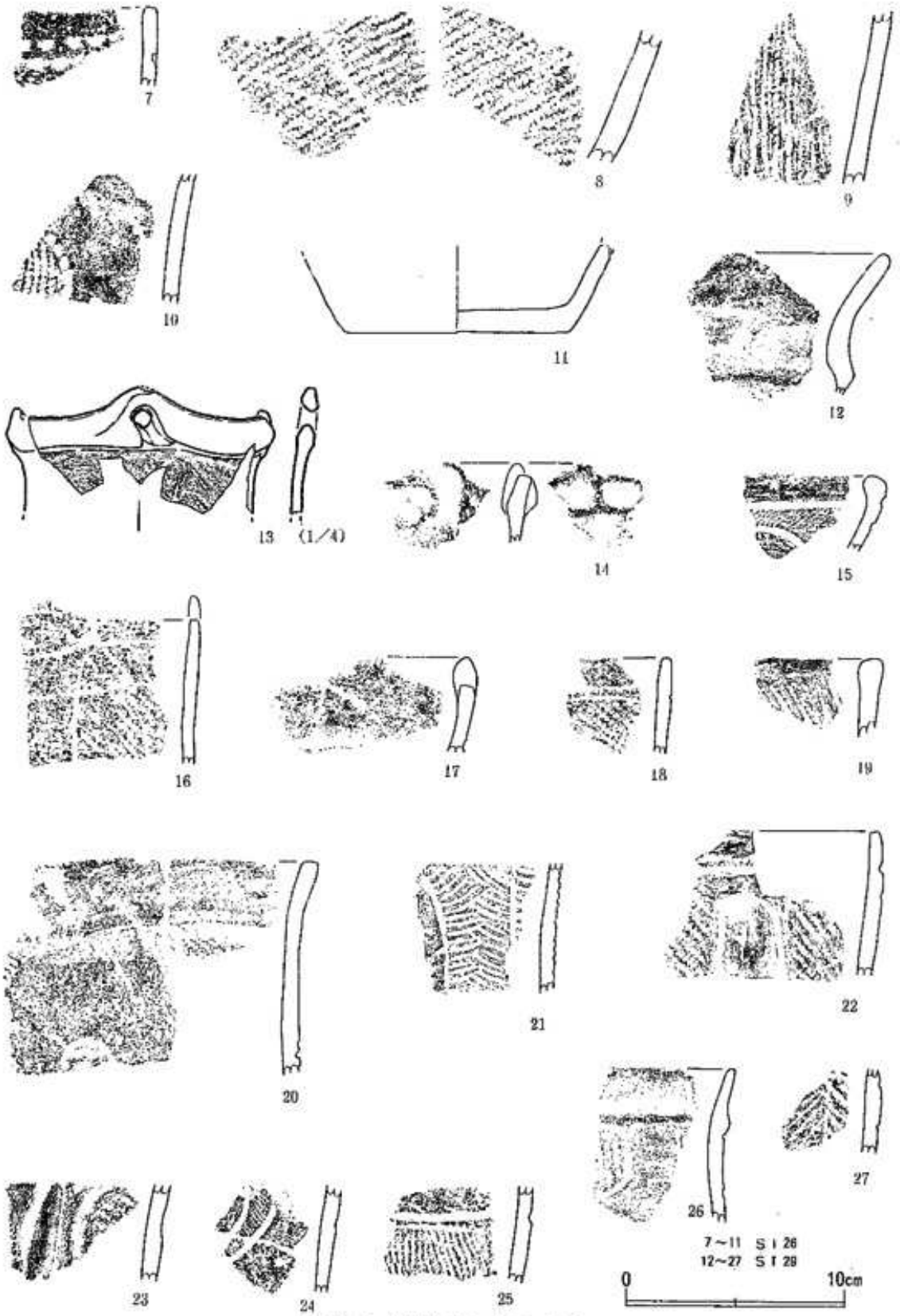
第2節　遺構外出土遺物

遺構外から出土している遺物には、縄文時代中期末葉から後期初頭にかけての土器や、石鏃・スクレイパー・磨製石斧・磨石・凹石などの石器がある。これらは、調査区全般に出土するが量は少ない。以下、土器、石器の順に説明を加えていく。

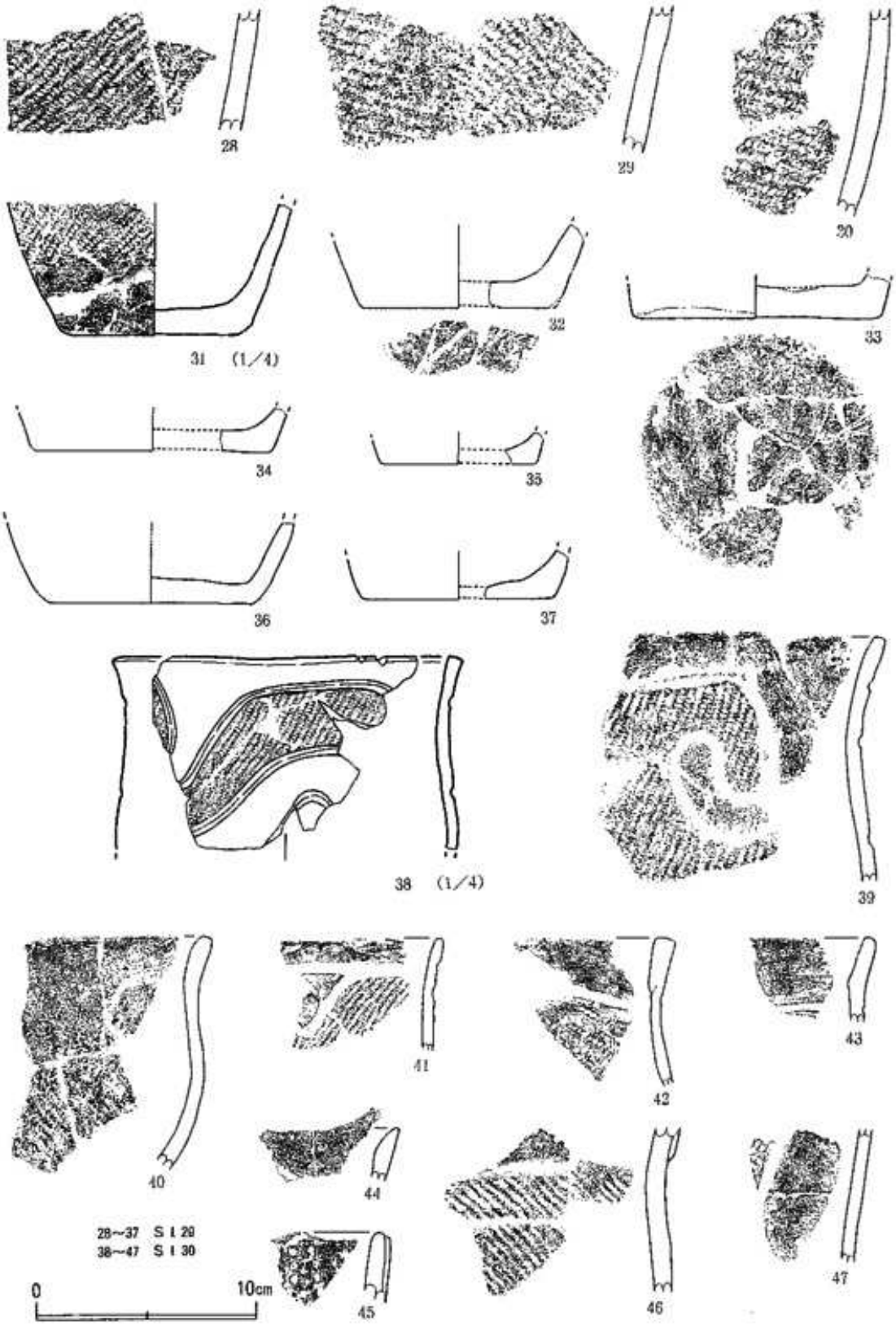
（1）土器（第92～95図、図版30～32）

土器のうち、145・146は中期中葉、147～154・156は中期後葉、155・157～164、169～173は中期末葉～後期初頭、174～213は中期後葉～後期初頭と考えられる。

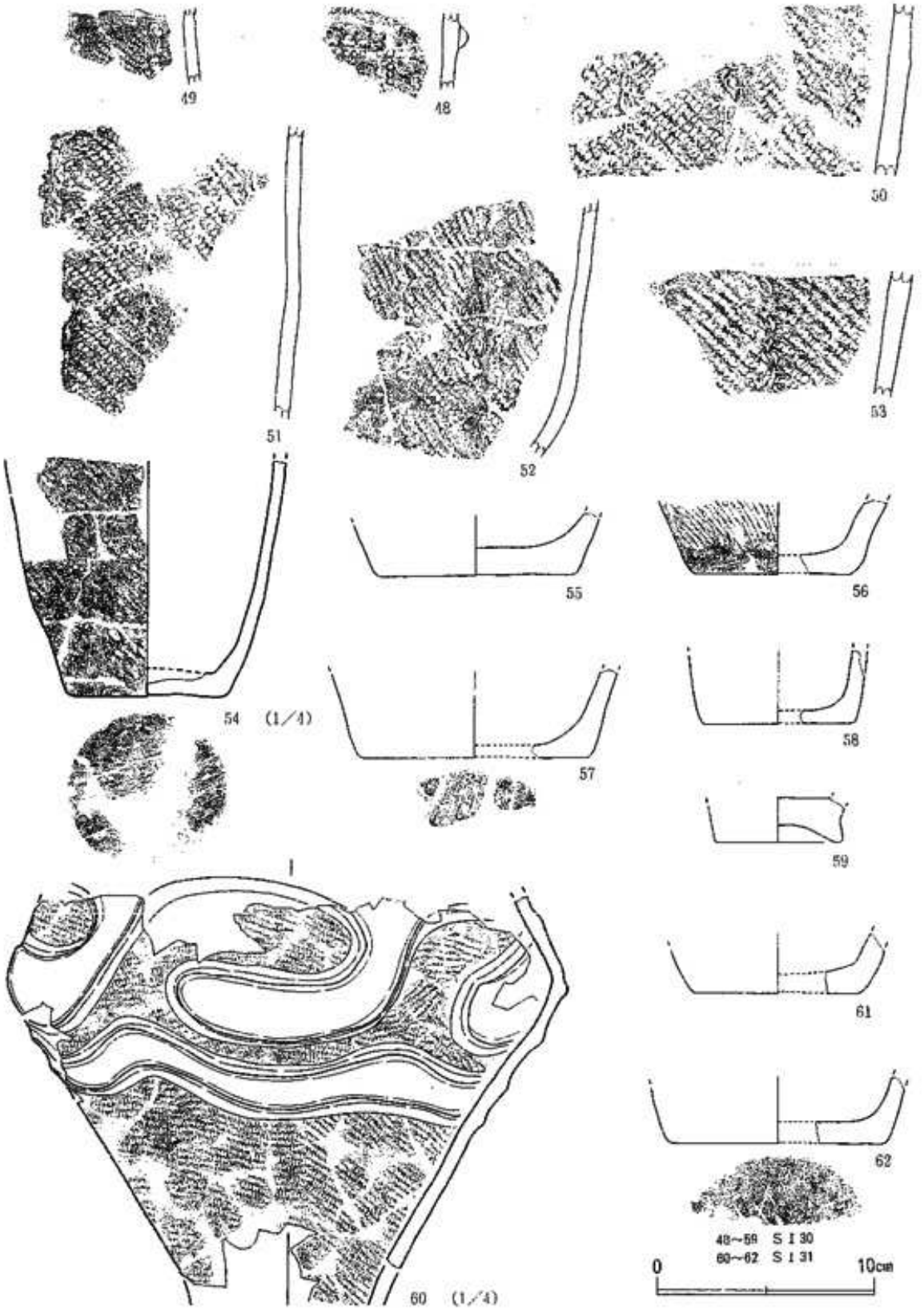
145・146は同一個体で、緩い波状口縁の深鉢である。ＲＬ斜縄文の地文に、隆線による渦巻文が口縁部～胴部に施されている。147～154・156は、胴部に断面三角形の隆帯もしくは沈線や刺突列で画された無文帯でＬ字状文等が描かれているものである。150～152は同一個体である。154の沈線は、先端が細いヘラ状工具によるものである。155～159は、口縁部が「く」の字状に内傾し、口縁部に山形の突起が付いて波状口縁となる深鉢である。155の突起内側には鍔状の隆帯が付されており、他は隆帯の両側に刺突列が施されているものである。157は中央に大きな孔のある突起部破片である。160は口縁部に沿って１条の刺突列があり、161は隆帯上に刺突が施されている。162～164は、沈線で画された幅の狭い隆帯の結合部や口縁端部に小さな円形の貼付文を付し、その中央に刺突を加えたものである。165は波状口縁の深鉢で、無文の口縁部と胴部との間に隆沈線の施されたものである。169～173は同一個体である。幅が広く直立気味の口縁部から、胴下部に向ってごく緩やかにすぼまる大型の深鉢である。無文地に口縁に平行する１組１～２条の刺突列が間隔をあけて３段以上施されている。刺突は生体の爪によるものと考えられ、器に向って左から右方向に粘土がかき取られ、除去されなかった粘土塊が右端に残っているものもある(172・173)。166～168、174～177、179・180は口縁部が無文で、胴部に斜縄文が施されているものである。174・175は同一個体で、強く膨らむ胴上部から内湾気味に外傾し口縁部が屈曲している。179・180も同一個体で、無文の口縁部が外傾する。181～191は、口縁部～胴部に縄文だけが施された深鉢である。187・188は胴上部～中部が膨らむものである。188～191は撚糸文が施されている。192～194も同一個体である。無文で外反する口縁部の端部に列点状の押圧が加えられ、口唇上に細い波状の粘土紐が貼付されたように見えている。この土器は、晩期後葉の深鉢かとも考えられるが、他に晩期の土器は出土していないため、ここでは中期後葉～後期初頭の土器としておきたい。195～213は底部である。全て深鉢の底部と見られる。木葉痕の付くもの(195・197)、網代痕のもの(198)、不明だが痕跡のあ



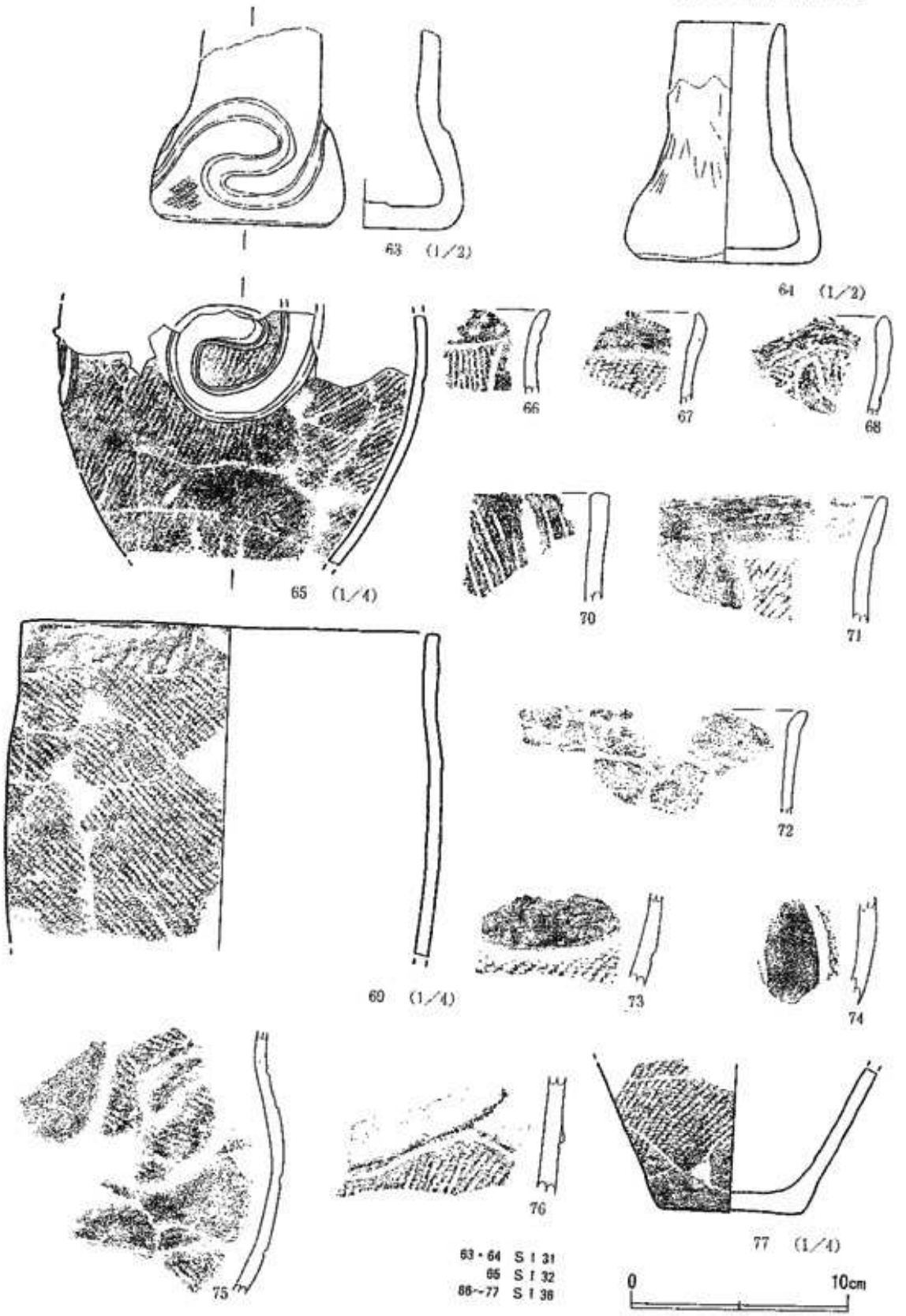
第73図　遺構内出土土器（1）



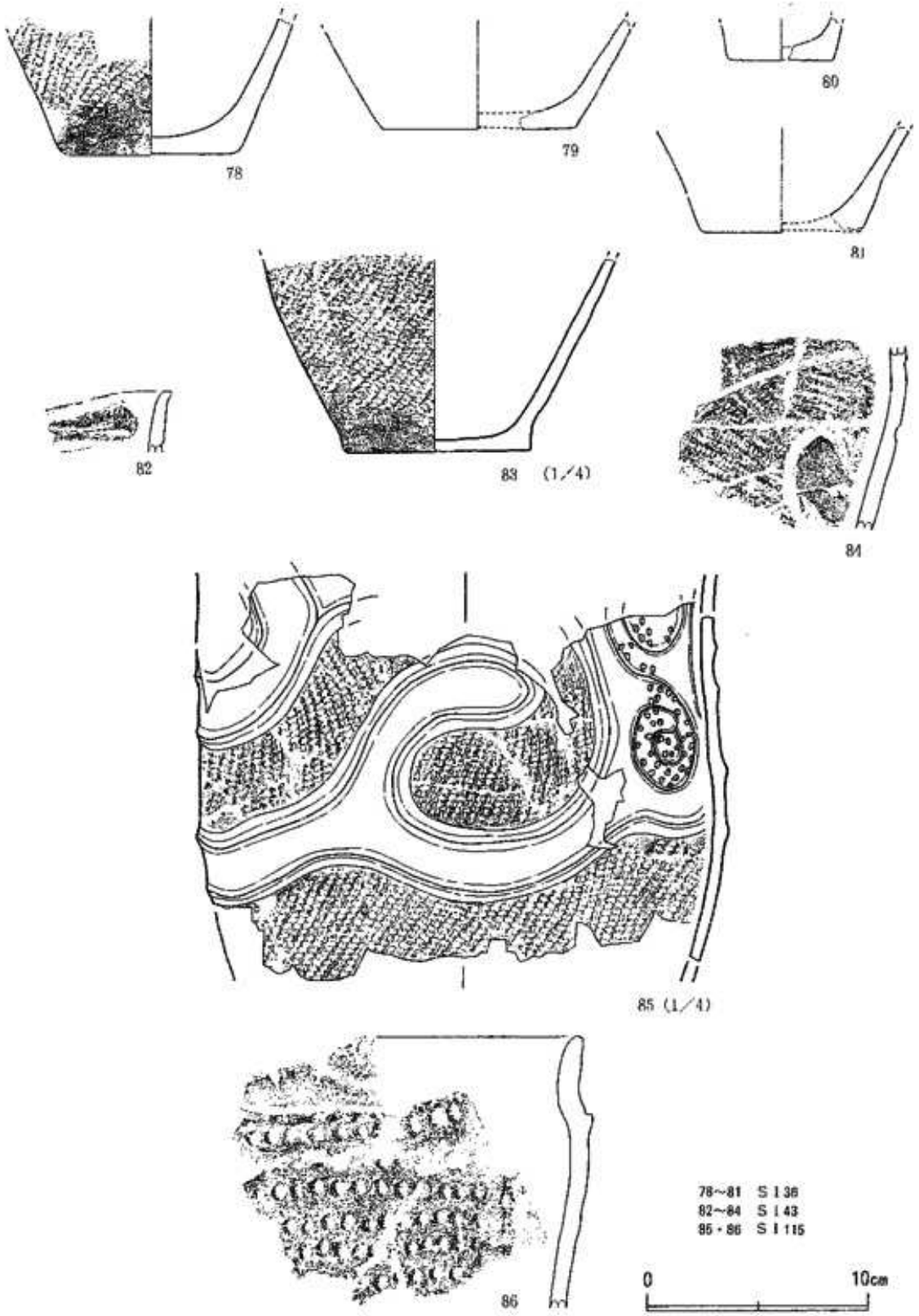
第74図　遺構内出土土器（2）



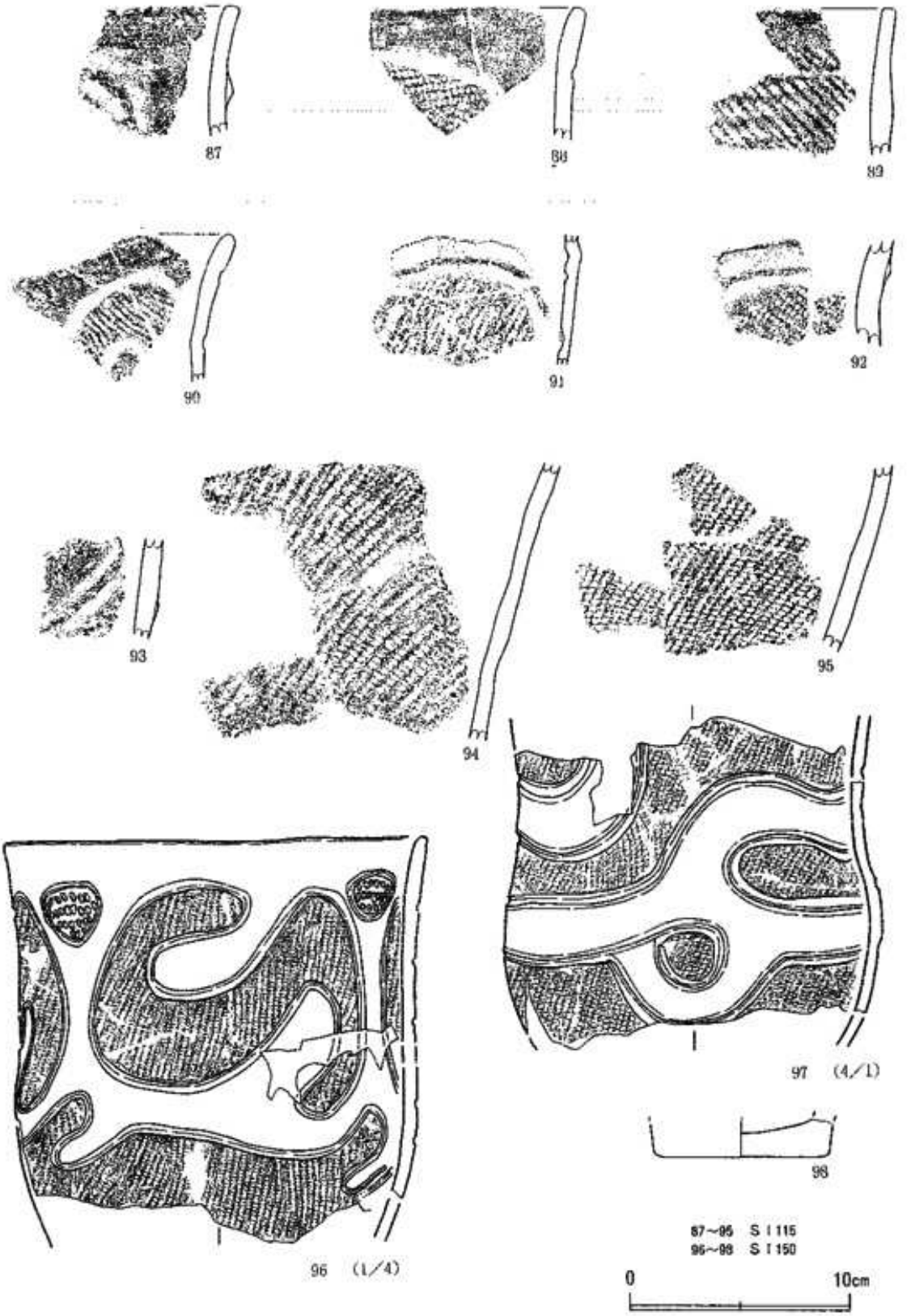
第75図　遺構内出土土器（3）



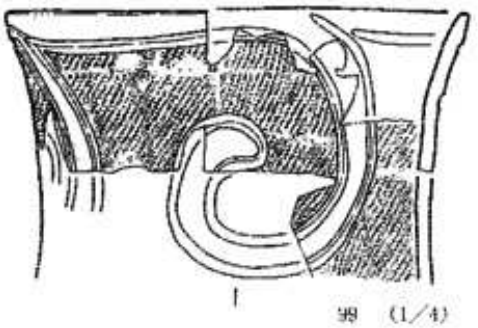
第76図　遺構内出土土器（4）

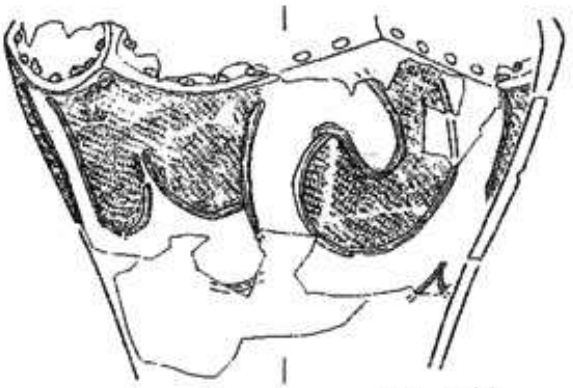


第77図　遺構内出土土器（5）



第78図　遺構内出土土器（6）


99　(1/4)

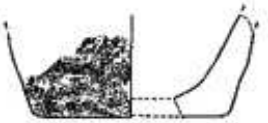

100　(1/4)

101

102

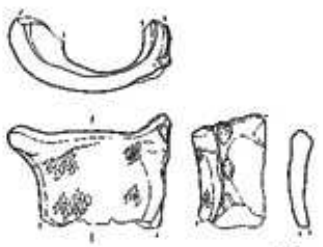
103

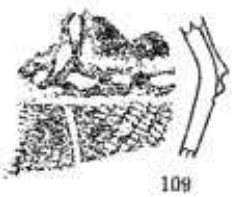
104


105

106

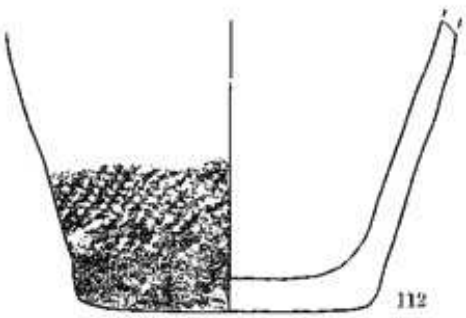
107


108


109

110

111

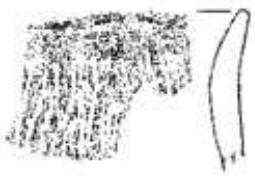

112

113

99　SR151
100　SN11
101　SKF33
102～105　SKF28
106　SKF34
107～111　SK24
112・113　SK45

0　10cm

第79図　遺構内出土土器（7）

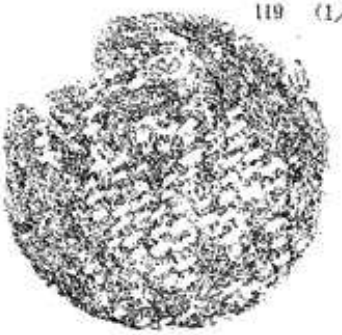

114

115

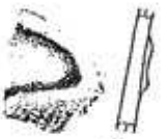
116

117　(1/4)

119　(1/4)

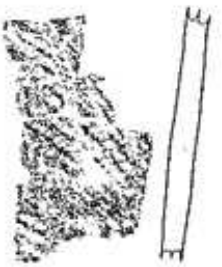


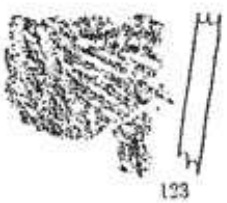
120


121

118

122


125

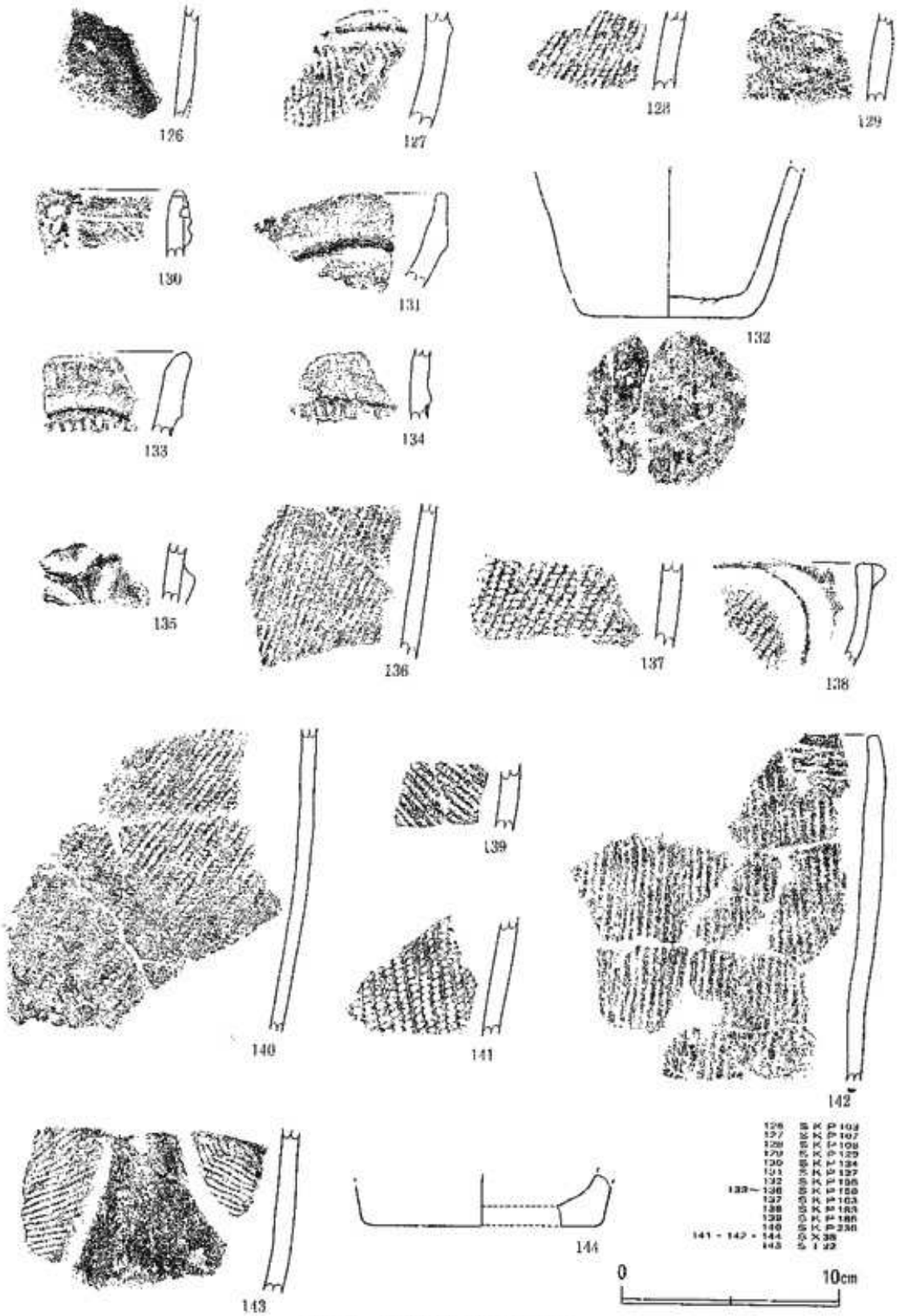

123

124

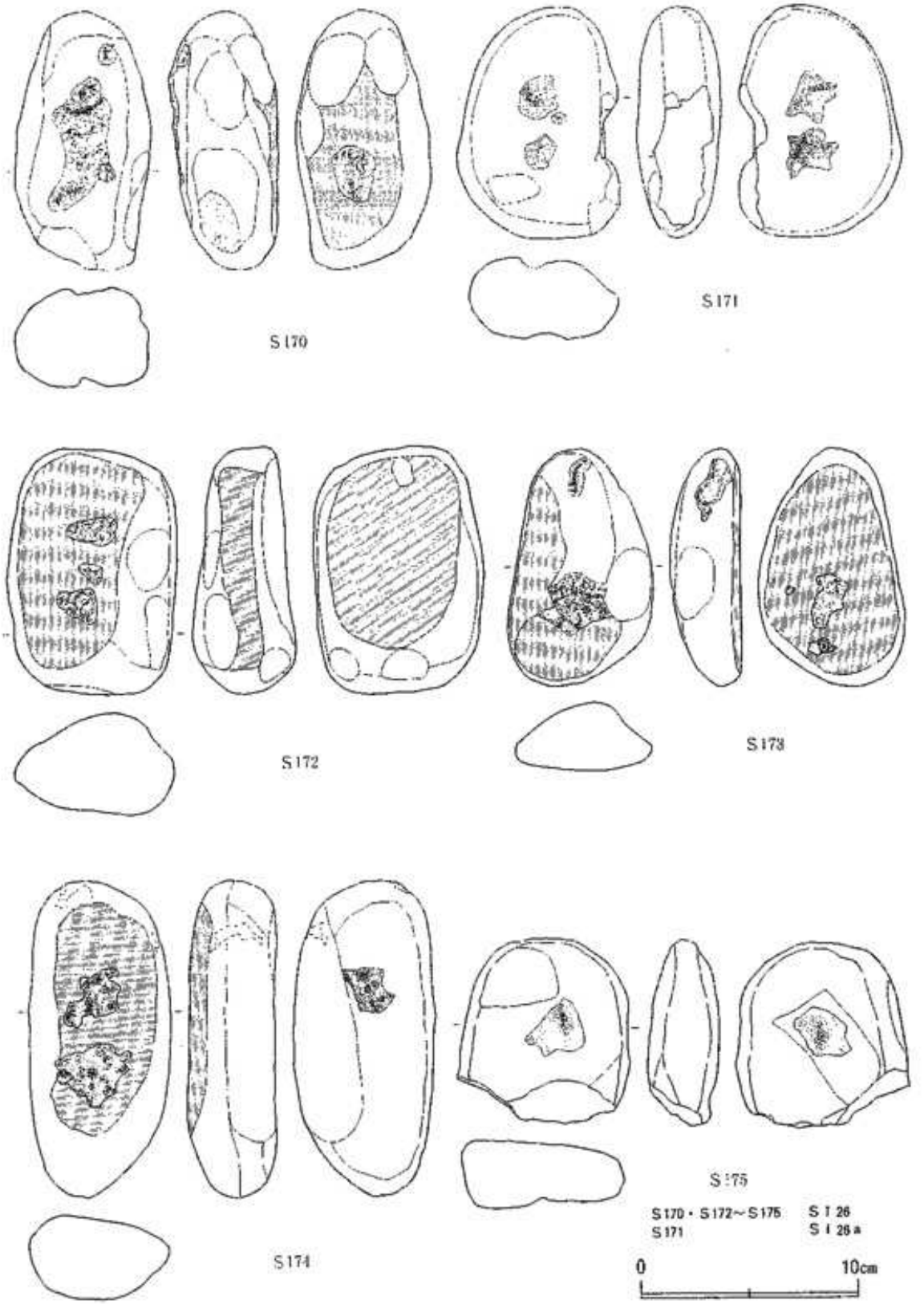
114～116　SK83
117～119　SK58
120～125　SK86

0　10cm

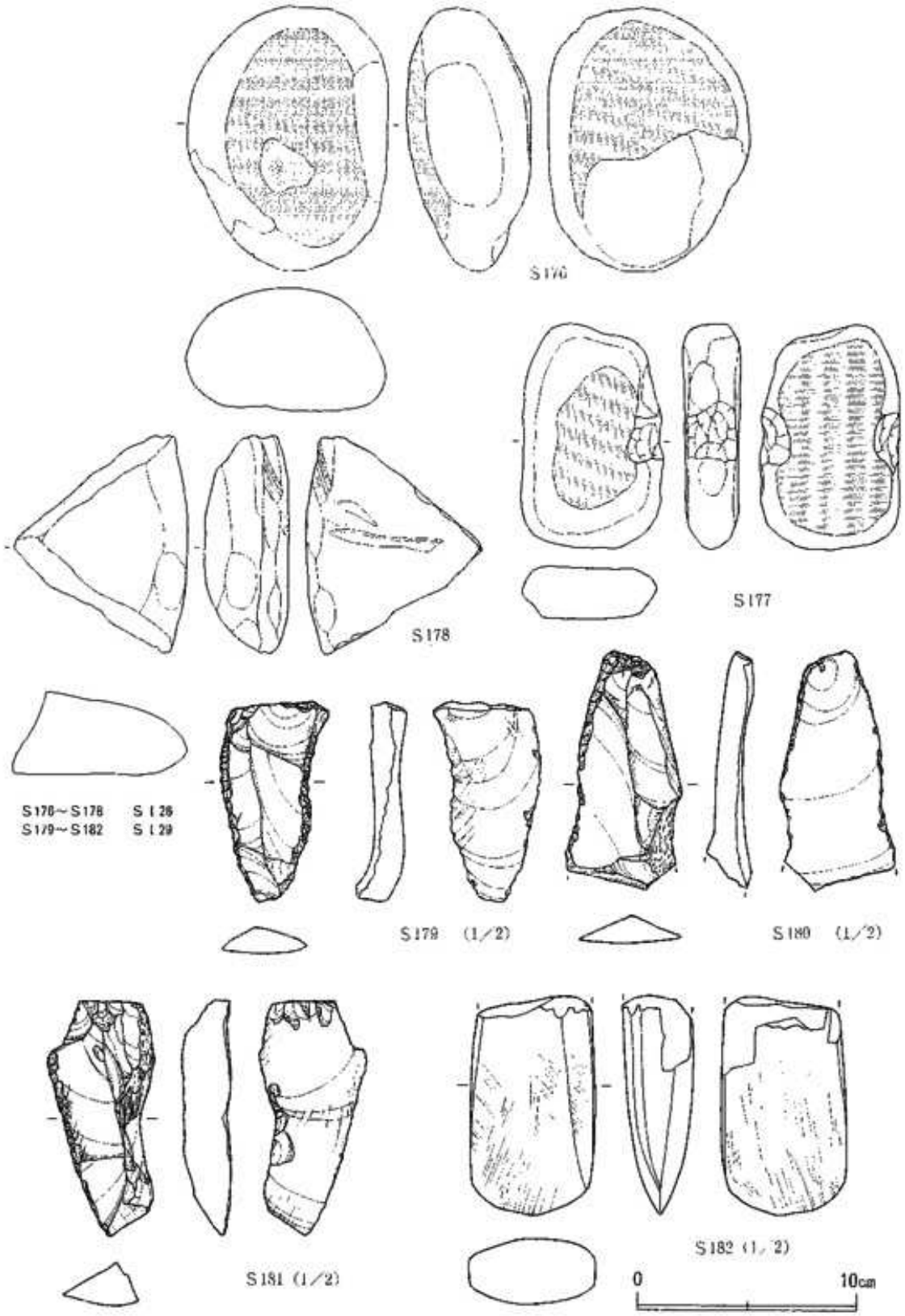
第80図　遺構内出土土器（8）



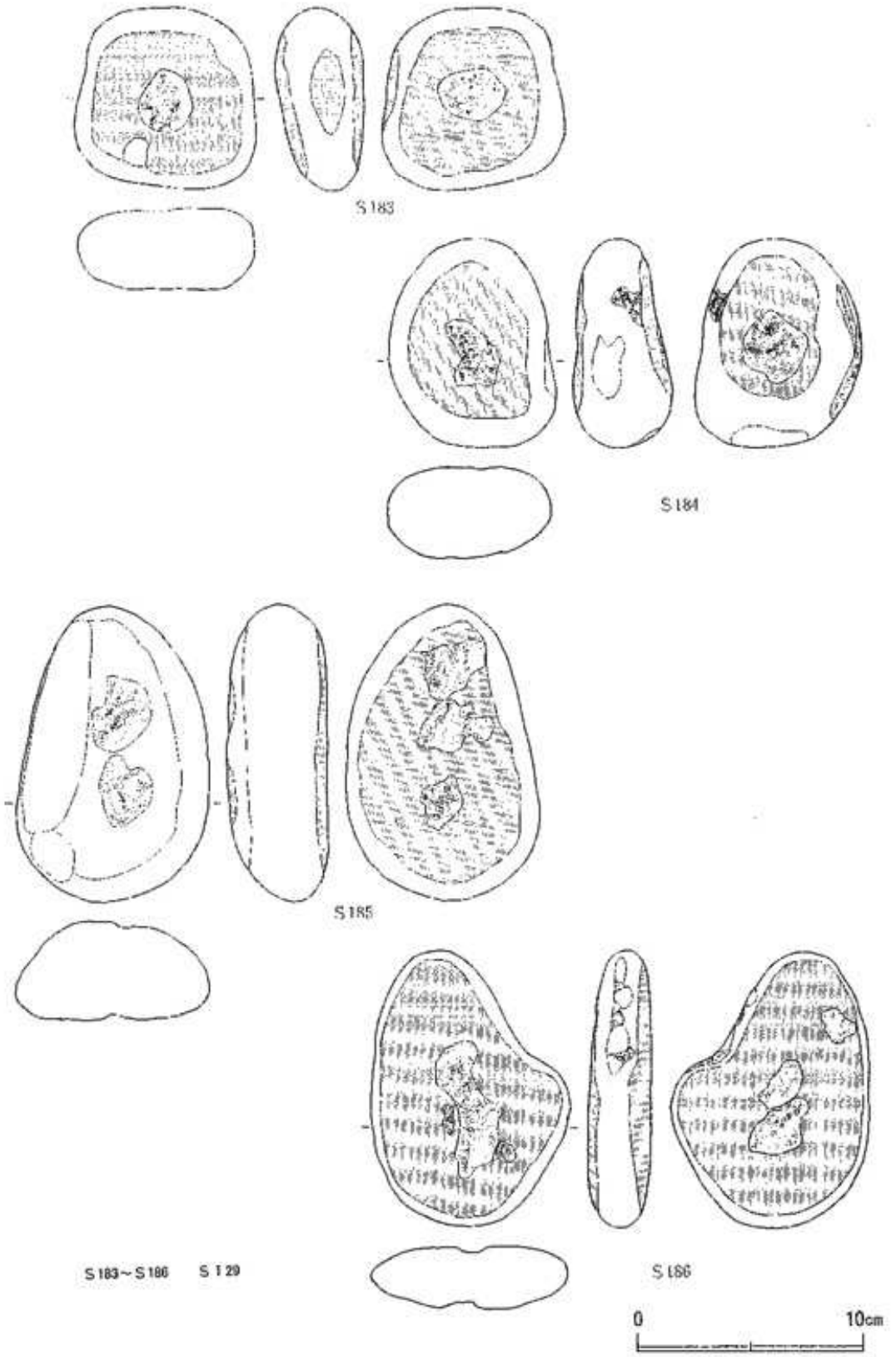
第81図　遺構内出土土器（9）



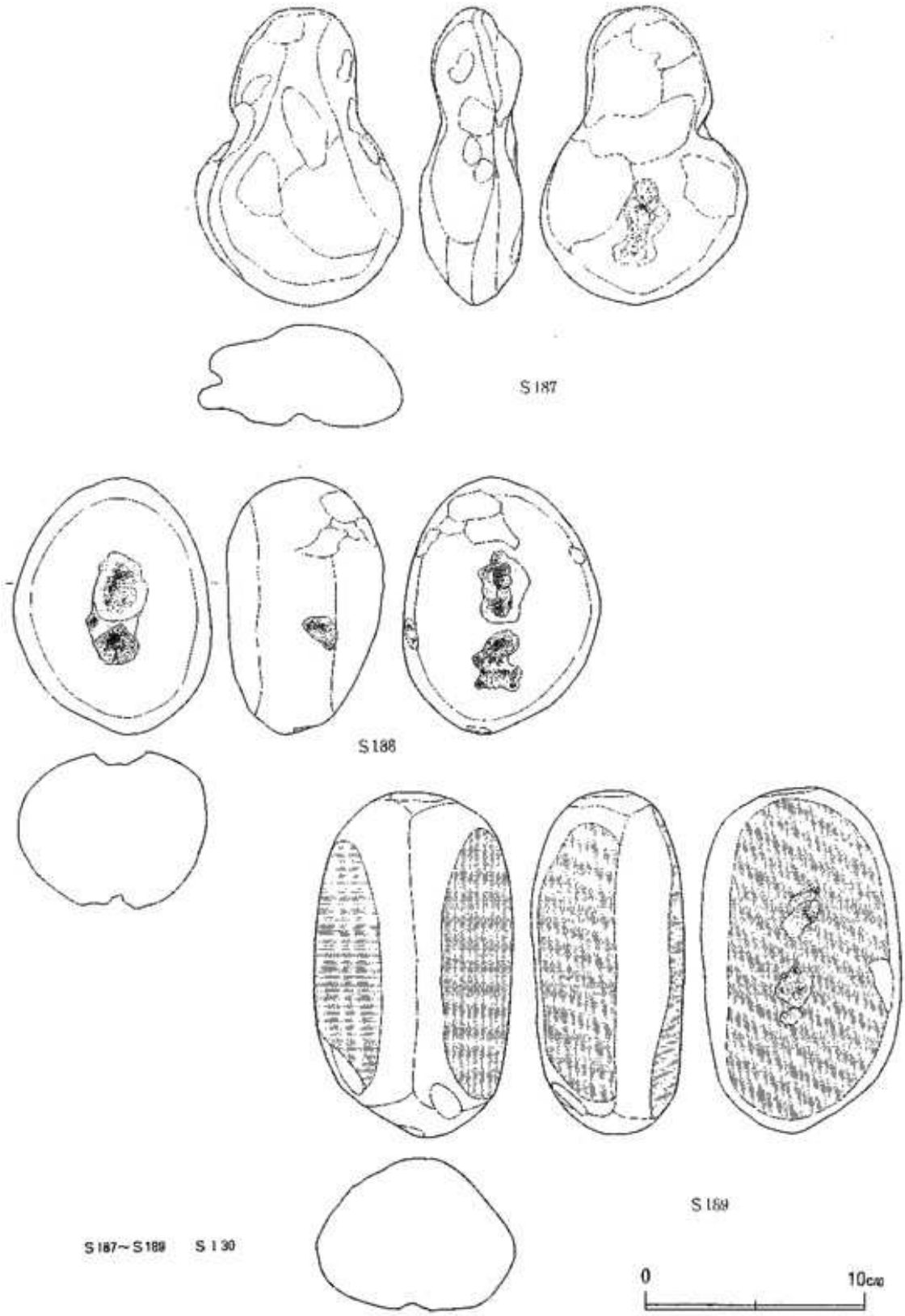
第82図　遺構内出土石器（1）



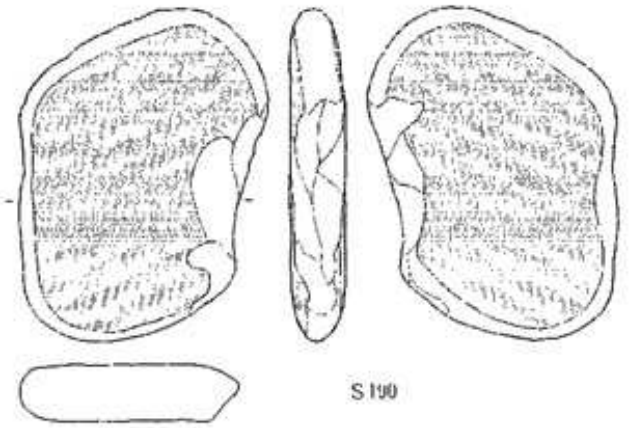
第83図　遺構内出土石器（2）

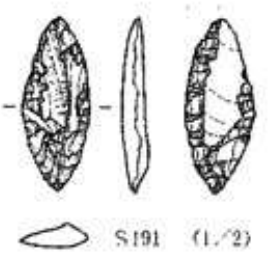


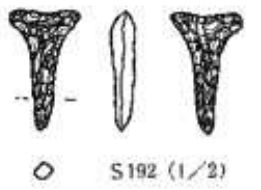
第84図　遺構内出土石器（3）

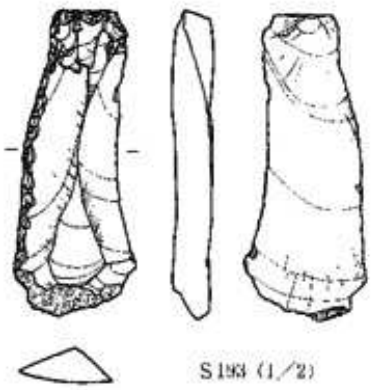


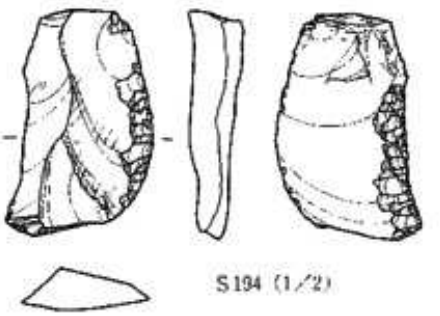
第85図　遺構内出土石器（4）

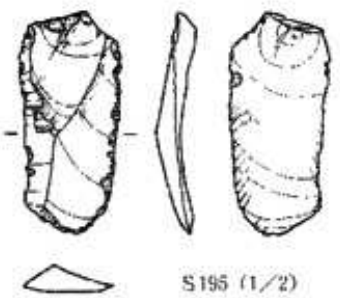


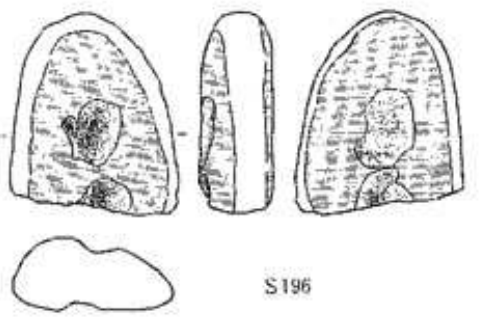




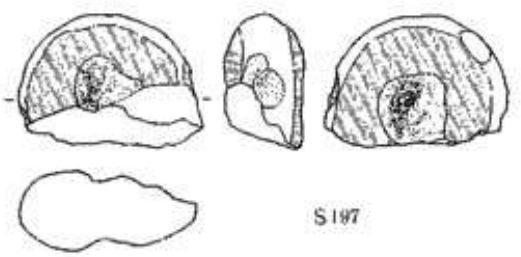




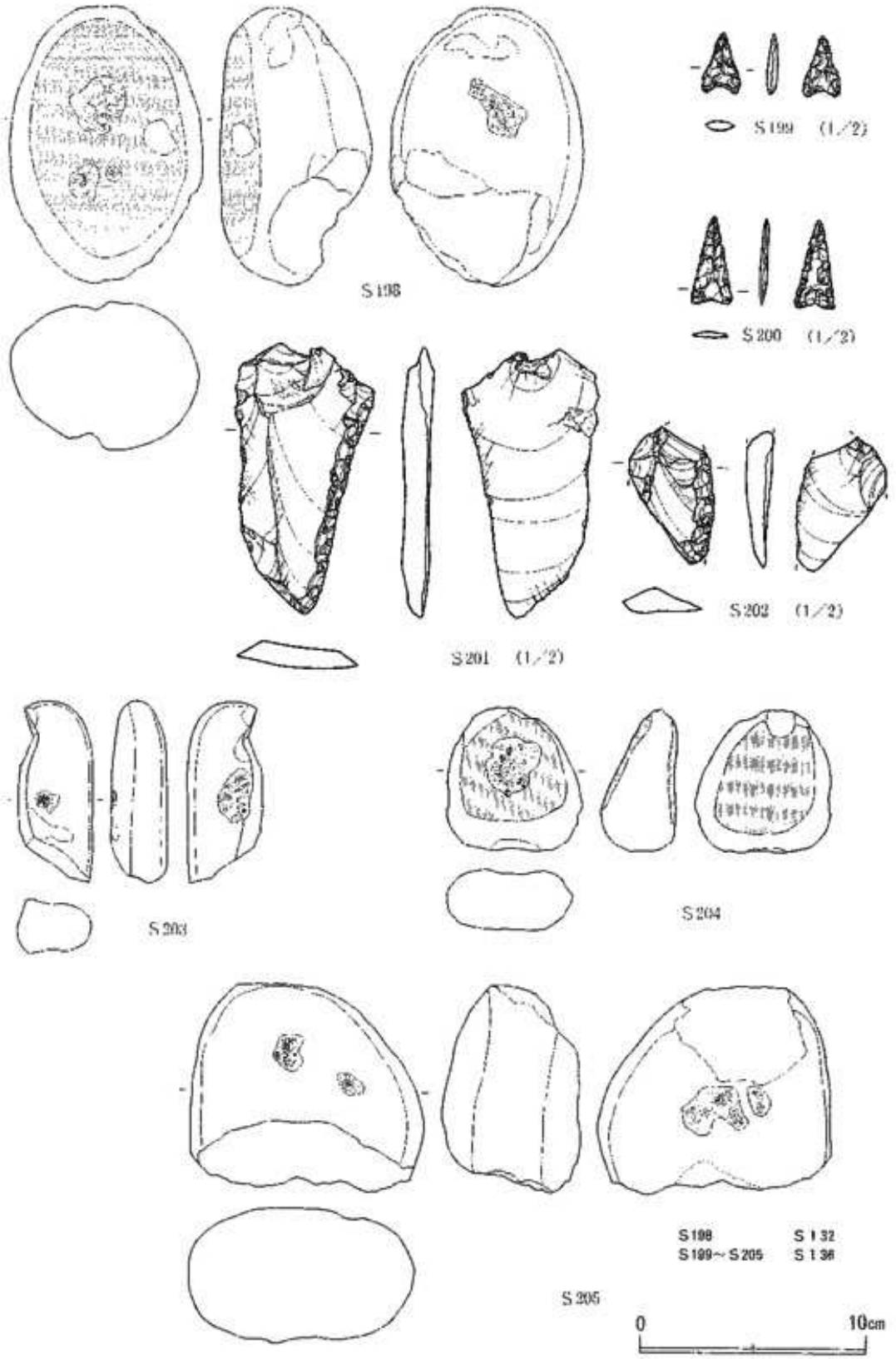




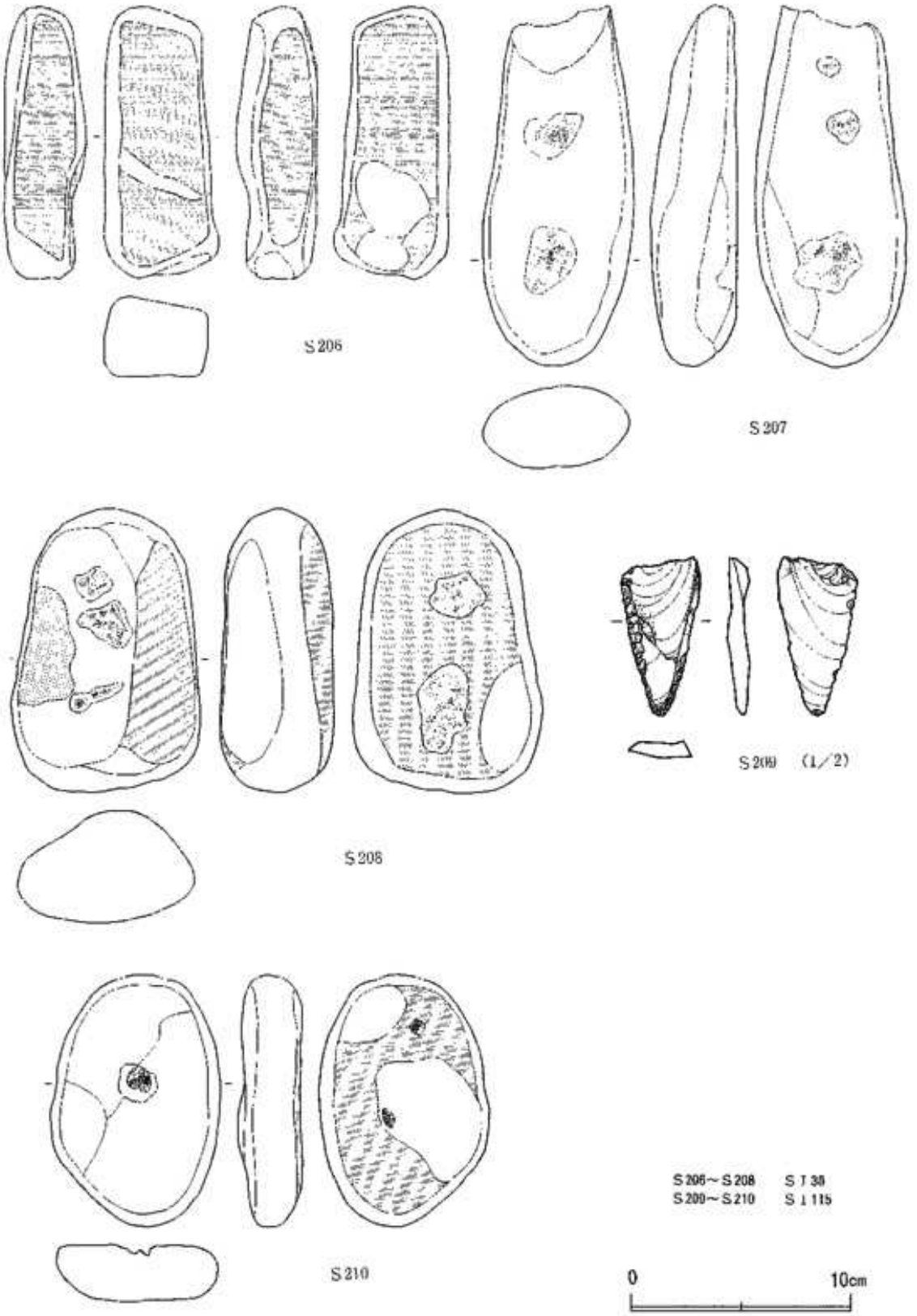
S190　　S130
S191～S197　　S131



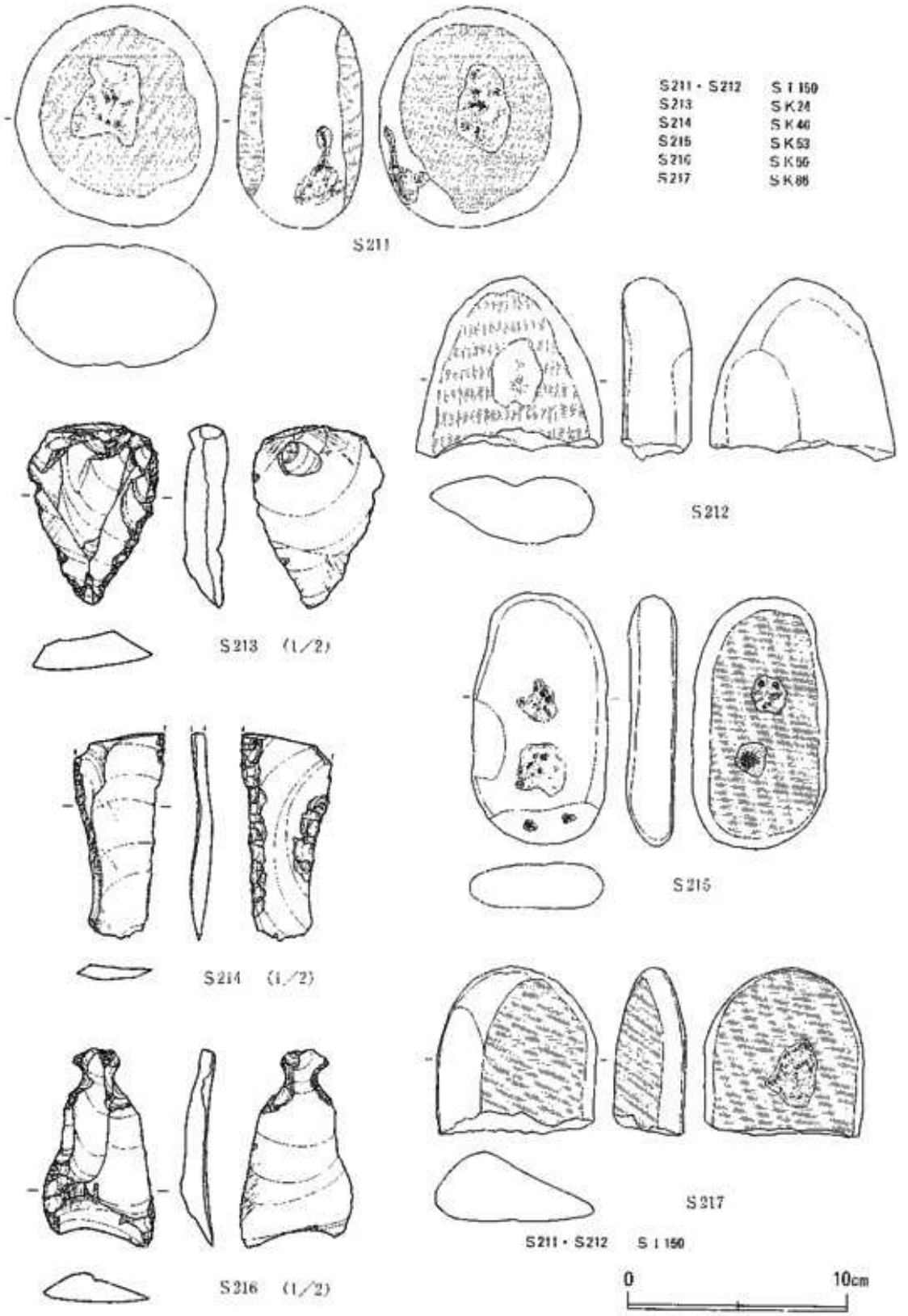
第86図　遺構内出土石器（５）



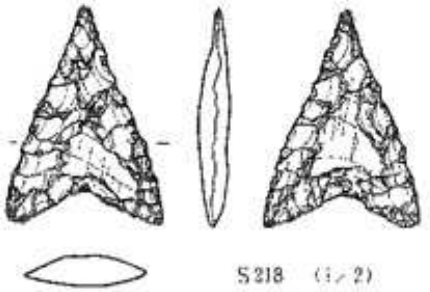
第87図　遺構内出土石器（6）



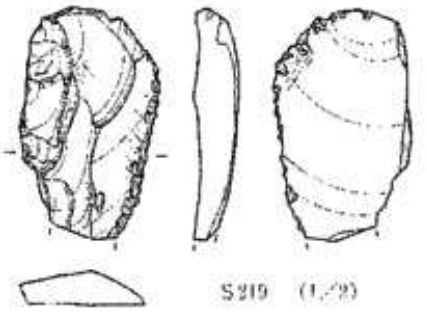
第88図　遺構内出土石器（7）



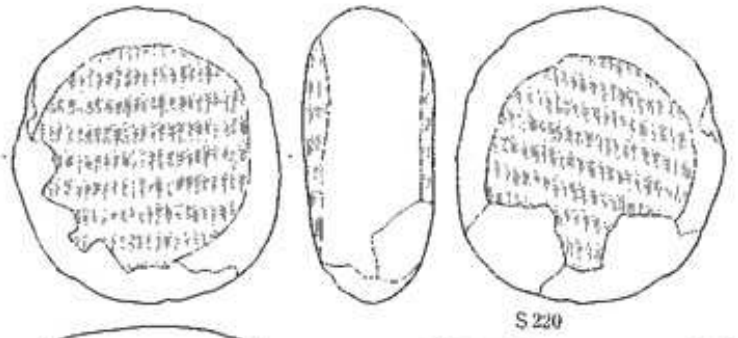
第89図　遺構内出土石器（8）



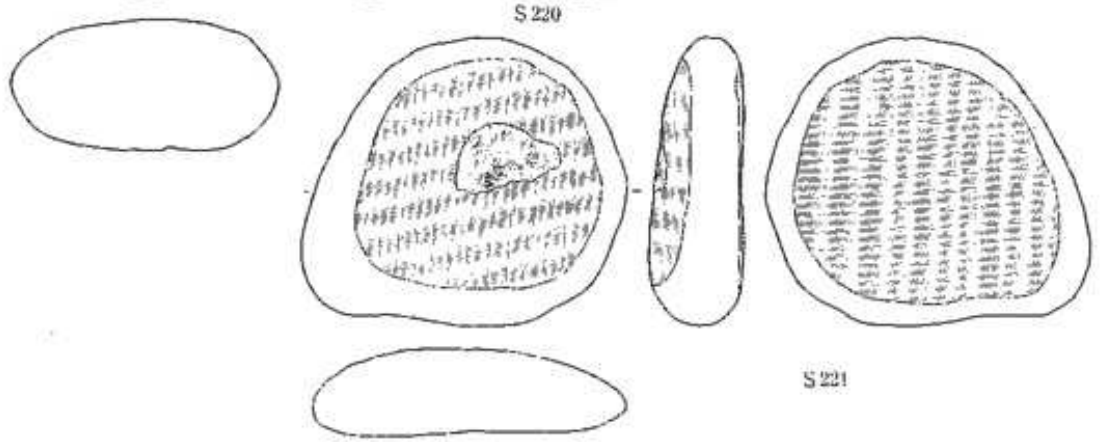
S218　(1/2)



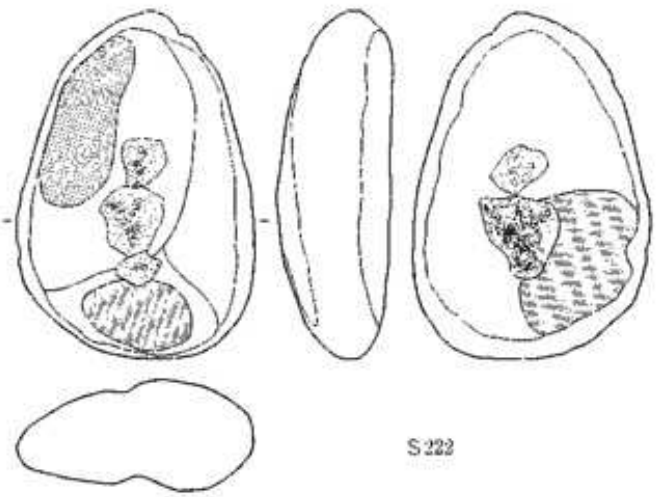
S219　(1/2)



S220



S221

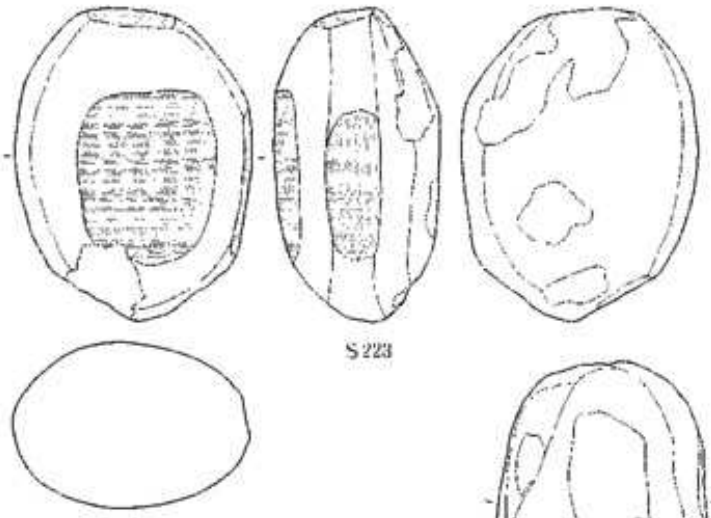


S222

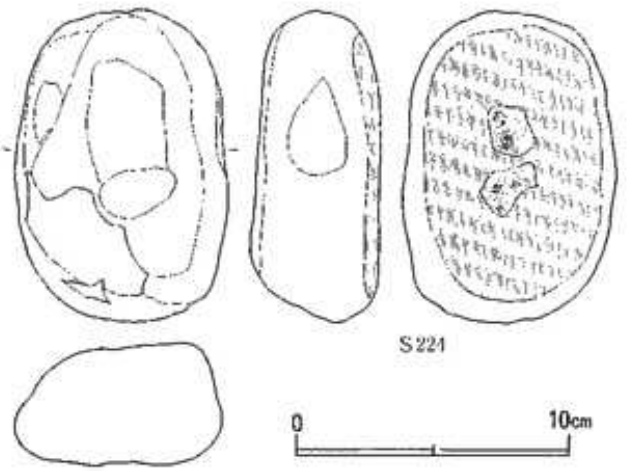
S218・S219	SX38
S220	SKP132
S221	SKP138
S222	SKP184

0　10cm

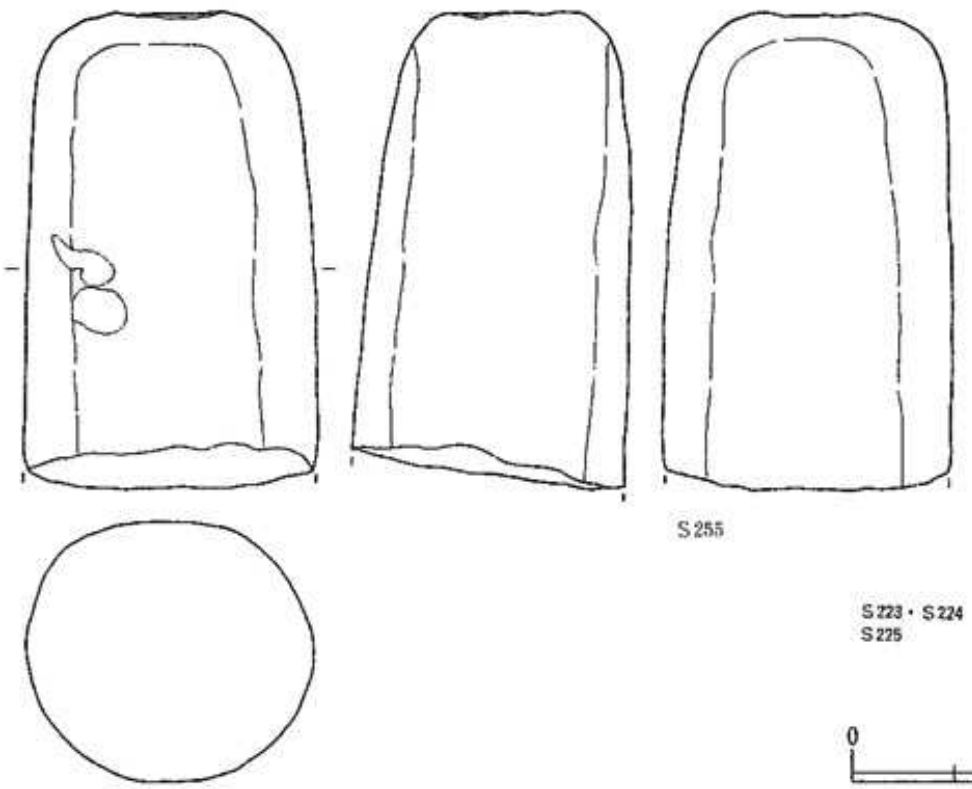
第90図　遺構内出土石器（9）



S223



S221



S255

S223・S224　S X125
S225　S I 36

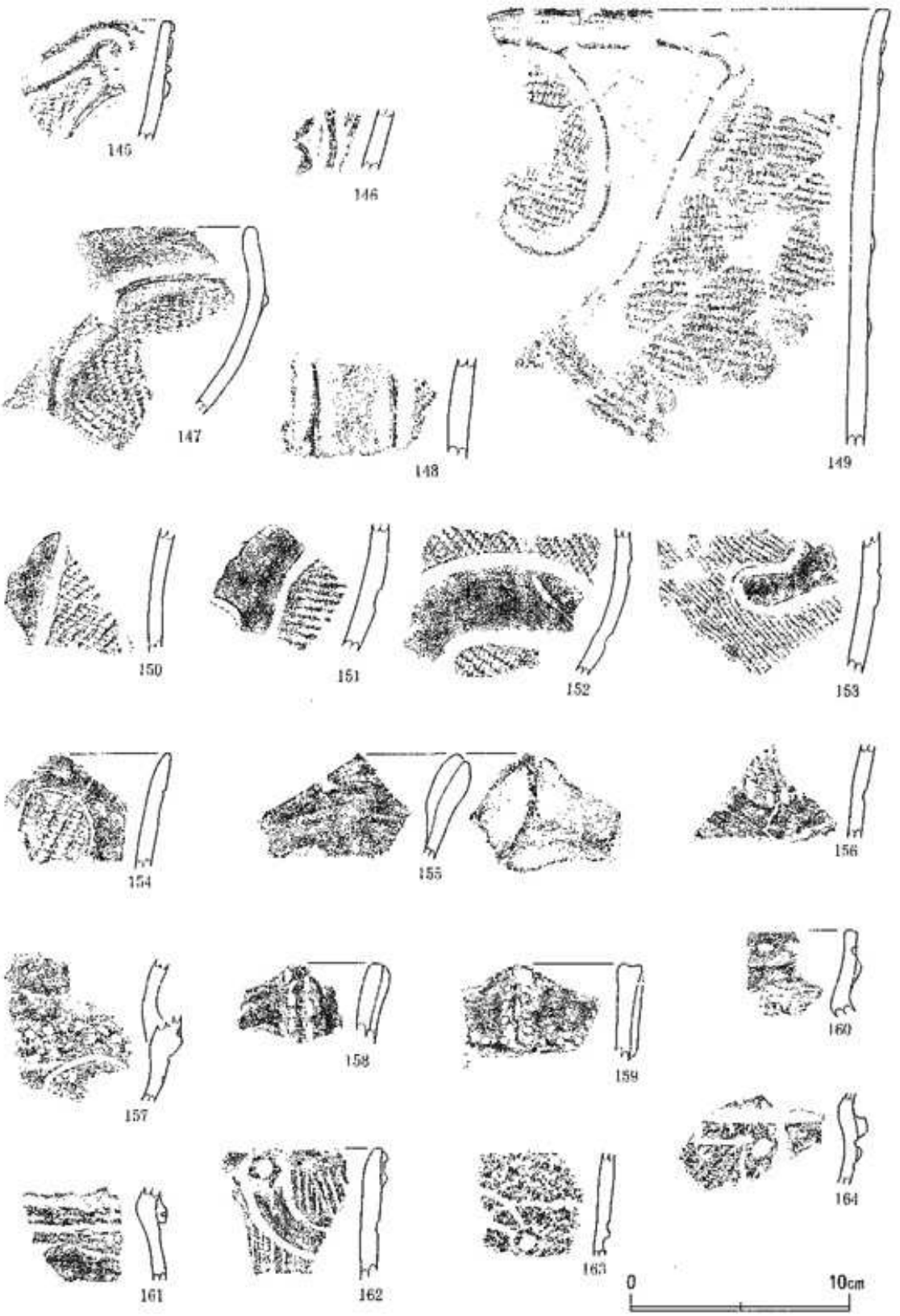
第91図　遺構内出土石器（10）

るもの（196・199）がある。

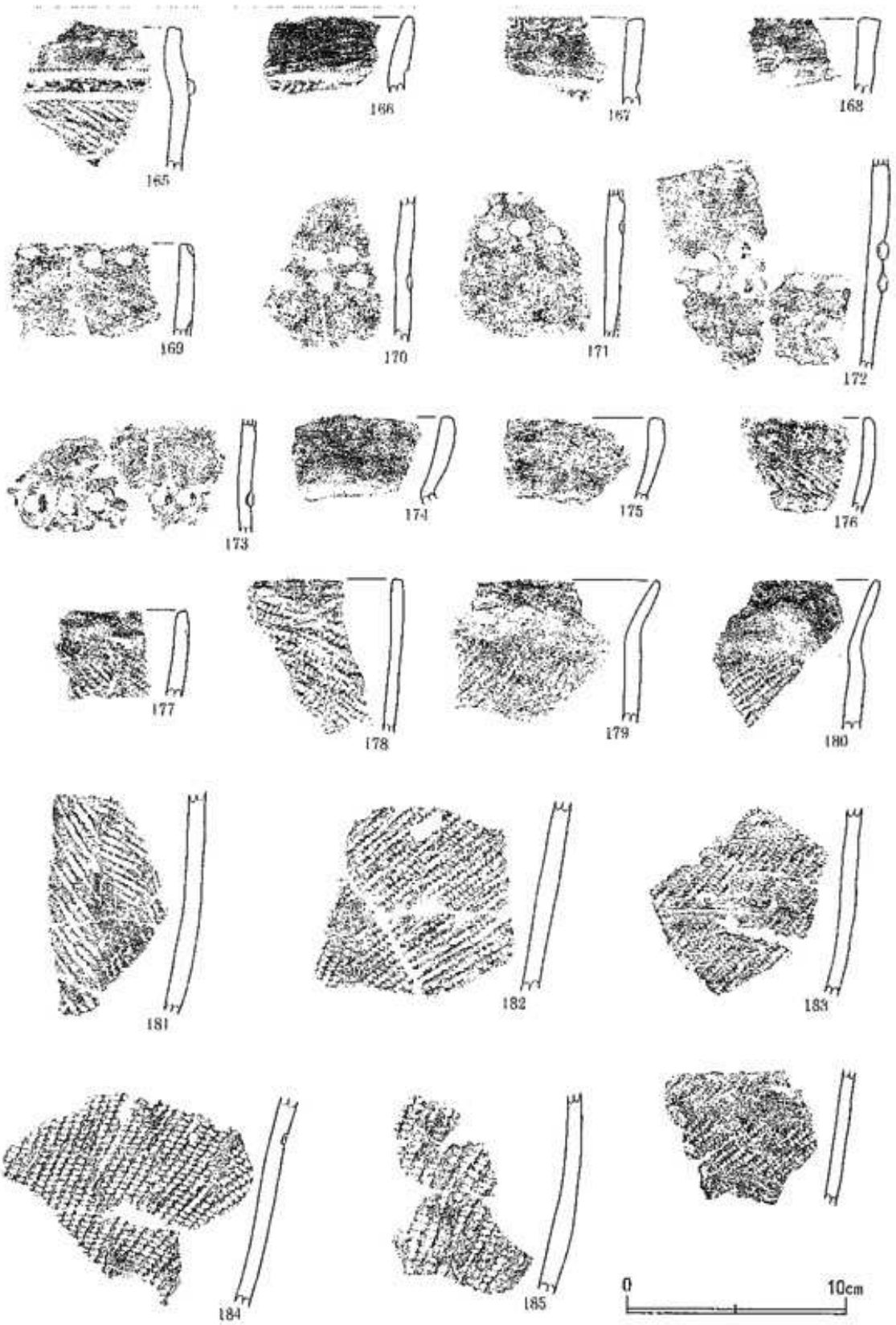
（2）石器（第96～100図、図版44～46・49）

遺構外から出土した石器には、錐（S226）、小型石鏃（S227）、スクレイパー（S228～S240）、剥片石斧（S245・S246）、凹石・磨石（S247～S255）などがある。

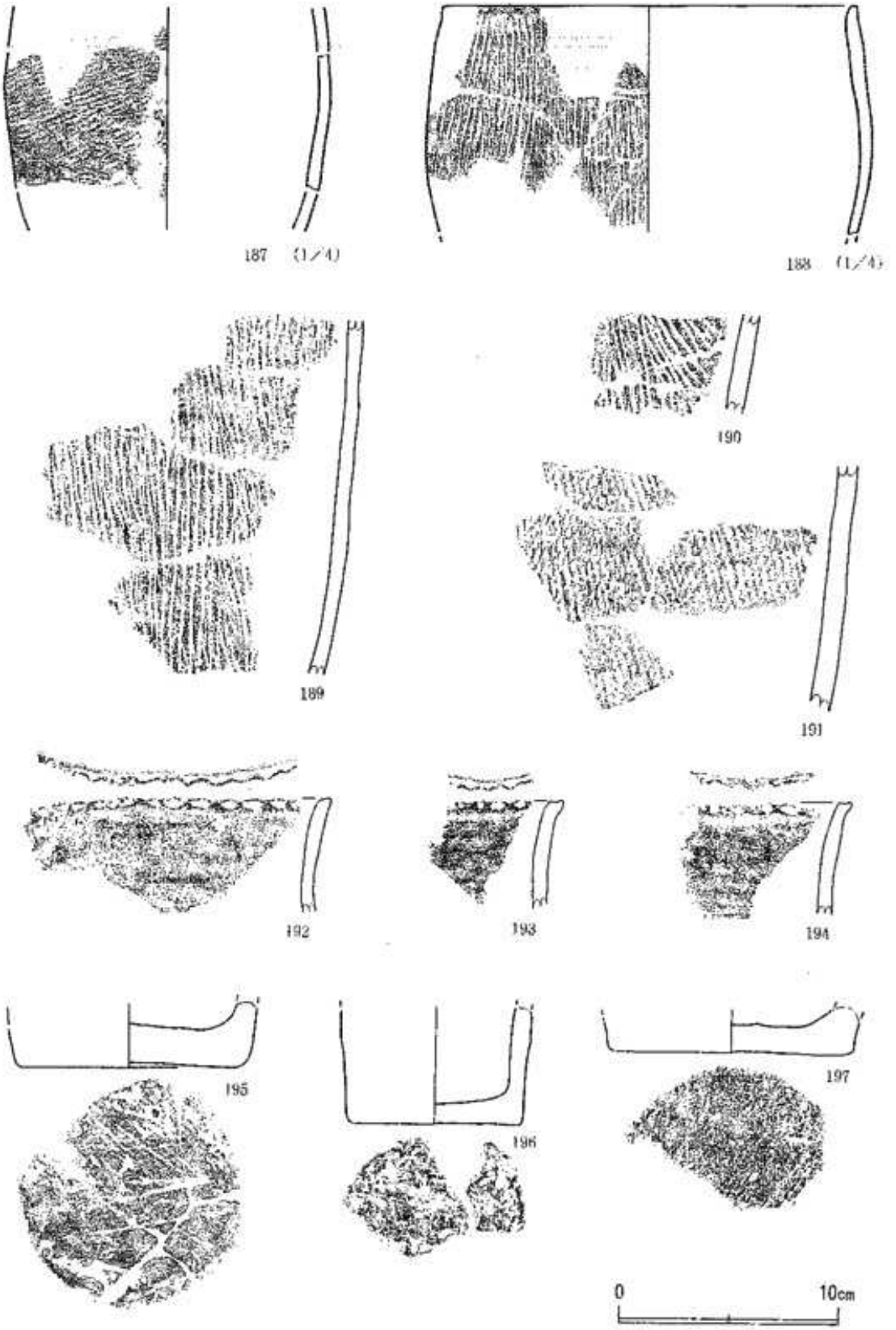
S226は両面に細かな剥離が入るT字形のつまみ部を有する錐で、錐部先端は欠損している。S227の小型の石鏃は、中高で刃部の調整は細かい。S228～S231は縦長剥片の先端を刃部としたスクレイパーで、先端が丸みのあるもの（S228～S230）と鋭角をなすもの（S231）がある。S232は刃部を直刃状にしたもので、S234は礫皮面のある横長剥片である。打点の反対側と右側縁とに粗い調整を施して刃部をつくったものである。S233・S235～S241は側縁に刃部をもつ。S235は両側縁に細かい調整を施し、S239は粗い調整を施したものである。S242は尖頭器状の石器で、片側全面に粗い調整を施したものである。S243は縦長剥片の右側縁に二次加工がある。S244は先端部が三角形状を呈しているが、調整はそれほど及んでいない。S245とS246は磨製石斧である。前者は基部と刃部を欠損しており、後者は両側が丁寧に磨かれた定角式の石斧である。S246の刃部右側はやや短くなっている。S247～S253は磨石と凹石を兼ねたもので、S254・S255は磨石である。S247～S252は、扁平な礫で断面の厚いS253とS248を除くと両側に凹部をもつ。S254・S255は断面の厚い礫で両面を磨り面として利用している。



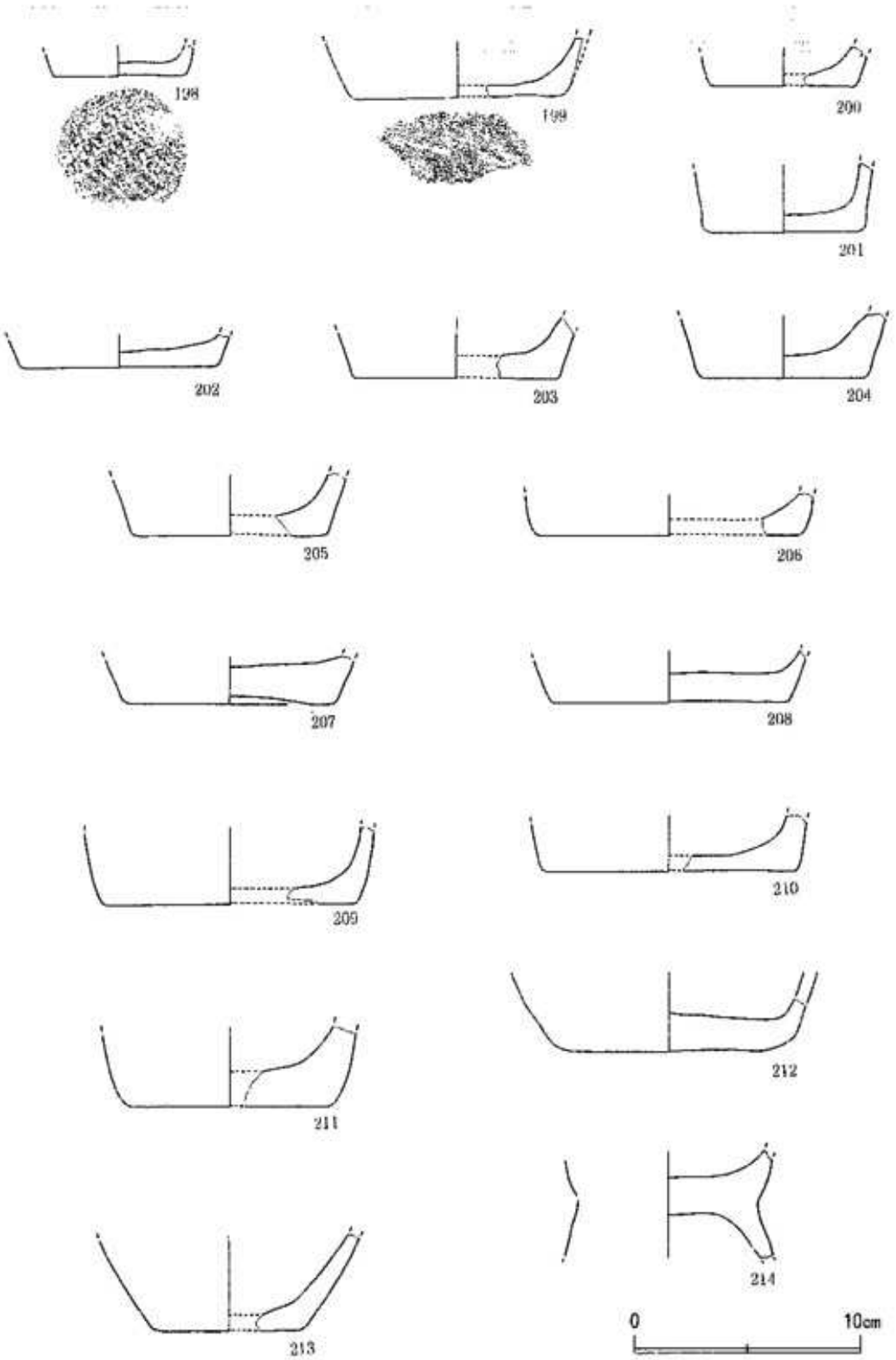
第92図　遺構外出土土器（1）



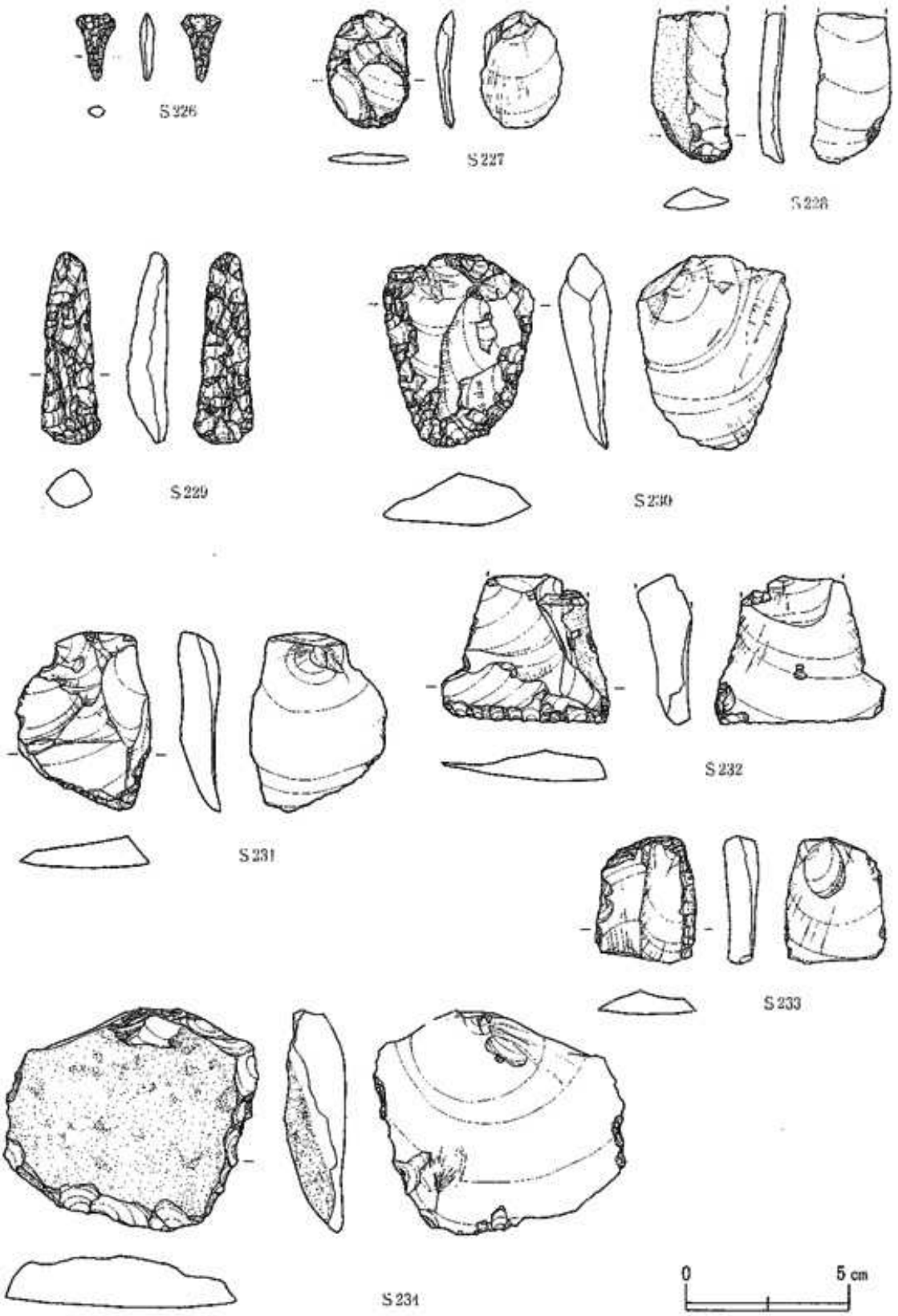
第93図　遺構外出土土器（2）



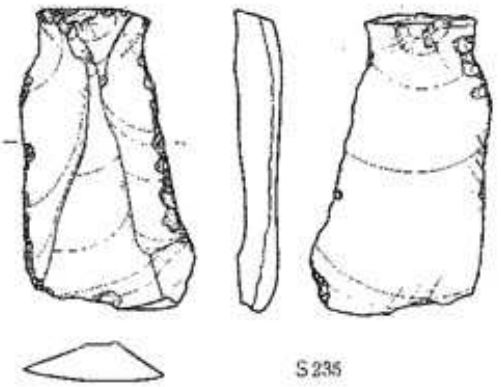
第94図　遺構外出土土器（3）

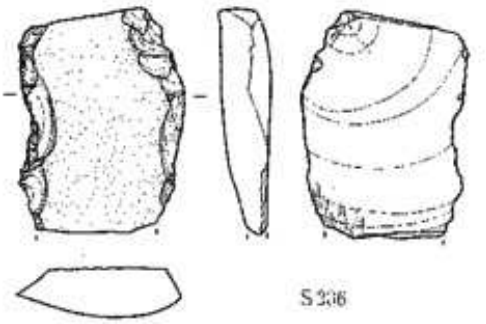


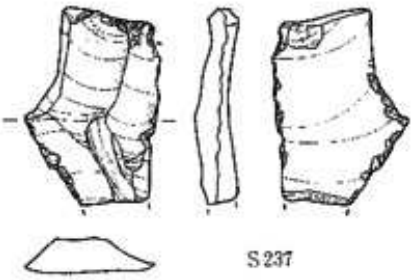
第95図　遺構外出土土器（4）

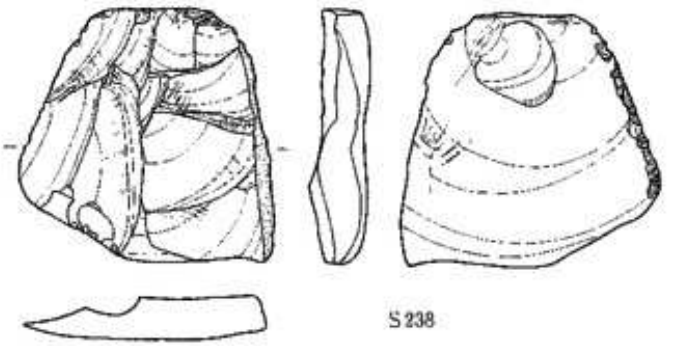


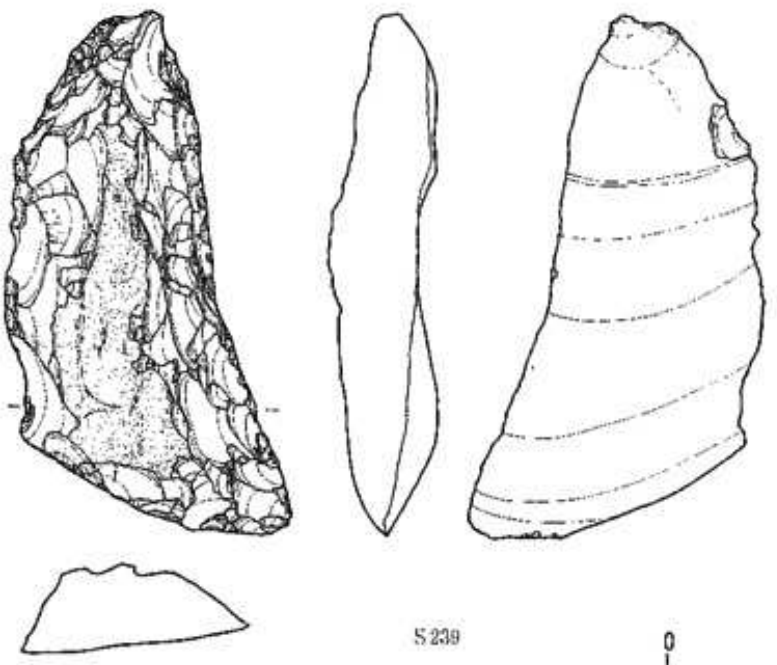
第96図　遺構外出土石器（5）



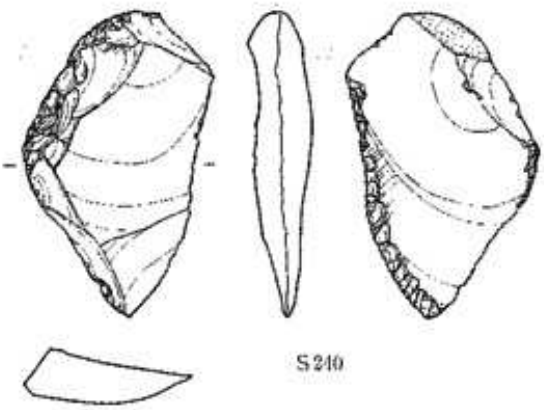


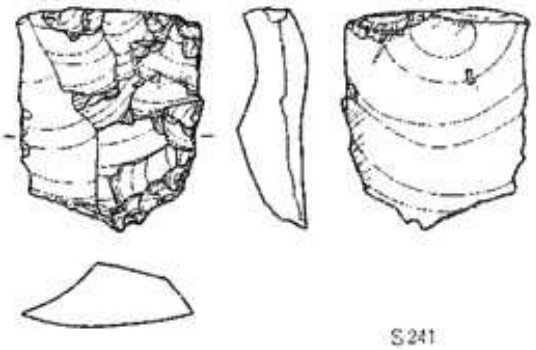


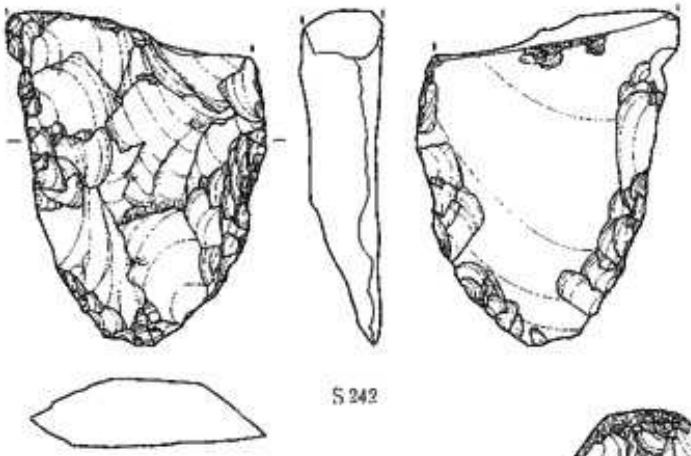


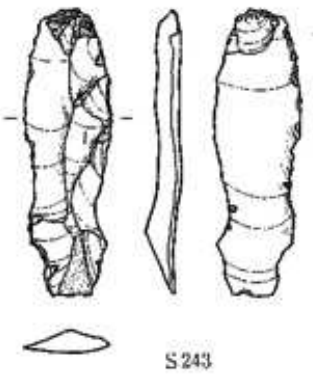


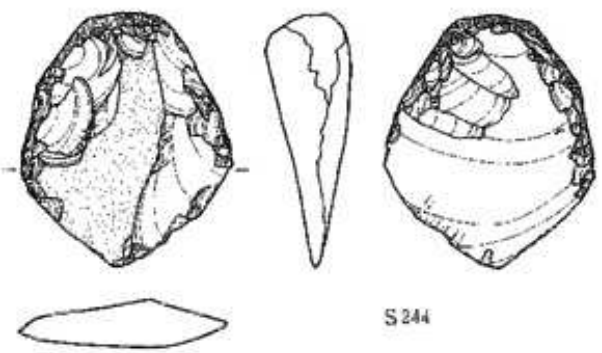
第97図　遺構外出土石器（6）

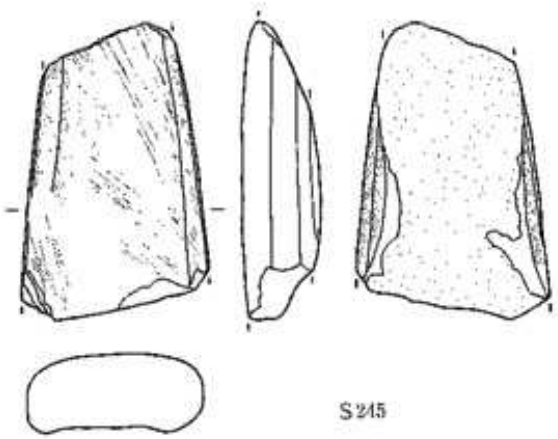


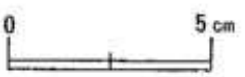




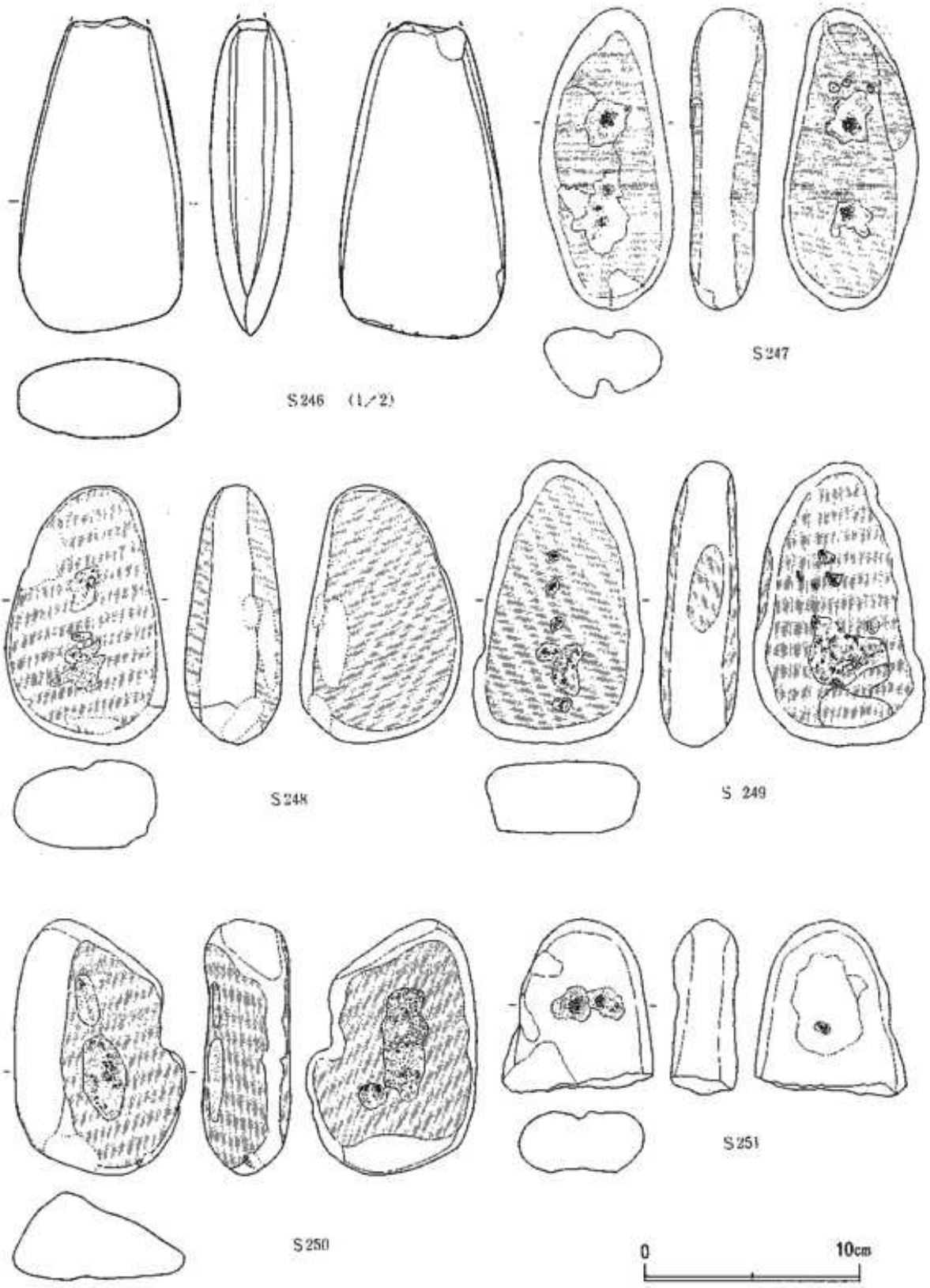




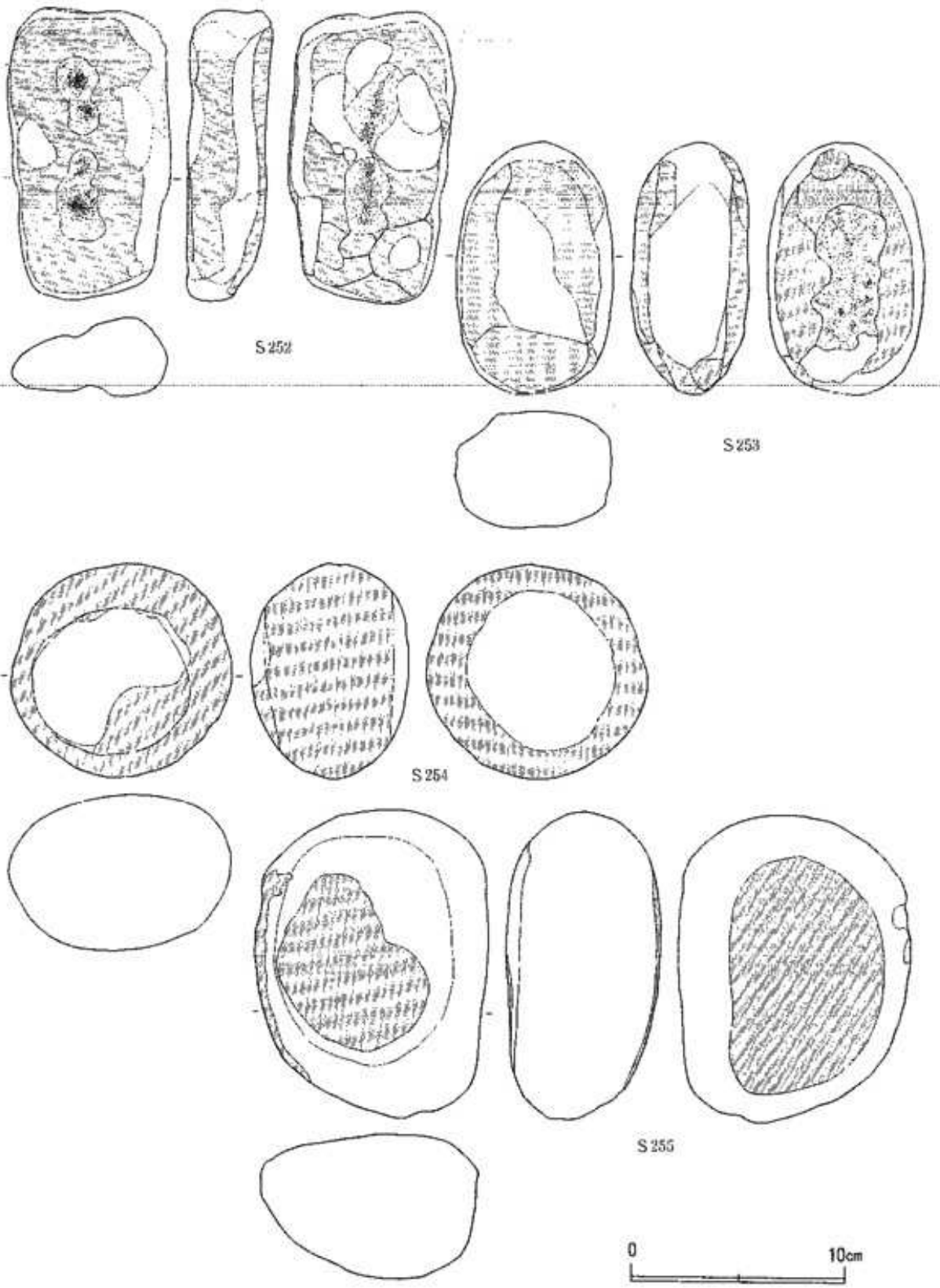




第98図　遺構外出土石器（7）



第99図　遺構外出土石器（8）



第100図　遺構外出土石器（9）

第9表　石器観察表（6）

石器番号	図版番号	出土地区	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質
S170	47	SI26	凹石	119	63	51	440.8	堆積岩
S171	47	SI26a	〃	107	75	39	390.6	安山岩
S172	47	SI26	〃	114	79	48	481.4	〃
S173	47	〃	〃	110	67	33	257.7	〃
S174	47	〃	〃	147	65	41	543.6	〃
S175	47	〃	〃	86	79	33	296.3	〃
S176	47	〃	〃	121	92	57	780.5	〃
S177	47	〃	〃	103	65	26	281.4	〃
S178	47	〃	石皿	100	80	38	280.2	〃
S179	44	SI29	スクレイパー	61	33.5	14	15.9	－
S180	44	〃	〃	73	35	14	22.9	頁岩
S181	44	〃	〃	72	33	15	28.9	〃
S182	44	〃	磨製石斧	67	38	22	94.3	－
S183	47	〃	凹石・磨石	81	81	40	325.9	安山岩
S184	47	〃	〃	93	75	50	375.2	－
S185	47	〃	〃	132	85	45	655.9	－
S186	47	〃	〃	123	89	28	353.0	安山岩
S187	47	SI30	凹石	136	94.5	47	595.2	〃
S188	47	〃	〃	118	91	72	716.5	堆積岩
S189	47	〃	凹石・磨石	159	92	70	1277.0	〃
S190	48	〃	磨石	123	92	21	296.5	〃
S191	44	SI31	石鏃	43.5	17	7	4.3	頁岩
S192	44	〃	石錐	29.5	17.5	6	1.6	〃
S193	44	〃	スクレイパー	76	30	11	20.8	〃
S194	44	〃	〃	56	36	14	22.6	〃
S195	44	〃	〃	55	25	10	7.7	〃
S196	48	〃	凹石・磨石	75	62	28	138.9	安山岩
S197	48	〃	〃	50	68	30	94.7	〃
S198	48	SI32炉	〃	124	86	67	794.6	〃
S199	44	SI36	石鏃	18	11	3	0.5	頁岩
S200	44	〃	〃	26	12	2.5	0.6	〃
S201	44	〃	スクレイパー	80	41	9	24.8	〃
S202	－	〃	〃	40	26	8	6.6	－
S203	48	〃	凹石	80	33	26	75.3	安山岩
S204	48	〃	凹石・磨石	64	61	34	138.7	〃
S205	48	〃	凹石	92	104	62	523.8	〃
S206	48	〃	磨石	124	53	37	362.7	〃
S207	48	〃	凹石	164	69.5	40	508.5	〃
S208	48	〃	凹石・磨石	130	87	52.5	736.0	〃
S209	44	SI115	スクレイパー	49	24	7	5.4	－
S210	－	〃	凹石・磨石	116	78	30	248.9	安山岩
S211	－	SI150	〃	101.5	93	57.5	676.0	〃
S212		〃	〃	84	86	32	214.4	〃

第10表　石器観察表（7）

石器番号	図版番号	出土地区	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石　質
S213	44	SK24	スクレイパー	56	40	12	24.0	頁　岩
S214	44	SK46	〃	63	28	6	9.4	〃
S215	—	SK53	凹石・磨石	116	62	23	238.9	安山岩
S216	—	SK56	石　匙	61	34	10	13.1	頁　岩
S217	—	SK86	凹石・磨石	77	73	33	215.4	—
S218	44	SX38	石　鏃	54	38.5	8	10.9	頁　岩
S219	44	〃	スクレーパー	57	35	11	19.7	〃
S220	—	SKP132	磨　石	110	99	54	624.3	安山岩
S221	—	SKP138	凹石・磨石	107.5	121	35	568.4	〃
S222	—	SKP184	〃	129	88	43	521.7	〃
S223	—	SX125	磨　石	115	79	48	582.2	〃
S224	—	〃	凹石・磨石	115.5	87.5	61	781.4	〃
S225	46	S136	石　棒	236	144	137	5880.0	—
S226	44	LB51	石　錐	21	12	5	0.8	頁　岩
S227	44	LQ51	石　匙	36	25	5	3.9	〃
S228	44	KM51	スクレイパー	47	25	8	8.5	〃
S229	44	KN51	〃	59	18	13	12.5	〃
S230	44	LD51	〃	60	46.5	16	35.7	〃
S231	45	KQ47	〃	55	41	14	25.8	〃
S232	45	LO57	〃	46	52	17	24.0	—
S233	45	KM50	〃	39	31	11	12.5	頁　岩
S234	45	KN48	〃	69	78	19	94.9	〃
S235	45	LO54	〃	74	44	12	34.4	〃
S236	45	LD51	〃	56	41	13	37.2	〃
S237	45	KR48	〃	49	34	11	13.5	〃
S238	45	LA50	〃	63	63	15	58.5	
S239	45	LJ53	〃	129	72	28	193.5	頁　岩
S240	45	LO57	〃	75	47	16	38.6	〃
S241	45	LC50	二次加工有剝片	55	46	17	39.9	-
S242	46	MN51	〃	83	64	20	94.1	頁　岩
S243	46	LB51	〃	71	22	8	8.8	〃
S244	46	Mトレンチ	〃	63	52	21	53.7	〃
S245	46	LA49	磨製石斧	74	46	20	96.1	—
S246	46	LD51	〃	99	51	26	187.4	—
S247	—	LO51	凹石・磨石	141	63	35	328.8	堆積岩
S248	—	Iトレンチ	〃	121	76	46	459.6	安山岩
S249	—	LC51	〃	133	80	35	539.2	〃
S250	—	LB50	〃	120	80	41	449.7	〃
S251	—	LA51	凹　石	82	71	31	177.9	堆積岩
S252	—	LO54	凹石・磨石	137	77	39	477.9	安山岩
S253	—	LC53	〃	119	74	55	713.1	〃
S254	—	LM57	磨　石	101	103	74	1004.0	〃
S255	—	LC53	〃	145	110	73	1551.1	〃

第6章　自然科学的分析

第1節　上谷地遺跡の考古地磁気調査

上谷地遺跡内で住居跡の炉の焼土、炭焼き窯の床あるいは壁の部分から試料を採集して古地磁気研究を行った。この調査の目的は試料に保存されている熱残留磁気の方向から年代を測定することにある。

住居跡の炉から採集した試料は、ＳＩ36炉Ａから19個、ＳＩ36炉Ｂから16個、ＳＩ36炉Ｃから10個、ＳＮ144から24個、ＳＩ150炉から16個の計85個である(ＳＩ36炉については、焼土範囲が広いので、便宜的に北からＡ～Ｃ部分に分けてある。)。炭焼き窯から採集した試料はＳＮ149から15個、ＳＮ152から30個、ＳＮ05、ＳＮ06、ＳＮ07から各10個、ＳＮ08から６個の計81個である。これらは一辺24mmの立方体状のプラスチックホルダーを挿入する方法を用いた。傾きの補正を行うため走向、傾斜を現地で測定し、後の計算に用いた。

採集した試料はスピナー磁力計(テラテクニカ社製ＲＭ－245)で測定した。スピナー磁力計では一回の測定で磁化の二成分しか測定できない。このため試料を６回回転させて測定を行い、それぞれの成分の４回平均から磁化三成分を求めた。しかし、この磁化の方向はサンプルホルダーに固定した座標系による値である。求めるべき数値は試料採集地点における数値である。現地の走向、傾斜を用いて座標変換を行い、北、東、鉛直下向きの成分を求めた。ある試料に対して交流消磁も行った。交流消磁は二次的に付加した磁化成分を消去する方法である。消磁の例として第101図にＳＩ150炉の場合を示す。この図はZijderveld(1967)の表示法で、黒丸が水平面投影、白丸が垂直面投影である。消磁磁場強度を大きくするに従って磁化成分は減少している。しかも、減少方向は最初から原点に向っているためＳＩ150の場合には二次磁化成分は含まれていないことが分かる。統計的に不適当な試料を取り除いて平均処理を行った。第102図に各試料の磁化分布状況と最終的に得られた平均の磁化方向をシュミット円中にプロットしてある。図中の楕円は95%信頼区間でこの楕円形に95%の確率で真の値があると考えてよい。楕円は小さい方が望ましい。第11表には得られた結果をまとめてある。

炉跡の試料に対しての古地磁気結果を見ると、ＳＩ36炉Ａ、ＳＩ36炉Ｂ、ＳＩ36炉Ｃの試料に対しては誤差が大きく、年代の推定は困難であった。しかし、ＳＮ144、ＳＩ150炉の試料に関してはまとまりもよく、年代推定は可能と思われる。Ohno(1991)は別府湾の海底堆積物を用いて過去一万年間の地磁気偏角、伏角変化を求めている。この偏角、伏角変化を秋田での値に変換し、測定値と共に示したのが第103図である。実線が地磁気永年変化で4400Ｂ.Ｐ.から3800

B.P.まで示してある。黒丸が測定値でSN144、SI150炉共に4200B.P.付近に極めて近いことが分る。従って、SN144、SI150炉の考古地磁気年代は4200B.P.前後と推定できる。考古学的には縄文中期後葉と解釈されている点と矛盾はない。

SN05～SN08の考古学的な解釈ではSN08が一番年代的に古く、SN07、SN06、SN05の順で若くなることが示されている。これらの試料に対しては残念ながら交流消磁を行っていないため誤差が大きく、年代を推定するには至らなかった。SN149、SN152は隣接した遺構である。広岡(1988)のデータを秋田に変換した地磁気変化曲線とこれらの測定結果を示したのが第104図である。900年から1250年程度までは東に数度だけ地磁気変化曲線を東に移動する必要があることを考慮して年代を推定すると、SN149が1440±80年、SN152が1180±70年と得られる。SN149の方がSN152に比べて新しいことになる。

参考文献

広岡公夫(1988)：古地磁気・考古地磁気編年による年代測定、地質学論集、第39号、305－318.

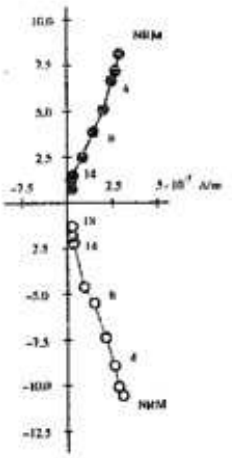
Ohno,Masao(1991)：Study of the earth's magnetic field for the past 10,000 years.

Zijderveld,J.D.A(1967)：Methods in paleomagnetism.Elsevier.254－268.

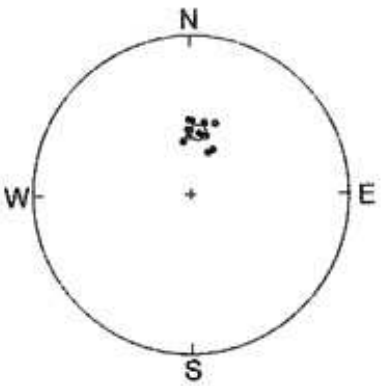
第11表　上谷地遺跡残留磁化測定結果

遺構名	形態	考古年代	資料数	消磁 (mT)	伏角 (°)	偏角 (°)	精密度 パラメータ	95%信頼 区間(°)	考古地磁気 推定年代
SI 36	炉跡A	縄文中期末葉	12	0	42.83	4.17	21.77	9.52	−
SI 36	炉跡B	縄文中期末葉	7	8	58.72	19.45	24.66	12.40	−
SI 36	炉跡C	縄文中期末葉	4	4	50.88	16.87	180.10	6.87	−
SN144	炉跡	縄文中期末葉	8	2	57.05	8.44	40.17	8.85	4200B.P.前後
SI150	炉跡	縄文中期末葉	12	4	57.55	7.59	104.11	4.27	4200B.P.前後
SN149	炭窯	中世以降	8	8	45.07	5.19	93.27	5.77	1440±80年
SN152	炭窯	中世以降	23	6	57.06	11.11	53.78	4.17	1180±70年
SN 05	炭焼き窯	中世～現代	9	0	61.95	−0.63	17.27	12.75	−
SN 06	炭焼き窯	中世～現代	6	0	56.10	13.49	21.26	14.87	−
SN 07	炭焼き窯	中世～現代	3	0	43.91	2.27	27.73	23.87	−
SN 08	炭焼き窯	中世～現代	4	0	42.62	−45.46	31.66	16.59	−

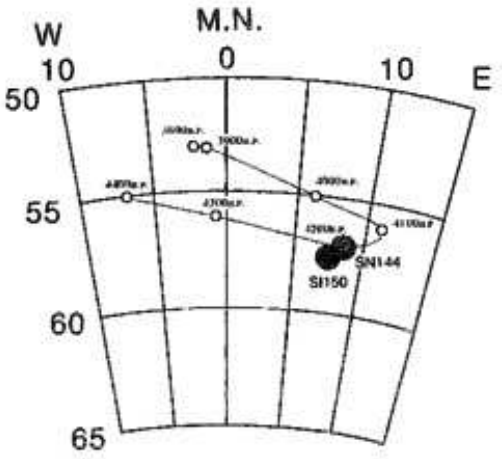
（注）消磁磁場は交流消磁を行った磁場強度、偏角、伏角は秋田における磁北基準の値である。



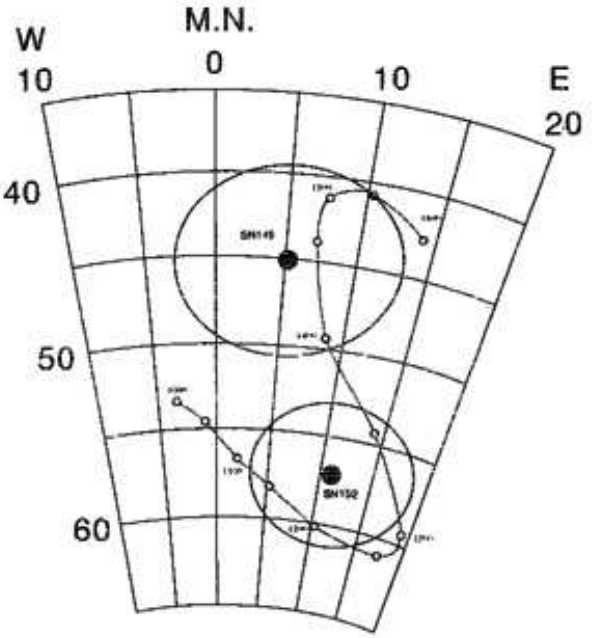
第101図　交流消磁による磁化の減少
図中の数字は消磁磁場強度で単位はミリテスラである



第102図　消磁後の磁化方向の分布
平均と95%信頼区間を示す



第103図　ＳＮ144、ＳＩ150炉の結果と4400Ｂ.Ｐ.～3800Ｂ.Ｐ.の地磁気変化曲線



第104図　ＳＮ149、ＳＮ152の結果と1000～1600年の地磁気変化曲線

第2節　学習院大学放射性炭素年代測定

年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差σにもとずいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してあります。また試料のβ線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が2σ以下のときには、Modernと表示し、δ^{14}C‰を付記してあります。

記

Code No.	試　　料	年代 (1950年よりの年数)
Gak−16824	Wood Charcoal from 上谷地遺跡	660 ± 90
	No. 1	A.D. 1290
Gak−16825	Wood Charcoal from 上谷地遺跡	950 ± 80
	No. 2	A.D. 1000
Gak−16826	Wood Charcoal from 上谷地遺跡	690 ± 80
	No. 3	A.D. 1260
Gak−16827	Wood Charcoal from 上谷地遺跡	4420 ± 100
	No. 4	2470 B.C.
Gak−16828	Wood Charcoal from 上谷地遺跡	4400 ± 100
	No. 5	2450 B.C.
Gak−16829	Wood Charcoal from 上谷地遺跡	4300 ± 100
	No. 6	2350 B.C.

以上

第3節　炭化物同定

はじめに

上谷地遺跡(平鹿郡山内村平野沢字上谷地所在)は、横手川左岸の台地上に位置する。本遺跡では、これまでの発掘調査により縄文時代中期の住居跡・土坑、中世以降の炭焼成遺構などが検出されている。

今回の分析調査では、縄文時代中期の住居跡(ＳＩ26ｂ・ＳＩ30・ＳＩ36)・土坑(ＳＫ24・ＳＫ25)・フラスコ状遺構(ＳＫ28)・中世以降の炭焼成遺構(ＳＮ01・ＳＮ05)から検出された炭化材および竪穴住居跡の埋土中から検出された種実遺体について同定を行う。

1．炭化材同定

(1) 試料

試料は、縄文時代中期の竪穴住居跡(ＳＩ30・ＳＩ36)、土坑(ＳＫ24・ＳＫ25)、フラスコ状土坑(ＳＫＦ28)、中世以降の炭焼成遺構(ＳＮ01・ＳＮ05)の各遺構から検出された炭化材7点である。また、種実遺体試料(試料番号8)中にも炭化材が数多く混入していたため、この中から比較的大きく保存状態も良好な5点を任意に選択して同定する。住居跡から検出された炭化材は住居構築材、炭焼成遺構から検出された炭化材は燃料材と推定されている。また、土坑および種実遺体試料中から検出された炭化材については用途不明である。

(2) 方法

試料を乾燥させたのち、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の割断面を作製し、走査型電子顕微鏡(無蒸着・反射電子検出型)で観察・同定した。

(3) 結果

試料は全てクリに同定された(表1)。クリの主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、和名・学名等は、主として「原色日本植物図鑑　木本編＜Ⅱ＞」(北村・村田, 1979)に従い、一般的性質などについては「木の事典　第4巻」(平井, 1980)も参考にした。

・**クリ** (Castanea crenata Sieb. et Zucc.)　　ブナ科

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのちに漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形、ともに管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・

家具・薪炭材、楯木や海苔粗染などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ、果実は食用となる。

表12　炭化材同定結果

試料番号	試料名	点数	時代	用途	種類
1	竪穴住居跡ＳＩ30	1	縄文時代中期末葉	構築材	クリ
2	竪穴住居跡ＳＩ36	1	縄文時代中期末葉	構築材	クリ
3	土坑ＳＫ24埋土	1	縄文時代中期	構築材	クリ
4	土坑ＳＫ25埋土	1	縄文時代中期	構築材	クリ
5	フラスコ状土坑ＳＫＦ28埋土	1	縄文時代中期	構築材	クリ
6	炭焼成遺構ＳＮ01埋土	1	中世以降	燃料材	クリ
7	炭焼成遺構ＳＮ05埋土	1	中世以降	燃料材	クリ
8	竪穴住居跡ＳＩ26ｂ埋土	5	縄文時代中期末葉	不明	クリ

＊　試料番号8は5点の炭化材を選択したが、いずれも同じ種類であるため一括して表記した。

（4）考察

同定されたクリは、日本産木材の中でも比較的強度が強く、住居構築材として適した木材と考えられる。東北地方には縄文時代の遺跡が数多く調査されており、住居跡から検出された構築材と考えられる炭化材の同定についても、青森県を中心に数多く報告されている。これらの結果を見ると、住居跡から検出された炭化材にはクリが多い。このことは、縄文時代にクリが住居構築材として広く利用されていたことを示唆する。本遺跡周辺では、横手川の上流部に位置する小田遺跡でも住居構築材としてクリが同定されている(未公表)。しかし、今回の調査では各住居跡から1点づつ選択された試料について同定を行っているため、各住居跡の構築材の種類構成については検討できない。とくに小田遺跡では、住居構築材にクリと共にオニグルミやニレ属が同定されており、住居構築材が1種類の木材ではなく、複数の種類で構築されていたことが推測されている。本住居跡でも複数の種類で構築されていた可能性があり、他に炭化材が検出されているならば、今後それらの炭化材についても同定を行う必要がある。

今回の調査では、縄文時代中期の住居構築材の他に、縄文時代中期の土坑や中世以降の炭焼成遺構から検出された炭化材についても同定を行った。それらの同定結果も住居構築材と同様に全てクリであった。この結果は、クリが構築材だけではなく、様々な用途に利用されていたと思われる。

2．種実遺体同定

（1）試料

試料は、縄文時代中期の竪穴住居跡（S I 26 b）の埋土から検出された炭化種子（試料番号8）である。

（2）方法

肉眼あるいは双眼実体検鏡下において、その形態的特徴から種類を同定した。

（3）結果

種実遺体と見られるほとんどの炭化物については、炭化・破損が著しく同定不能であった。同定されたものは、クリの子葉およびオニグルミの核に近似するものが1個ずつである。以下に形態的特徴について記す。

・オニグルミ近似種（cf. Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana (Maxim) Kitamura）　クルミ科

核の破片が検出された。黒色。破片は大きいもので1cm程度。表面は粗いしわ状で、裏面は子葉が入るくぼみがある。

・クリ近似種（cf.Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　ブナ科

子葉が検出された。大きさは1.5cm程度。扁円形で、一側にふくれ、もう一側はさじ状にへこむ。

（4）考察

クリやオニグルミは、貯蔵が可能なことや食用にするに際して「あくぬき」等の処理が不要なことなどから、古来より食料として利用されてきたとされており、日本各地の多くの遺跡から出土例が知られている（粉川，1983；渡辺，1984）。クリについては、材も多く検出されていることから、周辺からの入手が容易であったことが推定される。また、オニグルミについても、冷温帯では沢沿いなどに多く分布する種類である。当時の人々は、これらの植物を食用として利用していたものと考えられる。

＜引用文献＞

平井信二（1980）　木の事典　第4巻．かなえ書房．

北村四郎・村田　源（1979）　原色日本植物図鑑　木本編＜II＞．545p.，保育社．

粉川昭平（1983）縄文人の主な植物食糧．加藤晋平・小林達雄・藤本　強編「縄文文化の研究2 生業」，P.42－49．雄山閣．

渡辺　誠（1984）　増補　縄文時代の植物食．247p.，雄山閣．

第7章　まとめ

本遺跡は調査区を二分する沢によって分けられ、西側をA区、東側をB区として調査を実施した。A区では縄文時代の石器集中部1箇所、石器製作跡1箇所、土坑2基、中世以降の炭焼成遺構5基、溝1基などを検出した。B区では縄文時代の竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡2棟、土器埋設遺構2基、屋外炉1基、焼土遺構2基、陥し穴状土坑2基、フラスコ状土坑1基、土坑27基、ピット175基、中世以降の炭焼成遺構3基、焼土遺構1基などを検出している。遺跡は、A区が主に前期の石器製作跡に関わる遺跡、B区が主に中期後葉～後期初頭の集落である。

A区の石器製作跡からは石鏃・石錐・石篦・石匙などが出土している。Ⅳ層からは石篦や石匙が比較的多く認められており、近くの石器集中部も同一層であることから、これらの関係が指摘される。これらは、Ⅳ層出土土器によって前期初頭頃の時期が考えられる。

B区は起伏に富んだ地形のうち、主に平坦面～緩斜面に住居がある集落跡である。最も高い東側の上位平坦面や、その緩斜面には竪穴住居跡や貯蔵穴が、これより西側の下位平坦面には、竪穴住居跡の他に掘立柱建物跡、土坑、ピットなどが集中している。

竪穴住居跡の炉は、複式炉で壁際まで達するもの(ＳＩ31・ＳＩ32・ＳＩ115・ＳＩ150)、複式炉であるが壁と離れているもの(ＳＩ29・ＳＩ43)、地床炉になるもの(ＳＩ26a・ＳＩ30・ＳＩ36)に分けることができる。このうち壁まで達する複式炉は、炉の長軸方向の一端が斜面に眺んで立地しており、4軒ともに共通している。この一致は、風向きの関係によるものではないかと考えられる。

竪穴住居跡の炉などから主に出土している土器は、概ね大木10式になるものである。これらは、沈線や隆帯によって縄文や無文帯を区画している。また、北陸系の土器と考えられる葉脈状文をもつ土器がＳＩ29から、同じく三十稲場式と考えられる土器が住居覆土中から出土している。

また竪穴住居跡のうち、ＳＩ26ｂ・ＳＩ115を除いた炉の焼土や埋土について、骨や貝類の抽出を目的に水洗い選別を行った。結果、それらに関する資料は得ることができなかった。

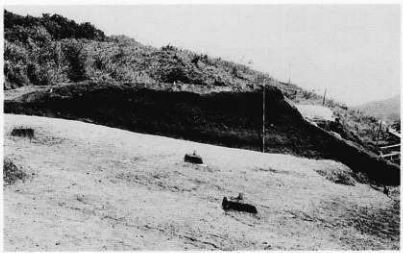
本遺跡では、縄文時代中期から後期初頭にかけての集落が、河川から非常に高い丘陵地に選地している。これがどのような理由によるものかは不明であるが、当時の環境と立地を考える上で興味ある現象である。

1　遺跡遠景
（南西▷）

2　A区全景
（東▷）

3　B区全景
（東▷）

図版2



1　A区MLライン土層断面（西▷）

2　SV03石器出土状況（北▷）

3　SV03断面状況（南東▷）

図版3

1　ＳＳ09遺物出土状況（西▷）

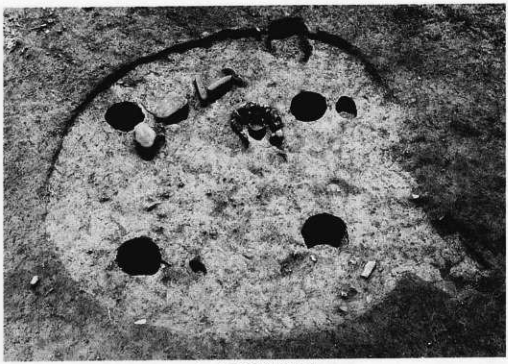
2　ＳＳ09遺物出土状況（西▷）

3　ＳＳ09遺物出土状況（南東▷）

図版4

1　SI26a・b完掘（東▷）

2　SI26a・b土層断面（西▷）



1　ＳＩ29完掘（北▷）

2　ＳＩ29炉（北▷）

図版6

1　ＳＩ30完掘（南東▷）

2　ＳＩ30土層断面（南東▷）

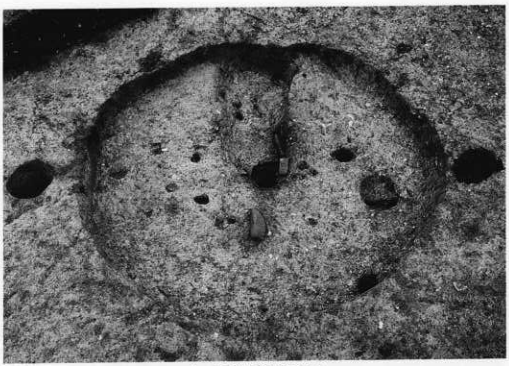
図版7

1　ＳＩ31土層断面（南東▷）

2　ＳＩ31遺物出土状況（北東▷）

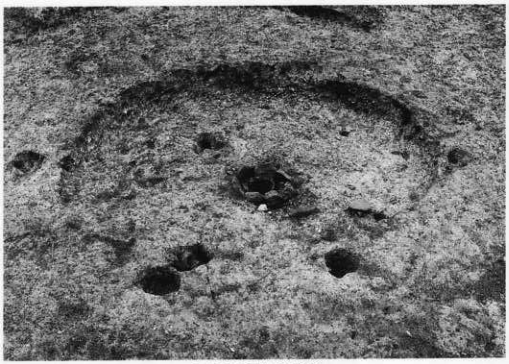
3　ＳＩ31炉（北東▷）

図版8



1　ＳＩ32完掘（北東▷）

2　ＳＩ32炉（南東▷）



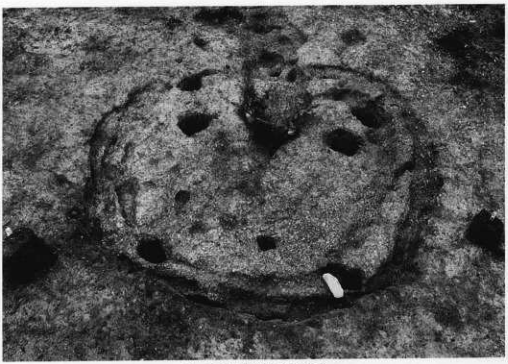
1　ＳＩ43完掘（南西▷）

2　ＳＩ43炉（南東▷）

図版10

1　S I 150全景（西▷）

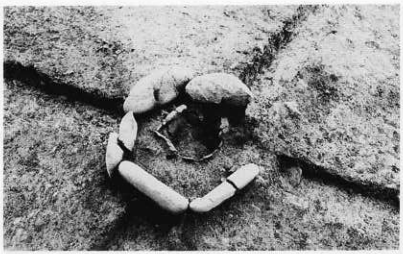
2　S I 150炉（北西▷）



1　ＳＩ115完掘（北東▷）

2　ＳＩ115炉（南東▷）

図版12

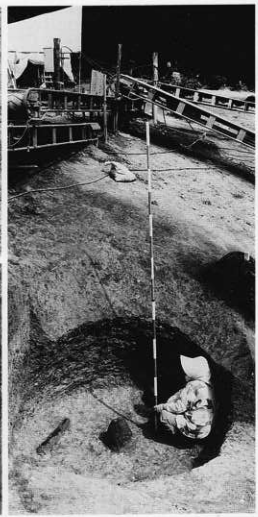


1　SN11完掘（西▷）

2　SX125検出状況（東▷）

3　SR23断面（東▷）

4　SR151検出状況（南▷）



1　ＳＫＴ16完掘
（南東▷）

2　ＳＫＴ25完掘
（西▷）

3　ＳＫＦ28
土層断面
（南西▷）

4　ＳＫＦ28完掘
（南西▷）

図版14

1　ＳＫ22土層
断面（東▷）

2　ＳＫ24調査
風景（北▷）

3　ＳＫ22・24
完掘（東▷）

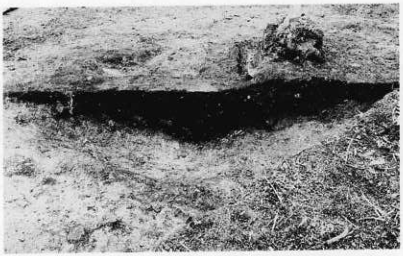
図版15

1　ＳＫ33完掘
（南東▷）

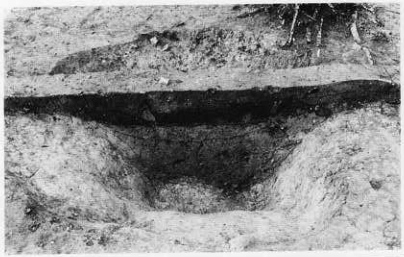
2　ＳＫ34完掘
（南▷）

3　ＳＫ35完掘
（北西▷）

図版16



1　ＳＫ12土層
断面（東▷）



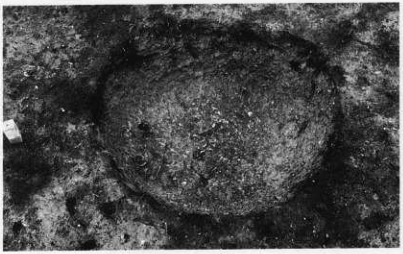
2　ＳＫ19土層
断面（南▷）

3　ＳＫ44完掘
（南東▷）

図版17

1　SK45完掘
（東▷）

2　SK46完掘
（南▷）



3　SK53完掘
（南西▷）

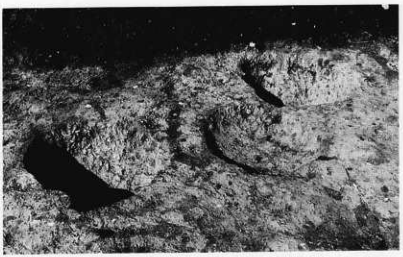
図版18

1　SK54完掘
（北西▷）

2　SK55完掘
（北▷）

3　SK58完掘
（北西▷）

図版19

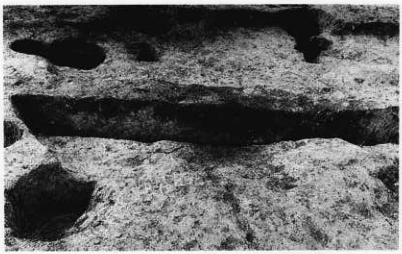


1　ＳＫ48～50
完掘（南▷）

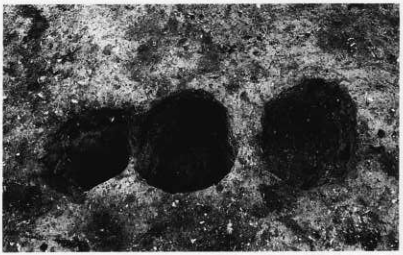
2　ＳＫ130完掘
（南西▷）

3　ＳＫ131完掘
（南西▷）

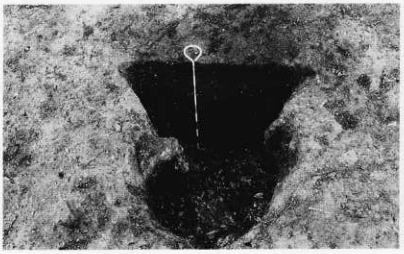
図版20



1　ＳＸ38全景
（南東▷）



2　ＳＫ74～76
完掘（南▷）



3　ＳＫＰ129
土層断面
（南東▷）

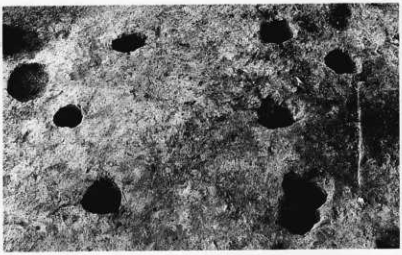
図版21

1　ＳＫＰ145
断面(南東▷)

2　ＳＫＰ239
断面(南東▷)

3　ＳＫＰ60完掘
(南東▷)

図版22



1　ＳＢ126完掘
（南東▷）

2　Ｂ区西側ピット群風景
（南▷）

3　ＳＫ45とピット群（東▷）